

| volume 4, No.2 |

Journal of Northeast Asian History

[日文版]

Journal of Northeast Asian History

| volume 4, no.2 |

[日文版]



 東北亞歷史財團
NORTHEAST ASIAN HISTORY FOUNDATION



Editorial Board

Publisher

KIM Yongdeok, Northeast Asian History Foundation

Editor-in-chief

BAN Byungyool, Northeast Asian History Foundation

Associate Editors

DUNCAN John, B., University of California, Los Angeles, United States

NOH Kishik, Northeast Asian History Foundation

Editorial Board

BATSAIKHAN Ookhnoi, Mongolian Academy of Sciences, Mongolia

BYINGTON Mark E., Harvard University, United States

CHUNG Jaeho, Seoul National University, Korea

GELMAN Evgeniya, Russian Academy of Sciences (Far Eastern Branch)

KIM Jongil, Seoul National University, Korea

KIM Jongmyung, Academy of Korean Studies, Korea

KIM Lena, Hong-ik University, Korea

MOHAN Pankaj N., University of Sydney, Australia

PARK Chungshin, Soongsil University, Korea

PARK Hyunok, Institute for Advanced study in Princeton, United States

PINGEL Falk, Georg Eckert Institute for international textbook research, Germany

ROBINSON Kenneth, International Christian University, Japan

SASSE Werner, University of Hamburg, Germany

SHIN Giwook, Stanford University, United States

STEINHARDT Nancy S., University of Pennsylvania, United States

YUN Peter, Youngsan University, Korea

Book Review Editor

KIM Minkyu, Northeast Asian History Foundation

English Editor

FAHS Robert, United States

Managing Editor

KIM Jinsoo, Northeast Asian History Foundation

Editorial Assistant

HWANG Sungjun, Northeast Asian History Foundation

Journal of Northeast Asian History invites contributions from all disciplines of the social sciences and humanities that deal with various aspects of Northeast Asia. The scope of the journal includes Korea, China, Japan, Southeast Asia, Mongolia, Tibet, Russian Maritime Province, and the adjacent regions of Central Asia. We are particularly interested in works of an interdisciplinary focus and comparative and cross-cultural scholarship. By overcoming the limits of studies that focus on the single-country or single-area orientation, *JNAH* intends to help historians and scholars of other disciplines working in areas other than East Asia to become better informed about the significant contributions of Northeast Asian history to the discipline as a whole. Finally, the journal will provide manuscript fees of 1,000,000 Korean Won (approx. US \$1000.00) for an article, 500,000 Korean Won (US \$500.00) for a review article, and 300,000 Korean Won (US \$300.00) for a book review or conference/field report. If you have any questions or suggestions, please contact us at jneah@historyfoundation.or.kr.

目次

特集論文 渤海国の歴史と文化

韓圭哲 渤海史特集に寄せて | 08

宋基豪 史実と前提：渤海古墳研究の場合 | 14

鄭炳俊 營州大祚榮集團の渤海建国 | 30

林相先 渤海国の発展と高句麗継承 | 48

具蘭憲 8世紀後半渤・日交流の諸問題 | 70

朴洪甲 渤海遺民大氏の韓半島定着過程 | 86

鄭永振 中国の渤海史認識 | 106

濱田 耕策 日本における渤海認識の変遷 | 116

アレキサンダー・イヴリイェフ ロシアにおける渤海史研究 | 130

一般論文

柳鏞泰 東北アジアの歴史紛争の論理とその淵源：疏通のための省察 | 146

學術會議參觀記

梁美康 2007歴史NGO世界大会の評価と展望 | 166

琴京淑 「東アジア歴史的和解国際フォーラム」 參觀記 | 172

書評

車惠媛 夫馬進編「中国東アジア外交交流史の研究」(京都：京都大学学術出版会，2007) | 180

申铉承 「近代日本の陽明学」を読んで 原題：小島毅著，「近代日本の陽明学」(講談社，2006) | 192



特集論文

渤海国の歴史と文化



渤海史特集に寄せて

韓圭哲 (慶星大)

Journal of Northeast Asian History
volume 4, number 2 (Dec 2007) : 10-13

*Copyright © 2007 by Northeast Asian History Foundation. All Rights Reserved.
No portion of the contents may be reproduced in any form without
written permission of Northeast Asian History Foundation.*

渤海史特集に寄せて

韓圭哲（慶星大）

渤海国は698年に大祚榮により建国され、926年に契丹により滅ぼされるまで、228年間にわたり現在の北朝鮮地域と中国の吉林省、黒竜江省、遼寧省の一部、そしてロシアの沿海州南部にかけて存在した王朝である。面積はおおよそ45万km²から最大59万km²で、高句麗の1.5～2倍、新羅の3～4倍ほどの領土を治めていたといわれている。このような渤海国の歴史が今なお未知の歴史である理由は、体系的な歴史記録がないためである。

この度編集された論文は東北亜歴史財団が発刊した『渤海の歴史と文化』（2007.3）と『東北亜歴史論叢』16号（2007.6）に掲載されたものを、各執筆者がジャーナル発刊にあわせて一部を修正したもので、その他に宋基豪の論文が追加されている。前者の書には、林相先・具蘭憲（韓国）、鄭永振（中国）、濱田耕策（日本）、アレクサンダー・イブリエフ（ロシア）の論文を英訳したものが掲載され、後者の書には鄭炳俊と朴洪甲の論文を英訳したものが掲載されている。概説書的に編纂された『渤海の歴史と文化』が比較的平易に書かれたものとするなら、後者は比較的新しい内容を盛り込んでいるといえる。宋基豪の論文も「六頂山古墳群の性格と渤海建国集団」（1988）を補完して英訳したものである。

宋基豪の「史実と前提」は、歴史研究において研究者が史実に基づいて研究せず、先入観によって研究することで歴史的事実を「誤解」「曲解」しうることを、「六頂山古墳群」を例に挙げて分析した論文である。このように歴史的事実が研究者の「前提」により曲解されていることは、研究者が身を置く「民族主義的」立場によるという見地のようなものである。

鄭炳俊の「營州大祚榮集団の渤海建国」は、大祚榮が渤海を建国しえた軍事的背景について論じている。著者は、大祚榮が高句麗人の半専門的な軍事集団である城傍の首領であったため、渤海建国に成功しえたと見なしている。渤海建国が成功した理由を漠然と高句麗遺民だけに求めず、具体的に指摘した点は

意味のある論考と評価できよう。

朴洪甲の「渤海遺民大氏の韓半島定着過程」は、これまでに議論されてきた、高麗に投降した渤海遺民を検討し、大祚榮の後裔を自任する永順太氏が韓半島に定着する過程を分析した論考である。これまでの研究成果をよく消化し、現代の韓国人が渤海の後裔を自任しえる血統的意味を考えさせる論考と思われる。

林相先の「渤海の高句麗継承(国家的性格)」は、渤海が自主的な王朝であり、唐の地方政権ではなかったことを仔細に明らかにしている。すなわち、渤海と唐における冊封と朝貢外交を、決して地方政権とみなすことはできないという点を明らかにし、渤海は唐に対抗できる軍事力を有し、渤海王を皇上と呼ぶなど、皇帝を自任したという点などを挙げ、渤海の自主性を再確認している。

具蘭憲は「渤海と日本の交流」で、両国間の関係を4時期に分けて整理している。1期は交流成立期(727年高齊徳-752年慕施蒙)、2期は政治的激変のなかの交流期(758年小野田守-763年板振鎌束)、3期は交流秩序の模索期(771年壹万福-799年滋野宿禰船白)、4期は交流盛行期(809年高南容-920年斐璆)、というように分けられるのである。

一方、中国の鄭永振と日本の濱田耕策、ロシアのアレクサンダー・イブリエフは、中国と日本、ロシアにおいて渤海使をどのように認識し、どのように研究してきたかという点を具体的に明らかにしている。鄭永振は中国学界が、渤海が中国史であることを明らかにする7つの理由を説明しており、濱田耕策は渤海と日本の関係を3時期に分け、現代の日本学界における渤海史の研究傾向に至るまでを概観している。イブリエフもやはりロシアにおける渤海史研究の開始期から現代の沿海州で行われている渤海考古学の成果までを紹介している。

今回の渤海史の企画は紙面の制限により、渤海史のあらゆる面を網羅してはいない。特に、渤海が高句麗を継承した王朝であったのか、靺鞨の王朝であったのかという点に触れられていない。この点は中国と韓国でその見解が異なるだけでなく、韓国内でも異なる見解が出されているためである。中国のように渤海を靺鞨の王朝とする見解は韓国でも支持を得ている点は事実である。支配層だけを高句麗遺民とみなすことは、すなわち靺鞨説を克服できなかった結果といえる。今後、渤海に関する多くの議論が発表されるものと期待する。

歴史は客観的であるべきで、民族主義的偏見に陥ってはならない。研究者は常にこの点を念頭に置き、注意深く検証せねばならない。これは学問の基本姿勢でもある。しかし、このためには政治的環境も非常に重要である点を指摘せざるを得ない。単純な研究者の愛国心による結果だけとはいえないためである。幸い韓国学界では、渤海史を中国のように靺鞨史とみなす主張を許容していることから分かるように、学問的多様性が保障され、活発な討論が行われている。

しかし、中国と北朝鮮は思想の自由が保障されていないという点で少し異なる。中国における渤海史研究の限界は、民主的政治環境と中華思想に多大な影響を受けているからにはかならず、北朝鮮もやはり民族主義思想に立脚した偏見をもって理解できる。「史実と前提」で指摘しようとする内容は、まさにこのような点で意義がある。また、一貫して主張しているように、六頂山古墳群の文化的多様性を明らかにしたことは高く評価できる。だが、埋葬文化の担い手を種族的に高句麗と靺鞨に明確に区別している点は問題の余地がある。

高句麗と靺鞨を、中央と地方文化という視点から述べると、石墓系や土壙墓系を種族的文化類型で区分すること自体がいかなる意味も持ち得ない。もっともな議論は精緻な論理を必要としないかもしれない。研究者が考える客観的事実という解釈の問題から発生した基準ではなく、科学的に立証された資料により言及されるべきである。

考古学的な遺構に「靺鞨」と書かれていないからには、土壙墓は靺鞨族の典型的な墓制で、高句麗は石墓系だということも一般的な見解にすぎない。靺鞨の記録に土壙墓だけがあり、高句麗の記録に土壙墓がないことは、種族的相違ではなく文化的相違に起因したものとみるべきである。渤海時代を直接見ることができない我々にとって、渤海人が自ら高句麗の後裔だといったのか、あるいは靺鞨人であったのかは判然としない。むしろ中国の『旧唐書』は、渤海と高句麗は風俗が同じであったという内容を伝えているなど、高句麗との関連性を明らかにしている。一方で、高句麗と靺鞨、渤海と靺鞨の関係についてははっきりしない。靺鞨は契丹と異なり、自称したという記録もない。渤海人もやはり靺鞨人であったと自称してはいない。

渤海を靺鞨で構成された王朝、あるいは被支配者層は靺鞨であったとする見解においても、高句麗の住民・被支配者層を靺鞨であつとはいわない。高句麗滅亡後 30 年で建国された渤海とあまりにも距離がある考えではないかと思う。歴史の継起性が欠如しているということである。

いかなる研究も、研究者によって基準を異にしている点を理解し、認めるべきである。特に、『三国史記』高句麗本紀をもとに南北の学者が渤海を高句麗継承国と主張する論理を、民族主義的側面だけからみたり、先入観に立脚した結果だけで判断することは、もうひとつの先入観といえる。真実は暴圧的で劣悪な環境でも現れるのである。

渤海は唐の地方政権ではなく自主的な王朝であった。当時の東アジアが唐中心の秩序のなかで存在していたということは誰もが認めるところである。このような点で、冊封と朝貢が持つ政治的意味もまた無視できない。しかし、このような国際的環境が、唐の地方政権を証明する根拠になり得ないということもまたよく知られた事実である。冊封は周辺の王朝に対する外交的承認行為とい

う意味でしかなかった。中国で主張しているように、冊封を中央と地方の関係を意味するものと認識するならば、新羅と百済、倭までもが例外でなくなり、韓国と日本も中国史の一部であるという拡大解釈が可能になる。さらに、東アジアの「冊封体制論」も唐中心の国際秩序を基準に設定されたものである。

渤海は独自の元号を用いた自主的な王朝であった。『新唐書』でさえも渤海の元号使用を自主的に用いたというほどであった。また同じ史料で、王の死後に与えられる諡号もやはり自主的に使用したと、渤海の自主性を認めている。また、渤海は皇上を自称する皇帝国家であった。貞恵公主墓碑（780年）と貞孝公主墓碑（792年）には両公主の父である文王が「大王」「聖人」「皇上」などと表現されている。対外的にも渤海は日本で自らを「靺鞨国」といわず、「扶余の遺俗」をもつ渤海国、あるいは高句麗の「高麗国」と自称した。渤海はまた唐に侵攻するほどの自主的な国家運営を行った。

渤海は高王大祚栄だけでなく渤海の建国に参加した人々を含めて種族的には獺貊、扶余系統の高句麗人であった。文献記録において粟末靺鞨、白山靺鞨などと称される住民であるとしても、これらは高句麗辺境住民をそのように称しただけである。『旧唐書』で言及されているように、文化的にも渤海人は高句麗と「風俗」を同じくした住民であり、高句麗の支配層が使用した石室墓と石棺墓のような古墳も築造し、高句麗人が使用したオンドルも使用した。渤海の被支配者層は土壙墓のように容易に築造できる埋葬方法を選択したと推測される。

渤海は国際的な文化をもっていた。対外交通路をみると、「新羅道」を含めて、日本道、契丹道、鴨緑の朝貢道、營州道などを活用していた。唐との関係においては朝貢外交を通じて政治・経済・文化的な実利を追求し、その一方で契丹および新羅・日本との関係を通じて渤海の利益を増大させ、国際的地位を向上させていった。さらに、渤海は突厥などの中央アジアとの関係において、「黒貂の道」を想定できるほどに積極的な外交を行った。6mを超える石灯籠や巨大な塔である靈光塔の造営も、渤海文化の国際性を語るものである。



史実と前提：渤海古墳研究の場合

宋基豪（ソウル大）

Journal of Northeast Asian History
volume 4, number 2 (Dec 2007) : 16~30

*Copyright © 2007 by Northeast Asian History Foundation. All Rights Reserved.
No portion of the contents may be reproduced in any form without
written permission of Northeast Asian History Foundation.*

史実と前提：渤海古墳研究の場合

宋基豪（ソウル大）

I. 2つの誤ったアプローチ

研究者が前提とみなす事実が、歴史研究において優れた出発点としての機能を果たすことが多い。しかし、時には誤った前提が先入観として作用し、むしろ歴史の実体へのアプローチを遮ることもある。渤海史の研究においてもそのような誤った前提が散見されるが、特に渤海文化を論じたものに顕著に現れている。

渤海文化の源流に関する既存の研究を検討すると、大きく2つの傾向がみられる。1つは、靺鞨文化は問題とせず、専ら高句麗の延長線上で渤海文化をみるものであり、もう1つは靺鞨と渤海を一体化させつつ高句麗をこれらから引き離そうとするものである。どちらを支持するにせよ、多くの研究者がこれを当然のこととし、研究の出発点とみなしており、その結果、初めから多様なアプローチの可能性を自ら閉ざしている。

まず、1つ目の例を挙げてみよう。北朝鮮の朱栄憲の研究を代表例として指摘できる。朱栄憲は、渤海が高句麗を継承した側面だけを一方的に強調し、靺鞨的要素については全く言及していない¹。このような見方はその後の北朝鮮学界に多大な影響を与え、1980年代に入りさらに確固たる立場を築いた。この頃から本格的に発掘され始めた咸鏡道地方の渤海遺跡は、その位置や文化伝統から当然靺鞨的要素より高句麗的要素が強く残らざるを得ない。それにもかかわらず、この地域に現れる文化的性質を渤海全体に拡大解釈することで、靺鞨的要素は完全に無視されている。程度の差はあるが、韓国でも暗に高句麗的要素を重視し、靺鞨的要素は相対的になおざりに扱う民族主義的傾向の存在を否認できない。

渤海五京制の起源と関連してもそのような傾向が垣間見られる。張国鍾は渤

¹ 朱栄憲『渤海文化』社会科学出版社、1971、pp.147-171。

海の五京が高句麗の五部制に由来するとし、高句麗に五部制が変化して成立した五京制が存在したとまで主張している²。しかし、高句麗中・後期の五部が首都および主要都市に設置された行政区域であったとすると、地方の拠点に設定された渤海の五京とは概念的に全く異なる。また、領土全域を五部に分割し、統治したという事実を認めるにしても、これもやはり地方の一部の拠点都市を五京とした渤海の統治方法とは大いに異なる。張国鍾は、高句麗が国内城に都を置いていた時期に、すでに卒本城、丸都城、平壤城、南平壤城、北平壤城などの副都が順次形成され、平壤に都を移してからは卒本城、国内城、南平壤城、北平壤城（丸都城）とともに五京を形成したと考えている³。しかし、これは渤海の五京に合わせるため強引に設定したにすぎず、高句麗に五京制が実在したという根拠は求められない。

2つ目の礼として、中国の魏存成や劉曉東の研究を挙げられるが⁴、実際には大多数の中国人研究者がこの立場を堅持している。中国では渤海を靺鞨族が建てた国家であるという前提で研究を始めるため、そうならざるを得ない。その内容については後述する。

このような傾向はロシア人学者にも見出される。ロシアのE. V. シャフクノフは、多数を占める様々な靺鞨部族と一部の高句麗人、そして少数の契丹人、ウイグル人、突厥人、古アジア人で構成された国家として渤海国を説明している⁵。それでいて靺鞨族が主導権を握っており、高句麗人はわずかに渤海南部の高句麗故地と渤海の中心地に居住し、文化・経済の発展だけでなく宗教、建築術、漢字の習得などでも重大な役割を果たしたと考えているわけである。これはロシアにおける渤海史研究が、沿海州一帯の考古学的資料にほぼ全的に依存していることにその原因を求め得る。この地域は高句麗の領域外であったため、高句麗的要素より靺鞨的要素が強くならざるを得ないのである。

渤海の文化を客観的に研究しようとする、上記の2つの前提がその出発点から問題点を抱えている。他の側面を「無視」し、一面だけを強調することは問題にならざるを得ない。さらに、他の側面を「省く」ことで議論の進行を困難にすることも明らかに歴史の歪曲といえる。中国と北朝鮮が1963～64年に共同で発掘した六頂山古墳群の報告書が近年中国で刊行されたが⁶、北朝鮮で1966

² 張国鍾著、李成出訳「渤海の領域と五京制」『高句麗・渤海と古代日本』在日本朝鮮社会科学者協会歴史部会編、雄山閣、1993、pp.160-161。

張国鍾『渤海史研究』2、社会科学出版社、1988、pp.72-74

³ 張国鍾著、李成出訳、前掲書、p.161、張国鍾、前掲書、p.73。

⁴ 魏存成「高句麗渤海墓葬之比較」『古民俗研究』1990-1。

劉曉東「渤海墓葬的類型与演变」『北方文物』1996-2。

⁵ Shavkunov, E. V.『渤海国と沿海州の渤海文化遺跡』Leningrad、1968、p.57。

⁶ 中国社会科学院考古研究所『六頂山与渤海鎮—唐代渤海国の貴族墓地与都城遺址—』中国田野考古学報告書考古学専刊丁種 56号、中国大百科全書出版社、1997。

年に刊行された報告書⁷と同じ内容である。しかし仔細にみると、北朝鮮の報告書にM205、M211、M212 および4基の土壙墓、M208、M209、M210、M214が掲載されていないことに気が付く。故意であろうがなかろうが、土壙墓が報告されていないことで、六頂山古墳群では石室墓、石槨墓、石棺墓という石墓だけが発掘されたかのように思われ、結果的に高句麗的要素だけを強調する歪曲された現象を招来した。

ここまで、誤った前提が客観的研究を妨げる事例をいくつか列挙してきた。渤海を1つの独立した実体として把握せず、高句麗や靺鞨と同一化させることで、このような歪曲がはっきりと現れるようになったのである。したがって、渤海、高句麗、靺鞨をそれぞれ独立させ、三者を相互に比較してはじめて渤海の文化を的確に理解できるであろう。渤海の古墳研究でもやはりそのような姿勢が要求される。

II. 石墓と土壙墓の伝統

まず、靺鞨を初めから渤海と一体化させることで生じる誤謬を検討しよう。その代表的な例が、渤海の涑州地域における古墳の変化に関する解釈である。

渤海の建国勢力として指目されている靺鞨族が粟末靺鞨である。粟末靺鞨という名称は粟末水に由来することは明らかで、これと関連して次の記録が注目される。

又郢銅涑三州，爲獨奏州。涑州以其近涑沫江，蓋所謂粟末水也。（『新唐書』卷219・渤海伝）

渤海の3つの独奏州（直隸州）のなかの1つである涑州が粟末水の近くにあったとするもので、涑州が粟末靺鞨の居住地に設置された行政区域であることは間違いない。中央で直接管掌する行政区域がなぜここに設置されたのか、その記録はなく確認できない。この地が契丹を防御する要衝であった可能性も考慮されるが、扶余府がその役割を遂行したので⁸、むしろ粟末靺鞨自体の重要性による可能性が高い。渤海の建国過程で高句麗人とともに活躍し、建国勢力の一翼を担った集団がまさに粟末靺鞨であったからである。

これまで涑州の所在地として指摘されてきたところは、吉林市一帯やその北

⁷ 朝中共同考古学発掘隊『中国 東北地方の遺跡 発掘 報告（1963～1965）』社会科学院出版社、1966。

⁸ 宋基豪『渤海政治史研究』一潮閣、1995、p.226。

側にある烏拉街一帯であった⁹。然るに最近、董学増は考古資料から吉林市東団山の麓にある平地城の南城子古城を涑州に比定した¹⁰。渤海上京城で出土した鴟吻と類似したものが南城子古城で出土しており、ここから東に約1 km 離れた帽兒山に渤海古墳群が分布する状況も考慮している。したがって、現段階ではここが渤海涑州の治所として有力である。

近年、渤海時期およびそれ以前の粟末靺鞨古墳が吉林市、烏拉街一帯、そして榆樹で発見されているので、この一帯が粟末靺鞨の中心地であったことが再確認された。現在、粟末靺鞨あるいは涑州と関連する古墳群として、吉林市帽兒山古墳群、永吉楊屯大海猛上層（第3期）古墳群、永吉查里巴古墳群、榆樹老河深上層古墳群が確認されている。

帽兒山古墳群では数基の積石墓が発見され、金簪、金圈、鍍金を施した半球形装飾、ハート形金葉装飾などが出土していることから、涑州所属の官人が埋葬された古墳群であると推定されている¹¹。しかし、1980年代に1基が発掘されただけであるため、その様相はまだ明確になっていない。

<表1> 粟末靺鞨古墳統計表

| 項目 \ 遺跡 | 大海猛上層 | 查里巴 | 老河深上層 |
|------------|---------------|-------------|-------------|
| 土墳墓 | 69/70 (99%) | 43/47 (91%) | 30/37 (81%) |
| 木質棺槨確認数 | 7/40 (18%) | 38/47 (81%) | 6/37 (16%) |
| 火葬 | 2/49 (4%) | 33/47 (70%) | 5/37 (14%) |
| 2次葬 | 25/70 (36%) | 15/47 (32%) | 28/37 (76%) |
| 多葬(3人以上) | 7/40 (18%) | 9/47 (19%) | 1/37 (3%) |
| 筒形罐(/陶器総数) | 111/167 (66%) | 23/51 (45%) | 33/37 (89%) |
| 鼓腹罐(/陶器総数) | 18/167 (11%) | 16/51 (31%) | 2/37 (5%) |
| 鍔板1(帯鍔型) | 222 | 21 | 0 |
| 鍔板2(牌飾型) | 56 | 56 | 0 |

一方、現地の粟末靺鞨人が埋葬された古墳として注目されるのが大海猛上層（第3期）古墳群、查里巴古墳群、老河深上層古墳群である。ここでは相当数の古墳が発掘され、全体的な輪郭が把握されている。これを表で示すと次の通りで

⁹ 曹廷杰、松井等、和田清、烏山喜一、王承礼、魏国忠は烏拉街説を提唱し、孫進己と鄭英徳は吉林市説を提唱した。金毓黻はこのうちの1つである可能性だけを提起した。

¹⁰ 董学増「吉林東団山原始、漢、高句麗、渤海諸文化遺存調査簡報」『博物館研究』1982-1、p.91。

¹¹ 吉林省文物志編委会『吉林市郊区文物志』1983、pp.77-78。

ある。

<表1>から分かるように、粟末靺鞨の古墳で土壙墓の占める比率が絶対的に高い。大海猛上層では1基の石壙墓を除く69基全てが土壙墓¹²、査里巴では4基の石壙墓を除く43基が土壙墓、老河深上層では7基の石棺墓を除く30基が土壙墓である。したがって、石墓の数において多少の差はあるが、土壙墓が主体をなすことは明らかである。これは数基の石墓が調査された帽児山古墳群とは区別される様相でもある。

中国の学界では粟末靺鞨族が渤海を建国したという前提のもと、吉林市一带にある粟末靺鞨の古墳群から敦化市の六頂山古墳群へ移行したと断定している。そして、靺鞨族の活動範囲が拡大し、次第に高句麗の墓制を採用していったと理解している¹³。つまり、靺鞨人は土壙墓を築いていたが次第に石墓を受容し、六頂山古墳群段階に至るとついに石墓が主流をなすようになったと理解するのである。しかし、土壙墓から石墓への移行過程をこのように解釈するには無理があり、二地域の古墳を連続する発展様相に組み入れることもできない。

粟末靺鞨の古墳にみられる石墓は、靺鞨人が高句麗墓制を採用した結果ではなく、渤海建国後に渤海墓制から影響を受けて築造されたとみるべきだろう。大海猛上層M17（1979年発掘）と査里巴M27で出土した開元通宝には共通して裏面に月文があるが、この文様は唐中期に盛行したものである。また、大海猛上層M2で出土した山字形簪は東清古墳群、虹鱒漁場古墳群、龍海古墳群などの渤海古墳群で特徴的に出土しているものである。したがって、吉林市一带に位置する粟末靺鞨古墳の築造年代は渤海建国後に下ることが確認される。そして、渤海建国後に築造された古墳のなかに石墓が登場したとみなすのが妥当であろう。

このような渤海の中央から地方への伝播過程を裏付ける資料がある。涑州の官僚の埋葬地と推定される帽児山古墳群がそれである。ここには積石墓が築かれており、この一带における粟末靺鞨の古墳とは異なる様相をみせている。つまり、中央から派遣され、あるいは中央勢力と密接な関係を維持していた渤海官僚は、吉林市一带でも石墓を築造していたということになる。そして、これらの統治を受けた周辺の粟末靺鞨族の多くは渤海建国後も固有の土壙墓の伝統を継承し、一部でこのような渤海の古墳様式を受け入れ、石墓を築造し始めたのである。

つまり、吉林市一带の粟末靺鞨族は伝統的に土壙墓を築いていたが、高句麗の影響を受けて石墓を採用し、渤海を建国して六頂山古墳群のような石墓中心の古墳群を築造したと解釈することはできない。これは粟末靺鞨族が渤海を建

¹² 1981年の発掘成果はまだ正式報告されておらず除外した。

¹³ 劉曉東、前掲論文、p.35。

国したという前提に立ち、靺鞨と渤海を一体化させることで発生した必然的な誤謬なのである。

渤海を建国した高句麗系の建国集団が石墓を築造し、このような人物が涑州に派遣され、帽児山古墳群のような石墓中心の古墳を築造する過程で、土壙墓の伝統をもった現地の粟末靺鞨族もその影響を受け、一部では石墓様式を受容するようになったと解釈するほうがはるかに合理的である。

Ⅲ. 六頂山古墳群の性格

中国の学者は、六頂山古墳群で多数を占める石室墓は問題視せず、少数の土壙墓を強調し、あるいは劉振華のように六頂山で出土した様々な副葬品のなかで筒形罐だけを考察対象にすることで、大氏王室が靺鞨系人物であったと主張するなど¹⁴、一面的要素だけを強調する問題点を内包している。また、高句麗の石室墳が地上式、半地下式であるのに対し、渤海の石室墳が地下式である点を挙げ、両者が異なるとする見解もあるが¹⁵、渤海古墳が地下式である理由は、唐の古墳の影響を受けたからであり、初期の石室墳は高句麗と同じく地上式や半地下式という点¹⁶で論旨に誤謬がある。

事実、六頂山古墳群で発見される石墓は高句麗的な様相を帯びている。特に、貞恵公主墓は天井の構造や石室の築造技法などにおいて高句麗の伝統を忠実に継承している。だからといって北朝鮮学者のように高句麗古墳との比較だけを行い、靺鞨古墳がどのような型式であったかについては関心をほとんど傾けない研究姿勢¹⁷も、もう1つの先入観であることに違いはない。

六頂山古墳群は1949年にはじめて調査され、1964年まで計32基が発掘された。1949年から1959年までに調査された12基については3編の報告文があるが¹⁸、内容が非常に疎略で、古墳の構造や副葬品などの状況を個別的に把握する

14 劉振華「渤海大氏王室族属新証—從考古材料出發的考察—」『社会科学戦線』1981—3。

15 魏存成「渤海王室貴族墓葬」『中国考古学会第三次年会論文集』文物出版社、1984、pp.261-262。

魏存成「第二松花江中遊地区的靺鞨、渤海墓葬」『北方文物』1998—1、p.47。

16 朴潤武「渤海石室封土무덤에 對한 考察」『渤海史研究』2、延辺大学渤海史研究室編、延辺大学出版社、1991、p.47。

鄭永振「최근년간 中国東北地域에서의 渤海遺跡 調査 發掘과 渤海史研究動向」『韓國上古史學報』9、1992、p.188。

金太順「渤海墓葬研究中的幾個問題」『考古』1997—2、p.27。

17 朱榮憲、前掲書、pp.65-79。

승성호「渤海初期의 城과 무덤에 對하여」『朝鮮考古研究』1998—1、pp.34-35。

장철만「渤海무덤의 高句麗的性格에 對하여」『朝鮮考古研究』1998—4。

18 王承礼「敦化六頂山渤海古墓群調查簡記」『吉林省文物工作通訊』1957。

王承礼・曹正榕「吉林敦化六頂山渤海古墓」『考古』1961—6。

ことは困難である（表2）。さらに、この時期に発掘された古墳の多くは六頂山古墳群の中心部である第1区域（第1墓区）の中部と下部に位置しており、渤海の最上層集団の性格を理解するうえで緊要な資料になるため非常に残念である。一方、中国と北朝鮮の研究者で構成された「朝中共同考古学発掘隊」が1963年に試掘した1基と、1964年に発掘した19基に関する報告書は1966年と1997年にそれぞれ北朝鮮と中国で刊行され、詳細な様相を把握できる（表3）。

計32基の古墳は築造様式から28基の石墓と4基の土墓に大別される。石墓はさらに石室墓、石槨墓、石棺墓に細分できるが、報告者によって分類を異にしており、混乱を招いている。したがってこれを再分類すると、一次的に羨道の有無により石室墓と石槨・石棺墓に大別できる。このようにみると、M1、M2、M4、M5、M101、M105、M201、M202が石室墓に該当し、特に羨道の前に墓道がついたM2とM4は大型石室墓に分類できる。羨道をもたないことが明確なM3、M12、M103、M104、M203は石槨・石棺墓に分類できるが、墓室内に木棺が安置されたのか明確でないので、石槨墓と石棺墓の区別は困難である。ただし、墓室の相対的な大きさを基準に、M3、M12、M203を石槨墓に、M103、M104を石棺墓に分類することも可能である。

4基の土墓のなかでM209とM210は南壁に石積みがあるため純粋な土墓とみるのは困難で、石墓の伝統を部分的に採用した土石混築墓に属する。これに対しM208とM214は純粋な土墓に属する。

したがって、石墓が全体の88%を占める。石墓と土墓の比率において吉林市一帯に分布する粟末靺鞨の古墳と正反対の現象を示すのである（表1参照）。このような点からみると、六頂山古墳群は粟末靺鞨の伝統を継承していない。すでに鄭永振も指摘しているように¹⁹、このような石墓伝統と土墓伝統は高句麗系と靺鞨系を分かち重要な基準になり得る。渤海の領域において、高句麗的要素が強く残っている北朝鮮の咸鏡道一帯では土墓が全くみられず、全てが石室墓を主とする石墓である。これに対し、高句麗の領域外であったロシア沿海州一帯はごく一部を除いて土墓である。視野をもう少し広げ、黒竜江流域に居住していた黒水靺鞨では土墓一色に変わる。このような傾向は満州地域の渤海領土においてもみられる。土墓が集中している地域は粟末靺鞨、黒水靺鞨などが居住していた松花江流域に限定され²⁰、その他の吉林省、黒竜江省地域はごく少数の土墓を除いて全て石墓系統である。したがって、渤海の中心部

王承礼「敦化六頂山渤海墓清理発掘記」『社会科学戦線』1979-3。

¹⁹ 鄭永振「高句麗・渤海・靺鞨墓葬形制比較研究」『百濟研究』22、1991。

²⁰ 渤海建国以前の靺鞨古墳に属する石墓の例として虹鱒漁場古墳群が注目されているが（金太順、前掲論文、p.27）、いまだ信頼するに足る編年の根拠が提示されていない。その見解に従うとしても、上京城一帯は玄武岩地帯で、石材が豊富な地域であるという地域的特性も考慮する必要がある。

では石墓が盛行し、その周辺地域で土壙墓が盛行していたことが分かる。また、周辺地域でありながら咸鏡道地域において石墓一色である点は、石墓の伝統が高句麗との密接な関係を示すものといえる。高句麗で盛行した石墓の伝統が高句麗滅亡後、渤海に受け継がれ、その分布範囲がかつての高句麗の領域外まで拡大したのである。

このような状況から、六頂山古墳群は主に高句麗の石墓伝統を受け継いだものとみるべきである。しかし、棺槨の使用、火葬、二次葬と多葬、獣骨の副葬といった埋葬習俗や筒形罐のような副葬品において異質的な要素が認められる。まず、六頂山古墳群の32基のうち半数ほどで木棺の使用や木棺と木槨をともに使用したことが確認される。大海猛上層と老河深では木棺の使用がこれよりも低い比率であるのに対し、査里巴ではこれより高い比率で独特な形態の変形木槨が使用されていた。高句麗でも積石墓段階にすでに木棺と木槨を採用していた。ただし、封土石室墓段階の資料はあまりにも少なく、明確な言及はできないが、高句麗末期まで木質の棺槨を使用していたのであろう。したがって、棺槨の使用だけでどちらから影響を受けたのかを明らかにすることは困難である。

六頂山古墳群にみられる火葬も、その出現頻度において差はあるが、粟末靺鞨の3古墳群すべてで確認できる。高句麗でも火葬を確認できる。洞溝古墳群で1000基余りの積石墓を調査した結果、640基余りで火に焼けた痕跡が発見され、残りの300基余りでその痕跡が発見されなかったという²¹。このように火葬が高句麗積石墓段階にすでに盛行していたことが分かる。封土石室墓段階にはまだこのような報告がなく、この段階になり火葬が消滅した可能性が濃厚である。したがって、その淵源を明らかにすることは難しいが、渤海古墳でみられる火葬は、高句麗よりも靺鞨に残されていた習俗が表出したものとみるべきであらう。

このような状況は多葬と二次葬の問題においても同一である。おおよそ多葬は二次葬と共伴する。六頂山古墳群でみられるこの現象は、粟末靺鞨の古墳群でも同じようにみられる。ただし、高句麗の古墳では人骨の出土例が少なく、この点に関する研究が行われていないが、二次葬の可能性を示す古墳も全くないわけではない²²。また、高句麗は三年葬を行っており²³、武寧王のように殯の期間があり、その後本葬を行った可能性が高いので、二次葬がよく行われていたのだろう。あわせて多室墓の場合には、一古墳に数人を埋葬する多葬を行っていた可能性も考慮される。したがって、このような習俗も果たしてどちらの

²¹ 孫仁杰「高句麗積石墓葬具研究」『高句麗研究文集』延辺大学出版社、1993、p.120。

²² 魏存成『高句麗考古』吉林大学出版社、1994、p.88。

²³ 『隋書』卷81・高麗伝：「死者殯於屋内，經三年，擇吉日而葬。居父母及夫之喪，服皆三年，兄弟三月。」

伝統を反映したものであるのか判断しがたいが、一次葬と二次葬が混在している現象などはやはり靺鞨的な様相をより強く帯びていると判断される。

次に、六頂山第1区域でだけみられる獣骨の出土を検討しよう。獣骨の出土は高句麗古墳で報告された例がない。ただし、査里巴M15で馬の頭を埋葬した例があり、ハルピン黄家崴子に位置する安車骨部の靺鞨古墳と黒竜江流域の黒水靺鞨古墳でも馬と豚の骨の出土例が報告されており²⁴、同仁文化の遺跡でも馬の骨が出土している²⁵、このような伝統はやはり靺鞨族の習俗と関連するとみるべきである。これは被葬者が生前に乗っていた馬を犠牲に捧げたという文献記録とも一致する²⁶。しかし、上記した粟末靺鞨の三古墳では動物骨を埋葬した例が希少であるため、安車骨部や黒水靺鞨のような周辺の靺鞨族、あるいは敦化周辺の靺鞨から影響を受けたと理解できるだろう。

最後に副葬品について検討しよう。副葬品には陶器と金属製品、玉石製品などがある。これらの遺物について、各々その由来・性格を明らかにすることは不可能である。さらに、渤海建国集団の構成が多様であったとすると、当然遺物においてもそのような多様性が表出せざるを得ない。つまり、少数の遺物に執着しては建国集団の主たる性格を理解できないのである。したがって、副葬品のなかで特徴的かつ主流をなす要素を抽出し、これらの性格を明らかにすべきであろう。

このような要素として筒形罐（長腹罐）に目を向ける必要がある。報告書によると、六頂山古墳群で出土した陶器は高温で焼成され、胎土にごく少量の砂を含み灰色を呈する類型、そして低温で焼成され、胎土に多量の砂を含み紅褐色、灰褐色、黄褐色を呈する類型がある。筒形罐は後者に属し、灰褐色または紅褐色、比較的広口で口縁下部に突帯（付加堆文）がめぐり、長胴、胴張りで、平底である。また、肩に文様をめぐらした例も1点ある。

高句麗末期になると陶器がほぼ泥質に変わる状況²⁷とともに、漢江流域で出土する高句麗土器も一部を除いてすべて泥質である事実²⁸を考慮すると、六頂山出土の筒形罐が高句麗と関連する可能性は低い。中国人学者が一般的に指摘するように、これら筒形罐はやはり靺鞨土器にその淵源を求めるほかにない。それゆえ劉振華は、これを根拠に渤海の建国集団が靺鞨族であると主張したのであ

²⁴ ジェレズニャコフ（Железняков К.А.）著、孫秀仁訳「阿什河下遊河湾地帯考古調査収獲」『黒竜江文物叢刊』1983-2、p.108。

クルシャノフ（Крушанов А.И.）責任編集、成于衆訳、王徳厚・候玉成校『蘇聯極東史—從遠古到17世紀—』哈爾濱出版社、1993、p.167。

²⁵ 楊虎・譚英杰・張泰湘「黒竜江古代文化初論」『中国考古学会第一次年会論文集（1979）』文物出版社、1980、p.88。

²⁶ 『旧唐書』卷199下・靺鞨伝：「殺所乘馬，於屍前設祭。」

²⁷ 耿鉄華・林至徳「集安高句麗陶器的初歩研究」『文物』1984-1、p.62。

²⁸ 崔鍾澤「漢江流域高句麗土器研究」『韓国考古学報』33、1995、p.70。

る。

以上、古墳の様式、埋葬方法、副葬品の3点から、六頂山古墳群の性格を簡略に整理してきた。古墳の様式面では高句麗文化の様相が強く現れていることは間違いない。その反面、埋葬風俗では棺槨の使用、火葬、二次葬と多葬という側面において、高句麗と粟末靺鞨のどちらの伝統が強く反映されたものであるのか断定し難いが、高句麗よりは粟末靺鞨の伝統により近いと判断される。獣骨の共伴は靺鞨の伝統を明確に示しているが、粟末靺鞨ではなく他の靺鞨族の伝統に由来するものとみられる。副葬品においても筒形罐は靺鞨の伝統を強く示しているが、のこぎり目の突帯がついた陶器と<表1>にある銚板2型が出土しないという点で、やはり粟末靺鞨とは少し異なる様相を示す。

これについて六頂山古墳群を2区域にわけて考察すると、比較的大型の古墳が密集する第1区域中・下部では古墳の様式においては高句麗の影響を強く反映しているが、獣骨がこの区域だけで出土する点はやはり靺鞨的な伝統の存在を示している。第1区域上部と第2区域には靺鞨的伝統をもつ土壌墓が含まれており、火葬や筒形罐の出土もこの区域に集中してみられることから、靺鞨的要素が上の区域よりさらに強く現れている。

結論を述べると、六頂山古墳群は高句麗の要素だけを備えているわけではない。これは渤海の建国集団が単一種族で構成されていない歴史的事実と符合する。渤海の建国集団は営州を脱出した時からすでに高句麗人と靺鞨人で構成されており、これらが遼東に逃れてきた時にも現地の高句麗人を合流させた。そして、東牟山で建国してからは現地の土着靺鞨人やこの地に流入してきた高句麗遺民を吸収していったのだろう。したがって、六頂山古墳群には東牟山に移入してきた勢力がもっていた高句麗および靺鞨の要素とともに、営州滞留時に受容した唐の文化的要素も入っているはずで、東牟山周辺に居住していた靺鞨族の文化要素も含まれていたことが想定される。また、渤海建国直後だけでなく、それ以後も相当な期間にわたり六頂山古墳が築造されていた事実を念頭に置くなれば、渤海人の独創的な文化要素も含んでいる可能性がある。

つまり、六頂山古墳群に含まれる多様な文化要素を無視し、高句麗の伝統だけを強調すると、渤海建国の歴史を解明する過程で過ちを犯さざるを得ないのである。

IV. おわりに

誤った前提により意図的にせよ無意識的にせよ、歴史的事実を誤解、あるいは曲解する可能性は常に存在する。上に挙げた2つの事例のように、渤海古墳の研究においてもやはり例外ではない。

まず、渤海は粟末靺鞨族の国家であるという前提のもとでは、吉林市一帯の古墳の変化過程を誤って解釈し得るのである。中国人学者が主張するように、吉林市一帯の粟末靺鞨土壙墓→吉林市一帯の粟末靺鞨石墓→六頂山古墳群という過程を経たのではなく、六頂山古墳群の石墓が吉林市一帯の粟末靺鞨族に影響を与え、土壙墓から石墓へ変化していったと判断される。涑州に派遣された官僚が埋葬された帽児山古墳群は、このような過程を究明するうえで重要な手がかりを提供している。

次に、六頂山古墳を高句麗文化だけに関連させようとする、それもまた渤海の建国集団について誤った研究結果を招かざるを得ない。六頂山古墳群では石墓がほぼ全てを占めており、古墳の構造や内・外部施設の細部的な面において高句麗の文化要素を色濃く帯びている。しかし、棺槨の使用、火葬や多葬、二次葬、獣骨の共伴と関連した埋葬習俗、筒形罐が絶対多数を占める陶器の副葬において靺鞨的要素も強くみられる。したがって総体として、高句麗の古墳様式に靺鞨的埋葬習俗が結合していることを確認できる。

しかしながら、大型石室墳が位置する第1区域中・下部には一部で靺鞨的要素もみられるが、高句麗の要素がより強く現れている。そして、第1区域上部と第2区域では相対的に靺鞨的要素がより際立つ傾向を示す。これは渤海の建国集団において最上層部になるほど高句麗人の比重が高く、下層になるほど靺鞨人の比重が高かったことを反映している。

つまり、渤海史の研究において、既往のどのような前提にも束縛されず、渤海、高句麗、靺鞨の三要素を客観化させ、相互比較してこそ、初めて歴史的実体に近づけるようになるのである。

<表2> 六頂山古墳群資料1

| 番号 | 位置 | 様式 | 羨道 有無 | 葬具 | 葬法 | 人数 | | | 副葬品 | | | | |
|-----------|--------|-----------|----------------|----|----|-----|-----|----|-----|------------------|--------------|---------------------|--|
| | | | | | | 1次葬 | 2次葬 | 不明 | 陶器 | 金属類 | 瓦磚類 | その他 | |
| | | | | | | | | | | | | | |
| M1 | 1 墓区中部 | 石室墓 | 有 | | | | | 2 | | | | | |
| M2(貞惠公主墓) | 1 墓区中部 | 石室墓(持送り式) | 羨道(南壁, 中央), 墓道 | 木棺 | | | | | 陶片1 | 広頭釘, 鎳金圓帽銅釘4, 鉄釘 | 平瓦(封土上), 素文磚 | 貞惠公主墓誌1, 石獅子2, 壁画片2 | |
| M3 | 1 墓区中部 | 石室墓 | 無 | | | | | 4 | | | | | |
| M4 | 1 墓区中部 | 石室墓 | 羨道(南壁, 中央), | | | | | | | | 平瓦(墓室内), | 玉璧1 | |

| | | | 墓道 | | | | | | | 素文磚 | |
|---------|--------|---------------|---------------|-----|--|--|---|---------------|--|-----|--------------|
| M5 | 1 墓区下部 | 石室墓 (板石天井) | 有 (南壁, 中央) | | | | | 陶瓶 1, 陶盃 1 | 金環 1, 鉄環, 鍍 金銅飾 1, 鍍金帶 環 1 | | 馬骨 多数 |
| M6(珍陵?) | 1 墓区中部 | 石室墓 | | | | | | 陶片 | | 花文磚 | 壁画片, 石 獅耳 |
| M7 | 1 墓区中部 | 石室墓 | | 木槨? | | | | | 鉄釘 | 素文磚 | |
| M8 | 1 墓区中部 | 石室墓 | | | | | | | | | |
| M9 | 1 墓区中部 | 石室墓 | | | | | | 長頸瓶 1 | 香炉 1(付近出 土), 金環 1, 装 飾品 3, 鍍金装飾 品, 鉄環 2 | | |
| M10 | 1 墓区下部 | 石室墓 | | | | | | | | | |
| M11 | 1 墓区下部 | 石室墓 | | | | | 2 | | | | 獣骨 |
| M12 | 1 墓区上部 | 石棺墓 | 無 | 無 | | | 1 | | | | |

※これらの古墳については「墓葬登記表」が提示されておらず、報告書の内容を整理した。

<参考文献>

1. 王承礼「敦化六頂山渤海古墓群調査簡記」『吉林省文物工作通訊』1957
2. 王承礼・曹正榕「吉林敦化六頂山渤海古墓」『考古』1961-6
3. 王承礼「敦化六頂山渤海墓清理発掘記」『社会科学戦線』1979-3

<表3> 六頂山古墳群資料2

| 編号 | 位置 | 様式 | 羨道 有無 | 葬具 | 葬法 | 人数 | | | 副葬品 | | | |
|------|--------|-----|---------------|----------|-----------|-----------|-----|-------|--|-----|-----|-----|
| | | | | | | 1次葬 | 2次葬 | 不明 | 陶器 | 金属類 | 瓦埴類 | その他 |
| | | | | | | | | | | | | |
| M101 | 1 墓区上部 | 石室墓 | 有 (南壁, 偏西) | 木棺 2? | 2 (北枕) | 3(小 児) | | 陶片 47 | 銅帶銙 5, 銅帶扣 1, 銅 耳環 1, 鉄帶銙 1, 棺釘 20 | | | |
| M102 | 1 墓区上部 | 石室墓 | 不明 | 木棺 1 | 1 (北枕) | 9 | | 陶碟 1 | 銅帶銙 7, 銅帶扣 1, 鉄 帶銙 6, 鉄鉈尾 1, 棺釘 1 | | | |

| | | | | | | | | | | | | |
|------|------------|-------------------|------------------|---------------|---------|-------------------------|---|----------------------------------|--|--|------------------------------------|---------------------|
| M103 | 1 墓区 上部 | 石室墓 | 無 | | | | | | | | | |
| M104 | 1 墓区 上部 | 石室墓 | 無 | | | | | 陶斂口罐 1, 直腹罐 1, 陶 片 38 | | | | |
| M105 | 1 墓区 上部 | 石室墓 (板石天井) | 有 (南壁, 偏西) | 木棺 | | 2 (南枕) | | | 銅指環 1, 銅耳環 1, 鐵 棺釘 17 | | | |
| M201 | 2 墓区 東部 | 石室墓 | 有 (南壁, 偏西) | | 火葬 | 1 (南枕) | | 陶瓶 1, 陶碗 1, 陶盤 1, 陶 片 50 余 | 銅鐻 2, 銅片 1 | | 平瓦 1(墓 室內) | |
| M202 | 2 墓区 中部 | 石室墓 | 有 (南 壁, ?) | 木棺 | 火葬 | 1 (北 枕) | | 陶長腹罐 1 | | | | 料珠 2 |
| M203 | 2 墓区 中部 | 石室墓 | 無 | | | 2 (北枕) | | 陶片若干 | 銅鐻 2, 鑲金銅耳墜 2 | | | |
| M204 | 2 墓区 中部 | 石室墓 | 不明 | | 火葬 | 1 | | 陶長腹罐 1 | 銅鐻 1, 銅帶銜 1, 銅鈿 尾 1, 銅環 1, 銀指環 2, 鐵鏃 1 | | | 瑪瑙珠 2, 料 珠 1 |
| M205 | 2 墓区 中部 | 石室墓 | 有 (南壁, 中央) | 木槨 木棺 | 火葬 | 2(北 枕); 1(幼 兒) | | 陶長腹罐 3, 陶瓶 1, 雙 耳盆 1 | 銅指環 2, 棺釘 | | | 料珠 3 |
| M206 | 2 墓区 中部 | 石室墓 | 有 (南壁, 中央) | 木棺 2 | 火葬 | 2 (北 枕) | 3 | 陶長腹罐 1, 陶圓腹罐 1 | 銅鐻 3, 銅耳環 1, 銅帶 扣 1, 銅帶銜 1, 銅鈴 11, 鐵帶銜 8, 鐵鏃 4, 鐵棺釘 13, | | | 瑪瑙珠 64, 料 珠 6 |
| M207 | 2 墓区 中部 | 石室墓 | 有 (南壁, 中央) | 木棺 | 火葬 ? | 1 | | 陶壺 1, 陶斂口罐 1, 陶片若干 | 銅鐻 2, 銅衣扣(釧)1, 殘鐵環 1 | | | |
| M208 | 2 墓区 東部 | 土壙墓 | 無 | | 火葬 | | | 陶片 10 余 | 銅鐻 1 | | 平瓦 3, 瓦当 1(墓 室內) | |
| M209 | 2 墓区 西部 | 土壙墓 (南壁 石築) | 有 (南壁, 中央) | 木槨 木棺 2 | 火葬 | 2(北 枕) | 6 | 陶圓腹罐 1, 陶片 | 銅帶銜 2, 鐵小刀 1, 鐵 棺釘 20 | | 丸瓦 2, 平瓦 18(封土 上及 墓室內) | |
| M210 | 2 墓区 西部 | 土壙墓 (南壁 石築) | 無 | 木棺 | 火葬 | 2(北 枕) | 1 | 陶片 | 銅指環 1, 銅帶銜 11, 鐵 帶銜 1 | | 瓦片(封 土上) | 瑪瑙珠 4 |

| | | | | | | | | | | | | |
|------|------------|-------------------|-------------------|-----------------|----|------|-------------------------|--|-----------------|---|--|---------------------|
| M211 | 2 墓区 中部 | 石室墓 | 有 (南壁, 中央) | 木槨 木槨 | 火葬 | 3 | 3 | | 陶長腹罐 1 | 銅帶銙 6, 銅指環 1, 鉄帶銙 1, 金指環 1, 銀耳環 1, 鉄棺釘 2, 殘鉄器 1 | | 瑪瑙珠 4, 玉 珠 1 |
| M212 | 2 墓区 中部 | 石室墓 | 不明 | 木槨 又 は 木槨 | 火葬 | | | | | | | |
| M213 | 2 墓区 中部 | 石室墓 | 有(南 壁, 中 央) | 木槨 2 | | 2 | | | 陶片若干 | 銀耳環 1, 鉄棺釘 20 | | |
| M214 | 2 墓区 中部 | 土壙墓 | 無 | 木槨 木槨 | 火葬 | 最小 1 | | | 陶片若干 | 鉄棺釘 7 | | |
| M215 | 2 墓区 中部 | 石室墓 (板石 天井) | 有 (南壁, 中央) | 木槨 | | | 一部 2 次葬 ⁸ | | 陶長腹罐 1, 陶片若干 | 銅帶銙 2, 銅鈍尾 2, 銅鐻 3, 鉄鐻 1, 殘鉄器 1 | | 瑪瑙珠 2, 瑪 瑙管 1 |

<参考文献>

1. 朝中共同考古学発掘隊『中国 東北地方の 遺跡 発掘報告 (1963~1965)』社会科学 院出版社、1966
2. 中国社会科学院考古研究所編著『六頂山与渤海鎮—唐代渤海国の貴族墓地与都城遺址—』中国田野考古学報告集考古学専刊丁種 56 号、中国大百科全書出版社、1997



營州大祚榮集團の渤海建国

鄭炳俊（東国大）

Journal of Northeast Asian History
volume 4, number 2 (Dec 2007) : 32~46

*Copyright © 2007 by Northeast Asian History Foundation. All Rights Reserved.
No portion of the contents may be reproduced in any form without
written permission of Northeast Asian History Foundation.*

営州大祚榮集團の渤海建国

鄭炳俊（東国大）

I. はじめに

高句麗の滅亡を前後し、多くの高句麗人が唐に移住した。もちろん、ここには自発的に移住した者もいたであろうが、大多数は唐朝の政策により強制的に移住させられた人々である。そして、唐に移住した高句麗遺民の運命は大きく2つに分けられる。1つは唐の内地に配置され一般民に組み込まれた場合であり、もう1つは異民族と対峙する辺境に配置され特別な形で管理された場合である。

唐の辺境には高句麗人以外にも唐朝に内附あるいは連行された多くの異民族が唐朝により特別管理されていた。その大半は種族別に構成された羈縻府州あるいは「城傍」に編制され、自らの習俗にしたがって生活し、有事の際に兵士として動員された。城傍は羈縻府州とは異なる一種の半専門的な異民族軍事集団を指す。唐代城傍の大半は遊牧民で、平時は本来の部落組織を維持し、兵牧合一の生活を営んだ。そして、これらは唐の軍隊において最強の戦闘力を誇り、辺境軍を補完するだけでなく、唐の対外遠征に従軍して目覚ましい活躍を遂げた¹。

唐の辺境に配置された高句麗遺民の相当数は城傍に編制されたとみられる。このように推定せしめるよい例は遼西の営州に居住した高句麗遺民である王思礼の事績である。彼は「営州城傍高麗人」と記録されている²。高句麗人で構成された城傍の人々は「城傍高麗人」と呼ばれていたのである。唐の城傍に関する論文を発表した中国の李錦繡は、王思礼以外に安史の乱以後、山東地域を支配した李正己も営州の「城傍高麗人」であり、彼とともに営州から山東に移つ

¹ 李錦繡「“城傍”与大唐帝国」『唐代制度史略論稿』中国政法大学出版社、1998（初出は『学人』8、1995）、256～257頁、280～281頁。

² 『旧唐書』巻110・王思礼伝、中華書局、3312頁。

た2万人余りの兵士の中にも營州の「城傍高麗人」がおそらく多数含まれていたとした³。

筆者はこれについて、高句麗遺民の大祚榮も營州の城傍であったという見解を述べたことがある⁴。しかし、そこでは簡略に理由だけを述べるにとどまり、具体的な説明はできなかった。仮に大祚榮が營州の城傍であったとすると、大祚榮は營州において個人ではなく集団の一員として軍事活動に従事していたことになる。

渤海国を建てた大祚榮の出自と建国過程については少なくない研究成果が出版されている⁵。しかし、營州時代の大祚榮とその集団についてはいまだ本格的な研究が行われていない。本稿は、高句麗滅亡後、唐の營州に移住した大祚榮とその集団が彼の地でどのような形で存在し、またそれが渤海国の性格にどのような影響を与えたのかを検討しようとするものである。

II. 高句麗遺民の唐移住

668年9月に高句麗が滅亡し、多くの高句麗人が唐に強制移住させられた。『旧唐書』巻5・高宗本紀下・總章2年(669)5月条をみると、

高麗戸28,200、車1,080乗、牛3,300頭、馬2,900匹、駱駝60頭を移住させた。今後内地に移すために萊州と營州の二州に送り、江・淮以南及び山南・并・涼以西の諸州の空閑処にわけて安置した(92頁)。

と記されている。長江と淮水以南は典型的な農耕地帯であるのに対し、山南・并州・涼州以西の空閑地域は辺境あるいは準辺境地域に属していた。「内地」とは言うまでもなく、このような典型的な農耕地帯と辺境地域を包括する語で、唐の領土ともいえる。唐に移住させられた28,200戸という数字は滅亡当時の高句麗の戸数であった697,000戸の約1/24にあたる。そして『資治通鑑』によると、唐朝が高句麗遺民を移住させた理由は、「高句麗遺民が唐に反旗を翻し、離反することが多かったため⁶」であるという。この記録は後代に大きな影響を与え、関連研究の大半がこれにほぼ従っている⁷。

³ 李錦繡「“城傍”与大唐帝国」290頁。

⁴ 鄭炳俊「‘營州城傍高麗人’王思礼」『高句麗研究』19、2005、261頁の注39。

⁵ 林相先『渤海의 支配勢力研究』新書苑、1999、22～34頁；金鍾福「渤海의 建国過程에 對한 再考察」『韓國古代史研究』34、2004、などを参照。

⁶ 『資治通鑑』巻201・總章2年4月条、中華書局、6359頁。

⁷ 日野開三郎「高句麗国遺民反唐分子の処置」『日野開三郎東洋史学論集』8、三一書房、1984、58～59頁；金文経「唐代의 高句麗遺民 徙民策」『唐代의 社会와 宗教』崇実大学

その後唐に移住した高句麗遺民は、高句麗最後の王、高蔵が唐から遼東州都督・朝鮮王に任命され遼東に戻ってきたが、高蔵の謀反の企てが発覚し、再び中国「内地」に連行された。すなわち、『資治通鑑』巻202・高宗儀鳳2年(677)2月条に「河南・隴右の諸州に散徒させ、貧者は安東城傍に置いた」(6383頁)とある。ここでも相当数の遺民が唐の辺境地域に配置されたといえよう。

金賢淑によると、高句麗遺民は時間の経過とともに高句麗人の後裔であるという意識が曖昧になっていき、中国社会に吸収・同化する速度が徐々に速まったという⁸。このような観点は大局的にみると非常に妥当性がある。しかし、これは唐に移住させられた高句麗人を1つの範疇で理解した結果であり、限界がある。中国の典型的な農耕地域に配置された高句麗遺民は時間の経過とともに徐々に本来の民族的アイデンティティを喪失し、中国社会に同化していったであろうが、辺境地域に配置された高句麗遺民は一般民とは異なる軍事組織に編制され、相対的に長期間本来のアイデンティティを維持したとみられる。すなわち、後者の場合には後述するように、唐朝の必要に応じ、軍事に動員するため特殊な軍事組織に編制し、本来の種族的アイデンティティを温存させたためである⁹。換言すれば、唐朝は高句麗人の武を好む気質を利用するため、その種族性を維持させたのである。

また、既存の研究では高句麗遺民として名を馳せた人物にとりわけ軍人が多かった理由について、彼らが軍隊以外には他に出世する道がなかったためであるとしている¹⁰。これはもちろん間違いではない。しかし、その相当数が当初から辺境の軍事組織に編制されていた事実を看過している。すなわち、高句麗遺民のなかで軍人として名を馳せた人物が多かった理由は、彼らの相当数が当初から特殊な軍事組織として編制されていたためであるとみるべきである。

唐朝は異民族を集団で辺境に配置し、軍事的に利用する政策をとり、大きな成果を挙げていた。もちろん、これは中国の伝統的「以夷制夷」政策の一環といえるが、唐代には特にその規模が大きく、またこれらが対外遠征に従軍し、輝かしい功をたてるなど、唐の世界帝国建設とその維持に非常に重要な役割を果たした。

このような中で、高句麗遺民も唐の辺境に配置され、軍事に従事していたことが窺われる。『旧唐書』巻104・高仙芝伝によると、高句麗遺民の高舎雞はまず唐の西方の辺境地域に設置された河西軍の軍将になり、次にその西方の安西

校出版部、1984、19～20頁など。

⁸ 金賢淑「中国 所在 高句麗 遺民의 動向」『韓国古代史研究』23、2001、92～94頁；同「高句麗 崩壊 後 그 遺民의 去就問題」『韓国古代史研究』33、2004、76頁、88～90頁など。

⁹ 李錦繡「“城傍”与大唐帝国」256～257頁。

¹⁰ 金賢淑「中国 所在 高句麗 遺民의 動向」83～84頁、92頁など。

軍に移って服務した。息子の高仙芝も河西から安西に移り、父の功績で軍将になったという¹¹。高舎雞と高仙芝はかつて河西地域に移住した高句麗人、あるいはその後裔であったと推測される。息子が父と行動をともにし、父子が家を継ぎ軍将になった点から、彼らは当初から世襲的な軍事組織として編制されていた可能性がある。このような点を裏付ける史料が『唐六典』巻5・尚書兵部・兵部郎中条の規定である。

秦・成・岷・渭・河・蘭の六州に高麗兵と羌兵がいる。(原註)すべて該当州の上佐一人が全的に統押し、毎年二度にわたり教練し、部伍を治めることとする。もし警急なことが生じれば、すぐに駆けつけて救援することとする。諸州の城傍子弟もやはり定期的に教習させるが、毎年秋に本軍に召集し、春に帰す(中華書局、157頁)。

上の史料は、唐の西方の辺境である隴右地域の秦州・成州・岷州・渭州・河州・蘭州の六州に高句麗人の兵士がいたが、これらは該当州の官吏の統制下で毎年定期的に軍事訓練を受け、有事の際に動員されたことを伝える内容である。子弟とは兵士を指し、城傍子弟は「城傍」兵士のことである。李錦繡は『唐六典』にみえる「高麗兵」も「城傍兵」を指す語であるとしている¹²。

このようにみえてくると、河西にいた高仙芝もやはり城傍であった可能性がある。その理由として、①河西と隴右は類似する地理的環境をもつ辺境地域であり、②両地域は高句麗滅亡の頃から吐蕃の攻撃を受け、③河西にも隴右と同じく城傍があり¹³、④蕃兵に対する依存度はむしろ隴右より河西が一層高く¹⁴、⑤高仙芝と王思礼が軍将であった父に従い移住して後を継ぎ軍人になった、という点などが挙げられる。このような推定が妥当であるなら、高仙芝のほかにも河西に高句麗人で構成された城傍人がいたであろうし、また高舎雞が河西から安西に移った際、河西にいた高句麗人の城傍の相当数が行動をともにした可能性まで否定できない。

唐代の営州には「城傍高麗人」がいたという明確な記録がある。王思礼の例がまさにそれである。『旧唐書』巻110・王思礼伝をみてみよう。

王思礼は営州城傍高麗人である。父虔威は朔方軍将になり習戦として名が知られている。王思礼は若くして戎旅を事とし、節度使王忠継嗣に従い河西

11 『旧唐書』巻104・高仙芝伝、3203頁。

12 李錦繡「“城傍”与大唐帝国」256頁。

13 李錦繡「“城傍”与大唐帝国」267～268頁。

14 王永興『唐代前期軍事史略論稿』崑崙出版社、2003、108頁、163頁など。

に行き………（中華書局、3312 頁）。

ここで王思礼が「營州城傍高麗人」であつたという事実が目を引く。王思礼と父の王虔威は本来營州城の周囲に集団で居住し、營州都督府の指揮に従う高句麗人で構成された軍事的集団に属していたとみることができる。

營州の「城傍高麗人」と関連して注目される人物が李正己である。李正己は高句麗滅亡から約 80 年後に起きた安史の乱の初期に、營州の平盧軍において初めてその姿をみせる。そして、平盧節度使侯希逸とともに兵士約 2 万人を率いて現在の山東地域に移動し、反乱終結後の代宗の永泰元年（765）5 月に侯希逸を追放して自ら節度使になり、広大な領土を支配する半独立的な藩鎮を建設した¹⁵。李錦繡はこのような李正己の活動から、李正己とそのまわりの多くの兵士も營州の「城傍高麗人」であつたのだろうという見解を提示している。ところで、この見解は李正己について詳細に考察して下した結論というより、營州に多数の高句麗人兵士がいて、そこに「城傍高麗人」がいた点をつなぎ合わせて下したものである。それにもかかわらず、様々な状況からみて、筆者もやはりこの見解に同意するが、事実、李正己の活動だけでは彼とその周辺の兵士が城傍であつたと断定するのは困難である。

そこで、侯希逸が營州にいた時期の動向をもう一度検討し、関連する手がかりを少しでも探してみよう。侯希逸の母は李正己のお婆である。玄宗の天宝末期に平盧節度使の指揮をうける安東都護府管下の軍鎮である保定軍の軍将になった。保定軍は安東都護府の治所があつた遼西故城に置かれ、保定軍使は安東副都護が兼任していた。当時、安東副都護は都護府の実質的な責任者であり、保定軍は都護府の主力軍であつた。安祿山が反乱を起こした直後、平盧軍の劉客奴らが安東都護府の軍将である王玄志らとともに挙兵し、平盧を掌握して唐朝に投降した。この時、侯希逸も王玄志と大事に参加し、功をたてた¹⁶。

記録にはこのような侯希逸の初期の活動と李正己の活動が別々に記されている。しかし、二人は従兄弟同士で、後にも重要な場面で一丸となって対応していることから、王玄志が大事を起こした当時、李正己も侯希逸とともに参与したとみられる。李正己もやはり保定軍の軍将であつた可能性が高い。

李正己も安東都護府の城傍あるいはその出身であつた可能性がある。その理由は安東都護府に「城傍高麗人」がいたという記録がみられるからにほかならない。すなわち、先に高蔵にふれて引用した『資治通鑑』巻 202・高宗儀鳳 2 年

¹⁵ 鄭炳俊「安史의 乱과 李正己」『東国史学』37、2002；同「平盧節度使 李正己에 대해－代宗時期를 中心으로－」『震檀學報』94、2002 など。

¹⁶ 鄭炳俊「平盧節度使 侯希逸－安東都護府의 軍將에서 平盧淄青節度使로－」『中国史研究』39、2005、49～54 頁。

(677) 2月条に「(高句麗遺民を) 河南・隴右の諸州に散徙させ、貧者は安東城傍に置いた」という一節がみえるが、「安東城傍に置いた」とあるのは「安東城傍とする」と解釈して差し支えない。すなわち、677年2月に唐朝は、遼東の高句麗遺民を再び「内地」に移し、残りの高句麗遺民を城傍という軍事集団に組織し、安東都護府を守る一翼を担わせたのである。もちろん、これ以後、安東都護府は数度治所を移し、玄宗の天宝2年(743)から遼西故城に治所を置いた¹⁷。しかし、このような治所の頻繁な移動とそれによる不安定性にもかかわらず、安祿山が反乱を起こした当時、安東都護府の管下には少なくとも8,500人の兵士と700匹の軍馬がいた¹⁸。

城傍は武則天の時期から少しずつ辺境の正規軍として編入され始め、中宗・玄宗代に至りさらに増員された¹⁹。しかし、玄宗代にも城傍は確かに存在していた²⁰。したがって、安史の乱が起こった時期に營州の安東都護府に「城傍高麗人」が存在した可能性もやはりいくらでもある。仮に、安史の乱以前に安東都護府の城傍高麗人がすべて辺境正規軍に編入されていたとしても、城傍高麗人としての痕跡が完全になくなっただろう。

Ⅲ. 營州の大祚榮集団と契丹族の反乱

大祚榮は高句麗滅亡後、遼西地域の營州に移住した。『旧唐書』卷199下・北狄列伝・渤海靺鞨伝に

大祚榮はもと高麗別種であつた。高句麗滅亡後、家属を率いて營州に徙居した(5360頁)。

という一節がみえる。家属とは宋基豪が指摘するように「血縁家族だけでなく、彼が率いていた集団全体」を意味する²¹と判断される。そして、当時の大祚榮集団が自発的に移住したのか、あるいは強制的に移住させられたのかは明確でないが、高句麗滅亡後、高句麗遺民が大挙して移住させられた事実から、大祚榮集団もやはり強制移住であつた可能性が非常に高いといえる。

¹⁷ 日野開三郎「唐の高句麗討滅と安東都護府」『日野開三郎東洋史学論集』8、三一書房、1984、31～35頁など。

¹⁸ 『通典』卷172・州郡2、中華書局、1988、4481～4482頁；『旧唐書』卷38・地理志1、1387頁；『資治通鑑』卷215・天宝元年正月条、6849頁。

¹⁹ 李錦繡「“城傍”与大唐帝国」283頁。

²⁰ 『旧唐書』卷142・李宝臣伝、3865頁；『資治通鑑』卷222・肃宗上元2年(761)3月条の『考異』にみえる『薊門紀乱』の記事、7110頁。

²¹ 宋基豪『渤海政治史研究』一潮閣、1995、26頁。

大祚榮は營州でどのような生活を送っていたのだろうか。まず注目されるのは、大祚榮が渤海を建国する頃に首領あるいは酋長と称されていた点である。崔致遠の『孤雲集』巻1に収録された「謝不許北国居上表」に「首領」と記されており²²、『三国遺事』巻1・靺鞨渤海条に「酋」と記されているのである²³。首領や酋長とは述べるまでもなく集団の頭を意味する語である。彼らはいわゆる「斉民支配」の対象、つまり一般の民や戸と同じ存在であったとは考えがたい。したがって、大祚榮は營州において一般民ではなく特殊な集団を率いる長であった可能性が高い。

營州は都督府であったが、管轄県は一県しかなかった。そして、その一県も1,031戸、4,732人にすぎず、これさえ玄宗の天宝年間には997戸、3,789人に減少する。この数は營州都督府が直接管理する民であり、營州で純粋に農業に従事した人口はほぼこれらのみであったといっても過言ではない。しかし、營州都督府の役割は決して一県の管轄にとどまるものではなかった。当時の營州は、東北方面の異民族を抑える前進基地の役割を果たし、領内には唐朝に投降したり、強制移住させられた契丹族・奚族・靺鞨族などの異民族が多数存在していた²⁴。その異民族の大半は靺鞨府州あるいは城傍という特殊な集団として編制され、營州都督府の統制を受けた。このような異民族は、平時には自らの習俗によって生活し、有事の際には兵士として動員されたが、殊に城傍の存在が大きかった。このような異民族の雑居により、營州は中原地区とは異なる文化的特徴を備えていたとみられる²⁵。

大祚榮が建国前に率いていた集団は靺鞨府州あるいは城傍の1つであったのだろう。然るに、營州には高句麗人で構成された靺鞨府州の痕跡が全くみられない。したがって、大祚榮が率いた集団は城傍以外に考え難い。実際、營州の城傍の頭を首領と称した記録もみられる²⁶。つまり、大祚榮は營州都督府の管理下にある多数の高句麗人城傍のなかの1つの頭であったと考えられる。この推定が妥当であるなら、營州移住前から大祚榮により率いられていた集団が營州で1つの城傍を形成したとみなすことができる。

²² 『影印標点韓国文集叢刊』1、民族文化推進会、156頁；『東文選』第33巻、民族文化推進会、1968、446頁。

²³ 『訳註三国遺事』1、梨花文化社、2002、「影印原文」の43頁。

²⁴ 盧泰敦「高句麗 遺民史 研究—遼東・唐内地 및 突厥方面의 集團을 中心으로—」『韓』欣博士停年紀念史學論叢』知識産業社、1981、96～97頁；楊曉燕「唐代平盧軍与環渤海地域」王小甫主編『盛唐時代与東北亞政局』上海辭書出版社、2003、162～168頁など。

²⁵ 李松濤「論契丹李尽忠、孫萬榮之乱」王小甫主編『盛唐時代与東北亞政局』上海辭書出版社、2003、97頁。

²⁶ 『全唐文新編』巻214・陳子昂6、「為建安王与遼東書」と「為建安王与安東諸軍諸」吉林文史出版社、2442頁。ここにみられる「土人と城傍子弟」と「諸蕃首領と百姓」が互いに対応することから、城傍兵の頭が首領と呼ばれていたことが分かる。

次に注目されることは、大祚榮がもと高句麗の将であったとする『三国遺事』巻1・靺鞨渤海条の記録である²⁷。朴時亨はこのような記録を根拠に、大祚榮がかつて高句麗の将であったと考えている²⁸。仮にそうであったとすると、大祚榮は高句麗の将であったが、高句麗滅亡後に唐の移住政策により麾下の兵士とともに營州に移住し、城傍として編制されたとみなすことも可能である。このことはさらに、唐に従った、あるいは連行された他の高句麗兵士の相当数も、唐の辺境で城傍として編制されたことを示唆する。

羈縻州や城傍に編制された異民族が、普段は自らの習俗で生活していたように、大祚榮集団と他の高句麗人城傍も自らの習俗で生活することで、その組織と結束力だけでなく、本来の文化的独自性を維持できたと考えられる。

大祚榮と李正己は營州城傍であったと考えられるにもかかわらず、それを伝える明確な記録がない。これは城傍の消滅後、城傍に対する人々の記憶が次第になくなっていき、後代の史家さえも史書編纂時に関連記録を十分に消化できなかったためと考えられる。事実、宋代の司馬光でさえも『資治通鑑』編纂時に城傍固有の意味を理解できず、それを「城側」と記録している²⁹。

また、大祚榮は果たして高句麗人であったのかという議論がある。大祚榮が高句麗系の辺境人であったとする見解と、高句麗人化した靺鞨系住民であったとする見解があるのである。しかし、後者においても、高句麗が高句麗文化を軸とした多民族国家であったことを念頭に置くならば、大祚榮を広義の高句麗人とみても大きな問題はないと考えられる。

696年5月に營州の契丹族の城傍首領³⁰である李尽忠が突厥の支援を得て蜂起した。李尽忠は營州城を陥落させ、營州都督の趙文翽を殺害し、自ら無上可汗と称し、孫万榮を南下させて唐を攻撃した。そして契丹軍は營州管内に設置された奚族の羈縻州である崇州を落とし、遼東の安東都護府を攻撃した。しかし、これは安東都護の裴玄珪により撃退された³¹。当時の安東都護府は現在の撫順に位置する新城に置かれていた。一方、唐の武則天は營州の異民族集団の動揺と離脱を抑えるため、突厥・奚・靺鞨族などの「城傍羈縻州」³²を河北の幽州と河南地域に移した³³。

²⁷ 『訳註三国遺事』1、「影印原文」43頁。

²⁸ 朴時亨『渤海史』理論と実践、1989、45頁。

²⁹ 李錦繡「“城傍”与大唐帝国」264頁参照。

³⁰ 『旧唐書』巻6・則天皇帝本紀・万歳通天元年5月条「營州城傍契丹首領松漠都督李盡忠與其妻兄歸誠州刺史孫萬榮殺都督趙文翽，舉兵反，攻陷營州」（125頁）。詳細は李錦繡「“城傍”与大唐帝国」257～258頁参照。

³¹ 『資治通鑑』巻205・則天后万歳通天元年9月条、6508頁；『旧唐書』巻59・許欽寂伝、2329頁。

³² 羈縻府州の形態をとっていたが、実際には城傍であったものを指す。

³³ 李錦繡「“城傍”与大唐帝国」261～263頁。

孫万榮は10万の軍隊を率いて長城を越え、8月に平州で武三思が率いる唐の大軍を破った。唐軍は幽州北方の檀州で契丹軍を撃退させることで、ようやく幽州を死守できた。こうした状況で突厥の默啜河汗が唐に使臣を送り、王室間の通婚と河西降胡の返還を条件に契丹攻撃を提案し、武則天がこれを受け入れた。こうして突厥が契丹の本拠地を攻撃して大打撃を与え、李尽忠と孫万榮の妻子を捕らえた。9月には李尽忠が急死し、契丹軍の士気が急速に低下した³⁴。

しかし同年10月に孫万榮が戦列を整え、再び南下して河北の冀州、瀛州、相州、滄州、趙州、貝州を蹂躪した。その頃唐軍に従軍していた張説は、河北の十中八九が契丹の手中に収められていた、と述べている³⁵。唐朝は武攸宜の指揮下に蕃漢40万を動員し、河北と遼東の二方面から契丹軍を総攻撃するという計画を立て、2月、薛訥に5万の軍隊と食糧を与え、山東から海を渡って遼東に入らせた³⁶。

しかし、697年3月に清辺道総管の王孝傑率いる17万の唐軍が平州で孫万榮の契丹軍に大敗し、王孝傑は戦死した。そこで武則天は5月に20万の軍隊を武攸宜に与え、また突厥に使臣を送り支援を要請した。突厥が同年6月に再び契丹の本拠地を攻撃し、さらに契丹の同盟軍であった奚族が契丹を裏切り後方が混乱すると、契丹軍は戦意を喪失した。孫万榮は後退し、同月幽州の東で部下に殺害され、その残党は9月に鎮圧された。契丹の将軍李楷固と駱武整は孫万榮の死後、すぐさま唐に降伏した³⁷。

このように、契丹軍と唐軍が攻防を繰り返していた間に、大祚榮集團³⁸は靺鞨族の乞四比羽集團とともに東走し、遼東の高句麗故地で建国を準備していた。唐朝は契丹軍鎮圧後、大祚榮と乞四比羽を懐柔するため、大祚榮の父である乞乞仲象を震国公に、乞四比羽を許国公に封じた³⁹。唐朝における国公は郡王に次ぐ第3の等級であるが郡王と同じ正一品であり、唐の臣下に与えられる最高の爵位であった。武則天がこのような高い爵位を与えたことは、大祚榮と乞四比羽がすでに遼東で相当な勢力を形成していたことを示唆する。

それでは、大祚榮が東走したのはいつであろうか。『旧唐書』巻199下・渤海靺鞨伝の記事から、李尽忠が反乱を起こしてから死亡するまでの間であった

³⁴ 『資治通鑑』巻205・則天后万歳通天元年9月、10月条、6509～6510頁。

³⁵ 『全唐文新編』巻224・張説4、「論神兵軍大總管功状」2537頁。

³⁶ 『全唐文新編』巻214・陳子昂6、「為建安王与遼東書」「為建安王与安東諸軍書」吉林文史出版社、2442頁；宋基豪『渤海政治史研究』48頁参照。

³⁷ 『資治通鑑』巻206・則天后久視元年6月条、6547頁。

³⁸ 『新唐書』巻219・渤海伝には「有舍利乞乞仲象者，與靺鞨酋乞四比羽及高麗餘種東走」（中華書局、6179頁）、『資治通鑑』巻210・玄宗開元元年2月条には「祚榮與靺鞨乞四比羽聚衆東走」（6680頁）とだけ記されている。

³⁹ 『新唐書』巻219・渤海伝、6179頁。

とみられる⁴⁰。宋基豪は、大祚榮が東走する前に李尽忠に同調したが、李尽忠の軍が壊滅する頃に營州を脱出したとし、その根拠として①『旧唐書』渤海靺鞨伝に大祚榮集団が「契丹の余党」と記されており、②崔致遠の「謝不許北国居上表」に「最初は契丹と悪を行つたが、続いて突厥と共謀した」とあり、③『新唐書』渤海伝に、武則天が大祚榮に爵号を下して「罪を許し」とあることを挙げている⁴¹。

仮にそうであれば、大祚榮が東走した時期は、契丹軍が危機に陥った時期であるという推定も可能である。李尽忠の生存時で契丹軍が危機に陥った時期は、李尽忠が死亡する直前の 696 年 9 月、本拠地が突厥により攻撃を受けた時だけである。したがって、大祚榮が營州を脱出した時期は、李尽忠の本拠地が突厥の攻撃を受け、契丹軍が危機に瀕した 696 年 9 月から李尽忠が死亡する 10 月の間であると推定できる。

李尽忠と孫万榮が反乱を起こした原因は、營州都督の趙文翽が飢餓に陥った契丹族を救済せず、また酋長であった李尽忠と孫万榮を下僕のように扱ったためであると記録されている⁴²。もちろん、趙文翽の個人的性格による側面もあったであろうが、それより根本的な理由は、唐が辺境の異民族を統制・利用しつつ、同等な臣民として見なさなかつたことであると考えられる。李尽忠が反乱を起こしてからわずか 10 日で軍勢が数万に膨れ上がったことも、まさにそのためであったのだろう。

一方、孫万榮は万里長城を越えて南下する際、自身の軍隊を 10 万と称したが、これらが全て契丹人であったとは考え難い。反乱初期に奚族などが加わったことも確認される。したがって、契丹族以外にも少なくない異民族集団が直接あるいは間接的に契丹軍に加わった可能性がある。

大祚榮もやはり李尽忠の反乱に同調したが、契丹軍が危機に瀕したため、營州を脱出したのであろうか。このような疑問が生じるのは、696 年 9 月に突厥の攻撃で契丹軍が大打撃を受けたが、決して致命的・壊滅的打撃を被つたわけではなく、またその期間も長くはなかつたためである。翌 10 月に孫万榮が再び戦勢を回復し、以前より一層激しく河北地域を襲つたことがこれを証明する。大祚榮が李尽忠に同調したであろう根拠として宋基豪が提示したものなかで、①と②は李尽忠に同調しなかつたとしても、大祚榮がすでに東走した以上、唐朝の立場からはいくらでも可能な表現である。③の場合にも大祚榮を批判する立場で書かれたものであるため、必ずしも同調を意味すると断定することはで

40 『旧唐書』卷 199 下・渤海靺鞨伝、5360 頁。

41 宋基豪『渤海政治史研究』62 頁、64 頁。

42 『資治通鑑』卷 205・則天后万歳通天元年 5 月条、6505 頁；『旧唐書』卷 199 下・契丹伝、5350 頁。

きないと考えられる。大祚榮が東走し、短期間のうちに遼東で相当な勢力を形成したということは、大祚榮がそれ相応の組織力を持った集団を率いていたことを示唆し、さらには少なくとも大祚榮が反乱に積極的に荷担しなかったことを示すと理解される。

李尽忠の反乱中に武則天が營州の異民族集団を河北の幽州と河南地域に移した事実が注目される。すなわち、李尽忠が營州を占領すると、武則天は突厥・奚・契丹・靺鞨族で構成された順州・瑞州・玄州・威州・昌州・師州・帶州・鮮州・信州・崇州・慎州・夷賓州・黎州の13州を幽州と河南の青州・淄州・徐州・宋州に移し、次いで中宗の神龍年間（705～707）初頭に全て幽州に移し、幽州都督府に隷属させたのである⁴³。従来、これらの州は全て単純な羈縻州であったとみなされていたが⁴⁴、現在は羈縻州とは別に存在する「城傍羈縻州」であったと理解されている⁴⁵。武則天が營州の城傍羈縻州を唐内地に移した主たる理由は、動揺のあまり反乱に合流したり、唐の統治の外に脱することを遮断するためであったのだろう。そして、その時期は先に言及したように、おおよそ李尽忠の本拠地が突厥の攻撃を受けた696年9月頃と推測される。

營州の羈縻州城傍に唐内地への移住命令が下された時、それまで事態の推移を注視していた異民族集団もいただろう。しかし、命令により最後の選択を迫られた。大祚榮も李尽忠の反乱にどれほど荷担するのかという程度の問題を超えて、最後の決断を下すべき状況になったのであろう。そのような状況で、大祚榮は断固として營州を脱し、独自勢力の形成を決心したとみられる。つまり、大祚榮が營州を脱した時期は、突厥が契丹の本拠地を攻撃した696年9月頃、武則天が營州の羈縻州城傍に内地への移住を命じた直後であったとみられる。

当時、營州の異民族集団の中に、唐朝の統治からの脱却を図っていた集団がさらにあっただと思われる。大祚榮とともに東走した靺鞨族の乞四比羽集団もその中の1つなのであろう。しかし、唐朝が送り込んだ軍隊の攻撃で乞四比羽が戦死したことからも分かるように、唐の追撃をかわすことは決して容易なことではなかった。

IV. 大祚榮の渤海建国

唐朝の懐柔にもかかわらず、大祚榮と乞四比羽はそれを拒否し、独自の建国の意志を明確にした。そこで唐は契丹の降将、李楷固を討伐軍の将として攻

⁴³ 『新唐書』卷43下・地理志7下・羈縻州、河北道の突厥州条、1126頁；同書卷43下・羈縻州、河北道の奚州・契丹州・靺鞨州条、1128頁。

⁴⁴ 劉統『唐代羈縻府州研究』西北大学出版社、1998、104～105頁など。

⁴⁵ 李錦繡「“城傍”与大唐帝国」259～263頁、271～272頁。

撃した。これに対し乞四比羽集団がまず李楷固軍と戦ったが、敗れて乞四比羽は戦死した。この頃、乞乞仲象はすでに死亡しており、大祚榮が集団を率いていた⁴⁶。

大祚榮はさらに東に移り天門嶺を越えた。ここは現在の松花江の支流である輝発河と渾河の分水嶺である吉林省の哈津嶺に比定される。続いて李楷固が天門嶺を越えて追撃してくると、大祚榮は乞四比羽が率いていた集団を糾合し、決戦に備えた⁴⁷。ついに天門嶺の東で熾烈な戦闘が行われ、大祚榮が李楷固軍を破り、李楷固はかろうじて逃れた⁴⁸。これで大祚榮は建国過程で直面した最大の危機を脱しただけでなく、この一帯の高句麗系と靺鞨系の人々を統括する土台を確保するにいたった。

李楷固は唐朝も認める将軍であった⁴⁹。その李楷固がこのように惨敗したことは、大祚榮の軍事能力が非常に優れていたことを意味する。大祚榮は俊敏、勇敢であり、用兵に秀でていたという⁵⁰。60に近い歳⁵¹にもかかわらず、このような軍事的力量を持ち得たのは、大祚榮が営州で城傍の首領として軍事活動に従事してきたためと考えられる。

李楷固が後退し、契丹と奚が突厥に服属した。その結果、唐は大祚榮追撃の道を塞がれることになり、大祚榮への攻撃が不可能になった。大祚榮は再び東に移動し、挹婁の故地を占拠し、東牟山（吉林省敦化市城山子山城）に城を築き、ここを根拠地とした。すると靺鞨集団と「高麗余燼（高句麗の残りの集団）」が徐々に従ってきた⁵²。

697年に大祚榮はついに東牟山で独自の国家を建て、震国王（あるいは振国王）と称した⁵³。大祚榮が震国王を称したのは、先に乞乞仲象が唐から震国公に封じられたことと関連があり得る⁵⁴。すなわち、大祚榮が独立国であることを明らかにし、唐朝との関係を意識し、唐の権威を利用するため、以前の爵名をそのまま国名として使用したということである。そして、震国王大祚榮は新たに勢力を回復した突厥と通交して唐に対抗し、新羅とも通交して国家的実体の承

46 『新唐書』巻 219・渤海伝、6179 頁。

47 大祚榮が糾合した集団については、林相先『渤海の支配勢力研究』57～58 頁参照。

48 『旧唐書』巻 199 下・渤海靺鞨伝、5360 頁；『新唐書』巻 219・渤海伝、6179 頁；『五代会要』巻 30・渤海伝、上海古籍出版社、473 頁。

49 『資治通鑑』巻 206・則天后久視元年 6 月条、6547 頁。

50 『旧唐書』巻 199 下・渤海靺鞨伝、「祚榮驍勇善用兵」（5360 頁）；『資治通鑑』巻 210・玄宗開元元年 2 月条に「驍勇善戰」と記されている。

51 宋基豪『渤海政治史研究』33 頁。

52 『旧唐書』巻 199 下・渤海靺鞨伝、5360 頁；『新唐書』巻 219・渤海伝、6179 頁。

53 『新唐書』巻 219・渤海伝、6179～6180 頁；『旧唐書』巻 199 下・渤海靺鞨伝、5360 頁；『資治通鑑』巻 210・玄宗開元元年 2 月条、6680 頁；『新唐書』には震国、『旧唐書』『資治通鑑』には振国と記されている。

54 宋基豪『渤海政治史研究』69 頁。

認に努めた⁵⁵。

705年正月に中宗は侍御史張行岌を震国に派遣した⁵⁶。遼西の突厥と契丹勢力を牽制するためであったが、唐がついに震国の存在を認めたことを意味する。そこで大祚榮も息子を唐に送り、入侍した。そして、中宗が大祚榮を冊立しようとしたが、契丹と突厥が辺境を侵寇したために実現しなかった⁵⁷。そして、先天2年(713)2月には玄宗が崔訢(または崔忻)を派遣し、大祚榮を左驍衛大將軍・渤海郡王・忽汗州都督に冊封し、正式に国家的実体を認めた。以後、震国は渤海と呼ばれるようになった⁵⁸。ただし、林相先の最近の見解によると、渤海と靺鞨という名称は中国で使用されたにすぎず、渤海では震国、高麗および高麗国という国号の使用が推定されるという⁵⁹。

高王大祚榮は建国後、領域の拡張を続けた。その結果、渤海は大祚榮代にすでに「營州の東2,000里にあるが、南は新羅と接し、越喜靺鞨から東北の黒水靺鞨に至るまで四方2,000里にもなり、編戸は10万余り、勝兵は数万人」⁶⁰というほどに成長した⁶¹。

このような拡大政策は第2代武王大武芸と第3代文王大欽茂にも継承され、その領域は拡大していった。武王は日本に送った国書で「列国を主管し、諸蕃を従え、高句麗の故地を回復し、扶余の遺俗を継ぐ」⁶²という内容を伝えている。そして、文王は服属していない靺鞨部族への攻勢をさらに強めた。鉄利部、拂涅部、越喜部、黒水部などの靺鞨部族は8世紀初頭、唐に頻繁に朝貢し、独自の動きをみせ、唐と渤海間の戦争において直接的な継起になった。これらの部族に対する渤海の具体的な攻撃を伝える記録はないが、これら諸部族の唐への朝貢は、ある時点から断絶する。すなわち、拂涅部と越喜部が741年、鉄利部が740年を境に唐への朝貢が断絶するのである。このことは、これら諸部族が8世紀中葉に渤海の勢力圏に入ったことを示す⁶³。これにより文王初期の8世紀中葉になり、渤海の領土は松花江下流まで広がり、建国以来追求してきた対外拡大政策が一段落し、渤海全盛期の領域をほぼ形成するに至る。

55 宋基豪『渤海政治史研究』70頁。

56 『旧唐書』巻199下・渤海靺鞨伝、5360頁；『新唐書』巻219・渤海伝、6180頁；『資治通鑑』巻210・玄宗開元元年2月条、6680頁。

57 『旧唐書』巻199下・渤海靺鞨伝、5360頁。

58 『資治通鑑』巻210・玄宗開元元年2月条、6680頁；『新唐書』巻219・渤海伝、6180頁；『旧唐書』巻199下・渤海靺鞨伝、5360頁。

59 林相先「渤海의 建国과 国号」(尹載云ほか『새롭게 본渤海史』高句麗研究財団、2005)、26~27頁。

60 『旧唐書』巻199下・渤海靺鞨伝、5360頁。

61 『五代会要』巻30・渤海伝では渤海建国頃に「勝兵丁戸四十餘萬」(473頁)であったとする。

62 『続日本紀』巻10・聖武天皇神亀5年正月条、吉川弘文館、111頁。

63 宋基豪『渤海政治史研究』111~112頁。

渤海がこのように領域拡大活動を継続できた土台は、どこに求められるだろうか。もちろん、様々な対内・外的要因を考慮すべきであるが、本稿では大祚榮が営州の城傍であったという点と関係するという見解を提示しよう。大祚榮は営州で城傍として身を置きながら、非常に長い期間趙から軍事技術を学んだ。この経験は渤海を建国するうえで大いに活用され、建国後領域を拡張するうえでも重要な働きをしたものとみられる。渤海は出自的に武力的性質を強く備えた国家であったといえる。大祚榮が城傍出身でなかったならば、渤海の建国自体が不可能であったかもしれない。

特に、武王は黒水靺鞨問題で唐との関係が悪化すると、732年9月に將軍張文休を送り、海から山東地域の登州を攻撃し、刺史偉俊を殺害し⁶⁴、また翌年には軍隊を率いて山海関近隣の馬都山に侵攻し、周辺の城邑を攻撃した⁶⁵。このように唐の中心部を直接攻撃したことは、高句麗でも類例がなかったことで、武王の攻撃的気質をよく示す一節である。このような点は、やはり大祚榮家門が営州時代から蓄積してきた武力的性質と無関係ではないと考えられる。

このような渤海の拡大・攻撃的特徴は第10代の宣王大仁秀の時期にもう一度発揮され、しばらく萎縮していた領土をさらに拡張させた。すなわち、渤海の混乱期に統制から脱した黒水靺鞨などの北方異民族を討伐し、建国初期に占有していた領域を再び確保したのである。そうして渤海は高句麗よりも広い、四方5,000里余りの国土を領有し、全盛を極めて「海東盛国」という名声を得るようになった。

中国のある学者は、大祚榮集団が営州で送った30年間に漢族の先進文化を学んだことで渤海の文化水準が高まり、これは文化的な面から渤海建国に重大な意味を持つと述べている⁶⁶。しかし、このような見解は誤りである。大祚榮集団は営州で唐の中原文化を学んだわけではない。大祚榮集団が営州で学んだことは、軍事技術だけであったといっても過言ではない。本来の習俗を維持し、多様な種族を相手にする術も身につけたであろう。このことは、渤海が広大な領土を占める多民族国家として発展するうえで重要な役割を果たしたとみられる。

⁶⁴ 『資治通鑑』巻213・玄宗開元20年9月条、6799頁；『旧唐書』巻199下・渤海靺鞨伝、5361頁；『新唐書』巻219・渤海伝、6181頁。

⁶⁵ 『新唐書』巻136・烏承玘伝、4597頁；『資治通鑑』巻213・玄宗開元21年正月条の『考異』6800頁。

⁶⁶ 尹載云「中国의 渤海文化 認識」（高句麗研究財団編『中国의 韓国古代文化研究 分析』2005）257頁、264頁参照。

V. おわりに

大祚榮集團は營州において、異民族で構成された半専門的な軍事集団である「城傍」に編制されていたため、本来の民族的性格を維持することができた。大祚榮が營州の高句麗人城傍の一首領であったという点は、次の2つの事実から推測できる。まず、大祚榮が首領あるいは酋長と称されたという点である。これは大祚榮が一般民ではなく特殊な集団を率いていたことを意味する。その集団とは靺鞨府州、ないしは城傍以外に考え難い。然るに、營州には高句麗人で構成された靺鞨府州の痕跡がみられない。他の異民族で構成された城傍の長も、首領や酋長と呼ばれていたことが確認される。

次に、大祚榮が營州を脱して唐の追撃を退けた際、60歳に近い年齢であったにもかかわらず、「驍勇善用兵」あるいは「驍勇善戦」と記されている点である。仮に、大祚榮が一般民の生活を送っていたならば、果たしてこのような働きができたであろうか。そうであれば、少しずつ中国社会に同化し、新国家建設などは考えも及ばなかったであろう。

大祚榮集團が城傍に編制されたのは、唐朝が政策的に彼らを利用するためであった。城傍の大半は遊牧民であったが、唐朝はその軍事力を利用するため、本来の部落組織と特質を維持させた。大祚榮らは遊牧民ではなかったが、唐朝は高句麗人の強力な軍事能力と尚武精神をよく知っていたのである。そこで唐朝はそのような高句麗人を自らの軍事力として再活用するため城傍に編制し、本来の習俗を維持させたといえる。こうして、大祚榮集團も本来の民族的アイデンティティを維持できたのである。

渤海は建国後、領域拡張を継続していった。ここには様々な対内・外的要因があるだろうが、大祚榮が營州の城傍であったことが大いに作用したであろう。渤海は出自的に武力国家の性質を持っていたといえよう。このような性質は第2代の武王大武芸と第3代の文王大欽茂にも継承され、渤海は遼東の大半を領有し、東は松花江下流まで勢力を伸ばした。

特に、武王代には黒水靺鞨問題で唐との関係が悪化すると、732年に張文休を送り、海から山東地域の登州と山海関近隣の馬都山を攻撃したことは、渤海の攻撃的性質をよく表すものである。そして、渤海のこのような攻撃的性質は第10代の宣王大仁秀の時代にもう1度発揮され、一時萎縮していた領土をさらに拡張させた。その結果、渤海は四方5,000里余りの国土を領有し、全盛を極めて「海東盛国」という名声を得るようになったのである。

キーワード：高句麗遺民、大祚榮、高仙芝、營州、城傍、渤海国



渤海国の発展と高句麗継承

林相先 (東北亞歴史財団)

Journal of Northeast Asian History
volume 4, number 2 (Dec 2007) : 50-68

*Copyright © 2007 by Northeast Asian History Foundation. All Rights Reserved.
No portion of the contents may be reproduced in any form without
written permission of Northeast Asian History Foundation.*

渤海国の発展と高句麗継承

林相先（東北亞歴史財団）

1. はじめに

渤海は高句麗の後に続き7世紀末から10世紀初めにかけて、北方地方に存在した国家であるが、今日‘渤海国’に対する歴史認識は、関連国家が多いだけにその解釈もまた様々である。

渤海国の建国者である大祚榮の出生について『旧唐書』では、大祚榮を‘高麗別種’すなわち高句麗系と記述しており、韓国と北朝鮮の研究者はこれを支持している。一方、大祚榮を『新唐書』にあるように“粟末靺鞨であり高麗に属した者（本粟末靺鞨附高麗者）”と解釈した場合、大祚榮は靺鞨族の中でも粟末靺鞨出身ということになる。中国の研究者の多くは、この見解を支持している。

また、中国の学会では渤海を‘唐の地方政権’と見なし、渤海を国家として認めておらず、日本の学会もまた渤海を日本の朝貢国と見なしている。一方、韓国や北朝鮮、ロシアなどは、渤海を自主的な独立国と見ている。このように、渤海に対する認識が異なるのは、昔の渤海領土に現在渤海史研究を進めている国々がある程度含まれており、渤海史が自国と関係があることを主張しているためである。

本稿では、高句麗滅亡後、高句麗遺民が中心となり高句麗の故地に建国した渤海国を、どう理解すべきかについて論じようと思う。渤海史研究上の争点である渤海初期を中心に、この時期の渤海国の性格がどのようなものであったのか、検討してみようと思う。具体的には、高王、武王から文王までの渤海建国と発展過程における渤海と唐の関係、渤海国の高句麗継承意識などについて検討する。

2. 渤海の建国と唐との対立

1) 建国直後の周辺国との交流

渤海の高王は、698年に現在の中国吉林省敦化市城山子山城を中心に自立し、振国王となった。その直後、唐の侵攻に備え突厥に使節を送り通交した。この通交は、両国の共通の敵であった唐の勢力に対抗するために成されたものである。

また、700年頃には南側の新羅にも使節を送り、建国を知らせると共に通交を結んだ¹。その後、713年に新羅が渤海を意識するかのよう開城地方に城を築き²、732年に渤海が登州を攻撃したことが契機となり、新羅が渤海南の国境を攻撃するに至った。これは、新羅が735年（聖徳王34）に唐から正式に涇江以南地域の領有を許される前に、北辺の経営がすでに始められていたことを意味する³。

8世紀初期になると、唐は政策を変更し渤海を認めることで、渤海を唐に従わせようとした。唐は、当時遼西地域を攪乱していた契丹・奚・突厥などに対処するため、その東に位置する渤海の存在に注目したのである。渤海も唐との衝突を避ける必要があったため、唐とは友好的な関係を維持しようとした。

唐は、中宗が即位すると侍御史の張行岌を送り彼を慰勞し、大祚榮は息子を送り入侍させた。しかし、唐と渤海の間は契丹勢力と突厥勢力により遮断され、使節を送ることができなくなった。その後、713年になりようやく使節の派遣が可能となった。

睿宗先天2年（713）に、郎將崔訢を送り祚榮を左驍衛員外大將軍渤海郡王とし、その統轄地域を忽汗州といい、忽汗州都督を加授した。これ以降、毎年使節を派遣し朝貢した⁴。（『旧唐書』渤海伝）

睿宗先天年間に、使節を派遣し大祚榮を左驍衛大將軍渤海郡王に加授し、忽汗州を統轄させると共に忽汗州都督を兼任させた。これ以降、靺鞨という名を

¹ 韓圭哲，1983，「新羅와 渤海의 政治的 交渉過程-南北國의 사신과견을 중심으로-（新羅と渤海の政治的交渉過程—南北国の使節派遣を中心に—）」，『韓国史研究』43

² “十二月，大赦。築開城。”（『三国史記』卷8，〈新羅本紀〉8，聖徳王12年）。

³ 林相先，1988，「渤海의 遷都에 대한 考察(渤海の遷都に関する考察)」，『清溪史学』5，清溪史学会

⁴ 睿宗先天二年，遣郎將崔訢往冊拜祚榮爲左驍衛員外大將軍・渤海郡王，仍以其所統爲忽汗州，加授忽汗州都督，自是每歲遣使朝貢。（『旧唐書』卷199下，列伝第149下，渤海靺鞨）

捨て渤海とだけ呼んだ⁵。（『新唐書』渤海伝）

睿宗先天2年（713）に、崔訢を送り祚榮を左驍衛員外大將軍渤海郡王とすると共に、その統轄地域を忽汗州とし忽汗州都督を加授した。そしてそれ以降、靺鞨という名を捨て渤海とだけ呼んだという記事である。この記録にある、崔訢が使節として渤海を往来した⁶こと、そして祚榮を‘渤海郡王’にしたことを根拠に、渤海の最初の国号は‘靺鞨’であり、713年以降‘渤海’に改称されたとし、渤海は靺鞨が建国した国家であるという主張が提起されている⁷。

しかし、記録にある‘靺鞨’は、崔訢が訪問した渤海の首都（現在の吉林省敦化市）が、多くの靺鞨族が居住する地域であったことを意味するのであって、渤海の国号を意味しているわけではなかった。渤海の住民の中には靺鞨人も含まれていたが、建国過程には多くの高句麗遺民が参与し、彼らが主導的な役割を果たしたことは紛れもない事実である。また、‘靺鞨’や‘渤海’という国号を使用したのは、渤海ではなく唐であった。唐が渤海をそのように呼んだのであって、渤海人が国号を‘靺鞨’や‘渤海’にしたわけではない⁸。

そしてまた、渤海郡王に冊封され忽汗州都督府になったという上記の記録について、これは、唐の州のひとつになったことを示すものであり、渤海が唐の地方政権であったことを意味すると主張する者もいる。つまり、渤海が唐王朝から冊封されたのは、渤海が唐王朝のひとつの羈縻州であり、地方行政機構となったことを意味すると同時に、地方の民族政権として唐王朝とは中央と地方の関係が築かれ、また藩属関係にあったこと意味すると述べている⁹。さらに、唐から冊封され唐の臣下となり服従し¹⁰、唐王朝に隷属した地方民族政権、すな

⁵ 睿宗先天中，遣使拜祚榮爲左驍衛大將軍。渤海郡王，以所統爲忽汗州，領忽汗州都督，自是始去靺鞨號，專稱渤海。（『新唐書』卷219，列伝第144，渤海）

⁶ 遼寧省南端の旅順にある黄金山ふもとの井戸の所にあった鴻臚井碑には、「勅持節宣勞靺鞨使鴻臚卿崔訢が井戸を2つ掘り、これを永遠の経験と記した。開元2年5月18日著（勅持節宣勞靺鞨使 鴻臚卿崔訢 鑿井兩口 永爲記驗 開元二年五月十八日造）」という記録があり、崔訢の肩書きである‘靺鞨使’は、渤海が靺鞨であることを意味していると解釈する者もいる。（魏国忠・朱国忱・郝慶云，2006，『渤海国史』，中国社会科学出版社）

⁷ 渤海の創建者である大祚榮は震国王を自称したが、これは封号であり国号は靺鞨という。（金香，1989，「關於渤海国的若干民族問題」，『社会科学戦線』1989—1；崔泰吉訳，1990，「발해국의 일부 민족문제에 대하여（渤海国の一部民族問題に関して）」，『발해사연구（渤海史研究）』1，延辺大学出版社，245—246頁）

⁸ 渤海の国号に関しては金毓黻，『발해국지장편（渤海国誌長編）』叢号および金鍾福，2005，「발해 國號의 성립배경과 의미（渤海国号の成立背景と意味）」，『韓國史研究』128，韓國史研究會を参照。

⁹ 王承禮，1984，『渤海簡史』，黒龍江省人民出版社；宋基豪訳，1987，『발해의 역사（渤海の歴史）』，翰林大アジア文化研究所

¹⁰ 李殿福・孫玉良，1987，『渤海国』，文物出版社

わち特殊な辺地州郡のひとつであったと主張している¹¹。

一方、漢代の周辺国家との冊封・朝貢関係について、中国の学会が、その政治的性格よりも漢中心の天下観に形式的に帰服した点を強調すると共に、魏晋南北朝時代には冊封の主体が多分化したと指摘している点は、参考になるといえる¹²。高句麗は、北魏や南朝の様々な王朝から、同時に冊封されることも多かった。隋、唐代の冊封・朝貢関係は、東アジアの様々な権力の間で関係を築くために形式的に活用された側面が強く、また東アジア各国の発展により、これらを中国に帰服させるのは事実上不可能な状況であった¹³。

渤海もまた、建国初期から唐の冊封を受け宿衛などを派遣したが、これは渤海が政治的もしくは軍事的に束縛されていたことを意味するのではない。渤海が独自の年号を使用し、前代の王に対する諡号を定め、王を皇帝と称したことは、唐も理解していた。そして、渤海は前任の王が死亡した後、新たに唐から冊封を受ける前に新任の王が国政を担当するなど、正常な形で王権を行使していた。唐王朝による周辺国に対する冊封は、該当国家にとっては事実上無用なものであり、渤海王の場合も国内で中国の官爵を使用した例は見当たらないという主張は参考になる¹⁴。

従って隋、唐と高句麗、渤海の関係を冊封・朝貢を基盤とした従属関係とするのは、当時の実状を無視した非現実的な解釈であるといえるだろう。冊封・朝貢を基に帰属か否かを結論づけることに関しては、中国の学会内部でも批判が提起されている。つまり、中国の歴代王朝が、秦漢以来国内で施行した地方行政制度（分封制、郡県制、郡国制など）の経験に基づいて行われたのが、周辺国家と民族に対する朝貢・冊封制度であったと主張するのである。朝貢・冊封関係下では、一般的には君臣関係、政治的には一定の隷属性があるなど、不平等な要素が存在するが、国内の中央政府と地方政府との関係は、このようなものではなかった。これがすなわち、郡県制（分封制、郡国制を含む）と朝貢・冊封関係の異なるところであると述べている。さらに、朝貢・冊封関係は、中国の歴代王朝と周辺国家・民族、もしくは大国と小国、強国と弱国の間で結

¹¹ 魏国忠・朱国忱・郝慶云, 2006, 『渤海国史』, 中国社会科学出版社

¹² 中国側の冊封・朝貢に関する主張と、これに対する批判は林相先(2005), 「중국학계의 발해・고구려 역사연구 비교 (中国学会の渤海・高句麗の歴史研究比較)」, 『중국의 동북공정과 중화주의 (中国の東北工程と中華主義)』, 高句麗研究財団を参照。

¹³ 方香淑, 2004, 「古代 동아시아 冊封朝貢體제의 원형과 변용 - 韓中關係를 중심으로 - (古代東アジア冊封朝貢体制の原形と変容—韓中關係を中心に—)」, 『朝貢冊封體制와 韓・中 關係 (朝貢冊封体制と韓・中關係)』, 高句麗研究財団主催第2次學術會議發表集, 29-31頁

¹⁴ 李成珪, 1996, 「中國의 分裂體制模式과 東아시아 諸國 (中国の分裂体制模式と東アジア諸国)」, 『韓國古代史論叢』8集, 300-318頁

成された国際社会の政治、外交秩序であると規定している¹⁵。

渤海と高句麗が、それぞれ唐の地方政権と属国であるという主張も、朝貢・冊封と同様の論理によるものである。黒水靺鞨は、渤海とは異なり唐から官吏が派遣されていた。中国の論理が正しければ、黒水はこれに該当することになる。しかし、渤海に使節ではない官吏が唐から派遣されることはなく、逆に武王が弟である大門芸の処分をめぐり、唐朝廷を積極的に非難した。732年には唐の行為に抵抗するために唐本土に侵入したが、唐が新羅を引き込みこれに対応したことで、争いは国際的な戦争へと発展した。中国側の説明にあるように、渤海が地方政権であるとすれば、732年に唐は外国勢力である新羅を味方につけ地方政権と戦ったことになる。

また、渤海が唐の地方政権であるとした場合、南側の新羅に対する認識も問題になってくる。唐は、安史の乱そして765年に河北において藩鎮勢力が割拠すると、山東に淄青平盧節度使押新羅渤海両蕃使を置き、渤海と新羅の業務を担当させた。渤海は新羅と同列であるため、渤海だけを地方政権であるとする論理は、中国の学会自らがその矛盾を認めることになる。

2) 領土拡張と唐との衝突

791年に大祚榮が死ぬと、その国で独自に諡号を定め高王とした¹⁶。その直後、彼の息子である桂婁郡王大武芸が王位に就き武王となり¹⁷、自ら年号を仁安とつけた。武王は王位に就くと、積極的に対外拡張を試み勢力を発展させ、727年には‘多くの国をひとつにまとめ、多くの蕃国を監督し、高句麗の故地を取り戻し、扶余の習俗を得た’¹⁸ことを自称すると共に大国の盟主として振る舞った。対外拡張により渤海の領域は何倍にも拡大し、人口も急増した¹⁹。

それは、營州から東に2千里離れた所にあり、南は新羅と接し、（西は）越喜靺鞨と接し、東は黒手靺鞨に至り、その領土の規模は四方2千里にもなる²⁰。

大土宇を開拓し、東北の様々な夷が恐れ、渤海の臣下となった²¹。

¹⁵ 朴真爽，2004，「試論四—五世紀東北亞世界的朝貢冊封体形—以高句麗為中心—」（馬大正・金熙政主編，『高句麗渤海歴史問題研究論文集』，延辺大学出版社），102—116頁

¹⁶ 『新唐書』渤海伝

¹⁷ 『旧唐書』渤海伝

¹⁸ “忝當列國 監總諸蕃 復高麗之舊居 有扶餘之遺俗”（『続日本紀』卷10）

¹⁹ 李殿福・孫玉良，1987，「대무예의 武功（大武芸の武功）」，『渤海国』，文物出版社

²⁰ “其地在營州之東二千里，南與新羅相接，越喜靺鞨東北至黒水靺鞨 地方二千里”『旧唐書』卷199下，北狄列伝，渤海靺鞨伝

²¹ “斥大土宇，東北諸夷畏臣之”『新唐書』219，北狄列伝第144，渤海

武王代には、‘領土を大幅に開拓し、東北の蛮夷たちがこれを恐れ渤海の臣下’となるほど、積極的に領土拡張が進められた。『旧唐書』では、この時期の領土を四方2千里と記録している。旧国で建国された後、東は牡丹江を越え豆満江に至り、西は鴨緑江河口、吉林、長春を越えて行き、北は鉄利、越喜付近にまで達し、南は新羅と接していたことが分かる。

東京地域は渤海が建国された後、半世紀も経たないうちに5京のひとつとなり、8世紀後半には首都に選定された。特に東京地域は、武王代初期にはすでに渤海の領域に編入されていたようだ。727年に初めて渤海から日本へ使節が派遣されたが²²、この時の使節団は、現在のロシア沿海州のクラスキノと推定される塩州から船に乗って日本に渡ったと思われる。従って、武王代には、沿海州南部の東海岸地域にまで渤海勢力が拡大していたといえる²³。

武王の対外拡張政策は、周辺民族や国家の脅威となり、これらの関係は緊張状態へと変化していった。また、武王代には北部と西部への領土拡張も進められ、726年に武王は、軍隊を送り北側の黒水靺鞨府に攻め込み、靺鞨の多くの府を統一しようと試みた。

唐は契丹、奚、突厥が一時的に衰退した隙を狙い、渤海の背後に位置する黒水靺鞨を抱き込み、726年に該当地域に黒水府を設置すると共に唐の官吏を派遣し、黒水靺鞨族を監督・操る任務を遂行させた。本来、黒水靺鞨は渤海に属してはいなかったが、渤海との関係を考慮し、渤海の許しを得た後に対外交渉を行った。突厥と交流し黒水靺鞨に突厥の官吏である吐屯を置いた時も、事前に渤海の承諾を得ていた²⁴。しかし、この時は渤海との間で事前の話し合いはもたれておらず、独自に唐と交流しその官府を設置させた。唐と黒水靺鞨がつながりをもつことは、渤海を前後から圧迫する構造が形成されることを意味し、もしこれを容認すれば、渤海の勢力下にある他の靺鞨部族も同様の形で、唐の影響下に置かれることとなる。これは、渤海の存立に致命的な要素となりうるものであり、よって武王は黒水靺鞨に対する攻撃を断行せざるを得なかった²⁵。

この際、弟である大門芸と彼の叔父である任雅に軍事を徵発し黒水を討つよう命じたが、門芸はこれを拒否した。

²² 当時、武王は日本に送った国書に、“武芸は周辺の列国を主管し諸蕃をひとつにまとめ、高句麗の故地を取り戻し、扶余の風俗を継承した”と記した。（『続日本紀』10、神亀5年正月甲寅条）

²³ 金東宇，2006，「渤海의 地方統治體制 운영과 그 변화（渤海の地方統治体制の運営とその変化）」，『韓國史學報』第24号

林相先，2006，「발해 ‘東京’ 지역의 고구려 문화 요소（渤海‘東京’地域の高句麗文化要素）」，『고구려연구（高句麗研究）』25，高句麗研究会

²⁴ 『旧唐書』卷199下，列伝149下，渤海靺鞨

²⁵ 盧泰敦，1996，「발해의 성립과 발전（渤海の成立と発展）」，『한국사（韓國史）』10－渤海，国史編纂委員會

黒水が唐の官吏を要請したからといって、攻撃にでるのはまさに唐を背くことである。唐は人が多く軍事力は我々より万倍も強く、恨みを買えば一夜にして自滅することになるだろう。昔、高句麗はその全盛期に強兵30万を率い唐と対敵し服従を拒んだが、唐の軍隊による一度の攻撃で、全滅に追い込まれた。今日の渤海は、百姓が高句麗より何倍も少ないうえ、唐に背を向けては事を成し遂げることはできない²⁶。（『旧唐書』渤海伝）

人質として唐に送られた経験のある門芸が、唐の勢力の強大さを理由に反対したが、武芸はそれを聞き入れず攻撃命令を出し続けると、門芸は軍を捨て唐に逃げたのであった。武王は使節を送り門芸の罪状を言い渡し、彼を殺すよう要求したが、唐はこれを受け入れず、両国の間では緊張が高まっていった²⁷。

ついに開元20年（732年）、武王は彼の将帥である張文休を送り出し、海賊を率いて登州の刺史である韋俊を攻撃させた。唐の玄宗は門芸を幽州に派遣すると共に軍を徴発しこれを防ぐよう命じた。一方で、唐は太僕員外卿金思蘭を新羅に送り、軍を徴発し渤海南の地域を攻撃させた²⁸。これについて『三国史記』には、

靺鞨渤海は、表向きには藩翰と言いながら、心の中では狡猾なことを考えている。今、軍隊を出動させ罪責を問いただそうと思う。卿も軍隊を徴発し前後牽制体制を整えろ。聞くところによると、昔将帥であった金庾信と孫充中がいると言う。すべからくこの者たちを将帥として派遣しろ²⁹。

と命じ、充中に金と幣帛を下賜したという。こうして、大王は充中の弟である充文など4人の将軍に、軍を率い唐の軍と会盟して渤海を討つよう命じたのである³⁰。

²⁶ “黒水請唐家官吏，即欲擊之，是背唐也。唐國人衆兵強，萬倍於我，一朝結怨，但自取滅亡。昔高麗全盛之時，強兵三十餘萬，抗敵唐家，不事賓伏，唐兵一臨，掃地俱盡。今日渤海之衆，數倍少於高麗，乃欲違背唐家，事必不可”（『旧唐書』卷199下，北狄列伝，渤海靺鞨伝）

²⁷ 武王と大門芸の争いは、表向きには黒水討伐に対する意見の違いが理由であるが、一方では、武王以降の王位継承をめぐり、自分の息子である大欽茂を即位させようという武王と、弟である自分が王位を継承することを要求した大門芸との対立であったという見解もある。[酒寄雅志，1979，「渤海王権の一考察－東宮制を中心として」（旗田巍先生古稀記念会編，『朝鮮歴史論集』上巻，龍溪書舎）；林相先編訳，1990，『渤海史의 理解（渤海史の理解）』，図書出版新書苑，137及び145～146頁]

²⁸ 『旧唐書』渤海伝

²⁹ “靺鞨渤海，外稱蕃翰，内懷狡猾，今欲出兵問罪，卿亦發兵，相爲犄角，聞有舊將金庾信孫充中在，須差此人爲將。”（『三国史記』卷第43，列伝第3，金庾信下）

³⁰ 『三国史記』43，列伝。この記事では、唐の新羅に対する救援要請は、開元21年（733年）と

しかし、新羅軍は渤海の辺境の攻撃に出た際、前方には山が立ちばかり寒いうえに大通りは雪に覆われ、兵士の大半が何の功もたてられないまま死んでゆき、733年春には功業を成し遂げられないまま帰還した³¹。武王は、恨みをはらすために現在の洛陽へ秘密裏に人を送り、刺客の手を借りて天津橋の南で門芸を暗殺しようとしたが、門芸は刺客に対敵し死を免れた³²。

その後、渤海は再び唐との関係改善に力を注いだ。733年に毗伽可汗が死亡すると、内紛が激しさを増し突厥勢力が衰退すると共に、唐を側面から牽制する勢力がいなくなるという状況の中で、唐と争い続けることは渤海にとっては負担が大きかった。唐もまた、渤海に対する攻撃が事実上困難であることを経験していたため、東北アジア地域において急激な変化が生じないよう現状維持政策に政策方向を変え、渤海との関係改善を図った。こうして、両国の間では国交が再開され、737年に武王が死に文王が即位してからは、渤海と唐はより緊密な関係になっていった³³。

3. 渤海国の発展と遷都

1) 文王による国家体制整備

第3代文王大欽茂は、728年に武王の長子である大都利行が唐で宿衛を任されていた時に死亡したのを受け、武王が次期王位継承者として任命し王位に就くこととなった。文王は、56年にわたる在位期間中、唐から何度も冊封を受け、762年には渤海国王兼檢校太尉に昇格し、また774年には‘大興’から‘宝曆’に年号を改めた。

高王と武王は対外征服に国力を集中させたが、その後を継いで即位した文王は、内部の整備に関心を傾け始めていた。彼の改革政策の核心は文治であり、これを遂行するために、唐の文物を積極的に取り入れると共に儒学と仏教の振作を図った。そして、このような改革政策は上京遷都の後期に急発展を見せたが、これには対外関係の安定が大きく寄与していた³⁴。

こうした政策を効果的に推進するためには、周辺情勢の変動を無視することはできない。文王代は、前の時代とは異なり対外的な緊張関係が解消され始め

記録されている。

³¹ 33年（734年）春正月に入唐宿衛左領軍衛員外將軍金忠信が、王に文書を出し、本国に戻り再び兵馬を徵發し靺鞨を攻撃するつもりだと伝えたが（『三国史記』8, 新羅本紀）、実行したか否かは明らかになっていない。

³² 『旧唐書』渤海伝及び『신당서（新唐書）』渤海伝

³³ 盧泰敦, 1996, 「말해의 성립과 발전（渤海の成立と発展）」, 『한국사（韓国史）』10—渤海, 国史編纂委員会

³⁴ 宋基豪, 1995, 『渤海政治史研究』, 一潮閣, 106頁

た時期であった。また、文王代後期には人々の氏名にも変化が現れ、以前とは異なり漢字式の名前が一般化した³⁵。

そしてまた、727年の第1次使節派遣から759年の第5次使節派遣まで武官で構成されていた渤海の使節は、762年第6次使節派遣以降には、文官で構成されるようになった。こうした変化の要因については、渤海の対日交渉が軍事的な目的から経済的な目的に転換した事実を反映しているという見解³⁶と、渤海において文官制が施行された事実を反映しているという主張がある³⁷。

文王は前代の武王とは異なり内実と安定を重視し、対外関係においても善隣友好政策を維持した。738年には唐から『唐礼』、『晋書』、『三国志』、『十六国春秋』などを写し帰り、これらを土台に国家体制を整備した³⁸。つまり、渤海は唐の文物を模範として、国家体制を整備していったのである。渤海の中央および地方制度は、建国初期から整備が始められ、文王代になりその枠組が確立された³⁹。

渤海初期の地方制度に関して『類聚国史』殊俗部渤海条では、

渤海国は高句麗の故地であり---その広さは2千里であり、州県館驛がなく、所々に村里があるが、それは全て靺鞨の部落である。その百姓は、靺鞨が多く土人は少ない。村長は全て土人から選び、大村（村長）は都督と呼び、その次（の村長）は刺史といい、その下（の村長）を百姓は皆首領と呼んでいる⁴⁰。

と記録し、渤海の地方体系は大村（都督）一次村（刺史）一下村の3段階からなり、下村すなわち次村の下にあたる村の長が首領であると述べている⁴¹。上記の記録は、一般的に渤海が日本と交流していた初期の状況を表しており⁴²、また州のうち大きな州の長を刺史ではなく都督と呼んでいたことから、当時はまだ府が成立していなかったことが分かる。つまり、これは渤海にまだ府一州

³⁵ 林相先, 1999, 『渤海의 支配勢力 研究 (渤海の支配勢力研究)』, 図書出版新書苑

³⁶ 石井正敏, 1974, 「初期日渤交渉における一問題—新羅征伐計画中止との関連をめぐって—」『史学論集対外関係と政治文化』1, 森克己博士古稀記念会, 吉川弘文館

³⁷ 孫玉良, 1982, 「略述大欽茂及其統治下の渤海」, 『社会科学戦線』1982-4

³⁸ 『唐会要』卷36, 蕃夷請經史条と『冊府元龜』卷999, 外臣部・請求条を参照。

³⁹ 盧泰敦, 1996, 「발해의 성립과 발전 (渤海の成立と発展)」, 『한국사 (韓国史)』10-渤海, 国史編纂委員会

⁴⁰ “渤海國者高麗之故地也-----其國延袤二千里 無州縣館驛 處處有村里 皆靺鞨部落 其百姓者 靺鞨多土人少 皆以土人爲村長 大村曰都督 次曰刺史 其下百姓皆曰首領” (『類聚国史』193, 殊俗部渤海上延歷15年4月戊子条)。

⁴¹ 林相先, 1996, 「사회·경제구조 (社会・經濟構造)」, 『한국사 (韓国史)』10-渤海, 国史編纂委員会

⁴² 石井正敏, 1976, 「渤海の日唐間における中繼的役割について」, 『東方学』51, 東方学会; 林相先編訳, 1990, 『渤海史의 理解 (渤海史の理解)』, 新書苑

一県制度が成立していないことを意味している⁴³。

776年に日本に派遣された使節が、南海府の吐号浦から出発したという記録から⁴⁴、この頃には、府州県制と5京制が成立していたといえる。それが、5京・15府・62州の形になったのは、9世紀初めの宣王代の膨張を経た後のことであった。このように、文王代になり府州県制や5京制などが整備され、官僚組織が体系化されたことは、すなわち中央集権力と王権が強化されたことを意味する⁴⁵。

2) 首都の移転⁴⁶

『新唐書』渤海伝では、渤海の領域内には5京15府62州があったと説明されている。現在のところ、渤海の5京の位置については、大祚栄が渤海を建国した‘旧国’は吉林省敦化県の六頂山、永勝遺跡、城山子山城一帯であり、文王代に移された中京顕徳府は現在の吉林省和龍県西古城子と推定され、また上京龍泉府は黒龍江省寧安県東京城鎮に位置する遺跡、そして東京龍原府は吉林省琿春県八連城の遺跡、西京鴨緑府は吉林省通化付近の臨江、最後に南京南海府は咸鏡北道北青が有力視されている。

渤海の5京制は、高句麗の5府制から影響を受けると共に、唐の4京制に1京を加えて5京となった。渤海の5京のうち上京と東京は、共に一時期渤海の首都であったが、南京南海府と西京鴨緑府については、それらが首都になったという記録はなく、地方統治と交通の要衝地としての機能を果たしていた。特に、唐への交通路に西京鴨緑府と長嶺府が設置されていた点から、渤海が唐との交流を重視していたことが分かる。これが、鴨緑府に西京が設置された主要要因であり、また鴨緑江沿岸で、高句麗の首都であった輯安ではなく臨江に西京鴨緑府が置かれたのは、唐との交易による物資の流通において、該当地域が水路と陸路の転換地点であるという地理的条件が重視されたためである。そして、地方の主要拠点であると同時に対外交通の要衝であったこれら5京には、王の血縁である有力者が派遣され、強力な兵力を背景に所属する州県を管轄したものである⁴⁷。

⁴³ 盧泰敦, 1996, 「발해의 성립과 발전 (渤海の成立と発展)」, 『한국사 (韓国史)』 10-渤海, 国史編纂委員会

⁴⁴ 『続日本紀』巻34, 光仁天皇宝龜8年正月

⁴⁵ 盧泰敦, 1996, 「발해의 성립과 발전 (渤海の成立と発展)」, 『한국사 (韓国史)』 10-渤海, 国史編纂委員会

⁴⁶ 林相先, 1988, 「渤海의 遷都에 대한 考察 (渤海の遷都に関する考察)」, 『清溪史学』 5, 清溪史学会を参照。

⁴⁷ 河上洋, 1989, 「渤海の交通路と五京」, 『史林』第72巻第6号; 林相先訳, 1990, 『国学研究』第3集, 国学研究所, 259-261頁

渤海は建国から滅亡する228年までの間に、4回にわたり5京を中心に首都を移動した。遷都は政治、経済、文化、軍事または交通上の中心地である都が移動することを意味し、これは国家的に重大な事件である。まず、‘天宝中’（742－756）には建国地である‘旧国’から‘顕州（中京）’に移動し⁴⁸、‘天宝末’には再び‘上京’へと首都を移した。そして、‘貞元時’（785－793）には上京を離れ東南の‘東京’へ遷都し、第5代成王の即位と同時に上京へ戻った。その後、渤海は926年に国が滅びるまで、‘上京’に首都をおいた。

旧国から顕州への遷都は、拡大した領土が効率的に統治され、国力が上昇した746年から752年にかけて行われた。旧国は、渤海の建国地であると共に、高王をはじめとし武王などが眠る所であり、首都が移された後も変わらず重要視された地域である。旧国期に活動した人物については、高句麗系と靺鞨系が共に確認されており、当時渤海住民の間には、靺鞨人と高句麗人という種族的な違いによる政治・社会的区分や差別は存在しなかったものと思われる⁴⁹。また、中京期の支配勢力や人物については、725年に使節として日本に渡った輔国大將軍慕施豪だけが記録に登場する半面、領土拡張が活発化すると共に文王代の自信が現れはじめる時期であった。

顕州から上京への遷都は、安祿山の乱を主要因とし契丹に対する防備を兼ねて、756年に急きょ断行された。756年（至徳1）に、平盧留後徐帰道が判官張元潤を派遣し兵馬を徴発しようとする、渤海は彼らを疑い使節を留まらせ帰らせなかった。758年に再び平盧節度王玄志が王進義を送り、天子が首都に戻り敵が全滅したことを報告すると、渤海はまたもこれを疑い王進義を留まらせ人を送り事の詳細を尋ねた。このように、渤海は安祿山の乱が自国に与える影響を懸念し、警戒と疑惑の目で注意深く乱の行方を見守ったのである。

渤海が2度にわたり唐の使節に対し非常に慎重な姿勢を見せたのには、唐で起こった安祿山の乱への介入を避け、またその影響を最小限に押さえようという理由があったと思われる。さらに、渤海の慎重な姿勢は、安祿山の乱の勃発を前後に断行された中京から上京への遷都とも関連があるように見える。両者の関連性を示唆する直接的な資料は存在しないが、安祿山の乱という緊迫した状況の中で、渤海がその衝撃（影響）に対する対応措置をとった可能性は排除できない。安祿山の乱に対する防備は、渤海だけでなく日本でも例外ではなかった。日本の朝廷は、乱の消息を聞き予め対策を立て、その中から最も良い方

⁴⁸ これとは異なり、“顕州 渤海國 按皇華四達記 唐天寶以前 渤海國所都”（『武経総要』前集卷16下）という記録を根拠に、顕州への遷都が天宝以前に行われた可能性があることも提起されている（宋基豪，1994，「발해의 초기 도읍지와 천도과정（渤海初期の首都と遷都過程）」，『于江権兌遠教授定年記念論叢』）。

⁴⁹ 林相先，1998，「渤海 支配勢力의 變動과 姓氏（渤海の支配勢力の変動と姓氏）」，『高句麗研究』6，高句麗研究会

策と細部内容をひとつひとつ記録し報告させた⁵⁰。

上京は、文王が最も長く都をおいた地である。また、この時期は対内外的に最も活発な活動が繰り広げられ、高句麗継承意識の表明や唐からの進封・維新、そして転輪聖王の理念の採択などを中心に、王権が強化され国力が上昇する徴候が見られる時期であった⁵¹。また、大氏をはじめ高氏、楊氏、烏氏、慕氏といった渤海の上層支配集団が形成される時期といってもよいだろう⁵²。

上京から東京への遷都は、日本との関係を考慮したというのが重要な動機である半面、文王代後期に東京地域の地理的利点を根拠に新たに成長した勢力が、自らの立場を強化する目的で、785年から786年にかけて首都を移した。その後、793年3月に文王が死亡し族弟の元義が即位したが、彼は疑い深く暴悪であったため1年ももたず国人に殺害された。これを受け、文王の孫（文王の子である宏臨の子）である華璵（成王）が即位し、上京に都を移すと共に中興に年号を改めた。しかし、彼もすぐに死亡したため、崇璘が即位し年号を正歴に改めた⁵³。特に、大元義の後から宣王即位までの王位継承においては、文王の息子である宏臨に注目しなければならない。宏臨が文王の息子であることと‘早死’したこと以外に、記録に残されているものはなく、貞恵公主と貞孝公主の墓誌にある‘東宮’を宏臨とするならば、宏臨の息子である成王が即位した時の年齢はおよそ10～15歳であり、またその後登場する康王大嵩璘などの王位継承の背景を推測することもできる⁵⁴。

東京地域は、遷都の背景そのものが日本との関係によって説明されていることから分かるように、日本との貿易により利益を得ていた大元義の勢力基盤であった。東京から上京への遷都は、793年に成王が即位した際、彼の勢力基盤である上京地域に戻ることで、王権の刷新と新たな気風を造成しようという目的から行われた⁵⁵。成王の即位と上京への遷都を支えたのは国人であった。‘国人’層は、8世紀末に文王を中心とし、上京地域に基盤をおく勢力であった。彼らは、東京地域において日本との貿易により富を蓄積した元義系とは対立的な立場にあった。さらに、国人層が王権を左右するほどの勢力だったとすれば、貴族層の中では右姓家門がこれに最も近い集団であるといえる⁵⁶。また、大元義の即位は独自のなものであるように見えるが、そこには彼を支える一定

⁵⁰ 『続日本紀』巻21, 淳仁天皇天平宝子2年12月戊申条

⁵¹ 宋基豪, 1995, 『渤海政治史研究』, 一潮閣を参照。

⁵² 林相先, 1999, 『渤海의 支配勢力 研究 (渤海の支配勢力研究)』, 図書出版新書苑

⁵³ 『신당서 (新唐書)』渤海伝を参照。

⁵⁴ 林相先, 1999, 『渤海의 支配勢力 研究 (渤海の支配勢力研究)』, 図書出版新書苑

⁵⁵ 林相先, 1988, 「渤海의 遷都에 대한 考察 (渤海の遷都に関する考察)」, 『清溪史学』5, 清溪史学会

⁵⁶ 林相先, 1988, 「渤海의 遷都에 대한 考察 (渤海の遷都に関する考察)」, 『清溪史学』5, 清溪史学会

の勢力が存在したと思われ、さらに彼を殺害した国人は、大元義集団とは明らかに政治的性格が異なる部類であっただろう⁵⁷。

4. 渤海国の高句麗継承と国家位相

3) 高句麗継承

渤海による高句麗継承は、渤海の国家的性格と、渤海が現在のどの国家の歴史に近いのかを判断するにあたり、重要な要因となっている⁵⁸。

まず、記録を中心に渤海と高句麗の関係を見てみると、渤海は建国初期から対外的に高句麗との関連性を表明していたことが分かる。713年には大祚榮の息子である武芸が桂婁郡王に冊封され、720年には武王の息子である大都利行が再び桂婁郡王に冊封された⁵⁹。これは、渤海の王室と高句麗の間に一定の関係があったことを、唐も理解していたことを意味する。なぜなら、桂婁郡王とは名目上のものであるとはいえ、唐が桂婁部すなわち高句麗の領土に彼らを封じたことを意味するからである⁶⁰。

『続日本紀』をみると、759年に渤海の使節を高麗蕃客と表記して以来、778年に大綱公広道を送高麗客使にするまで、高麗という用語が渤海と併用されていることが分かる。つまり、こうした状況が19年間も続いたということになる。日本の記録に高麗という用語が登場した理由に関して日本の研究者は、対日外交のための臨時的な用語であると解釈している⁶¹。また、渤海が高句麗の後継

⁵⁷ 林相先, 1998, 「渤海 支配勢力의 政治的 役割 (渤海の支配勢力の政治的役割)」, 『先史와 古代 (先史と古代)』10, 韓国古代学会

宋基豪, 1995, 『渤海政治史研究』, 一潮閣

⁵⁸ これに関しては、下の論稿を参照。

朴時亨, 「발해사 연구를 위하여 (渤海史研究のために)」, 『력사과학 (歴史科学)』1962-1
朱榮憲, 「발해는 고구려의 계승자 (渤海は高句麗の継承者)」, 『고고민속 (考古民俗)』1967-2

朴榮海, 「발해는 고구려를 계승한 국가 (渤海は高句麗を継承した国家)」, 『력사과학 (歴史科学)』1986-3

韓圭哲, 「발해의 고구려 역사 계승 문제 (渤海の高句麗の歴史継承問題)」, 『韓國古代史研究』33, 2004

高句麗研究財団編, 『고구려와 발해의 계승 관계 (高句麗と渤海の継承関係)』, 연구총서 (研究叢書) 7, 2005

宋基豪 (2007), 「渤海의 高句麗 継承性 補論 (渤海の高句麗継承性補論)」, 『東아시아 속의 渤海와 日本 (東アジアの中の渤海と日本)』, 東北アジア歴史財団・韓日文化交流基金共同主催韓日国際シンポジウム発表文, 2007. 11. 2. -4.

⁵⁹ (開元) “8年8月に渤海郡王が、左驍衛大將軍王大武芸の嫡男である大都利行を桂婁郡王に冊封した。” (『冊府元旧』964, 封冊)

⁶⁰ 宋基豪, 1995, 『渤海政治史研究』, 一潮閣, 43頁

⁶¹ 石井正敏, 1975, 「日渤海交渉における渤海高句麗継承国意識について」, 『中央大学大学院研

者であるという事実を否定するために、中国側の研究者はこの資料が虚構のものであることを強調している⁶²。

しかし、日本人が当時の外交的戦略のために史料を歪曲したと簡単に決めつけることはできない。渤海が727年に日本へ初めて使節を送った時から、渤海は“高句麗の故地を取り戻した”と言っており、こうした高句麗継承意識がこの時期になり本格的に表明され始めたと理解しなければならない。

渤海の高句麗継承意識は、単に政略的な次元ではなく、過去の強大国であった高句麗を継承したという自負心を基盤とするものであった⁶³。771年に日本に送った国書で自らを天孫と称し、自国を義父の国とし日本を婿の国と規定しようとしたのは、こうした事実を克明に表しているといえる。このような継承意識は、文王代に実施された一連の改革政策により国力が大きく伸張したことでさらに強化され、最終的には、文王後期に高麗国を表明するに至ったと思われる。これに合わせて、日本では761年と777年に、それぞれ高麗大山や高麗殿嗣といった高句麗系の人物を渤海に使節として派遣している点も注目される⁶⁴。

また、国号からも高句麗との関連性を確認することができる。渤海人が最初に使用した国号は“震国”であった。698年に大祚榮が東牟山に国を建国した後、‘震国王’を自称したことから、‘震国’（震国もしくは振国ともいう）が最初に使用された国号である可能性が高い。渤海人が自称した他の国号としては‘高麗’または‘高麗国’などがある。

高麗という名称については、727年に渤海が初めて日本に使節を派遣する際に添付した国書に‘高麗の昔の地を取り戻し、扶余の遺俗を手に入れた（復高麗之舊居 有扶余之遺俗）’と記し、‘扶余’と‘高麗’を共に言及している。また、758年に楊承慶が率いる渤海使節が日本を訪問した際に伝達された国書で、当時の王である文王は自らを‘高麗国王’と名のつた。翌年、日本朝廷が国に戻る渤海使節を通じ文王に送った国書でも、文王を高麗国王と称した。その後しばらくの間、高麗国王または高麗という名称が日本の記録に登場する。渤海人自らが自国を‘高麗’または‘高麗国’と呼び、相手も同様の呼び方をしたのは、特別な意味がある。関連資料が新たに発見されない限り、渤海初期、特に文王時期における渤海の国号が‘高麗’であった可能性を否定するのは難しいだろう⁶⁵。

究年報』4；林相先訳，1990、『渤海史의 理解（渤海史の理解）』，新書苑

⁶² 宋基豪，1995、『渤海政治史研究』，一潮閣，117-118頁

⁶³ 盧泰敦，1985，「渤海國의 住民構成과 渤海人의 族源（渤海国の住民構成と渤海人の族源）」，『韓國古代의 國家와 社會（韓国古代の国家と社会）』，一潮閣

⁶⁴ 宋基豪，1995，『渤海政治史研究』，一潮閣，146-147頁

⁶⁵ 林相先，2005，「발해의 건국과 국호（渤海の建国と国号）」，『새롭게 본 발해사（新しく見た渤海史）』，高句麗研究財団

そして、武王代になり高句麗人だけでなく様々な姓氏をもつ靺鞨人が登場することについては、当時の支配勢力は高句麗人と靺鞨人の連合という側面が強く、主導的な集団が成立しなかったことを反映しているといえる。特に、靺鞨系の人物の官職が、国家から与えられることもあったが、その多くが‘首領’または‘大首領’などであったことは、当時はまだ国家体制が完備されていなかったことと、土着勢力による中央勢力化が進められていたことを意味する⁶⁶。

一方、高句麗と関連し渤海文化の性格については、2つの方向で研究が進められている⁶⁷。一つ、渤海建国当時の文化の淵源を、どこに求めるのかという問題である。中国の学会では、渤海建国の主体を靺鞨とする立場から、その靺鞨文化が渤海文化の淵源であると説明している。つまり、渤海初期の様々な文化要素や文化水準は、靺鞨が唐の營州に属していた時期に取り入れた漢文化が基盤となっていると主張するのである。しかし、六頂山渤海古墳の性格規定からも分かるように、ここの遺物のうち靺鞨と関連づけることのできるものは、低級な土器のみである。靺鞨と関係のない多くの遺物は、高句麗以外にはその文化の淵源を見つけ出すことができない。

二つ、渤海の存続期間における文化の性格については、唐文化の影響を強く受けたものであるという点で、全ての学会の意見が一致している。中国側は、建国以来渤海が唐文化を熱心に輸入した事実は、渤海が唐に送った数多くの使節や、これらに関する各種の記録からも確認することができるとしている。考古学の報告でも、おおよそ唐の影響だけを強調し、全てにおいて唐文化の影響を受けたものと説明している。つまり、渤海文化が唐文化であるということは、渤海が唐の地方政権であり、その文化もまた国家的な違いがあるのではなく、中央と地方という違いにすぎないというのである。しかし、1年に1,2回派遣される国家使節により文化が輸入された結果、渤海と唐の文化は同質のものとなったという主張は、行き過ぎた憶測であると言わざるを得ないだろう。渤海文化における唐文化の要素を否定することはできないが、しかしそれは、文化全体の一部分に過ぎないと言わなければならないだろう。

中国の学会による渤海遺跡に関する解釈が、唐文化一辺倒になっているのは異なり、中国以外の地域における発掘結果からは、渤海文化と高句麗文化に深い関連性があることが確認できる。渤海の5京のうち、中京と東京地域は以前に高句麗の直接的な支配化にあったため、高句麗と関連のある要素が多く残されている。また、現在のロシア沿海州南に位置するクラスキノ城も例外では

⁶⁶ 林相先, 1999, 『渤海의 支配勢力 研究 (渤海の支配勢力研究)』, 図書出版新書苑

⁶⁷ 林相先 (2005), 「중국학계의 발해·고구려 역사연구 비교 (中国学会の渤海·高句麗歴史研究比較)」, 『중국의 동북공정과 중화주의 (中国の東北工程と中華主義)』, 高句麗研究財団を参照。

ない。この城は、渤海時代に東京に属していた塩州の治所であったと推定されているが、2004年度のクラスキノ城寺院跡発掘で出土した遺物は、高句麗遺跡から出土したものと非常に類似したものであった⁶⁸。これは矢じり、土器（底に大きな穴がいくつかあいている土器、リボン型の取っ手がついた土器、取っ手がついた蓋など）、金具、車輪に打ち込む釘、数種類の瓦、釘、かすがいなどを見ても明らかである⁶⁹。

クラスキノ城の寺院跡からは、その建造時期が高句麗末期まで遡ると思われる、高句麗系の瓦で作られた排水遺構が発見され、また金銅菩薩立像や瓦、三彩の遺物などは、この寺院跡が高句麗もしくは渤海初期の8世紀半ばに、初めて造られたことを立証している。そしてまた、この寺院跡は瓦当から少なくとも10～11世紀まで存在したものである⁷⁰。

寺院跡の生活空間の中央にある井戸は、その形や規模が高句麗と渤海の井戸と似ている。例えば、平壤大城山城の南方3キロの所で発掘された井戸は、3世紀半ばから6世紀に編年されており、構造の似た井戸が渤海の上京城跡にもある⁷¹。

2004年に、高句麗研究財団とロシア側が共同で発掘した発掘地31第2層の南東地域では、破壊された住居地の（断層）オンドルが発見された⁷²。2005年度の韓・ロ共同発掘でも、完全な形の2基のオンドル遺跡が、寺院関連地域の南に位置する発掘地34（136平方メートル範囲）において確認された。第1オンドルは、全長1480センチ、幅100～130センチで、U字型をしており、2本の煙道が見られる。居住地は、北東－南西を向いており、オンドルの南側には地面から30～50センチ下がった所に焚き口があった。第2オンドルは、第1オンドルの北東－南西の壁の北西方向にあり、発掘地34の北西端で検出された。ここにも2本の煙道が備え付けられており、約300センチ内外が発掘された⁷³。

クラスキノ城で発掘された完全な形のオンドル施設は、渤海と高句麗との文

⁶⁸ 林相先, 2006, 「발해 ‘東京’ 지역의 고구려 문화 요소 (渤海 ‘東京’ 地域の高句麗文化要素)」, 『고구려연구 (高句麗研究)』 25, 高句麗研究会を参照。

⁶⁹ V. I. Boldin, 「크라스키노 성터 발굴 보고서 (クラスキノ城跡発掘報告書)」, 『2004년도 러시아 연해주 발해 유적 발굴 보고서 (2004年度ロシア沿海州渤海遺跡発掘報告書)』, 高句麗研究財団, 2005年, 46～47頁

⁷⁰ 文明大, 「제1장 크라스키노 사원지 서구역 발굴 (第1章クラスキノ寺院址西区域発掘)」, 『러시아 연해주 크라스키노 발해 사원지 발굴 보고서 (ロシア沿海州クラスキノ渤海寺院址発掘報告書)』, 高句麗研究財団, 2004年, 25頁

⁷¹ V. I. Voldin, Gelman, Ivliev, Nikitin, 清水信行訳, 「クラスキノ土城4年間の調査集成」, 『青山史学』 21, 青山学院大学文学部史学研究室, 2003年, 53～54頁

⁷² V. I. Boldin, 「크라스키노 성터 발굴 보고서 (クラスキノ城跡発掘報告書)」, 『2004년도 러시아 연해주 발해 유적 발굴 보고서 (2004年度ロシア沿海州渤海遺跡発掘報告書)』, 高句麗研究財団, 2005年, 24～25頁

⁷³ 高句麗研究財団, 『2005년도 러시아 연해주 크라스키노성 발굴 보고서 (2005年度ロシア沿海州クラスキノ城発掘報告書)』, 2006年, 28～32頁

化的関連性を裏づける重要な事例である。渤海のオンドルは高句麗にその淵源があり、渤海以前の靺鞨関連遺跡からは、かまど、煙道、床、溝、煙突、床裏などの施設が設けられた典型的なオンドルは発見されなかった。しかし、集安県東台子で発見された住居跡は、渤海上京龍泉府王宮内の西区住居跡と類似した点が多いことから、渤海のオンドル設備は、高句麗人のものを継承したといえることができる。現在に伝わる渤海時期のオンドルは、上京龍泉府城内の西区住居跡、東京龍原府城内の第2宮殿跡、正岩山城内の兵舎跡、梧梅里寺跡、英義城と永安遺跡で発見された住居跡、団結渤海村落遺跡、屯灣子住居跡など、8つのみである⁷⁴。

以上のように、クラスキノ城から出土した遺物には、高句麗系の要素だけでなく靺鞨または契丹系の要素も部分的に表れている。唐の貨幣である開元通宝をはじめ土器、置き米、すずり、青銅製ヘアピンなどの遺物は、クラスキノ城が渤海時期に使用されたことを証明するものである⁷⁵。これらの遺物は、クラスキノ城が使用された時期や住民の性格を分析するにあたり、非常に参考になるといえる。

4) 皇帝国を表明⁷⁶

3代文王時代の社会の性格と、渤海社会の自信を表しているのが、‘天孫’と‘皇上’という称号である。天孫という用語は、771年に一萬福を大使とする使節団が日本に到着し、翌年日王に伝えた渤海王からの国書に登場するものであり、昔の高句麗のように、両国の関係を兄弟と位置づけるのではなく、舅甥（義父と婿）と称したと記されている。

渤海が天孫という称号を使用したのは、高句麗の天孫意識継承を裏づけるも

⁷⁴ 方學鳳, 『말해건축연구 (渤海建築研究)』, 延辺大学出版社, 1996年, 183-202頁

⁷⁵ クラスキノ城の築造と使用期間については、1960年代E. V. Shpkunovが8~9世紀と推定したのが最初であり、2001年に東門と城壁を発掘した報告書には、クラスキノ城の築造時期が城壁本体→甕城→地盤沈下、洪水→池→洪水→廃棄（12~13世紀）の順に、数回にわたり変化したと記されている（田村晃一外, 2002, 「2001年度ロシア・クラスキノ土城発掘調査概要報告」, 『青山史学』20, 青山学院大学文学部史学研究室, 2002年, 20~21頁）。

しかし、ここで出土した木炭に対する放射性炭素年代測定も2回にわたり行われ、その結果クラスキノ城が8世紀から9世紀にかけて使用されたことが判明した。まずは、1994年7月~8月に行われたクラスキノ寺院跡の発掘の際に出土した木材の測定から、A. D680~970, A. D680~890年という結果が得られ、次に2004年の瓦壁室から出土した木炭に対するAMS測定の結果、瓦壁室遺構が9世紀前半のものであることが判明した。

⁷⁶ 下記の内容に関しては宋基豪, 1993, 「말해 文王대의 개혁과 사회변동 (渤海文王代の改革と社会変動)」, 『韓国古代史研究』6及び宋基豪, 1995, 『渤海의 政治史研究 (渤海の政治史研究)』, 一潮閣, 99-126頁を参照。

のである⁷⁷。同時に、貞恵公主と貞孝公主の墓誌にある‘皇上’、‘大王’という用語にも注目しなければならない。これらの碑文には、文王を指す句節が何ヶ所か見られ、当時は文王を尊び‘大王’、‘聖人’、‘皇上’などと呼んでいたことが分かる⁷⁸。

皇上とは、臣下が皇帝を呼ぶ際に使われるもので、渤海で皇帝称号が使用されていた証拠である。前述した天孫称号と関連づけて考えればなおさらのことである。しかし、貞恵公主墓誌が書かれたのは780年であり、貞孝公主墓誌が書かれたのは792年である。そして、天孫という称号が日本で問題になったのが771年であり、これらは全て文王後期に該当する。よって、文王後期に天孫という称号と共に皇帝という称号が使用されたことは、紛れもない事実である。

渤海の国力が伸張し対外的位相が上昇すると同時に、内部的にもそれに相応する措置がとられ、王が皇上と呼ばれ、774年には大興から宝歴に年号が改められた。従って、渤海が独立国ではなく唐の地方政権の一つに過ぎないという主張は、その論理的妥当性が弱いと言わざるを得ない。

5. 終わりに

上記の内容を整理すると次の通りである。中国側の記録によると、睿宗先天2年（713）に崔訢を送り大祚榮を渤海郡王に任命し、さらに統轄する地域を忽汗州と呼び、この時から靺鞨という名を捨て渤海という名だけを使用したという。ところが中国の学会では、崔訢を使節とした渤海往来と‘渤海郡王’を根拠に、渤海の最初の国号は‘靺鞨’であり、713年以降‘渤海’に改称したとし、渤海は靺鞨が建てた国家であることを主張する者もいる。しかし‘靺鞨’は、崔訢が訪問した渤海の首都（現在の吉林省敦化市）が、多くの靺鞨族が居住する地域であったことを意味するのであり、渤海の国号を意味するわけではなかった。また、渤海の住民の中には靺鞨人も確かに存在したが、建国の過程においては多数の高句麗遺民が参与し、彼らが主導的な役割を果たしたことは紛れもない事実である。

また、冊封・朝貢は中華的世界観の残物であり、本来は中国内部の政治秩序であったが、中国の皇帝が周辺国家の君長に対し特定の官爵と物品を下賜する

⁷⁷ 朴時亨, 1962, 「발해사연구를 위하여 (渤海史研究のために)」, 『역사과학 (歴史科学)』 1962-1

盧泰敦, 1985, 「對渤海 日本國書에서 云謂한 “高麗舊記”에 대하여 (對渤海日本國書において云謂した“高麗旧記”について)」, 『辺太変博士華甲記念史学論叢』, 三英社

⁷⁸ 『冊府元旧』には、渤海人たちは“自国の王を可毒夫と呼び、対面しては聖王と言い、奏達する賤や表では基下と呼び、王の父を老王、母を太妃と言い、王の妻を貴妃、長子を副王、息子たちを王子と呼んだ”と記されている。（『冊府元旧』962, 官号）

ことで、その地位を公認し臣属させるという外交形式に発展した。渤海は唐の要求により冊封・朝貢を行っていたが、実際のところ渤海は唐の属国や地方政権ではなく、自主的な独立国家であった。つまり、渤海人が唐で受けた科挙試験は、唐人が受けるのとは異なり、外国人を対象とする賓貢科であり、渤海内部においては皇帝国としての秩序が整えられており、また渤海と新羅は平路枝城節度使と“海運押新羅渤海兩蕃等使”の管轄下にあったため、渤海だけを唐の地方政権であるということとはできない。従って、渤海と中国の関係は形式的なものであったと言わざるを得ない。

渤海文化の性格については、靺鞨文化を基盤として成立し、建国後の渤海文化は全て唐朝文化の影響を受けたものであるという説明が、中国学会における共通の認識である。しかし、1年に1,2回行われる国家使節を通じて文化が輸入された結果、渤海と唐の文化が同質のものとなったという主張は、再検討する必要がある。渤海の文化において唐文化の要素を否定することはできないが、それは文化全体の一部であると言わなければならない。むしろ、渤海の政治制度や文化は高句麗のそれに基づいているといえ、建国以降は当時交流のあった唐や新羅、日本の様々な要素を取り入れ、渤海の歴史と文化を形成したと理解すべきであろう。

727年に初めて日本に派遣された渤海の使節に託された国書に武王は、‘高句麗の故地を取り戻し、扶余の風習を受容した’と記し、高句麗継承意識をはっきりと表明した。『続日本紀』では、759年に渤海の使節を高麗蕃客と表記してから、778年の大綱公広道を送高麗客使に任命したと記録するまで、高麗という用語が併用されていた。日本も761年と777年に、高麗系の人物である高麗大山と高麗殿嗣を渤海に使節として派遣した。

考古学的にも、渤海と高句麗の文化的相関関係を確認することができる。渤海の5京のうち中京と東京地域は、以前高句麗の直接的な支配化にあったため、高句麗と関連のある要素が多数残されており、現在のロシア沿海州南に位置するクラスキノ城もまた例外ではない。この城は、渤海時代に東京に属していた塩州の治所と推定され、この地における城壁の築造や出土した遺物は、唐ではなく以前の高句麗との関連性が強い。

渤海の国力が伸張し対外的に位相が上昇すると同時に、内部ではそれに相応する処置がとられるようになった。王は皇帝を意味する皇上と呼ばれ、774年には大興から宝歴に年号が改められた。これらは、渤海が唐の地方政権または属国ではなく、自主的な独立国であることを示唆している。



8世紀後半渤海・日交流の諸問題

具蘭憲（教育人的資源部）

Journal of Northeast Asian History
volume 4, number 2 (Dec 2007) : 72~85

*Copyright © 2007 by Northeast Asian History Foundation. All Rights Reserved.
No portion of the contents may be reproduced in any form without
written permission of Northeast Asian History Foundation.*

8 世紀後半渤海・日交流の諸問題

具蘭憲(教育人的資源部)

1. はじめに

安史の乱が終結した8世紀後半、東アジアはそれぞれ自国に有利な情勢を模索するなかで、多様な外交を展開した。安史の乱を前後した時期の渤海と日本の外交に関する研究は、主に日本を中心に行われてきたが、国際関係が政治中心の外交から経済中心に転換していくということに注目している。特に、新羅征討計画の霧散が経済外交に転換する重要な契機になったと考えられている¹。

この時期は使臣団の増加とともに、国書の形式遵守や筑紫道の利用、そして来航期間などの問題が起きており興味をひくが、これらのことに注目した研究は極少数にすぎない。石井正敏は日本の外交を光仁－桓武の政治改革の一環である行政簡素化という枠組みの中で理解し、来航期間の問題について交易を達成しようとする渤海の外交戦略と指摘したが、基本的には経済中心の理解にとどまっている²。一方、朴眞淑は渤海の康王代を中心に、渤海の政治的安定と関連してこの時期の外交を検討したが、渤海中心的立場を強調しすぎている³。

両国の外交を扱った先行研究は、基本的に日本が新羅とは外交断絶で敵対的關係を、渤海とは友好的な関係を維持させてきたとしながらも、この時期から日本が渤海とある程度距離を置こうとすると解釈する⁴矛盾がある。このような

¹ 李成市「渤海の対日本外交への理路」『東北アジア史の再発見』有信堂高文社、1994；石井正敏「初期日渤海交渉における一問題－新羅征討計画中止との関連をめぐって」『史学論集 対外関係と政治文化』1、吉川弘文館、1974；酒寄雅志「渤海国家の史的展開と国際関係」『朝鮮史研究会論文集』16、朝鮮史研究会、1979；韓圭哲「日本과의 關係」『韓国史』10、国史編纂委員会、1996、130～132頁。

² 石井正敏「大宰府および緑海国史の外交文書調査権」『古代文化』43、1991；同「光仁・桓武朝の日本と渤海」『日本古代の伝承と東アジア』吉川弘文館、1995。

³ 朴眞淑「渤海 康王代의 対日本外交」『忠南史学』10、忠南史学会、1998。

⁴ このような見解は渤海日外交研究において基本的な理解である。当該時期に注目した研究には、重松敏彦「平安初期における日本国際秩序構想の変遷」『九州史学』118・119、1997；

問題意識をもとに、本稿では記録に表れた両国の外交の実像を客観的に整理し、それが意味するところについて新たにアプローチすることにしよう。

2. 天平宝字～神護景雲年間（757～769年）

8世紀後半の日本の対渤海外交はいくつかの段階に区分が可能である。758年2月から763年2月まで両国の交流は継続するが、その後一時小康状態になる。再び771年6月から渤海の派遣を契機に進められ、時折両国は使臣の派遣を行っている。

宝亀年間の外交的特徴を考察するため、まずその直前の時期の両国関係について概観しておく。藤原仲麻呂を筆頭とする淳仁天皇の執権期は、権力基盤を強化するための政治的正当性の確保という対内的必要により、渤海との緊密な外交が推進された。特に、安史の乱が起こると、この情報を渤海から入手するなかで、新羅征討計画に渤海を引き入れようとした。新羅征討計画は『続日本紀』にみえる断絶的な記録から推論された歴史的事件である。759年6月の行軍式を手始めに、同年9月と761年12月の2度にわたり軍隊の編成が行われた。763年11月に新羅征討計画のため香椎廟に奉幣したという記録を最後に関連記録がみられないので、この時期から計画が中止へと向かっていったことが分かる。ところで、まさにこの時期を前後した758年から763年に渤海と日本は8回にわたり交流を持続したが、これは新羅征討計画を成功させるため日本の強い意向により行われたと思われる。日本の招きで渤海使臣が派遣され、その使臣は日本で手厚い歓待を受け、帰国時には必ず送使が帯同していた。すなわち渤海は、日本の関心を引く情報を提供することで、両国の緊密な交流を容易に達成していたのである⁵。

しかし、両国の緊密な交流は藤原仲麻呂の失脚と、これに伴う称徳天皇の重祚により、一時小康状態となった⁶。これまで日本が提供する各種の外交特惠を受け、外交を進めてきた渤海としては、両国の交流を持続させるための新たな外交戦略が必要になった。

保科富士男「古代日本の外交関係における贈進物の名称—古代日本の対外意識に関連して—」『白山史学』25、1989；石井正敏「光仁・桓武朝の日本と渤海」：東野治之「日唐間における渤海の中継貿易」『日本歴史』438、吉川弘文館、1984などがある。特に重松敏彦は、渤海使臣の迎接依頼の用語が蕃礼から賓礼あるいは勤礼に変わることによって焦点を定め、渤海に対する立場が友好的であったことを明らかにしている。

⁵ 具蘭憲「8世紀 中葉 渤海・新羅・日本の関係」『韓日関係史研究』10、1999、9～12頁。

⁶ 山口博は、淳仁天皇期と称徳天皇期の外交に対する認識が全く異なるためであるとする。（山口博「奈良朝政治事件と東北アジアの国際環境」古厩忠夫編『東北アジア史の再発見—歴史像の共有を求めて—』有信堂高文社、1994、62～65頁）

3. 宝亀年間 (770~780 年)

板振鎌束⁷の帰国の9年後、771年6月に壱万福一行が日本に到着する。季節風を利用した渤海-日本間航路の特徴により、晩秋から初春に到着するのが一般的である。ゆえに6月の到着は異例のことである⁸。時期的にみて光仁天皇が即位して8カ月あまりであるので、渤海が日本の光仁即位に関する情報を入手し、すぐさま派遣したと考えられる。同時に、769年11月に来航し、交易を終えて帰国した新羅使の金初正一行に対する牽制の意図があった可能性も看過できない。

もうひとつ注目される点は、派遣人数が325人に達するという事実である。以前の使臣が25~75人⁹であったことに比べると、大規模な派遣団と言わざるを得ない。このような派遣団の増加について、靺鞨統合後の在地首長層、特に東京の中心勢力の強力な交易要求を充足させた結果であるとする見解もある¹⁰。しかし、渤海が靺鞨地域を統合したのは740年前後であり、これと関連した使臣団の拡大事例はすでに746年に現れているので、特別にこの時期の特徴とはみがない。したがって、この時期の大規模な派遣は、両国の交流を積極的に展開しようという渤海の強い意向によると判断するのが妥当であろう。

光仁天皇にとっては即位後初めて迎える元日朝賀¹¹に渤海使臣を参加させ、対外的正当性を充足できたのである。しかし、国書の特定語句をめぐる摩擦が生じる¹²。

日本の朝廷は、壱万福がもたらした渤海王の表¹³が無礼だということで受け取りを拒否した。いわゆる渤海の「無礼」は、日付の後に官品と姓名を記さず、末尾に天孫を自称したことである。また、「失礼」は「舅甥」の関係を称していることである。

⁷ 王新福の送使として派遣された人物である。

⁸ 渤海使の来航時期は、特に9世紀に入ると12月と1月に集中する。これは一行の人数が105人ほどに整備されることと軌を一にするものと思われるが、これについては別稿で扱うことにする。

⁹ 746(天平18)年に1100人に達する使臣団が派遣されたが、これは公式使節ではなく鉄利人独自の民間使節団と判断されるので除外した(具蘭憲「8世紀 中葉 渤海・新羅・日本との関係」『韓日関係史研究』10、1999、14~16頁)。

¹⁰ 李成市「渤海の対日本外交への理路」『東北アジア史の再発見』有信堂高文社、1994、36~41頁。

¹¹ 『続日本紀』巻32 宝亀3年正月壬午条。

¹² 『続日本紀』巻32 宝亀3年2月乙卯条。

¹³ 渤海外交において「表」という用語はこの時期、すなわち宝亀2年、4年、10年に集中的にみられ、たいていは「啓」と表現される(ブルース・バートン「律令制下における新羅・渤海使の接待法—大宰府外交機能の解明へ—」『九州史学』83、1985)。

このような渤海の高圧的な外交姿勢の背景と意図はどのようなものであろうか。762年に渤海郡から渤海国に、渤海郡王から渤海国王に封じられるなど¹⁴、渤海の対外的地位における変化が一次的な要因であるといえよう。このような対外的地位をもとに、渤海は対内的にもこれに相応しい措置を下している。「宝曆」という独自の元号の使用、「皇上」「転輪聖王」¹⁵などがそれである。したがって、外交文書にみえる天孫意識は、このような国際社会における地位向上と、それに伴う国内情勢の変化のなかで理解できる¹⁶。

ここに、壺万福派遣直前の外交情勢を結びつけ、いくつかの点を付け加えよう。直前までの緊密な両国関係を持続させる方法として、冒険的な試みを行ったものであるのかもしれない。上で確認したように、この時期の国書内容は両国外交の全時期を通じて最も強硬な姿勢を維持している。しかし、渤海のこのような外交戦略は、日本との緊密な関係をつくりあげるための冒険的試みであり、それ自体を日本に受け入れさせることが目的ではなかったようである。

渤海の態度が外交を持続させることに目的を置いた冒険的試みであるということは、壺万福の対応からも理解できる。壺万福は国書の内容を知らず、それを個人的に改めることもできなかつたと述べながらも、個人レベルでこれを修正することによりなだめている。

また、引き続き使臣を派遣していることもこれを裏付ける。次の使臣である烏須弗の派遣は壺万福派遣の2年後で、派遣の直接的な理由は壺万福の帰国が遅延したためである。すなわち、渤海は壺万福の外交結果に非常に注目していたことが分かる。さらに今回は壺万福派遣時とは異なり、両国の交流を「兄弟」関係にたとえた¹⁷。これはつまり自らがとった高圧的態度を多少なりとも緩和させることが目的であったと理解される。

烏須弗の来航もやはり円滑に進まなかつた。今回の派遣においても日本は国

¹⁴ 唐から封じられた官職を新羅のそれと比較すると、おおよそ品階上は新羅が上位であるが、この時期には渤海が一時的に新羅よりも上位に位置する（宋基豪『渤海政治史研究』一潮閣、1995、121頁）。

¹⁵ これらの用語は貞恵公主墓誌と貞孝公主墓誌にみえる。宝曆という元号は墓誌全体に、転輪聖王は墓誌の第2列に、皇上は第11列にみえる（韓国古代史研究会『訳註 韓国古代金石文』451～466頁）。

¹⁶ 盧泰敦「対渤海 日本国書에서 云謂한 “高麗旧記” 에 對하여」『邊太燮博士華甲記念 史学論叢』1986、623～626頁；宋基豪「渤海国書を 中心으로 本 9世紀 社会 变化」『渤海政治史研究』一潮閣、1995、145～147頁；石井正敏「日渤交渉における渤海高句麗継承国意識について」『中央大学大学院研究年報』4、1975；孫玉良「略述大欽茂及其統治下の渤海」『社会科学戦線』1982-4。

¹⁷ 日本の概説書では、これを日本と渤海が兄弟関係であったと拡大解釈されることもあるが（上田雄著・최봉렬訳『渤海의 수수께끼』教保文庫、1994）、史料上は「渤海日本…如兄如弟」とあり、渤海が想定した関係は、渤海が兄、日本が弟であることが分かる。

書内容の無礼を理由に入京を許可しなかった¹⁸。さらにもうひとつの制裁を加えるのであるが、それが到着地の問題であった。日本は今後、渤海使臣がかつての例に従い筑紫道から来航することを命じた。ここでいうかつての例とは事実に基づいたものではなく、儀礼的な用語として使われたものである。では、この時期に日本はなぜ筑紫道の利用を命じたのか。この点については後述する。

渤海は次の派遣でこの要求に応じる。777年に史都蒙を筆頭とする187人の使臣団が派遣されるが、日本の要求に従い対馬に到着したことを強調している¹⁹。これは日本との円滑な交流を持続させるための渤海の配慮とみられる。派遣の目的は天皇の即位を祝賀し、文王夫人の崩御を伝えることであった²⁰。しかし、光仁天皇の即位は数年前のことで今更のように即位を祝賀するということは、壺万福派遣時の国書内容をめぐる摩擦により両国の交流が円滑ではなかったことを示すものでもある。いずれにせよ、日本が渤海使に応じる名分を提供したわけである。

しかし、渤海が日本の措置を全て受け入れたわけではなかった。日本が30人を招聘すると、生き残った46人全員の入京を要求し²¹、さらに史都蒙は日本が弔慰品の名目で追加した交易品に満足せず、より多くの品を要求している²²。ところで、この時期の物品は他のどの時期よりも多かった。前回の派遣で外交的摩擦が生じたにもかかわらず交易量が増加しているという事実から、交易による渤海産物の輸入は渤海との外交においてもひとつの重要な軸になっていたことが分かる。渤海使の帰国に際しては高麗殿継が送使として派遣される。高麗氏を派遣することで、渤海との関係強化を図ろうとする日本の配慮と思われる。

高麗殿継の帰国時には張仙寿が派遣され、交流は継続する。日本は張仙寿について安置、供給を命じたが、高麗殿継には速やかな入京を命じている。これはおそらく高麗殿継の帰国報告に緊急を要する事案があったからであろう。この点と関連して再考すべき事実は、張仙寿が「渤海使（高麗使）」ではなく「送使」という語で記録されているということである。ここから、日本側には渤海使の派遣目的を送使に限定する意図があったと理解できよう。しかし、このような送使としての役割区分とは異なり、この時期の記録では渤海と関連したあらゆる用語が「高麗」となっており、これはすなわち日本が渤海との緊密な関係を強調していることを間接的に表現したものと見える²³。

18 『続日本紀』巻32 宝亀4年6月戊辰条。

19 『続日本紀』宝亀8年正月癸酉条。

20 『続日本紀』宝亀8年正月癸酉条。

21 『続日本紀』宝亀8年2月壬寅条。

22 『続日本紀』宝亀8年5月癸酉条。

23 渤海と日本の外交において「高麗」という用語の使用について筆者の見解を整理してお

それでは、張仙寿について、なぜこのような相反する立場がとられたのだろうか。これに答えるため、「送使」と記録していることに注目し、第10次遣唐使²⁴と関連づけて考えてみよう。

【表1】第10次遣唐使船の帰国状況

| 区分 | 帰国時期 | 帰着地 | 乗船者 | 備考 |
|-----|---------------|--------------|-------------------------------|---------------------------------|
| 第1船 | ? (778年11月前後) | 薩摩国甄嶋郡 | 主神津守宿禰国麻呂 唐判官(孫興進)等56人 | 破損した船 とともに帰港 |
| | ? (778年11月前後) | 肥後国天草郡 | 判官大伴宿禰継人 藤原喜娘(藤原河清の女)等41人 | |
| | — | — | 副使小野朝臣石根等 38人 唐使趙宝英等25人 | 死亡 |
| 第2船 | 778年11月乙卯(13) | 薩摩国出水郡 | ? | |
| 第3船 | 778年10月乙未(23) | 肥前国松浦郡 橘浦 | 小野朝臣滋野等? | |
| 第4船 | 778年11月壬子(10) | 薩摩国甄嶋郡 | 録事韓国連源等? | 帰港 |
| | — | 耽羅島(新羅) | 判官海上真人三狩 等? 唐使高鶴林 | 抑留された が779年7月 に新羅使と 帰港 |

こう。これまでの研究は個別事例だけを挙げ、個人的見解を提示することに限定されていたようである(盧泰敦、前掲論文:石井正敏「日渤交渉における渤海高句麗継承国意識について」)。高麗という用語は727年、759~762年、そして張仙寿の派遣時に直接的に用いられ、間接的に高句麗継承意識を標榜したのは770年の天孫云々、796年の高句麗との長い交流云々などであるといえる。しかし、各々の用語は時期的な必要により異なる認識のもとに用いられていたようである。

727年の場合は、高句麗との交流の伝統を想起させることで、国交を開こうとする意図とともに、渤海が高句麗継承意識を標榜する立場で用いられた。759~762年の場合は、日本側で新羅征討計画に対する渤海の歓心を買うため意図的に用いられたと判断される。770年については、渤海側で高句麗継承意識が自国の確固たる地位と結びつき表現されたことを先に述べた。

このように時期により用語の使用と関連した意識の違いがみられるが、両国の関係を緊密にするために用いられているという点で軌を一にすると考えられる。

²⁴ 「第10次」という名称は山尾幸久の見解に従った(山尾幸久「遣唐使—律令国家におけるその意義と性質」『東アジア世界における日本古代史講座6 日本律令国家と東アジア』学生社、1982)。

張仙寿が派遣された当時、遣唐使船の所在が不明であった。そうしたなか、11月を前後して第2船と第3船だけが無事に日本に到着し、第1船の乗船者は航海中の事故で一部は死亡、一部は破損した船をたよりに甄嶋郡に、また一部は天草郡に到着した。第4船は到着したが乗船者の一部は新羅地域である耽羅島に漂着した。その詳細を整理すると次の表の通りである。

張仙寿は日本が派遣した高麗殿継一行の帰国のために派遣された送使の役目を負っていたという事実からみて、日本は遣唐使の帰国に際し渤海の協調を得ようと議論していたのかもしれない。その一方では遣唐使船の帰国のため新羅に協調を求めた場合、あるいは渤海使の入京・歓待により引き起こされる新羅との関係悪化を未然に防止するため、入京を留保していたのかもしれない。このような点からすると、日本が新羅に敵対的であったと断言することは困難である。

ひとまず遣唐使船の帰港過程がある程度把握されると、渤海使は入京を許され、入京祝賀の儀式、大射などが行われた。張仙寿が帰国すると、日本は耽羅に抑留された一行を帰国させるため遣新羅使を任命し²⁵、続いて唐使を入京させた²⁶。

次の派遣は779年9月に行われるが、渤海および鉄利人359人が派遣されたという点で、多少異例的である。この使臣団については多様な見解があるが、筆者は派遣団の構成と日本の対応から、鉄利人の独自のな交易と理解している²⁷。日本は表の無礼を問題視し、さらに筑紫道で来航しなかった点を指摘している。渤海との公式関係が順調である時期だけに、日本としては外交の窓口の単一化と同時に渤海に対する信頼を構築するための対応と理解できる。一方で、この派遣団が帰国のため9隻の船の提供を求めると、これをすぐさま受諾した事実から²⁸、公式使節とは認定しなかったが、交易はある程度達成されたことが分かる。

4. 延暦年間（782～805年）

786年の李元泰の派遣については、桓武天皇の即位後初めて行われた交流であったにもかかわらず、具体的な記録が残っていない。李元泰一行は出羽国に到着し、蝦夷の侵略を受けて34人が殺される被害にあった²⁹。当時の日本は藤原

25 『続日本紀』巻35 宝亀10年2月甲申条。

26 『続日本紀』巻35 宝亀10年4月庚子条。

27 具蘭憲「8世紀 中葉 渤海・新羅・日本の関係」12～16頁で詳細に論じた。

28 『続日本紀』宝亀10年11月乙亥条。

29 『続日本紀』延暦5年9月甲辰条。

種継の暗殺³⁰、早良親王の廢太子³¹など、多くの政治的混乱を経ている時期であり、渤海使臣の歓待が困難であったのか、関連記録がみられないのである。使臣団の規模も65人と以前に比べて少なく、交易よりも政治に重きを置いていたのではないかと推測する。おそらくこの派遣では文王末期の王権弱化³²を克服しようとする渤海と、政権初期の混乱を收拾しようとする日本の必要性により、政治的性格が強調されざるを得なかったと考えられる³³。各種行事による歓待がなかつとしても、天皇との拝謁は行われたとみるのが妥当であろう³⁴。

次の使臣派遣は8年後の795年11月に行われる。この派遣は康王の即位および2月に唐から冊封されたことで対外的正当性を確保して行われたという点に意義がある。

しかし、この使臣もやはり出羽国に漂着し、殺害されるという被害にあう³⁵。蝦夷による殺害は3度目である。その最初は727年に渤海が初めて日本に来航した高仁義一行の例である。この時は24人中16人が殺害された³⁶。残りの2度はこの時期に集中する。これはおそらく桓武天皇の征夷事業³⁷により蝦夷の不満が増幅し、それが漂着民に対して強く表出したものと理解される。特にこの時期は蝦夷との熾烈な対立が繰り返されており、蝦夷は渤海が日本の朝廷を支援する目的で来航しているとみなし、徹底的に対立したのかもしれない³⁸。それでは、ここで再び筑紫道の利用について考えてみよう。

両国の交流には周知の通り東海を経なければならないが³⁹、日本行きはおおよ

³⁰ 『続日本紀』巻39 延暦4年9月庚申条。

³¹ 『続日本紀』巻39 延暦4年9月丁巳条。

³² 宋基豪は王権弱化を反映したものとして、貞孝公主墓誌に大興という元号を復活させて用いている点、皇上と大王という語を混用している点などを指摘し、その原因を文王の老衰、東宮大宏臨が若くして死亡したことで補佐する勢力を失った点などを挙げている（宋基豪、前掲書、125頁）。

³³ 石井正敏は、むしろこのような政治混乱の最中における使臣の訪問を、政治的に利用できたと考えた（石井正敏、前掲論文、436頁）。

³⁴ 金恩淑は、李元泰が帰国困難な事情を報告している記録を挙げ、桓武天皇に拝謁した可能性を指摘している（金恩淑「9世紀前半 新羅と日本の関係」『日本史研究会9月月例発表会』1999、3頁）。

³⁵ 出羽國言。渤海國使呂定琳等六十八人漂着夷地志理波村。因被刳畧。人物散亡。勅宜遷越後國依例供給（『類聚國史』巻193 殊俗・渤海 上 桓武天皇延暦14年11月丙申条）。

³⁶ 『続日本紀』巻10 神亀4年9月条。

³⁷ 桓武天皇の征夷事業は780年の伊治公告麻呂の乱以後、積極的に推進された。791年に大伴弟麻呂と坂上田村麻呂を筆頭に、794年、797年と大々的な討伐を敢行し、801年に至り胆沢から志波に及ぶ地域をほぼ討伐する。

³⁸ 小嶋芳孝は蝦夷と日本、そして日本と軍事同盟を結んだ渤海との対立と反目は、渤海交流初期からあったとみている。『続日本紀』にみえる710年の靺鞨使臣派遣を渤海とみなし、これを蝦夷征伐のための支援派遣と理解した（小嶋芳孝「高句麗・渤海との交流」『境界の日本史』山川出版社、1997、210～202頁）。

³⁹ 古畑徹は渤海使の単独航海には北回航路が利用されたと指摘している（古畑徹「渤海・

そ秋～初春の北西風を利用する。季節風のほかに航海状況を規定するもうひとつの重要な条件は海流である。当時の海洋条件が現在と大きく異ならないとすると、リマン海流が東北地方に南下しているため、筑紫道に到着することが非常に難しいことは事実である⁴⁰。

交易に伴う負担などにより渤海との交流を忌避したという前提のもと、この時期に日本が筑紫道の利用を強要したことについて、渤海使来航を拒む意志の表れであると理解するのが一般的であった⁴¹。しかし、これまでの議論からみると、日本は渤海との交流において交易と外交による政権の対外的正当性確保という利益を創出できたので、渤海との外交関係を維持しようとしたと判断される。したがって、筑紫道の利用を外交忌避と理解するには無理があるだろう。一方、論者によっては筑紫道の利用を光仁天皇の政治簡素化の一環として推進されたとする見解⁴²や、多くの窓口を開放した際に発生する混乱を最小化させるためという見解⁴³もあり、説得力がある。これを受け入れるならば、到着地の限定は渤海との交易の窓口を単一化し、朝廷が統制する目的であったということになるが、それにもかかわらずなぜこの時期にこのような要求が集中しているのかについては説明に乏しい。

そこで、蝦夷との衝突にその糸口を求めてみよう。すなわち、日本が筑紫道の利用をしばしば強調したのは、蝦夷による被害を防ぐという配慮と理解できるのである。それだけでなく、東国の在地首長層が保有している海上権を認めることで征夷事業に利用してきたという点⁴⁴を考え合わせると、この在地勢力と渤海間の交流の可能性が、蝦夷と対立していた桓武天皇にとってはもうひとつの負担になったのかもしれない。換言すると、筑紫道の利用は、漂着による被害を防止することと、東北地域と渤海との私的な交流を遮断する目的であったといえよう。

795年の呂定琳一行の派遣で最も注目されることは来航期間の問題である。渤海は使臣の数を20人に限定するかわり、来航期間については日本が提案することを要求し、これを決める使臣を来秋までに送ることを通告している。ところ

日本間航路の諸問題」『古代文化』46、1994、443～445頁)。

⁴⁰ 尹明喆「海洋 条件을 通해서 본 古代 韓日關係史의 理解」『日本学』14、1995、68～76頁。

⁴¹ 新妻利久「渤海国使に対する海路法規の研究」『国史学』56、国史学会、1976、370～375頁。

⁴² 石井正敏「光仁・桓武朝の日本と渤海」『日本古代の伝承と東アジア』吉川弘文館、1995、428～433頁。

⁴³ 新妻利久「渤海国使に対する海路法規の研究」『国史学』56、国史学会、1976、370～374頁。

⁴⁴ 川尻秋生「古代東国の外洋交通」『歴史学研究』703、1997。

でこの時に、諸侯が天子に聘期を問う魯の例⁴⁵を挙げ、渤海はこれを引用して来航期間調整の意を伝えた。日本と渤海の関係を天子と諸侯の关系到例えることで、日本との外交関係を円滑にしようと努めたのである。

果たして渤海の意図通り、日本は渤海王の啓が礼を逸しておらず、1つ1つの語句に誠意があるとするなど⁴⁶、渤海に対し友好的な立場を堅持している⁴⁷。のみならず、渤海の要求通り 798 年 5 月に内蔵賀茂麻呂を派遣し、来航期間の問題に対する立場を伝える。日本が専使を派遣した例は新羅征討計画を推進していた天平宝字期に 2 回、そして今回のあわせて 3 回のみである。専使が日本の必要性により派遣されたことは、来航期間の問題が非常に重要な事案であったことを証明する。日本は両国間の距離、航海の危険に伴う負担などの理由を挙げ、6 年を提案している⁴⁸。

これに対し渤海は 798 年 12 月の内蔵賀茂麻呂の帰国時に大昌泰を派遣し、日本が提示した 6 年の期限について、短縮するよう求める⁴⁹。早くから対中国外交においては王族、特に王子や王弟、あるいは王姪の派遣が頻繁に行われていたことに比べ、対日本外交で王族を派遣した例は今回が初めてで注目される⁵⁰。それだけ渤海としては日本の関心を引き、来航期間を短縮しようとする意向が強かったのである⁵¹。大昌泰の官職は「尉軍大將軍左熊衛都將上柱將開國子」で、武官であったが、史料だけでは特別に武官を派遣した理由を明らかにすることは難しい⁵²。ただし、「王族の派遣」という名分を立てながらも、渤海の自尊心を損なわない程度の人物として選ばれたのではないだろうか。つまり、対中国外交のように王子などを派遣して蕃国の礼をとるのではないが、王族派遣という名分だけを伝えるという外交技術とみるべきだろう⁵³。

45 『春秋左氏伝』襄公 8 年条。

46 『類聚国史』巻 193 殊俗・渤海上延暦 15 年冬 10 月壬申条：『日本後紀』巻 5 皇統彌照天皇桓武天皇延暦 15 年冬 10 月壬申条。

47 すでに注 4 で明らかにしたように、重松敏彦は渤海使臣の接見を指す用語の変化に注目しており、このような変化を渤海の積極的な外交交渉によるものとするよりは、日本側の交易の必要性に起因したものとみなした（重松敏彦、前掲論文）。

48 『類聚国史』巻 193 殊俗・渤海上延暦 17 年 5 月戊戌条。

49 『類聚国史』巻 193 殊俗・渤海上延暦 17 年 12 月壬寅条。

50 渤海の王族派遣は 841 年大虎晃の例がもう 1 度ある。宋基豪は大使の官職を分析するなかで、渤海使として大氏が派遣された例を 1 回としたが、多少曖昧な叙述である（宋基豪、前掲書、135 頁）。

51 さらに、大昌泰と関連した官爵の除授に関する特別な記録がないことから、明らかに地位の高い王族ではなかったようである。林相先の研究でも一般的な大使に下された程度と理解している（林相先『渤海の地方勢力研究』新書苑、1990、184～190 頁）。

52 日本に外交的圧力をかけるために武官を派遣したという見解もある（朴眞淑、前掲論文、19 頁）。しかし、全般的な外交の趨勢からみて、渤海の立場からは日本を刺激する必要はなかったもので、この見解は受け入れがたい。

53 これと類似した例が新羅で 2 度確認される。752 年の金泰廉と 802 年の金均貞の使臣任

この年の3月に渤海は唐から王に封じられ、康王は文王の爵位を受け継いだ。これはその直前に康王が使臣を送り、強く要求したからであるといわれる⁵⁴。これに反し、日本に対しては蕃国の礼をとるというジェスチャーをみせているが、当時の渤海はなぜこのような外交政策を推進したのであろうか。これは康王即位による日本の警戒を緩め、以前と同じ関係を保つことにその意図があったからにはほかならない。周知の通り、727年以降、文王と交流してきた日本が、新たに登場した康王を警戒したのであろうことは想像に難くない。さらに日本との交流は靺鞨系首領層の交易を保障することになり、政権の安定につながる⁵⁵。したがって、新たに即位した康王としては対日本外交に力を傾けざるを得なかったのである。日本が年限について気にかけないことを伝え⁵⁶、来航期間をめぐる交渉は一段落する。来航期間無制限の確答を受け799年4月に大昌泰は帰国し、その送使であった滋野船白は同年9月に帰国する。

この時期の渤海との交流でもう1点注目すべきことは、唐と日本との中継貿易的な役割である⁵⁷。記録にみえる渤海の帰路同行事例は表の通りである。

唐との交流および遣唐使の派遣は、地理的条件から日本が独自に進めるには多くの困難が伴う。遣唐使の予期し得ない漂着で新羅に援助を要請することもあったが、上の表で確認できるように、唐との交流や留学生あるいは留学僧の帰航には渤海との交流を積極的に利用していたのである。

命がそれである。もちろん、金泰廉が王子であったかについては議論があるが、9世紀の金均貞の仮王子計画と結びつけると、このような措置はすべて相手国の名分を立てることで外交を進めていく対日本外交戦略の1つではなかったかと思われる。

⁵⁴ 『冊府元龜』卷965 外臣部奉冊3 貞元14年3月条。

⁵⁵ 鈴木靖民「渤海の首領制—渤海の社会と地方支配」『歴史学研究』547、1985；金東宇「渤海首領の時期別変化とその意義」高麗大学校碩士学位論文、1995；李成市「統合支配の戦略としての対日本外交」『東アジアの王権と交易』青木書店、1997；鈴木靖民「渤海国家の構造と特質—首領・生産・交易—」『朝鮮学報』170、朝鮮史研究会、1999年。

⁵⁶ 『類聚国史』卷193 殊俗・渤海上延曆18年夏4月亥朔条；『日本後紀』卷8 皇統彌照天皇桓武天皇延曆18年夏4月己丑条。

⁵⁷ このような見解はすでに提起されている（森克己「遣唐使と新羅・渤海の関係」『史淵』48、1951）。

【表 2】日本の入唐後の帰路同行事例

| 到着時期 | 同行入国者 | 渤海使臣 | 備考 |
|-------------|-------------|------|---------------|
| 738(天平 11) | 平郡廣成 | 己辰蒙 | 733 年唐に派遣され帰国 |
| 759(天平宝字 3) | 高元度 | 高南申 | 藤原河清のため迎入唐使 |
| 762(天平宝字 6) | 高内弓とその家族、戒融 | 板振鎌束 | |
| 772(宝亀 3) | 永忠、得清、誠明 | 壺万福 | 入唐 |
| 796(延暦 15) | (永忠) | 呂定林 | 永忠に金 300 両伝達 |
| 825(天長 2) | (靈仙) | 高承祚 | 靈仙の書状を伝える |

58

59

渤海との交流により有利な諸条件を得ていた日本は、安定した交流を確保するため、802 年に渤海使のための渤海客院設置を推進する⁶⁰。客院の設置および利用に関する記録がないことを指摘し、設置の事実を疑う見解⁶¹もあるが、大型船建造のため能登国の大木伐採を禁じた記事⁶²は、この地域に渤海使臣が常に来航していたことを示すものであるので、渤海客院が設置されたことを反証するものといえる。その他に、能登地域の羽咋市寺家遺跡などでは牛・馬の抜歯を推測させる遺物が出土しており、外来人の頻繁な出入りによる疾病などの流入を防ぐための宗教的行為が行われていたと考えられ⁶³、これもやはり渤海人の往来が頻繁にあったことを間接的に語るものといえよう。以上のような端緒から、能登地域に客院が設置されたという推定は間違っていないだろう。

来航期間に関する渤海との協議が成立するとともに、安定的な渤海航路⁶⁴確保

58 渤海は当時、文王の冊封事実を確認するため平群広成の帰路同行を計画したという指摘もある（濱田耕策「留唐学僧戒融の日本帰国をめぐる渤海と新羅」『日本古代の伝承と東アジア』吉川弘文館、1995、401～410 頁）。

59 東野治之「日唐間における渤海の中継貿易」『日本歴史』438、吉川弘文館、1984、270～272 頁。

60 『日本後紀』卷 12 皇統彌照天皇桓武天皇延暦 23 年 6 月庚午条。

61 浅香年木「能登客院考」『北陸の考古学』1983。

62 『日本三大実録』卷 44 元慶 7 年 10 月壬戌条。

63 小嶋芳孝「高句麗・渤海との交流」『海と列島文化 1 日本海と北国文化』小学館、1990、215 頁。

64 この時期を前後して渤海使は隠岐国、出雲国、但馬国などの山陰道で来航しており、航路の変更を示している。これについても諸説紛紛としているが、古畑徹は鬱陵島を中間拠点として発見したことによるとし、鬱陵島の利用が可能であった理由を新羅の政治不安に求めた（古畑徹「渤海・日本間航路の諸問題－渤海から日本への航路を中心に－」『古代文化』49、1999）。

新妻利久は航路変化の主たる原因を出港地の変更に求め、この時期の出港地がポシェット湾から南京南海府に変わっていたと指摘する（新妻利久『渤海国及び日本との国交史の

に向けて外交の拠点として設置された渤海客院は、9世紀以降、渤海と日本の活発な外交の基礎を提供するにいたる。

5. 結論

これまで、8世紀後半の外交に関する研究が「政治から経済へ」という枠組みの中で扱われ、看過されてきた渤海と日本間の交流がもつ政治的意味を再考してきた。両国の外交の基本は、対外的正当性を確保し政権の安定を図る政治的側面と、交易による実益を図る経済的側面が結びついたもので、これはこの時期においても同じであった。日本においては、対外的正当性を確保しようとする意向が国書持参の要求とその内容の指摘などに表れるが、対新羅外交とは異なり融通性があり、この時期に交易品が増加しているという事実は、渤海産物に対する受容が高かったことを示している。それだけでなく、唐との中継貿易的な役割もまた日本が渤海との交流で得られた利益の1つであった。渤海においては、交易が首領統合の重要な役割を担うという基本的枠組みに照らし合わせると、政治的意味と決して分離できないことは周知の事実である。

特にこの時期の外交において、日本の交流忌避と、これを解消するため渤海が蕃国の立場をとったという基本的理解の枠組みを提供してきた筑紫道の利用と来航期間の協議について新たな理解を付け加えた。筑紫道の利用が、蝦夷との対立が激化した時期から征夷事業が一段落する前に限定してみられることは、蝦夷による被害を最小化させ、来着地で私的に行われる交易を防止することにその目的があったと考えられるので、あくまでも両国の外交において国家間の窓口を単一化するためであったと理解できるだろう。779年に鉄利人が来航した際、入京は許可しなかったが、帰国のため9隻の船を提供するなどの配慮もやはり、このような脈絡で理解できるだろう。渤海との交易は行うが、国家間の単一窓口を維持しようというものであったのである。

一方、この時期の来航期間の協議は、日本の期間制限に応じた9世紀の様相とは区別されるもので、文王との長期にわたる関係により康王との新たな外交がやや疎遠になることを憂慮して講じた渤海の積極的な外交戦略といえよう。さらに唐との関係が安定的してきた頃に進められているという事実は、来航期間の協議が決して外交的孤立や日本の無関心を打開する目的ではなく、政治的安定に基づく交流の拡大が目的であったことを示している。蝦夷問題が終結し、

研究』学術書出版会、1969)。

一方、金恩淑は790年新羅が渤海使臣を派遣した際に、新羅沿岸の航海許可に関する交渉が行われた可能性に注目し、これにより日本海横断が可能になったとした(金恩淑「9世紀前半 新羅と日本の関係」『日本史研究会9月月例発表会』1999)。

来航期間の協議が合意に達する頃に行われた渤海客院の設置は、このような両国の交流に対する意向と必要性が重なり合い実現されたといえよう。



渤海遺民大氏の韓半島定着過程

朴洪甲 (国史編纂委員会)

Journal of Northeast Asian History
volume 4, number 2 (Dec 2007) : 88-105

*Copyright © 2007 by Northeast Asian History Foundation. All Rights Reserved.
No portion of the contents may be reproduced in any form without
written permission of Northeast Asian History Foundation.*

渤海遺民大氏の韓半島定着過程

朴洪甲（国史編纂委員会）

I. はじめに

渤海王室の大氏一族は、滅亡を前後して数度高麗に投降している。渤海王子の大光頭はもちろん、『高麗史』に散見される大氏もおおよそその後裔であると推定される。高麗に流入した大氏に関する問題は、1960年代後半以来、様々な学者により研究されてきたが、主たる関心はその社会的地位に関するものであった。そのなかで特に北村秀人の研究は、大氏が郷・所・部曲の民として生きていく劣悪な立場であったことから、高麗が民族的同質感を認めず、差別的扱いをしたということに焦点を合わせたものであった¹。

しかし、これは中央の政治舞台において権力闘争に巻き込まれた牛峰大氏が粛清された結果であり、当初から差別的扱いを受けたわけではなかった。その後、牛峰大氏は歴史から姿を消すが、中央の権力闘争とは無関係に生きた尚州永順県の大氏は、永順県を本貫として現在まで続いている。

渤海遺民大氏が高麗国民として編入されるためには、特に良人の身分を維持する必要があり、それ相応の待遇を受けるためには姓貫の獲得が必須であった。高麗初頭の姓貫制度の運営がすなわち住民統制策の一環であったためである²。量田と戸口を把握する籍の作成をもとに地域共同体の支配体制下に置くようになるが、これを編制する枠組みがすなわち置邑であった。本貫の邑格により住民の身分と社会経済的地位にも格差が生じ、官人や商人など国家から許可され

¹ 北村秀人「高麗時代の渤海系民大氏について」『三上次男博士喜寿記念論文集』3（歴史篇）平凡社、1985。

² 許興植「高麗時代の 本貫 居住地」『高麗 社会史 研究』亜細亜文化社、1981；金寿泰「高麗 本貫制度の 成立」『震檀学報』52、震檀学会、1981；金寿泰「高麗初期 本貫 研究」『韓国中世史研究』8、韓国中世史研究会、1999；蔡雄錫「高麗前期 社会構造와 本貫制」『高麗史의 諸問題』三英社、1986；姜恩景「高麗時代 本貫에서의 定住와 他郷으로의 移動」『史学研究』81、韓国史学会、2006。

た特定身分を除いて、本貫で設定された地域に限定して居住するのが原則であった。

このような本貫制の支配体制が12世紀から変質した。居住地と本貫地の分離が進み、その機能自体に変化をもたらし、相対的に門閥を明らかにする機能と、父系親族の観念を確認する機能だけになったということである³。すなわち、後三国末期から本貫は国家で民を把握し、統制する手段として活用されたが、現在のように姓と関連付けて使用する概念は高麗中期の門閥社会が成立してからであった。

本稿は以上の姓氏関連の既存研究成果をもとに、高麗に流入した渤海系大氏の活動状況と、彼らが高麗式の姓貫体制にどのように編入され、その消長が如何なるものであったかについて検討する。特に、今日、大祚榮を始祖とする姓氏のなかでは永順太氏と陝溪太氏が二大姓氏であり、これらを中心に考察することで、中性社会における姓氏の消長の特殊性と一般性もみえてくると考える。

II. 渤海遺民大氏の分析

我が国の最も古い姓に朴・昔・金と斯盧国の村長であった李・裴・薛・鄭・孫・崔などを挙げられる。しかし、これらの姓は新羅建国期から付けられたものでなく、7世紀以降に使用されたとするのが現在の学会の見方である。我々の姓氏は新羅末から高麗前期に至る間に一般化していくが、朴・昔・金を除いてはほぼ中国の大姓を模倣したものであった⁴。すなわち、吏読式の固有名だけを使用していたが、漢字式の姓と名を使用する呼称文化の変化があったのである。渤海もやはり698年に大祚榮が建国してから、王室の姓氏を世襲したので、大氏の漢姓化もやはり類似した時期であったと推定される。

『高麗史』には渤海遺民に関する記事が散見される。それらの人物のなかには固有名で記された者、李・朴など既存の新羅姓をもった者もいた。しかし、何よりも渤海王室と関係する大氏が非常に多くみられる。渤海が滅亡すると、934年（太祖17）7月に世子の大光顯が数万を従えて高麗に投降し⁵、それ以前の925年（太祖8）と928年（太祖11）にも大和均と大儒範の投降があった⁶。

³ 蔡雄錫『高麗時代の 国家와 地方社会—本貫制 施行과 地方支配秩序』서울大出版部、2000。

⁴ 李樹健「後三国時代 支配勢力의 姓貫分析」『大邱史学』10、大邱史学会、1977。
李鍾書「羅末麗初 姓氏 使用의 拡大와 그 背景」『韓國史論』37、서울大國史学科、1997。

⁵ 『高麗史』卷2・世家2・太祖17年（934）7月条。

⁶ 『高麗史』卷1・世家1・太祖8年（925）9月条、『高麗史』卷1・世家1・太祖11（929）7月条。

<表 1> 『高麗史』 所載渤海系大氏の活動内容

| | 典拠 | 記事内容 | 番号 |
|----|---------------|--------------------------------|----|
| 世家 | 神宗 4 年 7 月 | 工部侍郎大守正を金に使臣として送る | 1 |
| | 高宗 15 年 1 月 | 大集成を西北面兵馬使とする | 2 |
| | 高宗 18 年 10 月 | 蒙古との戦争で大集成が活躍 | 3 |
| | 高宗 19 年 5 月 | 蒙古進入で大集成らが遷都を主張 | 4 |
| | 高宗 23 年 5 月 | 守司空大集成卒 | 5 |
| | 高宗 40 年 8 月 | 校尉大金就が蒙古軍を撃退 | 6 |
| | 高宗 46 年 12 月 | 別将大金就が蒙古軍を撃退 | 7 |
| | 元宗 9 年 2 月 | 大氏夫人(周永賚の夫人)と娘二人の姦通事件 | 8 |
| | 忠烈王 3 年 7 月 | 内豎大守荘の活動 | 9 |
| | 忠烈王 4 年 7 月 | 大貞(平民)が王京近隣で活動 | 10 |
| 列伝 | 卷 91, 宗室元宗 | 大守荘の活動 | 11 |
| | 卷 94, 楊規 | 大將軍大懷徳が契丹戦で戦死 | 12 |
| | 卷 94, 徐熙 | 中郎将大道秀が契丹戦で活躍 | 13 |
| | 卷 94, 智蔡文 | 將軍大道秀が契丹戦で活躍 | 14 |
| | 卷 100, 慶大升 | 令史同正大公器の活動 | 15 |
| | 卷 103, 金希磾 | 大集成の活動 | 16 |
| | 卷 103, 金慶孫 | 叛逆事件で継母大氏(大集成の娘)を崔沆が虐殺 | 17 |
| | 卷 123, 李英柱 | 金州平民大文の一族百余名を李英柱が抑圧し、奴婢にしようとする | 18 |
| | 卷 129, 崔忠献 | 大集成の活動 | 19 |
| | 卷 129, 崔忠献附怡 | 大集成の活動及びその娘が崔怡の後室に入る | 20 |
| | 卷 129, 崔忠献附沆 | 大集成の娘(崔沆の継母)に対する崔沆の処遇 | 21 |
| 志 | 卷 57, 地理志 尚州牧 | 林下村人の大氏が功をたて永順県に昇格 | 22 |

以後、渤海遺民の投降は 10 数人から数万人規模に至るまで約 200 年の間に大き

く4時期にわかれて集中した⁷。ところで、これら渤海王室の遺民を高麗国民に統合する過程で、大光顕には王氏を下賜するとともに宗籍に載せ手厚くもてなし⁸、その他の人物についても官職と土地を一定の基準にそって与えている。すでに漢字式の姓をもった者に姓を下賜した場合、本来の姓を維持した他の事例があることから⁹、大光顕の後裔もやはり大氏を名乗っていたと判断される。然るに、問題は光顕とその集団を開京近隣の白州に定着させたというが¹⁰、そこを本貫とした後裔が全く不明であるという点である。

高麗に定着した渤海系大氏に関する説明をもう少し進展させるため、『高麗史』から抽出した人物を一人ずつ検討してみよう。

上の表にみえる22の記事を分類すると、①官職を持った者の活動、②婦女子の活動、③平民以下の身分を持った者の活動、に分けられる。

そのなかで①の性格をもった者には大道秀（正五品～正四品）、大懷徳（従三品）、大公器（吏属）、大守正（正四品）、大集成（正六品から二品以上）、大金就（正九品～正七品）、大守荘（宦官）などの名前が確認される。大道秀は契丹との戦争が起こった時期の人物であるという事実が、朝鮮の中宗代に太斗南が撰した「旧譜序」にも言及されている。『渤海考』では大道秀を大光顕の息子とし、太氏族譜もまたこれに従っているが、その根拠は不明である。そして残りの人物のうち、大集成と大金就を除いて譜牒では確認されない。これはいくつもの系統の大氏がいたという証拠でもあり、譜牒類が朝鮮後期に作成されたものであるので、高麗時代の人物に対する系譜の追跡が困難であったという結論にもなる。

②の史料には、枢密院副使周永賚の夫人である大氏に関するもの、崔沆の継母が大集成の娘であったという事実など、主に高官の婦女子が登場する。周永賚は崔沆に粛清されるまでは最高の実力者であった。そして、大集成の娘は崔怡の後室に入ったので、崔忠献にとっては息子の夫人になったわけである。大集成は崔忠献により抜擢された人物で、蒙古侵入時に大いに功をたてたが、牛峰崔氏一派と姻戚関係でつながっていた点で、当時の崔氏政権と強く密着して

7 北村秀人「高麗時代の渤海系民大氏について」『三上次男博士喜寿記念論文集』3（歴史篇）、平凡社、1985。

8 王氏を下賜されたが、王族に準ずる待遇がなかったという点を挙げ、差別を受けたとする見解もある（北村秀人、前掲論文）。しかし、高麗としては新羅王族と渤海王族の待遇を同一にすることはできないだろう。新羅は後三国統一過程で抱き込むべき必須の領土と人民を持っているが、渤海にはそれがないためである。すなわち、後三国統一過程での貢献度が異なるので、待遇もまたそれに相応しい水準で決定されたとみる必要がある。

9 高麗の建国過程で功をたて、王氏を下賜された王儒は春川朴氏であり、顯宗代の功臣であった王可道は清州李氏であった。『世宗実録地理志』の春川条と清州条には、春川朴氏と清州李氏は土姓として記されているが、王氏の記載はない。

10 『高麗史』巻2・世家2・太祖17年（934）7月条。

いたことが分かる。大金就が蒙古軍との戦闘で功をたてた際に牛峰別抄 30 人余りを率いていたという記録から、大集成だけでなく大金就も牛峰崔氏と直・間接的なつながりを持っていたことが分かる。当時最大の門閥を誇っていた牛峰崔氏とつながりを持っていたということは、渤海王室の後裔である大氏が高麗貴族社会内で一定の力を確保していたことを示す。こうして、22 番の史料にあるように、尚州郊外の林下村が永順県に昇格したのであるが、これは渤海王族遺民の後裔の功によるものであった。これがすなわち永順太氏の出発点になる。

一方、③を代表するものが 10 番と 18 番の史料である。まず、10 番の史料は大貞が王京（開京）の外に出て捕らえられたが、逃亡して帰ってきたという記事である。身分を正確に知る術はないが、平民であると推測される。次に 18 番の史料はもう少し詳しくみる必要があるが、忠烈王以後の状況であるので 1280 年代前後と推測される。慶尚道の金州に大氏一族 100 人ほどが居住していたが、都官佐郎李舜臣が李英柱の意に沿ってこれを奴婢にしようとした。そこで大文という者が王府断事官趙仁規に訴え、李英柱を罷職させて免れたというものである。1278 年（忠烈王 4）に趙仁規が印候とともに慶尚道の流民を探し出し戸籍に載せたことが史書に記録されており¹¹、これと関連したものではないかと思われる。

いずれにせよ、上の史料だけでは渤海王族遺民の状況について具体的なことを知り難い。ただし、高級官人から平民に至るまで多様な姿を描くことはできそうである。また、渤海遺民の史料を時期別に区分してみると、1、2 を除いて契丹と蒙古侵入過程で功をたてた人物という特徴がある。1010 年（顕宗 1）に契丹は康兆の穆宗弑逆の罪を問うという口実で高麗に侵入し、3 度（1015 年と 1018 年）にわたり国境を越えた。大道秀・大懷徳はこの時に活躍した将軍であるが、高麗初期に国境地域に配置された渤海遺民であったと推定される。

特に、1011 年（顕宗 2）に契丹は高麗に定着した渤海遺民を多数捕虜にし、寧州と帰州に編戸させたことがあった¹²。捕虜になった渤海遺民の大半は、国境地域に隣接した場所に定着した人々していたのだろう。太祖以来、渤海遺民を軍事上の主要拠点や辺境に配置したと推定されるが、これは敵を一次的に防ぐ役割を担ったわけでもある。いずれにせよ、契丹が渤海遺民を多数捕虜にしたことは、渤海に対する感情と領土に対する占有意識によるものと考えられる。そして、大集成、大金就、大守荘は蒙古侵入時に活躍した人物である。したがって、渤海王室遺民はおおよそ軍功で立身したことが分かるが、これは高麗貴族社会で占める比重がそれほど高くなかったことを示すものでもある。

このように高麗時代の記録に名を残した様々な大氏が確認されたが、大光頭

11 『高麗史』巻 28・世家 28・忠烈王 4 年（1278）10 月癸丑条。

12 『遼史』巻 38・地理 2・東京道。

をはじめとした渤海王室との関連性を明らかにする史料はない。ただし、朝鮮中期に権文海が編纂した『大東韻府群玉』のなかで永順太氏について、「高麗の時、永順部曲の村民に太氏姓をもった者がいたが、敵を捕らえた功があり、部曲から県に昇格し、ついに（太氏は）土姓になった。伝わるところによるとその先祖は渤海国王であり、高宗代に太集成が大將軍になったが、太氏の始まりはここにあるのではないかと思われる」と説明しているように¹³、永順太氏に関する一般的な認識をよく示している。『大東韻府群玉』は姓氏関連資料として非常に信憑性のある史料として認められている¹⁴と同時に、編纂者自身が永順のすぐ隣に位置する醴泉出身である。特に、永順太氏が輩出した朝鮮朝の名賢、太斗南とその後裔が醴泉に移住し、姻戚関係を結んでいるという点で、その内容の信憑性は高い。ただし、大氏でなく太氏とする点に留意する必要がある。

渤海遺民の大氏がいつ太氏に変わったのかについて、具体的な記録は見当たらない。譜牒類では『東史通鑑』という書を引用し、太氏に変わった経緯を説明しているが、現存しない書であるのみならず、書名からも疑問の余地がある。

『高麗史』で「大集成」と「太集成」を混用しており、1005年に宋で編纂された『冊府元龜』でも渤海遺民に関する記録に「太」と「大」が混用されている¹⁵。ただし、世宗代に廟号や諡号、外交文書などで「大」の字にすべて点を加えるという原則が決められた¹⁶ことから、この時期「大氏」が「太氏」と表記されるようになったようである。

一方、先に検討した『大東韻府群玉』（1589）で、永順を部曲と表現している点が一際目につく。それ以前に編纂された官撰地理志、例えば『高麗史』『世宗実録』『慶尚道地理志』『新增東国輿地勝覽』などには部曲ではなく林下村と表記されている。『増補文献備考』巻52の姓氏条には部曲とあるが、これは『大東韻府群玉』を参考にしたためである。『増補文献備考』を根拠として一部の学者は渤海遺民の社会的地位が低かったことを指摘している¹⁷。しかし、林下村と表記された史料が時期的に先行するという点で、部曲であった確率は低いと判断される。

13 『大東韻府群玉』（1589）巻14・去声「泰」の条項。

14 一般的に族譜編纂の草創期に該当する17世紀以前の譜牒は信頼できるが、18世紀以後に編纂された族譜は系譜をさかのぼらせるなど、歪曲が甚だしい。『大東韻府群玉』にみられる姓氏資料は様々な家門の譜牒編纂に大きな影響を与え、また編纂時期からみても信頼できる。

15 『冊府元龜』巻996・外臣部41・納質。

16 『世宗実録』巻9・世宗2年8月乙丑条。

17 北村秀人「高麗時代の渤海系遺民大氏について」『三上次男博士喜寿記念論文集』3（歴史篇）、平凡社、1985；朴玉杰「高麗時代の渤海人斗 그 後裔」『溪村閔丙河教授停年紀念史学論叢』1988；李弘斗「高麗部曲의 郡県昇格과 賤人의 身分上昇」『実学思想研究』10・11、1999。

Ⅲ. 大氏の地域別定着と陝溪太氏

我が姓氏は父系の血統を示す姓と、その姓の基盤地域を示す本貫である氏が合わさったものである。したがって、姓氏は血縁と地域を分離してしまうと、その存在価値はない。『世宗実録地理志』には太氏について尚州永順県の続姓、黄海道牛峰県の亡姓、江原道通川郡の属県である臨道の亡入姓として記されているが、特に臨道太氏には帰化姓という注がついている。

入姓とは土姓が存在しなかった元山湾から大同江以北地域を対象に、新たに開拓した土地に移住してきた姓氏であり、亡入姓とはその移住姓氏であった入姓がなくなったことを意味する。したがって、高麗時代の太氏は牛峰、永順、通川（臨道）の3カ所を本貫としたことが明確であるが、朝鮮初期には永順太氏だけが本貫を保っていた。『大東韻府群玉』に永順太氏だけが紹介されているのもこのためである。

それにもかかわらず、今日、永順太氏と陝溪太氏が各々大金就と大集成を中興の祖とする太氏の二大姓氏を形成している。南原太氏も知られているが、朝鮮端宗代に咸鏡道吉州に配流された太孟礼を始祖とし、太集成の9世孫にあたる。したがって南原太氏は陝溪太氏から分家したことが分かる。本章では『世宗実録地理志』に記録のないその他の太氏と陝溪太氏を中心に検討する。

高麗末の恭愍王代に孝子として称えられ旌門を建てられた太成吉という人物がいた。『大東韻府群玉』は太成吉を鉄原人としている¹⁸。記載通りならば、高麗末に鉄原地域を本貫とした太氏が定着していたことになる。しかし、朝鮮時代には続かないようである。様々な姓氏関連資料でも確認されない。

一方、『新增東国輿地勝覧』によると、醴泉郡于余谷に太氏が居住していた¹⁹。『世宗実録地理志』には于余谷に関する記事がない。ただし、『慶尚道地理志』と『慶尚道続撰地理志』には尚州の任内に銀尺所とともに于余谷所の名がみられる。『世宗実録地理志』の咸昌県の項には越境処について尚州任内の銀尺所が現西村に位置すると説明している。したがって、銀尺所が尚州の任内として存在していたが、同地理志尚州牧条では省略されたことが分かる。そうすると、于余谷所もやはり尚州の任内として存在していたが、省略されたことは明確である。これを根拠にすると、後代の史料である『新增東国輿地勝覧』に醴泉于余谷とみえるのは、所が廃止され尚州から醴泉に移属した結果と判断される。これは朝鮮建国後、郷・所・部曲を持続的に廃止した時代的情況とも軌を一にする。

いずれにせよ、醴泉于余谷にも太氏が居住していたことを確認できる。『増補

18 『大東韻府群玉』(1589) 卷14・去声「泰—永順太氏」の条項。

19 『新增東国輿地勝覧』醴泉郡姓氏条。

文献備考』には永順、醴泉于爾 [余]、尚州を本貫とする太氏が記されていることから、永順太氏とは系譜を異にする宗族と推定される。

次に、陝溪太氏について検討しよう。『増補文献備考』や 1930 年に朝鮮総督府が実施した「国勢調査」には本貫を異にする計 23 の太氏が記載されているが、ここにさえもみられない。今日、陝溪太氏の門中では壬辰倭乱前から全羅道南原などの地に定着していたというが、本貫の陝溪がどこであるかさえ具体的でない。族譜では陝溪を忠清道沃川の古地名としている²⁰。大集成が蒙古軍を撃退した功で陝溪君に封じられたとあり、その墓所が沃川にあるということから、比較的信憑性があるとみられる。北朝鮮学界でも譜牒類にみられる沃川を本貫として認めている²¹。

君号を与えたとすると、慣例上県単位以上の行政区域を対象にしたということは疑う余地がない。しかし、沃川近隣に陝溪という地名があったという事実は確認されない。陝溪の場所を確定するために、まず大氏が居住した地域を検討すると、黄海道牛峰郡が非常に有力な候補になる。牛峰に居住した大氏が朝鮮初期にはすでに亡姓と表記されていた点は先にみた通りである。

問題は牛峰大氏がどこから来たのかという点である。顕宗代に侵入した契丹が捕虜とした渤海遺民を寧州と帰州にわけて編戸させているので²²、大光顕が最初に定着した白州を中心とした西北地域の渤海遺民はこの時期に崩壊したであろう。その結果、白州での本拠地を失った大氏が、隣の牛峰に生活の基盤を移したのではないかと思われる。白州にはこれ以降大氏が居住したという痕跡はみられないので、牛峰地域が大氏の活動舞台になったと考えられる²³。

このことを確認するため、大集成という人物を追跡する必要がある。牛峰は高麗後期に最大の門閥となった崔忠献家門が族勢を極めた地域であった。大集成の娘は崔忠献の息子の夫人であり、大集成は牛峰崔氏と密接な関係をもった人物である。したがって、大集成は牛峰出身である可能性が高い。牛峰郡出身の大集成が蒙古侵入の際に功をたてたわけであるが、牛峰崔氏の強大な勢力を考慮すると、大集成を牛峰君に封じる状況ではなかったであろう。そこで、牛峰郡に隣接する地域に陝溪というところがあり、大集成は陝溪君に封じられたと考えられる。大集成は陝溪地域の広大な土地を下賜されているので、牛峰に

²⁰ 本稿で利用した史料は 1997 年に刊行された『陝溪太氏族譜』丁丑譜である。ここには英祖期に筆写本として存在した旧譜と、その後数度刊行されたとみられる序文が収録されているが、これらを直接確認できなかった。しかし、丁丑譜に収録された初期族譜の序文が『永順太氏族譜』に掲載されたものと同じの内容であることが確認される。

²¹ 蔡泰亨「陝溪太氏族譜에 실린 渤海史關係 資料에 對하여」『渤海史研究論文集 (1)』社会科学院歴史研究所、1992。

²² 『遼史』卷 38・地理 2・東京道。

²³ 大光顕が最初に定着した場所が白州であることから、溟西地域を本貫とした太氏が生じ、『増補文献備考』にみえる黄海道平山、白川、牛峰太氏がまさにそれと関係するという研究がある。

居住していた大氏は陝溪に移住したのであろう。

然るに、大集成の一族は大集成の死後 16 年で没落してしまった。大集成の権力は崔忠献の代から始まり、崔瑀の時に絶頂を極め、その死後（1236）も大氏は崔瑀政権と密着していた。しかし、崔瑀の死後、庶子であった崔沆に権力が委譲される過程で熾烈な暗闘があり、大氏がこの事件に巻き込まれ、没落したのである。崔瑀の大氏夫人が崔沆の反対勢力についてのが原因である。この時に殺戮され、配流された大氏一族は 70 人余りで、南方に流された一族も半数以上が崔沆により殺された²⁴。

このようにみえてくると、権勢を振るった牛峰崔氏が崔氏政権崩壊後、その姿を消したように、牛峰大氏もやはりそれより早く歴史の舞台から消え去ったと推測される。すなわち、牛峰から陝溪に移住したが、10 年ほどで一族が死亡あるいは離散し、定着する時間的余裕もなく、その結果、牛峰大氏は朝鮮初期に亡姓と表記されざるを得なくなったのであろう。

ここで注意すべきことは、陝溪の行政区域についてである。朝鮮朝 1396 年（太祖 5）に峽溪と新恩を合わせて新恩県と改称し、1445 年（世宗 27）に二県の名称から各々一字をとる慣例に従い新溪郡に変更された。こうして、高麗時代に存在した陝溪県はその名を消すことになった²⁵。陝溪が新溪郡に変わったとすると、朝鮮前期の姓氏関連資料には新溪あるいは峽溪太氏と記されるはずである。しかし、これは氏族がその地域の在地勢力として活動した場合に該当する。陝溪に定着した大集成の後裔はすでに南方に配流され散り散りになっていたのである。

このように陝溪太氏の本貫の把握を困難にした要因は、居住地の移動と廃県、そして代表勢力であった大集成とその後裔の没落などが重なったためである。北村秀人もやはり本貫を沃川ではなく黄海道陝溪と推定している。すなわち、崔沆の執権過程で敗北し、生き残った大氏が南方に流され、牛峰から北に若干離れた陝溪を本貫に定めたと推定しているのである²⁶。

しかし、大集成が陝溪君に封じられ、その一族が陝溪に移住した可能性を看過できない。陝溪に移住したと仮定することで、陝溪を本貫にした理由が合理的に説明できるのである。そして、南方に配流された大氏はその後「峽溪」を

²⁴ 『高麗史』卷 103・列伝 16・金慶孫伝、『高麗史』卷 129・列伝 42・叛逆 3・崔忠献附怡・沆伝。

²⁵ 『三国史記』と『高麗史』地理志によると、陝溪県はもと高句麗の大谷郡で、新羅の景德王代から檀溪県になり、高麗初頭に陝溪県になった。高麗の顕宗が谷州（谷山郡谷山面）の属県とし、後に監務を置き、朝鮮の太祖が二県を合併した。峽溪廃県は新溪県の南 30 里にあるとするので、『大東輿地図』を参照すると、現在の新溪郡多栗面三美里一帯と推定される。

²⁶ 北村秀人、前掲論文。

「陝溪」と表記したのではないかと考えられる。その時期は朝鮮後期の可能性が高い。一族を集め、族譜を編纂する過程で、主に湖南地域に定着した太氏が陝溪を本貫とし、太集成を中興の祖とした可能性が高いためである²⁷。

また、崔沆により南方に配流されたという大氏は、全羅道だけでなく慶尚道地域にも分散して移住させられたと推定されるが、この時の対象地域が郷・所・部曲であったのだろう。先の18番の史料でみた慶尚道金州の大氏弾圧事件はこれとの関連性が高い。大集成の後裔が中央の舞台で粛清されてから30年後のことだからである。金州はもと新羅良州の金海小京であったが、高麗の太祖が金海府に改編して以来、県と都護府など、数度の昇降があった。忠烈王も県に格下げしたが再び金州牧に昇格させた。さきの事件はまさにこの時期に起こったものであった。

朝鮮時代以降、金海と呼ばれたが、『世宗実録地理志』の金海都護府姓氏条には大氏がみえない。ただし、後世の史料である『新增東国輿地勝覧』には金海大山に太氏がいたとある。朝鮮初期まで金海の任内として大山部曲が存在したが、『世宗実録地理志』にはその部曲の姓として田氏だけを記している²⁸。いずれにせよ金海に集団居住した大氏の後裔がのちの大山太氏に続くという推論は可能である。

以上、渤海滅亡後の大氏が、いくつかにわかれて高麗に流入し、牛峰、陝溪、永順、鉄原、大山（金海）、臨道（通川）、于余（醴泉）などに定着していったことを確認できた。これらが全て渤海王族であったと判断することはできないが²⁹、高麗が後三国を統一した地域に、広範囲に分布していたことは明らかであるといえよう。

IV. 尚州永順県の成立と永順太氏

高麗時代に多様な形で流入した渤海遺民大氏が、各々居住地を本貫として定着させようとしたはずであるが、朝鮮初期の全国的な姓氏調査から分かるように、本貫に根を下ろし定着したのは永順太氏が唯一である。『世宗実録地理志』では永順県について次のように説明している。

²⁷ 渤海王室につながる系譜をもつ永順太氏と陝溪太氏は、大金就と大集成を各々中興の祖としている。朝鮮後期になり永順太氏と陝溪太氏の族譜が編纂されているが、同一の序文が両者の族譜に掲載されるなど、信憑性に疑問が多い。

²⁸ 『世宗実録地理志』慶尚道金海都護府姓氏条、『新增東国輿地勝覧』慶尚道金海都護府姓氏条。

²⁹ 既往の研究成果によると、渤海遺民のなかで契丹と女真系統の人物も大氏の姓を使用したという。

永順県は世俗が伝えるに「もと本州北面の林下村であるが、高麗の時に村人の太氏の者が敵を捕らえた功をたてたので、その村を永順県とした。……永順の続姓は一つであるが、太である〔今、郷吏になった〕³⁰。

上の内容は『高麗史』地理志にも記載されたものであるが、ここでいう太氏がすなわち永順太氏であり、永順県と同時に成立したことが分かるだろう。通常、郡県単位でいくつかの姓氏が土姓として構成されているが、永順県を基盤とした姓氏は太氏のみが記録されているので、永順を本貫とする姓氏もまた1つだけである。それほど小さな県であったのである。尚州に隷属した林下村が永順県に昇格すると同時に、太氏が村姓から県姓に変わったのである。また、永順太氏の姓種を続姓としている。『世宗実録地理志』編纂時、姓氏の記録は関と古籍に従ったが、続姓は古籍にはなく、関に依拠して追加で記録した姓氏であった³¹。関とは地方官署から中央に報告する文書で³²、古籍は一種の姓氏台帳のようなものと推定される。

したがって、『世宗実録地理志』の編纂のために各地方官が関と古籍を参照して担当地域の姓氏を報告し、その時を基準に古籍に記録されなかった姓氏が続姓であった。すなわち、古くから伝わる古籍に記録がないので、各地方から中央に報告した文書である関から探して追記したのである。これに比べ土姓は古籍と関に記録された姓氏であり、郡県ごとの行政区域を基盤とした土姓が全国に散在していた。

高麗以降、国家的次元で姓と本貫を定めたが、人口増加と時代の流れにより新生村も生じたわけであった。この時、新生村落には主邑の土姓が移住して邑司を掌握し、あるいは土姓が存在せず続姓だけを置くところもあった。永順県も本来は尚州北面の林下村であったが、太氏が功をたて、属県に昇格したのである。昇格当時、主邑土姓の移住がなかったので、既に定着していた太氏を続姓に編制したのである。当時の尚州の構成をみると、邑治（内）と直村があり、これより離れた周辺の村と任内（管内）で形成されていたが、林下村は尚州周辺の村で、ここに村姓の太氏がいた。村姓の太氏は邑治の人吏姓、直村の百姓姓よりは格下であるが、林下村が永順県に昇格することで、その邑司を掌握する郷吏になり続姓と表記されたのである。これは林下村の村姓であった太氏の族勢を認めたためと思われる。

『世宗実録地理志』に基づく、永順県のように県以上の行政単位のなかで

³⁰ 『世宗実録地理志』慶尚道尚州牧条。

³¹ 『世宗実録地理志』京畿道楊根郡姓氏条。

³² 『経国大典』礼典・用文字式に、「中郷と地方の公文書は、同等以下には関を使用し、同等以上には牒呈を使用し、七品以下には帖を使用する」と規定されている。

土姓が存在せず続姓だけが存在するところもあるが³³、これらもやはり永順県と同じような事情によると考えられる。したがって、土姓が存在する主邑に比べ、本貫を備えた姓氏の形成が遅かったのは当然であるといえる。

高麗の地方行政体系をみると、地方の首領官が派遣された主邑の下の属県と郷・所・部曲などが任内を形成し隷属していた。おおよそ古代の城邑国家以来の国・城・村が合わさり独立した単位の行政区域になったが、主邑から遠く離れたところには村と属県および郷・所・部曲に整理された。ところで、林下村のような高麗時代の村は郷・所・部曲とは異なる性格を備えていた。村は独立した行政体系を整備しえなかったためである。邑には邑司、郷・所・部曲には郷・所・部曲司などの独立した行政体系を整備していたので、これを構成する姓団を有することができた。邑司を構成する郷吏の姓団がすなわち土姓だったのである³⁴。

これに対し、村の住民は郡県区画時に主邑の土姓構成員になることもあり、外村姓として残ることもあった。この時にはほぼ一村一姓団で参加するようになるが³⁵、尚州北面の林下村もやはり一姓団で、それがつまり太氏であり、林下村が永順県に昇格し、邑治の邑司を構成した姓団も太氏のほかにはいなかったのである。

県に昇格すると邑司を構成する郷吏集団が必要になるが、渤海遺民として林下村に定着した太氏は永順県の邑司を掌握した郷吏になり、続姓に編制されたのである。他県の数多くの続姓もまた列邑間の郷吏調整策で編制された姓氏であったという点を考え合わせると、永順太氏もやはり永順県の邑司を掌握するのが当然の結果であった。こうして「今、郷吏になった」と注記されたのである。したがって、渤海から移住してきた集団が、尚州の邑治から遠く離れた林下村に定着して村姓になり、やがて県に昇格して県姓に飛躍すると同時に、邑司を掌握した続姓になったことが分かる。

太斗南が撰した「太氏旧譜序」の末尾に「先代に県の衙前になったというが、高麗末期の風俗が退廃したのでこれを正そうと志願したのである」とみえるのは、まさに上のことを述べたものである。おおよそ家門の先代をさかのぼると、高麗の郷吏である。朝鮮時代に入り持続的な郷吏抑圧策によりその地位が劣悪になると、族譜編纂時に「不服臣であったので郷吏に転落した」といった弁明を並べる場合が多いが、永順太氏の族譜もやはりそのような例に該当するものとみられる。

³³ 例えば、安東の属県である柰城県、春陽県、才山県などである。

³⁴ 李樹健『韓国中世社会史研究』一潮閣、1984；李樹健『朝鮮時代 地方行政史』民音社、1989。

³⁵ 例えば、盈徳県には尹・趙・鄭・朱の4村姓が存在していたが、金津村(尹)、古等村(趙)、八谷村(鄭)、上樹介村(朱)の4村が盈徳になり、自然と盈徳の村姓に編制された。

ここまで『世宗実録地理志』の記載内容を検討してきたが、尚州の林下村が永順県にいつ昇格し、その功をたてた者が誰であるかについては言及する機会をもてなかった。『高麗史』でも『世宗実録地理志』と同一の内容、すなわち太氏が功をたて、林下村が永順県に昇格したという事実だけが記されており、「捕賊有功」を「捕賊立功」と表現をかえている程度である。『世宗実録地理志』では永順太氏を続姓に分類しているので、永順県に昇格した時期は高麗後期であると推定される。続姓は列邑間の郷吏調整策により現れたもので、おおよそ高麗後期にその多くが形成されている。

『高麗史』高宗 40 年（1253）に、「校尉大金就が牛峯別抄 30 余人を率いて金郊・興安の間で蒙古兵と戦って首級をあげ、馬・弓・戦具などを奪った」という記録がある³⁶。また、元宗即位年（1259）の記事には「蒙古兵が松島に攻め入り康安殿の守者を駆掠するので、別将大金就が撃走させ捕虜を引き連れ帰ってきた」とある³⁷。

上の 2 つの記事にみえる大金就が族譜でいう永順太氏中興の祖にほかならない。したがって、林下村から永順県に昇格させる功をたてた人物は大金就であるという推測が可能である。しかし、永順県昇格と関連した人物に直接触れた史書はない。編纂年代が最も早い『高麗史』地理志や『世宗実録』地理志には「世に伝わるところによると」という表現で林下村にいた太氏が敵を捕らえて功をたてたという記録を載せているだけである。

そうすると、林下村で功をたてた人物が果たして大金就と結びつくのかという問題が提起される。上で提示した大金就の 2 つの記事は、校尉・別将という具体的な官職と、開京と金郊で功をたてた細かい事実まで記録している。この点を考え合わせると、『高麗史』の「林下村が永順県に昇格した」という事実が大金就と関連したものであるなら、やはりこのことが具体的に記録されていたであろう。

このような点を考慮すると、林下村で功をたてた太氏は大金就でない可能性も高い。特に『高麗史』や『世宗実録』より後代の史料には太集成を永順太氏の始祖としている。これに関する最初の記録は『大東韻府群玉』である。もちろんここでも「太集成が大將軍になったが、太氏の始まりはここにあるのではないかと思われる」³⁸という表現で疑問の余地を残している。この書は権文海が 1589 年に全 20 巻で編纂を完了したが、壬辰倭乱の影響でその後に刊行され。跋文は金応祖（1587～1667）が撰した。金応祖は「太斗南墓碣銘」を撰した人物

³⁶ 『高麗史』巻 24・世家 24・高宗 40 年（1253）8 月癸丑条。

³⁷ 『高麗史』巻 25・世家 25・元宗即位年（1259）12 月庚戌条。

³⁸ 『大東韻府群玉』（1589）巻 14・去声「泰—永順太氏」の条項。「太集成為大將軍太之源疑出於此」。

でもある。そのためかは分からないが、太斗南（1486～1536）の墓碣銘にも太集成を永順太氏の始祖と記している。これがもとになり、以降に編纂された『増補文献備考』（1908）、『典故大方』（1924）、『朝鮮名臣録』（1925）、『朝鮮氏族通譜』（1924）では疑問を省略したまま太集成を永順太氏の始祖と記している。ただし、『渤海国志長編』（1935）には「(太) 金就は高麗の高宗代に大將軍になり、蒙古と戦った功で永順君に封じられ、永順大氏の始祖になり、その後裔が永順太氏と改めて称した」とあり、永順太氏の譜牒類に載せられた内容を紹介している。

このように永順太氏の始祖については疑問点が多く、より慎重なアプローチが必要である。譜牒類の記録のなかで最も先行するものが、太斗南が撰したといわれる「太氏旧譜序」である。ここには林下村が永順県に昇格するうえで功をたてた者が太金就であり、太金就が永順君に封じられたという内容がみえる。太斗南は中宗代の人物である。したがって、「太氏旧譜序」は後代の族譜ではなく、派系図・世系図・家牒・草譜のような種類、もしくは後代に追記された序文なのであろう。永順太氏の族譜に依拠した関連史料（史料①②④）と太斗南墓碣銘（史料③）をもとに議論をもう少し進めてみよう。

- ① 高宗朝太金就太集成爲大將 而金就伐蒙古有功 以功封爲永順君（所居林下村 陞爲永順縣）（「旧譜序」西庵太斗南撰）³⁹
- ② 而至高宗大王之世 有金就集成 而能討伐蒙古 斯樹不世之功 以功陞所居林下村爲 永順縣 永順太氏之籍 自此始矣（『甲子譜』（1624、仁祖2）「序」 松巖太厚先撰）⁴⁰
- ③ 太之氏於永順 以高麗後軍將軍諱集成（金就一譜牒類） 討賊有功封焉 其先古渤海國王 太祚榮之後（「太斗南墓碣銘」金応祖撰）⁴¹
- ④ 高麗時 有後軍將軍 一缺一 伐蒙古有功 封永順君 自後太氏 一缺一 方者 皆本永順 …… 高宗朝太金就 伐蒙古有功 後裔之在湖南者 或籍陝溪 即沃川地（「執義西庵公墓誌」（1640、仁祖18））⁴²

太斗南が撰したという旧譜序文（史料①）は、太金就が功をたてたことで林下村が県に昇格し、同時に太金就が永順君に封じられたことを明らかにしている。然るに、1世紀が過ぎた1624年（仁祖2）に編纂された甲子譜序文（史料②）では、永順県昇格と同時に永順太氏が始まったことを明らかにしつつも、

³⁹ 『永順太氏族譜一己巳譜』（純祖9年、1809）所収「旧譜序（西庵太斗南撰）」。

⁴⁰ 『永順太氏族譜一己巳譜』（純祖9年、1809）所収「甲子譜序（松巖太厚先撰）」（1624、仁祖2）。

⁴¹ 『国朝人物考』巻26・名流「太斗南墓碣銘（金応祖撰）」。

⁴² 『永順太氏族譜一己巳譜』（純祖9年、1809）所収「執義西庵公墓誌」（1640、仁祖18）。

その始祖については明確な立場をとっていない。

一方で、これと近い、あるいは少し遅れた時期に金応祖（1587～1667）が撰した太斗南墓碣銘（史料③）では太集成を始祖としている。これは正祖代に編纂された『国朝人物考』に記載された内容である。そして、族譜に記された太斗南墓誌（史料④）は、人名（太集成あるいは太金就）が入るべき部分が「缺」となっている。この史料が、墓碣銘に近い時期に作成されたと推定すると、墓誌の原本にも太集成と記されていた可能性が高い。すなわち、族譜の編纂過程で太集成と記すべき部分を故意に「缺」とした可能性を否定できない。

いずれにせよ、族譜編纂以前には永順太氏と太金就が直接結びつく証拠がない。おおよそ家牒や世系図といった伝来した記録をもとに族譜を編纂する。それさえもない場合は『高麗史』をはじめとしたそれ以前の記録を参考にせざるをえない。永順太氏もやはり族譜編纂の初期段階には太金就との直接的な関連性にふれられず、年月が経ち中興の祖までその淵源をさかのぼらせる必要性が生じ、そこで『高麗史』に依拠して太金就を中興の祖に結びつけたのではないかと思われる。一般的に仁祖代以前に刊行された族譜は非常に少ないが、事実そのものを記載することに努めている。しかし、後代になるほど世系をさかのぼらせ、名高い祖先を求める傾向から、人為的に名の知れた人物に結びつけることが多い⁴³。太斗南の「太氏旧譜序」にある「太金就が蒙古との戦争で功があり、永順君に封じられた。居住していた林下村が永順県に昇格した」という内容もやはり後代になり追記された可能性が高い。

これまで、永順太氏の始祖について検討してきたが、むしろ混乱を招いたようである。北村秀人もやはり太金就と永順太氏との関連性は低いと推定している。大集成と大金就がともに大光顕と直結する1次遺民として牛峰地域に居住したと判断されるのがその理由である⁴⁴。しかし、大金就が牛峰別抄を率いていたとしても、牛峰出身と断定する根拠にはならない。大金就が初めて功をたてた時期は1253年であるが、これは崔瑀夫人の大氏が崔沆に殺害され、牛峰大氏一族が大々的に粛清された2年後である。このような点を考慮するなら、大金就が牛峰に居住したとするには無理がある。牛峰大氏が粛清されて南方に流され、後に陝溪に本貫を改変した可能性についてはすでに述べた。このような状況を考え合わせると、渤海遺民と推定される大氏が牛峰と永順にそれぞれ定着したことは明らかであるといえよう。こうして後代の族譜編纂過程において、嶺南地域に籍を置いた者は永順、湖南地域に籍を置いた者は陝溪に分離したの

43 李樹健「朝鮮前期 姓貫体系와 族譜의 編纂体系」『韓国史学論叢—朴永錫華甲記念論叢』上、1992。

44 北村秀人「高麗時代の渤海系民大氏について」『三上次男博士喜寿記念論文集』3（歴史篇）、平凡社、1985。

である。

いずれにせよ、様々な歴史的状況から、永順太氏の始祖について判断を保留せざるをえない。しかし、渤海遺民として流入した太氏一族が尚州林下村に居住していた間に、誰かが功をたてて永順県に昇格し、それまでの村姓から県姓になると同時に永順県の邑司を構成する郷吏の姓団に指名され、続姓になったことだけは明らかであるといえよう。

我が姓氏の淵源はその姓氏の基盤となる行政区域とは不可分の関係にある。尚州の属県であった永順県は 22 戸 132 口⁴⁵にすぎない小さな県である。永順太氏は、高麗時代に林下村が永順県に昇格しなかったならば、尚州の外村姓だったであろう。しかし、県に昇格することで県姓になり、同時に永順邑司を掌握する郷吏姓団になったのである。

また、尚州の姓氏分布状況をみると、主邑の土姓が次第に属県や部曲のような周辺地域に移動していき、これら主邑の姓氏が周辺地域の邑司まで掌握した。朝鮮時代に郷・所・部曲が廃止され、任内姓が主邑姓氏に吸収されていったように、村姓も次第に独自性を喪失し、主邑名を本貫とする姓氏が増加した⁴⁶。尚州地域の任内姓と村姓も例外ではない。『世宗実録地理志』にみえる尚州外村姓の尹氏が坡平に本貫を移したことをはじめ、多くの姓氏が本貫を改変した。

これに対し、永順太氏は尚州北面の林下村の村姓であったが、林下村が永順県に昇格することで県姓に飛躍したという背景から、永順県の廃県後にも主邑の尚州を本貫にしなかった。15 世紀末から本貫が主邑中心に統合されていく傾向にあったが、それにもかかわらず任内姓から出発した家門が既存の本貫を変えずに使用される場合も多々あった⁴⁷。これはすでに名門になっていたので可能なことであった。非常に小規模であった永順県の太氏が廃県後に本貫を変えなかったのは、渤海王族の後裔という自負心と、すでに名のある家柄としての地位を固めていたという自尊心が作用したからであると考えられる。

V. おわりに

渤海王室の後裔と推定される大氏は朝鮮時代にはいり、おおよそ太氏と記録されている。「大」と「太」は通用する漢字でもあるが、朝鮮の世宗代を前後して太氏と呼ばれたとみられる。『高麗史』で大(太)氏の集団居住地が確認され

45 『慶尚道地理志』は 22 戸、男 132 口、女 141 口とする。

46 忠州池氏、忠州魚氏、延安車氏、黄州邊氏、驪陽陳氏、牙山蔣氏、盈徳鄭氏、盈徳尹氏などように、本来の本貫であった村名を捨て、所属主邑名を新たな本貫に改変したものが端的な例である。

47 長水黄氏(黄喜家門)、徳水李氏、潘南朴氏のほかにも、杞溪兪氏、海平尹氏、豊山柳氏などはすでに名門となっていたので本貫を変えなかった。

た地域は、黄海道牛峰、慶尚道永順（尚州）と大山（金海）である。そして『世宗実録地理志』各県の姓氏条で確認された地域は永順、牛峰、臨道（通川）の3カ所であるが、永順を除いて居住地を去り、亡姓となった姓氏であった。

すなわち、牛峰大氏は牛峰崔氏である崔忠献一族との婚姻により活躍し、力を発揮できたが、大集成の娘、大氏夫人（崔怡の後妻）が崔沆の執権過程で殺害され、その一族が南方に配流されたことで一族は滅んだ。こうして湖南地域に流された者が陝溪に本貫を変え、現在に至るものと推定される。臨道太氏は亡入姓・投化人と記録されているので、渤海滅亡後高麗に投降し、開拓地の通川に定着したが、朝鮮初期以前にこの地を去ったとみられる。

『世宗実録地理志』より50年ほど遅れて編纂された『新增東国輿地勝覧』では、大山（金海）、于余（醴泉）に太氏の居住が確認される。金海大山地域は『高麗史』に集団居住地として記録されており、于余太氏もやはり永順太氏とは系譜を異にし、尚州・醴泉一帯に居住したと考えられる。これら二地域が部曲と所であるという理由で、渤海系王族である大氏が差別されていたという見解もある。しかし、これは牛峰大氏が中央政界から追放され、南方に配流されたことを看過した結果、下された結論であると考えられる。

一方、永順太氏は唯一、『世宗実録地理志』で本貫を確認できる渤海系の後裔である。慶尚道尚州の外村である林下村で太氏が功をたて、永順県に昇格した結果、太氏は邑司を掌握するようになった。高麗以来、地方行政単位である郡県を維持するうえで必須の三大要素は行政区域・住民・郷吏であった。郷吏はそれほど重要な要素であるが、永順県の太氏が長吏を世襲し、邑司を掌握して住民をまとめていったのである。

このように、渤海系の永順太氏は比較的遅れて尚州永順県の土姓として成長し、朝鮮建国後も本貫地を中心に引き継がれていった。特に、永順県が廢県になっても永順太氏は本貫を変えなかった。廢県になった場合は、主県名に本貫を改変した事例が多いが、永順太氏はその本貫を守ったのである。計22戸にすぎない尚州属県の永順を依然として本貫としたのは、渤海王族という自負心と、すでに名のある家門に成長していた社会的地位などが考慮された結果と判断される。これは、牛峰太氏（陝溪太氏）とは異なり、急変する中央の政治舞台から一歩下がっていたために可能なことであった。名高い祖先を奉じることができなかつた姓氏が、名のある姓氏の本貫に改変していた時代的趨勢とも対比させるといえよう。

以上、検討してきたように、渤海王室の後裔と推定される大氏が、高麗国民として生きていくために、高麗式の姓貫体系に編入されることは当然のことであった。特に、この時期には国家が姓貫制度により人民を支配する方法が採用されていた。大氏は朝鮮朝以後、一時衰退の道を歩んだが、中宗代に太斗南が

要職に進出することで、家門を新たに興す契機になった。これに対し、牛峰太氏は高麗の崔忠献執権期に中央の政治勢力の一翼として力を発揮したが、その命脈を維持できなかった。これは、我が姓氏の絶え間ない成長と消滅過程において現れた1つの事例でもある。



中国の渤海史認識

鄭永振（延邊大學）

Journal of Northeast Asian History
volume 4, number 2 (Dec 2007) : 108-115

*Copyright © 2007 by Northeast Asian History Foundation. All Rights Reserved.
No portion of the contents may be reproduced in any form without
written permission of Northeast Asian History Foundation.*

中国の渤海史認識

鄭永振（延邊大學）

中国人として最初に渤海国に関する記録を残したのは、渤海に使節として渡った唐の張建章であり、『渤海国記』は張建章によって書かれたものである。しかし、残念ながら張建章の『渤海国記』は既に失われており、内容の一部が『新唐書・渤海伝』によって伝えられているとみている。1957年に、張建章の墓誌銘が北京徳勝門外で発見され、墓誌銘の記録から当時までは伝えられていたことが確認されたが、その後いつどのように失伝したのかは分かっておらず、張建章の渤海史認識がどのようなものであったのか定かではない。

中国の渤海史認識は、『旧唐書・渤海靺鞨伝』と『新唐書・渤海伝』に基づき展開されてきた。しかし、2つの歴史書は渤海史の性格を、それぞれ靺鞨的な要素と高句麗的な要素によって記録しており、異なった性格を見せている。また、その後の文献もこうした叙述を踏襲しており、新しい認識はあまり形成されていない。『唐会要』、『冊府元龜』、『五代会要』、『資治通鑑』などは前者を踏襲し、『玉海』、『文献通考』、『金史』などは後者を踏襲している。このような矛盾した記録によって渤海史に関する認識は、今日まで激しく対立してきた。

中国での渤海史研究は、19世紀末期に曹延杰、景方昶などが歴史地理考証をすることから始まった。しかし、より専門的な研究は20世紀に入り唐宴、黄維翰、金毓黻によって始められたといえるだろう。1919年に出版された唐宴の『渤海国誌』は、紀、誌、表、伝の4巻からなり、字数はおよそ3万字ほどになる。“紀”は“原始”、“紀年”、“後紀年”の3つの部分からなり、“原始”では渤海の先世すなわち肅慎、挹婁、勿吉、靺鞨について叙述しており、また“紀年”では13代の王に関し記述し、そして“後紀年”では渤海の子孫に関する叙述が見られる。“誌”は地理、職官、与服の3つの部分からなり、“表”は朝貢、征戦の2つの部分からなっている。最後に“伝”は同姓、異姓、子遺の3つの部分で構成されている。唐宴の渤海史認識は、“原始”部分の叙

述からも分かるように、渤海を靺鞨の歴史として認識している。黄維翰の『渤海国記』は1929年に完成し、その字数はおよそ7万字に上る。上、中、下の3編、16章で構成されている本書は、唐宴の著書と比較すると、中国の史料だけでなく朝鮮の史料や日本の史料を収集したという点で、その創造力と発明力がうかがえる。しかし、史料を引用するにあたり慎重な検証が行われておらず、そこには少なからず誤りがあると言わざるを得ない。金毓黻の『渤海国誌長編』は、唐宴の体系と黄維翰の長所を取り入れ完成した、渤海文献史料研究の集大成といえる。本書は1934年に発表され全20巻からなり、字数は44万字に上る。また、本書で引用されている書籍は130種類余りに達する。本書の特徴は、中国だけでなく朝鮮や日本の渤海史関連記録をほぼ全て収録すると共に、これを体系的に分類し詳細な考証を行っている点にあり、文献史研究においては渤海史研究の最高権威といえ、現在でも渤海史研究者にとって無くてはならない重要な参考書籍となっている。金毓黻の渤海史認識は非常に鮮明である。彼は、渤海史を中国の東北地方史の一部分と位置づけており、また日本の中国東北侵略を反対する立場から、東北地方は遥か昔から中国の領土であったと説明し、渤海史が中国史であることを学問的に究明しようとした。

日本が、中国東北を占領すると同時に行った中国の渤海遺跡における調査や発掘は、主に上京城の発掘を断行したものであった。1933年から始まった発掘は、日本の東亜考古学会発掘隊の名義で行われ、上京城の主要な宮殿跡を全て発掘し、その発掘の成果として『東京城』を発行した。上京城の発掘に続いて行われた延辺地域の調査・発掘では、主に和龍西古城、琿春八連城とその付近の古墳において調査・発掘が進められ、その成果としては『間島省考迹調査報告』などがある。中国はこの時期の発掘の性格を、略奪と盗掘と規定し批判しており、その後、再調査と発掘を繰り返し行った。

中国で本格的に渤海史研究が始まったのは、中華人民共和国が成立した頃からである。1949年の延辺大学歴史学科による敦化六頂山の貞恵公主墓発掘は、中国学会の渤海史研究に新たな契機をもたらすこととなった。貞恵公主墓が発掘された後、1951年に閻万章先生が貞恵公主墓誌銘に注目し、1954年から研究を始め1956年に『渤海“貞恵公主墓碑”研究』という論文を発表したが、その内容は主に3つの考証で構成されている。一つには、“大興宝歴孝感□□□法大王”は渤海の第3代王文王大欽茂が生前に使用した尊号であり、貞恵公主は大欽茂の次女という点である。二つには、“大興、宝歴”は文王大欽茂の代に使用された2つの年号であるという点である。三つには、文王大欽茂の晩年においても依然として“大興”という年号が使用されていたという点である。渤海史研究の大家である金毓黻先生も『关于“渤海貞恵公主墓碑研究”的補充』という論文を発表し、閻万章先生の研究結果を肯定すると共に高く評価した。

また、貞恵公主墓誌銘が提示する新たな資料に基づき、渤海創始期の首都に関する問題、渤海国の政治制度に関する問題、渤海人の文学芸術造詣に関する問題などを補充した。さらに、敦化六頂山古墳群を渤海国の王族の古墳群と判断し、中央政府に対し古墳群の保存重視を主張すると共に、中国科学院考古研究所で計画的に発掘することを提起した。金先生のこうした助言を受け、国務院は1961年に六頂山古墳を国家級重点文物保護単位に指定した。

1949年の発掘後、1953年から1959年までの間に吉林省博物館などの機関によって、六頂山古墳群の調査や発掘が繰り返され、六頂山古墳群は第1墓区と第2墓区に分けられた。第1墓区では30基余りの古墳が発見され、そのうち12基が発掘されている。また、第2墓区においては50基余りの古墳が発見された。1964年には、中国科学院考古研究所と朝鮮社会科学院により、六頂山古墳群と渤海上京遺跡において大規模な共同発掘が行われ、重大な成果を上げた。この時期、黒龍江省でも牡丹江流域で考古学調査を実施し、渤海時期の古墳の一部を調査・発掘した。1966年から始まった10年間にわたる“文化大革命”は、中国の歴史においては悲惨な時期であったといえる。この時期、中国ではその如何なる学術活動も許されず、渤海研究もまた例外ではなかった。こうした理由から、1966年に朝鮮では単独でこの時期の発掘資料を発表し、朱榮憲氏が『渤海文化』を編纂するにあたり発掘成果を活用したが、中国では1997年になりようやく『六頂山と渤海鎮』という発掘報告書を正式発表するに至った。“文化大革命”時期の厳しい状況の中、吉林省では和龍八家子鎮河南屯において夫婦合葬墓を発掘し、また北大古墳群においては54基の古墳を発掘した。さらに、黒龍江省では海林山阻子において21基の古墳を発掘すると共に、東寧大城子古城に対する調査を実施し、渤海村落の遺跡を発掘した。特に、1977年に東寧團結村で渤海時期の平民の村落遺跡が初めて発掘されたことは、重大な成果であると共に渤海村落遺跡の分類に大きく寄与したといえる。

中国では、1980年から改革解放政策により全ての学問分野の研究が新たに始められ、渤海研究も活発化した。1980年に延辺博物館により、和龍県龍水郷龍海村の龍頭山で貞孝公主墓が発掘され、その墓内から墓誌銘と壁画が発見されたことは、渤海考古学における重大な成果であった。この発掘により渤海史研究は好況期に入り、研究成果も急増した。この時期、黒龍江省では『黒龍江文物叢刊』（後に北方文物に改称）、吉林省では『博物館研究』、遼寧省では『遼海文物学刊』（1990年代以降停刊）などの学術誌が発行されたことで、渤海史を含め歴史文物に関する学術論文の発表が可能となり、大学や社会科学院の学術誌でも渤海史関連論文が発表されるようになった。また渤海国の解説書として『渤海国史概要』、『渤海簡史』、『渤海史稿』、『渤海国』、『渤海史入門』などが出版されると共に、渤海の歴史と考古学を扱った論文も数多く

発表され、様々な面から渤海史を究明しようという努力がなされていたことが分かる。同時に、国内外では様々な学術討論会が開催され、渤海史の熱点問題をめぐり激しい論争が繰り広げられる中で、中国の立場も確立されていった。さらに、この時期には新しく研究機関も発足した。各省の考古研究所では考古学的な発掘を主管し、大学と社会科学院の傘下には専門的な渤海史研究員または研究機構を設置した。この典型的な例が延辺大学の渤海史研究所である。延辺大学の渤海史研究所は1990年に設立されて以来、渤海史研究専門機関として渤海史の研究に専念し『渤海史研究』叢書を刊行した。これまでに10巻が編纂され20巻余りの著作を出版するなど、渤海史研究に大きく寄与してきた。1980年代以降、黒龍江省や吉林省では渤海古墳や城跡の調査、発掘を実施し、目を見張る成果を上げている。吉林省は、5年という歳月を費やし47県の文物誌を発行すると共に、数百基もの古墳を発掘し、渤海史研究に新たな資料を提供した。また、黒龍江省による上京城の発掘では、非常に重大な発見と収穫があった。1988年に発掘された和龍北大古墳では、渤海時代の三彩土器が初めて完全な形で発見され、学会の注目を集めた。この三彩土器は、鑑定により渤海で焼かれた物であることが確認されたという点で、一層その意味は大きい。

20世紀の90年代初めから、黒龍江省は三陵屯付近における調査と発掘を行い、新たな成果を上げている。特に、三陵屯2号墳からは新たに壁画が発見されると共に、何基もの王陵級の古墳が確認されている。また、虹鱒魚場では300基余りの古墳が発掘され、そこからは何千点にも及ぶ遺物が発見されている。発掘された古墳の数だけでなく出土した遺物の数も多く、これは渤海古墳の発掘においては前例のないことである。しかし、発掘後10数年が過ぎた今も、報告書が刊行されていないことは、非常に残念なことである。1990年に延辺博物館により、東清において渤海初期の古墳の発掘が行われたことは、六頂山古墳群と渤海初期の文化を解明する上で、大きな意義があるといえる。東清古墳群には石室封土墳、石槨封土墳、土坑墓、階段式積石塚といった様々な形式の古墳が併存しており、特に階段式積石塚は新たに確認された渤海古墳の形式で、渤海文化と高句麗文化の関係を究明するにあたり、新たな資料を提示するものである。東清古墳群からは、高句麗と靺鞨の影響を全て確認することができる。古墳の構造や武器類には高句麗文化の影響が強く現れている半面、土器には靺鞨の影響が強く反映されており、渤海の建国集団を究明する上で、大きな意義を持っているといえる。渤海遺跡を世界文化遺産として登録するために、黒龍江省は渤海上京遺跡と山陵屯渤海王陵で調査と発掘を行い、吉林省は和龍西古城、琿春八連城、龍頭山古墳群、六頂山古墳群で大規模な発掘を実施した。去年までに基本的には発掘を終えており、2008年の申請に向け補修作業と報告書の作成作業を進めている。今回の発掘で得た新たな成果は、報告書の発表や

今後の渤海史研究において新たな契機となるであろう。2002年から始まった“東北工程”では、渤海史も重要な研究分野の一つとして選定され、『渤海国史』、『渤海史論』、『渤海移民的治理与帰属研究』、『靺鞨、渤海与東北亜各国、各族関係史研究』、『渤海遺跡現状調研』、『渤海族族源与流向研究』、『渤海国帰属問題研究』、『国外渤海史研究論著翻訳』などを研究テーマとして採択し、既に研究を終えた課題もあるが、現在研究が進められているものもある。

中国では、渤海史研究を四度の高潮期に分ける傾向がある。一次高潮期においては、20世紀の20～30年代の唐宴、黄維翰、金毓黻による『渤海国誌』、『渤海国記』、『渤海国誌長編』の3部が代表的な著作であるといえる。また、二次高潮期は貞恵公主墓の発掘・研究から1964年の上京城発掘までの時期であり、この二度の発掘における代表的な人物は金毓黻である。そして、三次高潮期は貞孝公主墓の発掘から20世紀の90年代半ばまでであり、この時期の代表的な人物は王承礼である。最後に、四次高潮期は20世紀末から現在までであり、若い世代が渤海史研究を主導する時期といえる。しかし、渤海史研究において世代交代が成功したとは言い難い。渤海史研究に従事する若い世代の研究者が、それほど多くないというのがその理由である。

中国では、渤海は中国の唐王朝の管轄下に置かれた少数民族の地方政権であり、中国史の一部であるという原則的な認識に基づき渤海史を研究している。こうした主張の根拠は、次の通りである。

一つ、渤海は靺鞨族によって建国され、また靺鞨族は中国内の固有民族であるという点である。中国の研究者は、『旧唐書・渤海靺鞨伝』にある“渤海靺鞨の大祚栄は、本来高麗の別種である（渤海靺鞨大祚栄者、本高麗別種也）”という記録と、『旧唐書・渤海伝』にある“渤海は本来粟末靺鞨であり、高麗に隷属された者で、姓は大氏である（渤海、本粟末靺鞨、附高麗者、姓大氏）”という記録は、高句麗系の要素と靺鞨系の要素といった二面性を持つ矛盾した記録ではなく、『旧唐書』の曖昧な記録を『新唐書』が確かな形で表現したものであると解釈している。また、“別種”というのは必ずしも血縁関係がなければならぬというわけではなく、一時期統治されていた時にも使用された用語であり、すなわち『旧唐書』がそれにあたるとし、靺鞨が渤海を建立した点を強調すると共に、渤海史が中国史であると主張している。特に、大祚栄の出自に関する論述において彼が靺鞨族であることを強調し、“高麗旧将”という記録に疑問を提起する者もいる。中国の渤海史関連論文は、その大半がこうした性向を見せており、主題の異なる論文であっても、その冒頭では必ずこれを強調し、本文へと展開していることから、この点を非常に重要視しているのが分かる。一部の論文では、靺鞨族を中心とし高句麗の遺民も建国に参加

したと指摘しているが、多くの論文は高句麗遺民の参与に関しては全く言及していない。従って、渤海国の建国過程を叙述するにあたっては、渤海の建国と何ら関係の無い肅慎、挹婁、勿吉について記述し、これら部族は周の時代から中国の古代民族として中華民族の重要な構成要素であったとし、靺鞨族の建てた渤海は中国の少数民族による地方政権であり、よって中国史の一部であると主張するのである。

二つ、渤海が唐から冊封を受け官職を下賜され、唐に朝貢したという点である。渤海は第1代王の大祚栄から始まり、歴代の全ての王が唐から冊封を受け忽汗州都督、左饒衛大將軍、銀青光祿大夫、檢校秘書監などに任命された。唐の官職である郡王は開府義国三司、太子太師、太子太傅、太子太保、驃騎大將軍、嗣王、国公などと同級の従1品官であり、また国王は太師、太傅、太保、太尉、司徒、司空などと同級の正1品官である。そして、左饒衛大將軍と都督は正3品官である。つまり、渤海国王は名義上は国王であるが、事実上は唐が任命した地方官吏であったということである。渤海は、唐から冊封されただけでなく唐に対し朝貢も行っていたが、このように冊封され朝貢した事実は、地方政権である渤海が中原の唐に隷属していたことを示す十分な証拠であると主張している。

三つ、渤海は唐の管轄下にあり、その領域は唐の行政区域であったという点である。渤海は唐から冊封され朝貢しただけでなく、その領域には唐の地方行政機構である忽汗州が設置され、唐による統治を受けていたことから、渤海は唐の一つの行政区域に属していたといえる。唐の玄宗は、713年に大祚栄を渤海郡王に冊封し、渤海に唐の州級にあたる忽汗州を設置すると共に忽汗州都督に任命し、後に府級である渤海都督府に昇級させ統治させた。唐の太宗の時には全国を10の道に分けたが、玄宗の代になってからはこれを15道とし、そのうち河北道には郡、県、都督府、都護府が置かれた。東北地域の榮州都督府、幽州都督府は河北道の管轄下にあり、渤海国（渤海都督府）は初めは榮州都督府の管轄下にあったが、後に幽州都督府の管轄下に置かれることとなった。西暦740年以降、渤海は平盧軍節度使の管轄下に置かれ、また安史の乱以降は、渤海が唐に通じる道を契丹と河北の割拠勢力によって遮断されると、唐は山東の淄青平盧節度使に専門官吏を配置し渤海の事務を管理させた。こうした事実を根拠に、渤海は終始唐の中央政権の管轄下にあり、唐の一つの地方行政単位であったと主張するのである。

四つ、渤海の官吏は唐から任命され、また渤海国王の息子と貴族たちは、唐で官職に就いていたという点である。通常、唐は渤海の官吏を任命し官服を与えたが、任命した武官は正3品から従6品の左武衛大將軍、左領軍衛大將軍、右衛將軍、中郎將、郎將、折沖都尉、果毅都尉、遊擊將軍などであり、また文官

は正3品から従8品の檢校工部尚書、太子詹事、光祿卿、太子右贊善大夫、上階太子洗馬、上階太子舎子、上階右神武軍長史、右饒衛長史、上階大理評事であるが、その中でも折沖都尉と果毅都尉が最も多く、官服は金魚袋（2品以上）、紫袍金帯、緋袍銀帯（5品以下）などであった。同時に、渤海国王の息子や貴族の息子たちは、皆唐で官職に就いており、このように唐が渤海の官吏を任命し、渤海人が唐で官職を任された事実は、唐と渤海地方政權の隸属關係を説明するものであると主張している。

五つ、渤海国地域は昔から中国の領土に属していたという点である。歴史上、漢族が中原地域に建立した中央王朝と、辺境地区の少数民族が建立した地方政權は、全て中国の政權であるといえる。従って、漢族が中原地区に建立した中央王朝の領土と、辺境の少数民族が建立した政權の領土は、全て中国の領土であるといえる。すなわち、中央王朝の領域と辺境の地方政權の領域は、共に中国の領域を形成するものなのである。渤海の領域とその境内に設置された行政区画から見ても、渤海の領域は肅慎の故地であると共に古代中国の領土であり、また唐の時代における渤海国の領域は古代肅慎族の故地であるため、この地域は周の時代から周の管轄下に置かれていた領土であることが分かる。

六つ、唐の文化が広範囲にわたり渤海に浸透し、渤海は中原文化をあらゆる面で吸収したという点である。渤海は、ほぼ全ての面で唐文化を取り入れたため、儒教思想、中央統治制度、地方統治制度、軍事制度、文学、芸術、文字などは中原のそれと同様の様相を成している。渤海文化の性格を論じるにあたり、中原文化との一致に焦点を合わせ、渤海文化と中原文化の同一な部分のみを選び比較していることから、渤海文化を把握する上で限界があると言わざるを得ない。さらに、渤海の古墳の形式において、絶対的多数を占めている石室封土墳の構造が、高句麗の石室封土墳と同様なものにもかかわらず、靺鞨の土墳が発展したものであると主張している。中国は、渤海文化の独立性をほとんど認めておらず、渤海文化は靺鞨文化を中心に漢文化を取り入れて形成された“海東文化”であるとし、一方では渤海文化は唐文化であるとも言われ、さらに渤海国文化の主体は靺鞨文化であり、渤海族文化の主体は漢文化であるという矛盾した説を唱える者もいる。

七つ、渤海遺民の多くが中国の漢族に融合され、中華民族の一員になったという点である。中国の研究者たちは、渤海国が最も盛んであった時の人口を300万前後と推測しているが、渤海国が滅亡した後の遺民たちの移動を見ると、朝鮮半島の高麗に移動した者は十数万人から多くても20万人を超えない。また、契丹によって強制的に遼東地区へ移住させられた人口は約190万人であり、その場に残った約60万人のうち一部が中国の中原に移住した。そして、高麗に亡命し現在の朝鮮民族になった渤海人は渤海総人口の7%に過ぎず、他は全て現

在の漢族に同化した。このような遺民たちの流向からも、渤海史は中国の歴史であるといえる。

以上のような理由以外にも、渤海史が中国史であることを主張する根拠はいろいろあるが、上記の7つを主要な根拠としていることは間違いない。中国のこうした認識は、民族理論、領域理論、帰属理論を原則として歴史の帰属問題を解決しようとするものである。民族理論は、中国の民族は漢族をはじめ56の民族により“中華民族”を形成しており、自古から統一された多民族国家であるというものだ。中国は中華民族を構成する様々な民族が共同で建立した国であり、中華民族の様々な民族人民たちの先祖は皆中国の歴史上の成員である。よって、各民族の歴史は全て中国史の一部であり、各民族が建立した政権は全て中国の政権であるとしている。領域理論は、現在様々な主張があり完全な意見の合意は成されていないが、現在の中華人民共和国の領土において発生した古代民族の活動を、中国の歴史と見なすという見解が優勢である。この見解は、渤海は終始現在の中国の境内を主な活動舞台としていたため、当然中国史と見なさなければならないというものである。また、歴史上の浮動の時期に形成された統一的な多民族国家の領域を、歴史上中国の領域内に位置づけなければならないという主張も提起されており、渤海史の帰属を判断するにあたりこの論理を積極的に主張している。帰属理論は、中国の中原政権から冊封され朝貢したということは、その政権が地方政権であることを意味し、古代東アジアにおいて流行した国際秩序維持のための冊封・朝貢関係ではないというものである。こうした認識の違いは、周辺国家の歴史認識と激しく対立する主な原因となっている。



日本における渤海認識の変遷

濱田 耕策 (九州大学)

Journal of Northeast Asian History
volume 4, number 2 (Dec 2007) : 118-128

*Copyright © 2007 by Northeast Asian History Foundation. All Rights Reserved.
No portion of the contents may be reproduced in any form without
written permission of Northeast Asian History Foundation.*

日本における渤海認識の変遷

濱田 耕策 (九州大学)

一、はじめに

初の渤海国の使者が日本に到着したのは727年9月のことであった。それは大祚榮が698年に渤海を建国してから30年近くを経ている。大祚榮が713年に忽汗州都督渤海郡王に冊封され、719年には前年に死去した大祚榮の後を継いだ子の大武芸が同じく忽汗州都督渤海郡王と冊封されていた。大武芸はその治績を『新唐書』渤海伝が「斥大土宇、東北諸夷畏臣之」と評価したように、対外積極策を展開している。それは建国後の王権の安定を図ることであったが、日本との交渉の開始は渤海がその北と南に接する黒水靺鞨と新羅とを牽制する狙いから発していた。

かくて、渤海国の対日交渉は、王権の安定と東アジアの国際関係の推移のなかであって、交易と文化交流の性格を次第に表面に打ち出しながらも、919年に若狭に到着した裴璆らの使節を最後に終了した。ここに至る32回の渤海から日本へ派遣された使節と、また、日本からはその答礼使を渤海に送り、或いは渤海経由で派遣した遣唐使などを含めて14度の遣渤海使が派遣されている。

こうした相互の使節の往来は渤海の日本認識を、また日本の渤海認識を育んだのである。この同時代の相互認識は今日では主として日本の史料に依って解釈せざるを得ない。日本では渤海国との交流の歴史は後世にも回顧され、渤海認識は変容しつつ再生産されて今日の認識に至っているのである。

本稿では、日本における同時代の渤海認識とその後の変容とに分かって概観するものである。

二、日渤海交渉の3区分

筆者は先に渤海が日本に使節を派遣し、日本がこれを迎接し、また日本から使節を渤海に派遣した歴史を大きく前後の2期に区分し、さらにその前期を2期に区分、即ち、全3期に区分して、各期の性格を論じたことがあった(1)。

その3区分とは、727年9月に出羽に漂着した高仁義ら16人の使者は大武芸が派遣した渤海最初の遣日本使であったが、これから759年10月に日本の遣唐使であった藤原河清を迎えに渤海に来た内蔵全成を日本に送還した高南申までの5回の遣日本使が第1期である。ついで、762年10月に日本の遣渤海副使であった伊吉益麻呂等を日本に送った王新福から810年7月に第7代国王の大元瑜が派遣した2度目の渡日となる高南容までの10回の遣日本使が第2期である。

さて、この第1・2期は後述するように共通した特質を有する。そして第3期はその特質を異にするのである。第3期は814年9月に出雲に到着した王孝廉から919年11月に若狭に到着した裴璆までの17回の遣日本使である。

第1・2期、即ち、前期は渤海が政治課題に重点を置いて日本に遣使したのであり、それ故に、使者は日本からは送使に伴われて、或いは、日本の遣渤海使とともに渤海に帰国したのであった。しかし、第3期では渤海の遣日本使は「商旅」の性格が濃く現れており、日本からはいかなる送使も渤海には派遣されなかった。

また、第1・2期の渤海の遣日本使は9月中か、それ以前の月に日本へ、なかでも出羽、越前、能登など平安京の北西北方の海港に着岸し、また、第2期では第1期の渤海大使が武散官を帯びていたことに反して、文散官を帯びていたことである。

さらに、この前期の遣日本使の特質に対して、第3期の遣日本使は第2期の大使が文散官を帯びていたことを継承しながらも、一行は65人の「首領」を含んでほぼ105人を定員として構成されていた。「首領」は着岸地や安置の土地や平安京において交易を行っており、また、11月や12月に日本に到着し、着岸地は前期のそれに比べると、西よりの西北西方の但見、伯耆、出雲、隠岐、長門等の海港に到着するという差異を表している。

こうした渤海の遣日本使の特質の変化は、渤海の政治と社会、そして国際関係の変化とそれに連動する渤海の日本認識の変化が、その根底にあると考えなければならないが、また、そのことは必然的に日本における渤海認識にも変化を産み出したものと予測される。

三、「六国史」と『類聚国史』の渤海認識

そこで、この3期の区分に従って、渤海の対日本観に留意しつつ、日本古代における基本的な渤海認識をここでは概観しよう。

668年、高句麗が唐と新羅の挟撃を受けて滅亡すると、日本に流入する高句麗人も少なくなかった。716年5月（靈龜2年）には駿河、甲斐、相模、上総、下総、常陸、下野の7国に居住する「高麗人千七百九十九人」を武蔵に移して「高麗郡」を設置したように、日本では亡国たる「高句麗」の記憶は当時では現存のものであったに違いない。こうしたなかで、727年に出羽に初の渤海使者が到着したことが平城京に知らされた。

この時の大使の高仁義らは着岸地の蝦夷で殺害されたが、首領の高齊徳ら8人が将来した大武芸の国書は、渤海が「高麗之旧居」を復活し、「扶餘之遺俗」を保有していることを説明しており、また「聘隣」を求める使節の派遣であることも日本側に伝えていた。そこで、聖武天皇は大武芸に璽書を送って、渤海が高句麗の「旧壤」を「恢復」したことを嘉した。

この初めてとなる渤海使者の属性とその国書の情報は、その後の日本の渤海認識を決定したと言える。それは、石井正敏氏が説くように（2）、渤海使者の来日とその外交形式と、そして大武芸の国書に言う渤海の建国事情とは、日本側に滅亡した高句麗と日本との朝貢関係を復活させるものと認識させたのである。日本からすれば、律令国家の体制を歩み出した時代に、日本に朝貢する国家と認識されていた亡国の高句麗に変わって渤海が新たに朝貢国として登場したと認識されたのである。そのことは初回の渤海国の使節を渤海に送った引田朝臣虫麻呂らが730年8月に渤海から帰国するや、大武芸から受領した信物を6ヶ所の山陵や諸国の神社に奉納したことに現れている。

大武芸が国書のなかで表現した“渤海国は高句麗を継承する”という自己認識は、日本の歓迎するところであったから、日本でも「渤海郡者、舊高麗国也」と認識することになった。「天平寶字二年（758）十月二十八日」の日付のある平城宮址出土の木簡には、日本の遣渤海使を「遣高麗使」と銘記していることや、天皇が渤海の使者に賜った璽書に「天皇敬問高麗国王」とあることから、渤海は高句麗の後継であるとする認識は同時代の認識であったと確認できるのである。

日本ではこの認識に立脚して渤海使を応接したから、渤海の使者は日本に到着するや来日の時間的間隔、使節の形式等が往事の高句麗使のそれと絶えず比較され、外交の礼を問われることになったのである。

ところで、727年12月に出羽から平城京に入城した初の渤海使者以来、日本側ではひとつの疑問が消えてはいなかったであろう。それは658年に阿

倍引田臣比羅夫が肅慎を討ち、生熊と罽の皮の計72枚を献上したことがあったが、また720年には北の辺境の港を管理する渡島・津軽津司である諸君鞍男ら6人を「靺鞨国」に派遣し、その「風俗」を観察させたことがあった。このように平城京、平安京では日本の北の辺境とその外の諸種族とそれらの相互関係が十分には理解されておらず、さらには「靺鞨」と渤海との識別の問題が解消されてはいなかったに違いないのである。746年には渤海人と鉄利靺鞨の千百余人が、また779年にも渤海と鉄利靺鞨人の359人が出羽に到着するに及んで、日本側には渤海と靺鞨との民族関係は認識を確かにすべき問題として存在した。この間にも、日本の東北辺では762年（天平寶字六年）12月に立てられた「多賀城碑」には、多賀城の所在を「去京一千五百里。去蝦夷国界一百二十里」であり、また「去靺鞨国界三千里」とも銘記するほど、「靺鞨」が意識されていたのである（3）。

しかし、渤海の使者は唐の政情や日本の遣唐使の安否を日本に伝えるなど、日本と唐との関係では中継的役割を果たした（4）。日本から見れば、渤海の中継的位置と役割の価値は新羅との関係が悪化していたから、真に重宝であった。

さて、日渤海の交渉が継続すると、日本では渤海国の民族的構成やその社会についての情報が蓄積されてきた。そのことは840年に藤原緒嗣らが嵯峨天皇の命を奉じて完成させた『日本後紀』のなかで、渤海国の社会についての知識を整理した文に表現されている。即ち、「渤海国者、高麗之故地也。天命開別（天智）天皇七年（668）。高麗王高氏為唐所滅也。後以天之真宗豊祖父（文武）天皇二年（698）。大祚榮始建渤海国。和銅六年（713）。受唐册立其国。延褒二千里。無州縣館驛。処々有村里。皆靺鞨部落。其百姓者靺鞨多。土人少。皆以土人為村長。大村曰都督。次日刺史。其下百姓皆曰首領。土地極寒。不宜水田。俗頗知書。自高氏以来。朝貢不絶」の一文である（5）。

ここにおいて、「渤海国は大祚榮が高句麗の故地に建国し、713年に唐から册封を受けた国家であること、また、渤海の社会は処々に村里があつて、靺鞨人が多く、渤海人は少く、これらの部落では、渤海人がその村長となつており、この村長を部落では首領とも呼んでいた」、と日本では渤海社会が理解されたのである（6）。

ただ、この理解は広い渤海社会を解説していないことに留意したい。「無州縣」とは言つても、第2回の渤海の遣日本使の大使は「若忽州都督胥要徳」であつたように、州（縣）制は施行されていたことを考慮すると、前記の渤海社会の理解には渤海国における中央集権体制下の地域社会とその辺境の社会とについての知識が混在していると認めなければならないであろう。

しかし、ここまでの渤海国との100年にもなる交渉の継続によって、日本

では7世紀後半以来、疑問が解消されていなかった日本の北方に來航していたかの「靺鞨」と渤海国との関係がともかく理解されたのである。即ち、渤海国の辺境社会では少数の渤海人が多数の靺鞨人を統治していると言う渤海国と靺鞨との関係である。また、ここには渤海国が高句麗以来、この時に至るまで日本に朝貢を欠かさない国家であることが認識されていることも注目される。

この渤海国が「朝貢不絶」であるという認識は、日本の高官と渤海の使者との間で催された漢詩の贈答にも発露されている。日本が渤海の使節を迎接した8世紀初～10世紀初までの200年間、日本と新羅の関係では、両者の間には不協和音が漂っていた。734年の新羅の遣日本使であった金相貞が來日した以降では、両国の間では外交の礼を争うことが継続し、使節の往来は互いに「放却」され、使命を果たすことが出来ずに帰国していた。それは日本が新羅の使節をあくまで朝貢使節として応接する外交形式に固執し、一方の新羅は日本とは対等な交聘の礼を強く求めていたからであった(7)。

外交の礼をめぐる難航していた日羅交渉の一方では、渤海国が「朝貢」の礼を維持して使節を派遣して來たことは、日本では大いに歓迎されたのである。その精華が漢詩の唱和である。漢詩唱和のことは、新羅の使節との間では、726年に長屋王が新羅の金造近(金奏勲)の帰国を送る宴を私邸において催したことがある。『懷風藻』にはその宴における唱和の漢詩が収められているが、それは日羅の関係が悪化する直前のことであった。

しかし、その後の新羅の使節については漢詩唱和の例を見出し難い。それは日本と新羅の使節との間では朝貢の礼をめぐる争っており、新羅の遣日本使は日本からは放還や放却の冷遇を受けたから、日本の高官から詩の饗宴を設けられるには至っていないのである。

ただ、779年の新羅の金蘭蓀の使節は「貢調」の礼で來日し、また、高鶴林ら5人の唐客とともに入京したから、日本から厚遇を受けていた。さらに、この使節には『華嚴經疏』や『金光明經疏』の著者として日本でも知られた元暁の抱孫である薛仲業が大判官として参加していたことから、淡海真人三船がこの薛仲業に詩を送っている。日本と新羅の間で外交摩擦が続くなかでは、この交流は日羅交渉の精華と言えるであろう(8)。

一方、渤海使との漢詩唱和の初例は758年9月に來日した揚承慶らの使節との間であり、翌年正月には授位、賜禄、饗宴、賜綿の礼の後に、藤原仲麻呂がその私邸において宴を催した。宴では「当代の文士、詩を賦して送別し、副使の揚泰師は詩を作りて之に和」したが、この時の副使揚泰師の詩が『経国集』に収められている。仲麻呂は762年10月に來日した王新福にも、翌年2月に私邸で饗宴を設けているから、ここでも漢詩の唱和がなされたものと思われる。

これらに共通するのは、来日の使節が朝貢使の礼を踏んだ場合には、朝廷における応接の儀礼の後に、大臣がその私邸において宴を設け、主客が漢詩を唱和していることである。

さて、日本では自己を「日域」或いは「扶桑」の地にあつて、中華に並立するものと認識するが（9）、その故に、渤海使者の来日はこの自己認識を充足させる「外蕃」の来朝として歓迎されたのである。漢詩唱和は主客の友誼の表現ではあるが、また、そこには渤海使者を朝貢使として認識し、これを文学に表現した側面が現れている。渤海国滅亡後、百年近くして紀齊名が編集した『扶桑集』には渤海使応接官の漢詩11首が「蕃客贈答」の詩として分類編集されることになるのである（10）。

さらには、紫式部の『源氏物語』では、桐壺の巻のなかで「光る君と言う名は、高麗人がおほめ申しておつけしたものであると、言い伝えているとのことである」とある。「高麗人」とは渤海人のことであり、来日した渤海使がどのように貴人を観相した前例は、777年に来日した史都蒙が橘清友を観相し、その子孫が「大貴」となることを占った例、また、849年に王文矩が時康親王（後の光孝天皇）は将来に天皇位に登るであろうと観相した例がある。

11世紀初に紫式部が光源氏を観相する人物として「高麗人」を設定し、また紀齊名が「蕃客贈答」詩を編纂した背景には、10世紀初までにも、渤海使者が朝貢使節として来日し、漢詩唱和の友誼を行っていた関係の歴史がある。しかし、このように「扶桑」の国たる日本を飾る朝貢国家であると渤海を認識していた対極では、新羅と日本との間では8世紀後半以後の外交摩擦があり、また日本が9世紀後半以降の新羅を海賊の跳梁する国として恐怖していたことは留意されてよからう。

四、渤海滅亡後の渤海認識

渤海国は926年正月に契丹の耶律阿保機に滅ぼされたが、929年11月には渤海国の遺臣の裴璆が来日した。この3度目となる裴璆の来日は、阿保機がその長子を渤海の故地に送って統治させた「東丹国」の使節としてであった。裴璆は日本に渤海の滅亡と東丹国の誕生を説いたであろうが、日本は裴璆が渤海の臣から東丹の臣に変貌したその「不忠不義」を責めた。しかし、東丹国は936年に契丹に併合され、使者の来日も継続しなかったこともあり、また、新羅に替わった高麗の使節が新たに来日していたから、日本の渤海認識は、その後、前述した高句麗を継ぐ朝貢国という認識を実感することは乏しく、それは回顧されるものであった。

しかし、『日本書紀』が朝廷で講書されるに随って、神功皇后の「三韓征

討」伝説は再生されるが、そこでは「三韓」、即ち、新羅、百済と高句麗が日本へ「朝貢」することが記憶され、また回顧されたから、この伝説に直結しない渤海の「来朝」は日本の高句麗認識の蔭に埋もれたのである。

かくて、渤海国が日本の歴史認識に明確に再登場するのは18世紀に入ってからであろう。水戸藩主の徳川光圀が1657年に編纂を命じ、1715年に清書された『大日本史』（正徳本）の「列伝」のなかの「諸蕃」に、「新羅」「高句麗高麗」「百済」「任那」「耽羅」に続いて「渤海」伝が編纂されている。「諸蕃」にはこの後に「蝦夷」「肅慎」「女真」「琉球」「隋唐」「宋元明吐火羅崑」が編纂されている。

ここで注目されることは、日本史料のほかに『新唐書』『旧唐書』『文献通考』を参照して、渤海伝を編纂したことである。日本ではこれまで来日した渤海使の属性から渤海を認識していたが、新たに「渤海、本粟末靺鞨附高麗者」であり、高句麗が唐に滅ぼされると、大氏が高句麗と靺鞨の衆を集めて建国した事情が中国史書からも認識されることになったのである。ここには現代日本の渤海認識にも共通する面があり、唐から宋にかけての中国の渤海認識が日本で受容される道が開かれている。

つづいて、近代に至ると、文部省は文化事業として百科史料事典の『故事類苑』の編纂を奨励したが、これが1914年に印刷された。その「外交部」のなかで、「三韓通載」「新羅」「百済」「高麗」「任那耽羅」に続いて、「渤海」は日本との交渉の諸相が分類編纂された。この後には「後高麗」「朝鮮」そして中国の「清」までの歴代王朝、「天竺安南」等の東南アジア、さらには「葡萄牙」から「合衆国」等との交渉の諸相が編纂されている。

この両書に編纂された渤海の位置は、三韓に由来する新羅、百済、高句麗とその後の高麗、朝鮮のなかにあるが、それは日本と交渉した時代の順に編纂したのであり、渤海が高句麗を継承するとの認識には必ずしも結び付かない。渤海の置かれた編纂の位置は中国王朝の交替にも接続していない。「渤海は高麗の旧地」や「文武天皇の時（698）、大祚栄という者、渤海を建て、唐の冊封を受く」という渤海の建国事情を認識してはいるが、渤海は高句麗を継承すると説明したかの渤海使者の主張をそのままに認識していたとは理解し難いのである。渤海が編纂された位置からも、渤海は日本に朝貢してきた三韓の高句麗の故地に成立した国家とは認識していたが、そこには渤海が高句麗を継承した国家であるとの認識は薄いのである。

五、現代の渤海認識

近代日本人が渤海史に関心を寄せたのは渤海の故地を戦場とした日露戦争と

その勝利が大きな契機となっている。1906年11月に南満州鉄道会社が設置されると、翌年、大連本社に調査部が開設され、満州とロシアの経済事情調査が推進された。また、その翌年には白鳥庫吉の進言によって、東京支社に「満鮮歴史地理調査部」が設置された。ここでは満州と朝鮮の諸民族史とそれらの関係史が研究された。

そこでは、満州の歴史と朝鮮半島の歴史とは不可分であるという認識から、「満鮮史」の範疇のなかで渤海を認識することが推進された。この近代日本の歴史認識は1922年に組織された朝鮮史編修会にも見られる。翌年の第1回編修委員会では、李能和、崔南善両委員が渤海の歴史を「朝鮮史」の大系のなかになどどのように編纂すべきかについて質問したが、幹事の稲葉岩吉はこれに答えて「新羅を叙する処で渤海及び之に関連した鉄利等の記事をも収載する」との編纂姿勢を述べている。しかし、1930年の委員会では「朝鮮史の起源と密接な関係ある」「民族」を広く編纂するようにとの希望を述べた崔南善委員に、今西龍委員は「渤海も朝鮮史に関係のない限りは省きます」との方針を答えている。

こうして、渤海史は「朝鮮史」の編纂のなかでは、「別録」のなかに、中国正史の渤海（靺鞨）伝が収載され、また新羅史と高麗史の編年部分に僅かな関係事項が記載されるのみであって、綱文はついに立てられなかった。

この「朝鮮史」の編纂事業は、黒板勝美が内藤湖南とともに顧問として指導していた。黒板は近代国家の文化事業として進行していた編年資料集の「大日本史料」や「大日本古文書」の編纂をながらく担当していた。また、編修会の人事にも黒板が関与していたことから解るように、「朝鮮史」の編纂モデルは「大日本史料」にあった。日本が併合した朝鮮は、日本の「帝国」を「内地」とともに構成する「外地」の位置にあるのであり、編修会の方針は「大日本史料」に並立する「外地」の編年史料集を編纂することにあつたのである。

そのことは、近代的な合理主義に立脚した編纂手法が採用されたこと、即ち、編修会の表現を借りれば、「独立国の旧夢を追想せしむる弊」があり、「人心を蠱惑するの害毒」ありと見なした朝鮮「古来」の「史書」に代わる史書として、「朝鮮史」を編纂すると言う編修会の方針からも窺えるのである（11）。

その意味では「朝鮮史」の編纂には、中国では新王朝が前王朝の歴史を編纂して、新王朝の正当性を標榜した「正史」の編纂にも共通する側面があろう（12）。

かくて、「朝鮮史」は「帝国」の「外地」の歴史として、あくまでも「朝鮮半島史」として編纂されるべきとの方針から、高句麗史は「朝鮮半島史」に編成され得ても、「檀君朝鮮」は「朝鮮史」の綱文に取り上げられず、「箕子朝鮮」と「衛氏朝鮮」は「古朝鮮」の綱文のなかで中国史書の記録が編修されたが、「渤海史」は「別録」のなかに中国「正史」の渤海（靺鞨）伝が転載され

たのみであった。そのことは「朝鮮史」の編纂が「半島」内の歴史に限定したことのほかにも、「史料」は編集するが「史説」は採用せずと言う前述した近代的な合理主義の編纂方針からでもあった(13)。

「朝鮮史第1編第3巻支那史料」は1933年3月に刊行されたが、この「朝鮮史」に編修されなかった渤海史に日本人が新たに関心に向けたのは、その前年3月に建国を宣言した「満州国」が契機となっている。現地に立ち入って遺跡を調査することが可能となったからである。東亜考古学会、日満文化協会などは「満州国」から便宜と支援を得て、東京城に代表される渤海遺跡の調査を行った。その成果は「満州国」を保護する日本が世界から非難を受けるなかで、「日満」友好の古代史として宣揚されたことを否定できない。だが、1945年の日本の敗戦とともに「満州国」は消滅した。渤海史は日本では「失われた」歴史として認識されることになり、やがてその認識は薄れたのである(14)。

六、おわりに

日本において渤海史に再び注目が集まるのは、1970年代以降である。日本の古代国家形成の諸条件を列島内に限定せず、東アジアの古代国家の形成過程との諸関係のなかで比較研究する視角が研究者に共有されてくると、渤海史及び渤海との交渉史について新たな関心が向けられることになった。唐を中心においた冊封体制という国際関係秩序のなかで、渤海国の制度を律令国家群のひとつのモデルとして理解する視角から、また、日本との関係を2国間の友好関係に限定せず、東アジアの諸関係のなかで理解する視角から、また、韓国、北朝鮮、中国、ロシアの各国における渤海史研究の成果との交流を基礎において、渤海研究が多角的に盛んとなってきたのである。

さらに、東西冷戦の終了は国際的共同の考古学調査を可能にした。例えば、韓国では高句麗研究財団や高句麗研究会等の各研究団体や宋基豪氏等の研究者、また、日本では田村晃一氏を中心とした研究者等の韓ロ、日ロの共同調査と日韓の共同研究である。国際的な共同調査と研究交流の進展は、各国の研究者が「实事求是」の立場に立脚して渤海の歴史と文化を研究し、各国の渤海認識を相対化する道を開き、また、この方向を進めつつあることが現在の研究環境であろう(15)。

【註】

- (1) 拙稿「渤海国の遣日本使—その時期区分と特質—」(『慶北史学』第23輯、2000年8月)
- (2) 石井正敏「第一回渤海国書について」(『日本歴史』327号、197

- 5年8月。後に、石井『日本渤海関係史の研究』〔吉川弘文館、2001年4月〕に所収)
- (3) 平川 南「碑文の検討」(安倍辰夫・平川南編『多賀城碑—その謎を解く』雄山閣出版、1989年6月)
 - (4) 石井正敏「渤海の日唐間における中継的役割について」(『東方学』第51輯、1976年1月。後に、石井『日本渤海関係史の研究』〔吉川弘文館、2001年4月〕)
 - (5) 石井正敏「『類聚国史』の渤海沿革記事について」(『中央大学文学部紀要』史学科43号、1998年3月。後に、石井『日本渤海関係史の研究』〔吉川弘文館、2001年4月〕に所収)
 - (6) この文の解釈についての諸説の検討は、前掲注(5)の石井論文を参照。
 - (7) 拙稿「中代・下代の内政と対日本外交—外交形式と交易をめぐる—」(『学習院史学』第21号、1983年4月。後に、濱田『新羅国史の研究』〔吉川弘文館、2002年2月〕に所収)
 - (8) 堀池春峰「華嚴経講説よりみた良弁と審詳」(『南都仏教』第31号、1973年12月。後に、堀池『南都仏教史の研究上(東大寺篇)』〔法蔵館、1980年9月〕に所収)、また、横田健一「八世紀末葉における日本・新羅・唐三国の外交交渉に関する一挿話」(『古代史の研究』第2号、関西大学古代史研究会、1980年11月)、李基東「薛仲業引 淡海三船税 交歓—統一期新羅人 日本引税 庚鉢旋嘘七税 廢断面—」(『歴史学報』第134・135合輯、1992年9月。後に、李『新羅社会史研究』〔一潮閣、1997年9月〕に所収。また、邦訳は「薛仲業と淡海三船の交歓—統一期新羅と日本との文化的交渉の一断面—」(『国史学』第151号、1993年5月。佐藤長門訳)
 - (9) 神野志隆光『「日本」とは何か—国号の意味と歴史—』(講談社現代新書、2005年2月)
 - (10) 谷口孝介「〈蕃客贈答〉の成立」(『和漢比較文学』第1号、1985年10月)、同「鴻臚館の”光君”」(『説話・伝承学』第4号、1996年4月。ともに、谷口『菅原道真の詩と学問』〔塙書房、2006年2月〕に所収)
 - (11) 朝鮮総督府朝鮮史編修会『朝鮮史編修会事業概要』(1938年6月。後に『朝鮮史巻首総目録・事業概要』〔東京大学出版会、1976年5月〕として復刻)
 - (12) 川村 湊『「大東亜民俗学」の虚実』(講談社選書、1996年7月)
 - (13) 酒寄雅志「渤海史研究と近代日本」(『駿台史学』108、1999年

12月。後に、酒寄『渤海と古代の日本』〔校倉書房、2001年3月〕に所収)

(14) 鳥山喜一『失はれたる王国－渤海国小史－』(翰林出版、1949年10月)

(15) 『君猷焼 尻背爽 降背 政旋 -薦1託 廃・君 因疑降閏繕紫左壺辞-』(壺仙館狛昔 企建尻姥社 室毒採、1994年10月)

『尻背爽拭 害焼 赤澗 降背－沿海州渤海遺蹟調査報告－』(沿海州文化遺蹟調査団・高麗學術文化財団、1999年3月)

文明大・李南 爽ほか『君猷焼 尻背爽 滴虞什徹葛 降背 紫据走 降閏左壺辞』(壺鋭形尻姥仙館、2004年11月)

宋基豪「降背研 達焼辞」(車室毒紫、1993年10月)

拙著『渤海国興亡史』(吉川弘文館、2000年11月)

田村晃一編『東アジアの都城と渤海』(東洋文庫、2005年3月)



ロシアにおける渤海史研究

アレキサンダー・イヴリイェフ
(ロシア極東アカデミー歴史・考古・民族研究所)

Journal of Northeast Asian History
volume 4, number 2 (Dec 2007) : 132~144

*Copyright © 2007 by Northeast Asian History Foundation. All Rights Reserved.
No portion of the contents may be reproduced in any form without
written permission of Northeast Asian History Foundation.*

ロシアにおける渤海史研究

アレキサンダー・イヴリイェフ

(ロシア極東アカデミー歴史・考古・民族研究所)

ロシア（当時ソ連）で渤海史を完全な形で扱っている本は、極東大学の助教だったマトベエフ（Z. N. Matveyev）により 1929 年に書かれたものである。この本には、ロシアの東洋学者たちによる業績とその知識の全てが記されている。まず、ビチューリン（N. Ya. Bichurin）による中国の歴史書の翻訳や、ポズドネエフ（D. M. Pozdneyev）とエガーマン（E. G. Egerman）による日本の歴史書の翻訳が含まれている。また、渤海に関する主要資料である『新唐書』・『旧唐書』渤海伝も、マトベエフの業績として記述されている。内容に不正確な点や明らかに誤っている点が認められるにもかかわらず、本書はロシアの渤海研究において重要な業績として位置づけられている。そして、渤海に関する業績、特にオクラドニコフ（A. P. Okladnikov）の著書においては重要な根拠となっている。マトベエフはブッセ（F. F. Busse）、クロポトキン（L. A. Krapotkin）、フョードロフ（A. Z. Fyodorov）、アルセーニエフ（V. K. Arsenyev）、そして注目されいた東洋学者パラディイ・カファロフ（Pallady Kafarov）により研究された、19 世紀～20 世紀初めの地域伝承と考古学に関する知識を幅広く利用した。彼らは、沿海州にある多くの遺跡を渤海時代のものと認識していた。しかし、こうした認識は仮定であり、その後確認されることはなかった。

ロシア極東における渤海に関する実質的な考古学的調査は、50 年代から始まった。オクラドニコフによって出版された日本の考古学者たちの東京城渤海上京城址に関する研究結果物は、ソ連の考古学者たちに極東地域に存在する遺跡の参考資料を提供することとなった（Okladnikov1957）。オクラドニコフの「沿海州の遠い過去」（1959）に描かれているウスリスク付近の渤海遺跡調査では、1960 年代にシャフクノフ（E. V. Shavkunov）による新たな発見があった後、ウスリスク地域でアブリコソフスキ寺址の発掘があり、カザンスキ地域ではクラスキンスコエ古城址の調査が行われ、アヌチンスキ地域においてはノボゴルデ

ーフスコエ古城址で渤海文化層が発見された。シャフクノフは、沿海州地域における渤海遺跡に対する優先権と科学的根拠を手にした。彼の著書である『沿海州における渤海と渤海文化遺跡』（1968）は、歴史記録と考古学資料を結びつける国内初の業績であった。

シャフクノフによって始められた沿海州での渤海遺跡調査は、70～80年代にセメニチェンコ（L. Ye. Semenichenko）とボルディン（V. I. Boldin）によって継承された。アルセニエフカとイリスタヤ川の溪谷に位置する渤海遺跡の発掘（ノボゴルデーフスコエ古城址と住居地、ニコラエフスカヤ1・2古城跡）は、渤海文化における初期と後期の区分を可能にし、また地域的な違いがあることをうかがわせている（Boldin, Semenichenko1978）。1980年代にボルディンは、ノボゴルデーフスコエ古城址、ウスリスクに位置するコルサコフスコエ1住居址、オクタフルスキ地域のコンスタンティノフスコエ1住居址を発掘した。特にコンスタンティノフスコエ1住居址では、初めてオンドル遺構が発掘された（Boldin1990）。また、ノボゴルデーフスコエ古城址の発掘により、渤海と金代の文化層や建築に対する認識がより正確なものとなった（Boldin, Ivliev1989）。当時に形成されたロシア極東の歴史において、渤海とその役割に関する考察や1960～80年代の沿海州地域での渤海研究の結果は、ロシア極東アカデミー歴史・考古・民族研究所の中世分科により製作された「ロシア極東地域における渤海と部族」という論文に集約され出版された（1994）。

沿海州における渤海史研究は、1990年代に新たな段階をむかえた。ボルディンによるクラスキノ古城址の発掘と渤海の墓の発見は、当時の主要内容であった。1980年に始められた、渤海東京塩州の治所と思われるクラスキノ城址の発掘は、ロシアによる渤海に関する考古学調査において、非常に重要な意味をもっている。なぜなら、クラスキノ城址の発掘は、他の遺跡の遺物と比較することができる典型的な渤海遺物をもたらし、また渤海文化に関する新たな資料を提供してくれたためである。この遺跡は、渤海東京龍原府の八連城から、わずか50～70 km離れた所に位置しているが、沿海州で渤海の中心地域とこれより近くに位置する遺跡は他にない。発掘の際、石垣に囲まれた仏教寺院が発見された。この建物集合体は、瓦の遺物が残る寺の演壇、初期の建築の遺構、鐘塔のような四角い石垣の遺構、窯跡の遺構、石列、瓦・壁体の遺構などである。オンドルのシステムを備えた住居址が、寺址の壁の向こう側の後期の層位から発見された。最も興味深いのは、典型的な契丹の器が井戸から発見されたことである。この器は、926年に渤海を占領した契丹が、短期間その場に存在したことを示している（Gel'man2000 ; Boldin2001）。城壁の横断面から、壁の内側と外側は石で囲まれ、その間は土で埋められていたことがわかる。また、沿海州地域の他の渤海城址に関する資料から、石壁はこの地域の渤海城址を強化する典型

的な方法であったと結論づけることができる (Ivliev1998)。クラスキノ城址には、城が存続したおよそ 200 年の間に形成された、少なくとも 3 つの文化層からなる 2m ほどの考古学的層位が存在する。すなわちそれは、渤海文化の研究において、初期の段階から最後の段階までの発展の力動性をうかがわせるものである。従ってクラスキノ城址は、ゲルマン (E. I. Gelman) が唱えた渤海の瓦の時代区分のための、基本的な遺跡であったといえる (Gelman2003)。

1990 年代半ば、渤海時代の寺址が沿海州の 5 ヶ所で発見・発掘された。クラスキノ寺址を除き、コピュチンスキ (Kopytinsky)、アブリコソフスキ (Abrikosovsky)、ボリソフスキ (Borisovsky)、ウスリスク地域のコルサコフスキ (Korsakovsky) などである。これら寺址の時期については、研究者たちの見解が大きく異なっている。シャフクノフは瓦の装飾の類型に基づいて、コピュチンスキ寺址を 8 世紀前半、アブリコソフスキ寺址を 8 世紀半ばもしくは後半と、その時期を区分している。彼は、ボリソフスキ寺址の瓦がアブリコソフスキ寺址のものより早く、コピュチンスキ寺址より遅い時期のものであると考えていた (Shavkunov1996 : 140-141)。コルズノフ (I. V. Kolzunov) は、屋根の端の装飾である鴟尾の形に基づき、アブリコソフスキ寺址は遼時代 (10-12 世紀) に編年されたものであると結論づけている (Kolzunov1996)。メドヴェデフ (V. E. Medvedehu) は、1972 年に彼が発掘したボリソフスキ寺址に関する論文で、この寺址は沿海州の寺址 (ボリソフスキ-コピュチンスキ-コルサコフスキ-アブリコソフスキ-クラスキンスコエ) の中で、最も早い時期のものであると述べている。彼はまた、前の 3 つの寺址と後の 2 つの寺址の間には、その時期に大きな違いがあると推定している (Medvedev1998 : 461-462)。シャフクノフによって提示された祖州の瓦は、アブリコソフスキ寺址の瓦のような形であり、契丹の初代皇帝である耶律阿保機の雄々しい墓や、10 世紀に建てられた祖州城址から出土した。もちろん、これらの瓦は渤海の匠人により、渤海の伝統的な方法で作られたものである。しかし、それは 926 年より早い時期のものである可能性はなく、アブリコソフスキ寺址の瓦が 13 世紀のものであるという時期設定も明確なものではない。また、ゲルマンはクラスキノ城址から出土した凹凸のある瓦の端の部分と層位が、その後の寺址 (コピュチンスキ-アブリコソフスキ-ボリソフスキ-コルサコフスキ) に継承されたと考えた。クラスキノ城址から出土した他の建築物は、他の寺址にある幾つかの建築物と同一のものである (Gelman2003)。寺址の時期設定に関する問題の最後の解決方法は、新たな資料の出現を待たなければならないことは明らかである。

オクタフルスキ地域のシネルニコポ 1 山城の発掘においては、この城が沿海州地域で靺鞨文化層が渤海文化層に覆われている 2 ヶ所のうちの一つであるチェルニャチノ 5 古墳付近に位置している点が興味深い (Boldin2001 ;

Gelman1999 ; Boldin1998)。渤海時代の建築文化層は、ミハイロフスキ地域のゴルバトカ城址の発掘の際に発見された (Gelman2001 ; Gelman2002)。また、幾つかのオンドルを備えた住居址と石造の井戸も発掘された。キロフスキ地域のマルヤノフスコエ (Maryanovskoye) 城址、ウスリスク地域のアブリコソフスキ住居址と寺址、アヌチンスキ地域のアウロフスコエ山城の発掘が行われた際には、渤海文化に関する新たな資料を得ることができた (Shavkunov E. V., Shavkunov V. E. 1998 ; Gelman1998 ; Shavkunov1997 ; Shavkunov1998 ; Shavkunov, Gelman2002)。目録にある遺跡のうち、後者は渤海以後の時代の渤海文化研究に寄与した。

チェルニャチノ 5 古墳群が、沿海州地域における渤海文化研究に寄与した最初の古代共同墓地であることは間違いない (Nikitin, Gelman2002)。石が積まれたものや石室があるものなど、160 基の墓が発掘されている。墓の多くは、外部で火葬した痕跡が残されている。もちろん、火葬されずに埋葬された遺体も存在する。放射性年代測定によると、最も早い時期の墓は 5 世紀末から 6 世紀初めのものであり、最も遅い時期の墓は 10 世紀のものである (Nikitin, Gelman2002 ; Nikitin, Jung Sok Bae2005)。このように、相対的に、部分的に、そして絶対的にチェルニャチノ 5 古墳群の年代が明らかになった。チェルニャチノ 5 古墳群は、吉林省の渤海中心地域の墓と非常に似ている。クラスキノ城址から 2003 年に (Nikitin, Usuki2004) 石室を備えた墓が発見され、チェルニャチノ古墳群は沿海州地域における唯一の渤海共同墓地ではなくなった。

渤海文化に関する新たな考古学資料が蓄積されていくなか、渤海周辺に居住していた他の部族の文化と区別するにあたり問題が生じた。1960 年代にシャフクノフは、著名な中国の歴史学者である金毓黻の業績を参考にし、渤海の地方統治単位である府の 2 分の 1 を沿海州地域に求め、渤海の東北の国境をアムル江下流までとした (Shavkunov1968)。しかし、渤海文化に関する資料や近代の歴史地理学の成果 (『東北歴史地理』) から、渤海の国境を北側や東側に拡張することは難しいといえる。近代の研究によると、『新唐書』渤海伝にある全ての府と州のうち 2 つが沿海州地域に位置していることは間違いない。それは、ラズドルナヤ江の溪谷にある率賓府とハッサン地区の南側にある東京龍原府管内の塩州である。率賓府の中心地域は、黒龍江省東寧県に位置する大城子城址であったと思われる (Zhang Taixiang1981)。おおよそ 9 世紀の渤海東の領域は沿海州南部の東海と朝鮮半島北部地域に至り、北東側はウスリ江一帯を含んでおり、また渤海遺跡のなかで最も北側にあるのはマルヤノフスコエ (Maryanovskoye) 城址であった。

アヌチンスキ地域のノボゴルデーフスコエ住居址に関する問題には変化が見られる。現在、ウスリ江下流のポクロフスカヤ (Pokrovskaya culture) の最も南に位置する遺跡だ (Gelman2002a)。渤海と周辺部族との間の国境問題と照ら

し合わせてみると、ニコラエフスコエ城址から出土した魚の形の青銅符節 (Shavkunov1989) は非常に重要であることがわかる。青銅符節には‘左驍衛將軍聶利計’という銘文が刻まれている。こうした符節の多くは唐 (618-907)、五代 (907-959)、遼 (916-1125) 時代に一般的に使用されていた。‘驍衛’は唐の時代に使われたものであり、‘左驍衛大將軍’は唐朝廷から渤海王に与えられた称号であった。また、渤海王大武芸の弟である大門芸が唐に亡命した際も‘左驍衛將軍’という称号が与えられた。朝廷と関連のある魚の形の符節がある將軍称号は、任務のため唐にむかう靺鞨首長たちに与えられたものである。名前の上に‘計’がある場合、それは靺鞨部族のうち使臣として唐に行く者を示している。従って、聶利計というのは渤海の將軍ではなく、その多くは唐で使われていた左驍衛大將軍という官職をもつ靺鞨の首長である可能性があるといえる。つまり、当時ニコラエフスコエ城址があったパルティジャンスカヤ江の溪谷は、渤海の領域に含まれていなかったということである。

渤海の中心と辺境との関係や、力動的に変化する渤海東北の国境に関する問題については、2005年に刊行された「古代・中世時代のロシア極東：発見、問題、仮定」という論文に集約されている、ニキチン (Y. G. Nikitin) とゲルマン (E. I. Gelman) による考古学資料が根拠となるだろう。ニキチンは、歴史資料と沿海州の様々な考古遺跡の遺物の編年を根拠に、渤海領土の膨張過程を3段階に分けている。同時に、沿海州の中央、東部、そして北東地域にある多くの古城址を、渤海領域に居住していた部族の遺跡であると推定している。ゲルマンは、貿易 (海産物、土器、陶磁器)、瓦や陶磁器の生産組織、中央・半辺境と辺境地域の瓦や陶磁器の生産組織などに関し、詳細な分析を基に渤海領域における辺境と水準が異なる中央との関係を考察した。

渤海文化の起源や、渤海と周辺の黒水靺鞨との関係の本質を理解するには、渤海に先立って存在した靺鞨文化に対する研究がなされなければならない。ロシア極東における靺鞨文化に対する概念は、オクラドニコフ (A. P. Okladnikov)、デレヴィヤンコ (E. I. Derevianko)、ダコヴァ (O. V. Dyakova)、ネステロフ (S. P. Nesterov) の業績が根拠となっている。これらの業績は主にアムル地域と関係がある。アムル地域の靺鞨土器を根拠に、ダコヴァは靺鞨遺跡をいくつかのグループに分けている。ブラゴスロヴェンニンスカヤ

(Blagoslovenninskaya)、ミハイロフスカヤ (Mikhailovskaya)、ナイフェルドスカヤ (Naifeldskaya)、トロイトスカヤ (Troitskaya)、グラトコーフスカヤ (Gladkovskaya) がそれである (Dyakova1984)。現在、こうしたグループは靺鞨文化の変種とみなされており、ミハイロフスカヤグループは他の文化に区分されている。ダコヴァは沿海州の靺鞨遺跡に関する論文のなかで、これらの遺跡の陶磁器をアムル地域に沿って特殊化した (Dyakova1998)。沿海州における

靺鞨陶磁器に関する詳細な研究は、アムル地域との十分な同質性が認められないことを示している。ピスカレヴァ (Ya. E. Piskareva) は、年代の違いによって沿海州地域の靺鞨陶磁器をいくつかのグループに区分した (Russian Far East…2005:419-438)。渤海遺跡から、少なくとも3つの異なるグループの靺鞨陶磁器生産組織が発見された。こうした違いは、‘他の技術的接近、独創的な形態と装飾’によって特性化されると共に、これらの遺跡の人口構成が多様であったことを証明している (Russian Far East…2005:426)。

チェルニャチノ5古墳群は、単純な墓から石室構造を備えたものまで様々であり、渤海の遺跡、瓦、陶磁器の生産構造 (Russian Far East…2005:492-509) は、この方面では第1段階に該当する。しかし、沿海州地域の渤海遺跡における考古学的な調査結果からは、いまだに渤海社会の社会制度を再構成するのに十分な資料が得られていない。歴史記録にある渤海社会の性格は、クラディン (N. N. Kradin) によって遂行されたものである (Kradin1990; Bohai state…1994:46-52)。彼は渤海社会について、主に搾取という形が共同体の一般構成員に対する税金であった初期階級社会と結論づけている (Bohai state…1994:200)。また彼は、渤海における初期国家の形成は、大欽茂の統治時期であると述べている (Bohai state…1994:48)。同時に、クラディンは渤海の社会的発展の力動性に注目した。はじめ、渤海社会は支配者 (王族を含む) と被支配者の2つのグループに区分されていたが、8世紀から社会が階層的な性格をもちはじめたという。つまり、王と王族-官僚-生産者 (共同体の構成員、様々な形で束縛された人々) などである (Bohai state…1994:52)。その後クラディンは、渤海の性格について東方全体主義に発展していく初期国家であるという彼のそれまでの結論を揺るぎないものにした (Russian Far East…2005:442)。彼はまた、突厥の銘文で言及されていた‘Boklo kaganat’ と初期靺鞨国家との関係にも注目した (Kradin2005)。

渤海住民の起源と渤海史の本質に関する問題もまた、ロシアで論争となっている。研究業績に見られる見解の多くは、渤海が少数の高句麗系住民と靺鞨人によって建国されたというものである。渤海滅亡後、住民たちは契丹によって中国北部や内モンゴル地域に送られ、また高麗に亡命したり女真族の一部となった者もいた。また、渤海史は東アジアの歴史とみなすことができる。それは、古代の渤海領土であった地域が、今日の中国、韓国、ロシアであるためである。シャフクノフ教授は、渤海を単純に唐王朝の地方政権とする中国の見解や、渤海を韓国史とする見解を共に拒否した (Shavkunov1992; Shavkunov1993)。同時に、考古学的な資料を根拠に、彼は渤海が韓国史において非常に重要な役割をしたと指摘した (Shavkunov1997a)。しかし、最近になりロシアの数人の韓国学専門家は、研究業績のなかで渤海を韓国史の一部とみなしている

(Tolstokulakov2002:66-67)。

ロシアにおける渤海研究の概要を簡単に結論づけると、これらの研究は主に考古学的な性格をおびていることがわかる。こうした状況は、言語の障壁によるものである。しかし、渤海遺跡に対する考古学的調査は、我々を渤海の歴史、文化、経済に関する新たな知識へと導いてくれるだろう。

参考文献

- Boldin V.I. 2001: Болдин В.И.** Городище Синельниково-1 – раннесредневековый памятник Приморья // Традиционная культура Востока Азии. Благовещенск, 2001. Вып. 3. С. 122-131 (Sinelnikovo-1 ancient town – site of early medieval epoch in Primorye // Traditional culture of the Eastern part of Asia. Blagoveshchensk. Fasc.3. P. 122-131).
- Boldin V.I., Gelman E.I., Ivliev A.L., Nikitin Yu.G. 2001: Болдин В.И., Гельман Е.И., Ивлиев А.Л., Никитин Ю.Г.** «Интеграция» на Краскинском городище: 4 года исследований // Вестник ДВО РАН. 2001. № 3. С. 74-90 90 (“Integration” program in Kraskinskoye ancient town: four years of research // Bulletin of the Far Eastern Branch, Russian Academy of Sciences. No.3. P. 74-90).
- Boldin V.I., Ivliev A.L. 1989: Болдин В.И., Ивлиев А.Л.** О строительных горизонтах чжурчжэньского времени на Новогордеевском городище // Новое в дальневосточной археологии (Материалы медиевистов). Южно-Сахалинск, 1989. С. 3 – 7 (Construction horizons of Jurchen epoch in Novogordeyevskoye ancient town // New in Far Eastern archaeology (Materials of medievists). Yuzhno-Sakhalinsk. P.3-7).
- Boldin V.I., Ivliev A.L., Khorev V.A., Shavkunov V.E. 1990: Болдин В.И., Ивлиев А.Л., Хорев В.А., Шавкунов В.Э.** Новый тип бохайского жилища в Приморье // Материалы по средневековой археологии и истории Дальнего Востока СССР. Владивосток, 1990. С. 153 – 159 (A new type of Bohai dwelling in Primorye // Materials on medieval archaeology and history of the Far East of the USSR. Vladivostok. P. 153-159).
- Boldin V.I., Ivliev A.L., Nikitin Yu.G., Gelman E.I. 1998: Болдин В.И., Ивлиев А.Л., Никитин Ю.Г., Гельман Е.И.** Итоги поиска. Исследования археологических памятников эпохи Бохая в Приморье в 1997 г. // Россия и АТР. 1998. № 1. С. 65-71 (Results of the search. Research of archaeological

sites of Bohai epoch in Primorye in 1997 // Russia and the Pacific. No.1. P. 65-71).

Boldin V.I., Semenichenko L.Ye. 1978: Болдин В.И., Семениченко Л.Е. Стратиграфия городища Николаевка-II и периодизация бохайской культуры в Приморье // Археологические материалы по древней истории Дальнего Востока СССР. Владивосток, 1978.С. 57-63 (Stratigraphy of Nikolayevka-II ancient town and periodization of Bohai culture in Primorye // Archaeological materials on ancient history of the Far East of the USSR. Vladivostok. P.57-63).

Gelman E.I. 1998: Гельман Е.И. Керамика Марьяновского городища // Археология и этнология Дальнего Востока и Центральной Азии. Владивосток, 1998. С. 136-151 (Ceramics of Marianovskoye ancient town // Archaeology and ethnology of Far East and Central Asia. Vladivostok. P.136-151).

Gelman E.I. 2002: Гельман Е.И. Предварительные итоги исследований городища Горбатка в 2000-2001 гг. // Россия и АТР. 2002.. № 3. С. 95-98 (Preliminary results of the research of Gorbatka ancient town in 2000-2001 // Russia and the Pacific. No.3. P. 95-98).

Gelman E.I. 2002a: Гельман Е.И. О культурной принадлежности Новогордеевского селища // Археология и культурная антропология Дальнего Востока и Центральной Азии. Владивосток: изд-во ДВО РАН, 2002a.. С. 167-187 (On culture attribution of Novogordeyevskoye settlement // Archaeology and cultural anthropology of Far East and Central Asia. Vladivostok. P. 167-187).

Gelman E.I. 2003: Гельман Е.И. Эволюция бохайской черепицы из буддийских памятников Приморья // Проблемы археологии и палеоэкологии Северо-Восточной и Центральной Азии. – Мат-лы международной конференции «Из века в век», 11-25 сентября 2003 г. – Новосибирск: изд-во Ин-та археологии и этнографии СО РАН. 2003, С. 324-327 (Evolution of Bohai tiles from Buddhist sites of Primorye // Problems of archaeology and paleoecology of North-East and Central Asia. – Materials of international conference “From century to century” 11-25th of September 2003. Novosibirsk: Institute of Archaeology and Ethnography of Siberian Branch, Russian Academy of Sciences. P. 324-327).

Gelman E.I., Boldin V.I., Ivliev A.L., Nikitin Yu.G. 1999: Гельман Е.И., Болдин В.И., Ивлиев А.Л., Никитин Ю.Г. Исследования на Синиловском

городище в Приморье // Археологические открытия 1997 года. М.: Эдиториал УРСС, 1999. С. 259-261 (Researches in Sinilovskoye ancient town in Primorye // Archaeological discoveries of 1997. Moscow: Editorial URSS. P. 259-261).

Gelman E.I., Boldin V.I., Ivliev A.L. 2000: Гельман Е.И., Болдин В.И., Ивлиев А.Л. Раскопки колодца Краскинского городища // История и археология Дальнего Востока. К 70-летию Э.В.Шавкунова. Владивосток: Изд-во Дальневосточного университета, 2000. С. 153-165 (Excavation of the well in Kraskinskoye ancient town // History and archaeology of the Far East. Celebrating 70th anniversary of E.V.Shavkunov. Vladivostok: Far East State University publishing house. P. 153-165).

Gelman E.I., Nikitin Yu.G., Boldin V.I., Ivliev A.L. 2001: Гельман Е.И., Никитин Ю.Г., Болдин В.И., Ивлиев А.Л. Исследования на городище Горбатка // Россия и АТР. 2001. № 1. С. 12 –19 (Researches of Gorbatka ancient town // Russia and the Pacific. No.1. P. 12-19).

Bohai state... 1994: Государство Бохай и племена Дальнего Востока России. М.: Наука, 1994 (Bohai state and tribes of the Far East of Russia. Moscow: Nauka).

Dongbei lishi dili: 東北歷史地. 哈爾濱: 黑龍江人民出版社, 1989. 第二卷 (Historical geography of North-Eastern China. Haerbin: Heilongjiang renmin chubanshe, 1989. Vol.2).

Dyakova O.V. 1984: Дьякова О.В. Раннесредневековая керамика Дальнего Востока СССР как исторический источник IV-X вв. М.: Наука. 1984 (Early medieval ceramics of the Far East of the USSR as historical source of IV-X cc. Moscow: Nauka).

Dyakova O.V. 1998: Дьякова О.В. Мохэские памятники Приморья. Владивосток: Дальнаука, 1998 (Mohe sites of Primorye. Vladivostok: Dalnauka).

Ivliev A.L., Boldin V.I., Nikitin Yu.G. Ивлиев А.Л., Болдин В.И., Никитин Ю.Г. Новые сведения о фортификации бохайских городищ // Археология и этнология Дальнего Востока и Центральной Азии. Владивосток, 1998. С. 152-156 (New data on fortification of Bohai ancient towns // Archaeology and ethnology of Far East and Central Asia. Vladivostok. P. 152-156).

Kolzunov I.V. 1996: Колзунов И.В. Реконструкция кровли Абрикосовского храма // Археология Северной Пацифики. Владивосток, 1996. С. 119-126 (Reconstruction of the roof of Abricosovsky temple // Archaeology of North Pacifica. Vladivostok. P. 119-126).

- Kradin N.N. 1990: Крадин Н.Н.** О формационной природе бохайского государства // Материалы по средневековой археологии и истории Дальнего Востока СССР. Владивосток, 1990. С. 18-27 (On social and economic structure of Bohai state // Materials of medieval archaeology and history of the Far East of the USSR. Vladivostok. P. 18-27).
- Kradin N.N. 2005: Крадин Н.Н.** Тюркские руны и проблема образования бохайского государства // Международная конференция Фонда Когурёских исследований: Когурёская история и культура. Сеул: Koguryo Research Foundation, 2005. С. 218-222 (Turkic runes and problem of forming of Bohai state // Articles on Old Choson, Koguryo and Parhae. Seoul: Koguryo research foundation. P.218-222).
- Matveyev Z.N. 1929: Матвеев З.Н.** Бохай 渤海 (Из истории Восточной Азии VIII-X вв.). Владивосток: Типография Дальневосточного Государственного Университета, 1929 [Труды Дальневосточного Государственного Университета. Серия 6, № 8]. – 34 с. (**Bohai** 渤海 (From the history of East Asia of VIII-X cc.). Vladivostok: Far East State University printing house [Proceedings of Far East State University, series 6, No.8] – 34 p.).
- Medvedev V.E. 1998: Медведев В.Е.** Бохайская кумирня в Приморье. Сеул: Изд-во Хакъёнмунхваса, 1998 (Bohai joss-house in Primorye. Seoul: Hakyonmunhwasa).
- Nikitin Yu.G., Gelman E.I. 2002: Никитин Ю.Г., Гельман Е.И.** Некоторые результаты исследования раннесредневекового могильника Чернятино-5 в бассейне реки Суйфун // Археология и культурная антропология Дальнего Востока. Владивосток: ДВО РАН, 2002.. С. 195-215 (Some results of the research of medieval burial ground Cherniatino-5 in the basin of Suifun river // Archaeology and cultural anthropology of the Far East. Vladivostok. P. 195-215).
- Nikitin Yu.G., Jung Sok Baе 2005: Никитин Ю.Г. Чжун Сук-Бэ.** Археологические исследования на могильнике Чернятино-5 в Приморье в 2003-2004 годах. ДВГТУ, Корейский государственный институт культурного наследия, 2005. (Excavation report on the Cherniatino burial ground in Primorskii Territory of Russia in 2003-2004 years. The Korean National University of Cultural Heritage; Far-Eastern State Technical University) (In Russian and Korean).
- Nikitin Yu.G., Usuki I. 2004: Yu. Nikitin, 臼杵勲.** クラスキノ城址周辺の渤海墓調査 // 第5回アジア調査研究報告会: アジア調査研究報告会実行委員会。

32-33 頁(Research of Bohai grave near Kraskino ancient town // 5th Annual meeting of the RANA: Executive committee of the Research Association of the North Asia. P. 32-33).

Okladnikov A.P. 1957: Okladnikov A.P. Остатки бохайской столицы у г.Дунцзинчэн на р.Муданьцзян // Советская археология. 1957.. № 3. С. 198-214 (Remains of Bohai capital at Dongjingcheng city on Mudanjiang river // Soviet Archaeology. No.3. P. 198-214).

Okladnikov A.P. 1959: Okladnikov A.P. Далекое прошлое Приморья: (Очерки по древней и средневековой истории Приморского края). Владивосток: Прим. кн. изд-во, 1959.- 292 с. (Distant past of Primorye (Outline of ancient and medieval history of Primorski Territory). Vladivostok: Primorian book publishers. 292 p.)

Russian Far East... 2005: Российский Дальний Восток в древности и средневековье: открытия, проблемы, гипотезы. Владивосток: Дальнаука, 2005 (The Russian Far East in prehistory and the middle ages: discoveries, problems, hypotheses. Vladivostok: Dalnauka).

Shavkunov V.E., Gelman E.I. 2002: Шавкунов В.Э., Гельман Е.И. Многослойный памятник Ауровское городище // Труды ИИАЭ ДВО РАН. Т.11. Актуальные проблемы дальневосточной археологии. Владивосток: Дальнаука, 2002. С. 75-108 (Multilayered site Aurovskoye ancient town // Transactions of the Institute of History, Archaeology and Ethnography of Peoples of the Far East FEBRAS. Vol. 11. Actual problems of Far Eastern archaeology. Vladivostok: Dalnauka. P. 75-108).

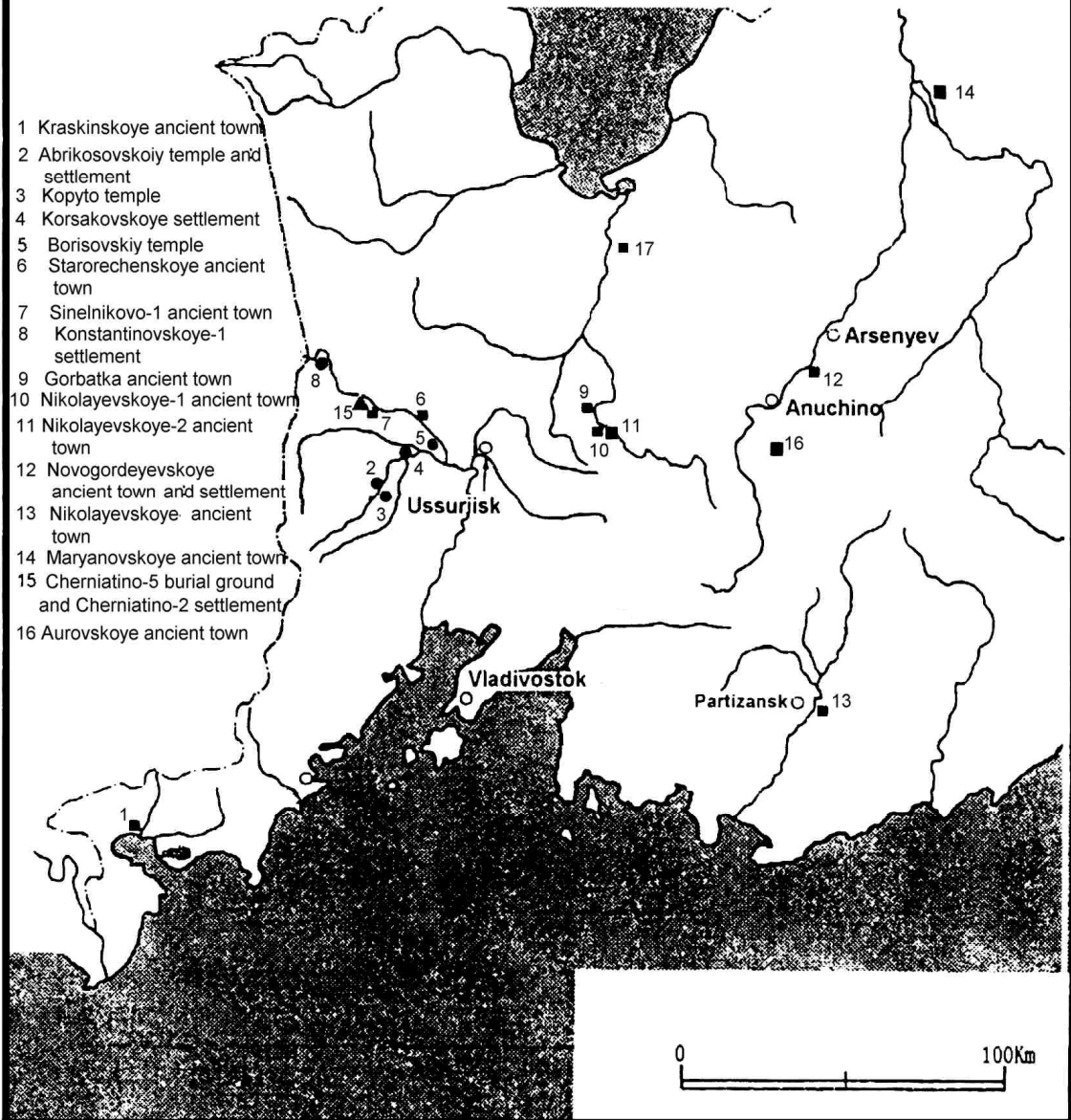
Shavkunov E.V. 1968: Шавкунов Э.В. Государство Бохай и памятники его культуры в Приморье. Л.: Наука, 1968 (Bohai state and remains of its' culture in Primorye. Leningrad: Nauka).

Shavkunov E.V. 1989: Шавкунов Э.В. Бронзовая верительная бирка в виде рыбки из Николаевского городища // Советская археология. 1989. № 1. С. 267-270 (Bronze tally in shape of a fish from Nikolayevskoye ancient town // Sovetskaya archeologiya. No.1. P.267-270).

Shavkunov E.V. 1992: Шавкунов Э.В. С объективных позиций. Бохай в трудах корейских исследователей (по публикациям Сон Ки Хо, Республика Корея) // Россия и АТР. 1992. №2. С. 70-80 (From impartial positions. Bohai in works of Korean scholars (by Song Ki Ho's publications) // Russia and the Pacific. No.2. P. 70-80).

- Shavkunov E.V. 1993:** Шавкунов Э.В. О зарубежных концепциях истории Бохая // Вестник ДВО РАН. 1993. №1. С. 88-94 (Foreign conceptions of Bohai history // Bulletin of the Far Eastern Branch, Russian Academy of Sciences. No.1. P. 88-94).
- Shavkunov E.V. 1996:** Шавкунов Э.В. Декор бохайской кровельной черепицы и его классификация // Археология Северной Пацифики. Владивосток, 1996. С. 127-144 (Decoration of Bohai roof tiles and its' classification // Archaeology of North Pacifica. Vladivostok. P. 127-144).
- Shavkunov E.V. 1997:** Шавкунов Э.В. Исследования на Абрикосовском селище в 1996 г. // Вестник ДВО РАН . 1997. № 1. С. 82-85 (Researches at Abrikosovskoye settlement in 1996 // Bulletin of the Far Eastern Branch, Russian Academy of Sciences. No.1. P. 82-85).
- Shavkunov E.V. 1997a:** Шавкунов Э.В. Государство Бохай и средневековая Корея // Россия и АТР. 1997. №2. С. 44-48 (Bohai state and medieval Korea // Russia and the Pacific. No.2. P. 44-48).
- Shavkunov E.V. 1998:** Шавкунов Э.В. Наконечники стрел Марьяновского городища // Россия и АТР. 1998. № 3. С. 107 – 113 (Arrowheads of Maryanovskoye ancient town // Russia and the Pacific. No.3. P. 107-113).
- Shavkunov E.V., Shavkunov V.E. 1998:** Шавкунов Э.В., Шавкунов В.Э. Новые находки. Раскопки на дворе Абрикосовской кумирни и на Ауровском городище в 1997 г. // Россия и АТР. 1998. № 1. с. 72-74 (New findings. Excavations of the yard of Abrikosovsky temple and Aurovskoye ancient town in 1997 // Russia and the Pacific. No.1. P. 72-74).
- Tolstokulakov I.A. 2002:** Толстокулаков И.А. Очерк истории корейской культуры. Владивосток, Издательство Дальневосточного университета, 2002 (Studies in history of Korean culture. Vladivostok: Far Eastern National University Press).
- Zhang Taixiang 1981:** 張泰湘. "Dachengzi gucheng diaochaji 大城子古城調查記 (Research of Dachengzi ancient town)", Wenwu ziliao congkan 文物資料叢刊 (4), Beijing, pp. 223-227.

**ARCHAEOLOGICAL SITES OF BOHAI EPOCH
mentioned in this work**



一般論文



東北アジアの歴史紛争の論理とその淵源 ： 疏通のための省察

柳鏞泰 (ユ・ヨンテ、ソウル大学)

Journal of Northeast Asian History
volume 4, number 2 (Dec 2007) : 148-164

*Copyright © 2007 by Northeast Asian History Foundation. All Rights Reserved.
No portion of the contents may be reproduced in any form without
written permission of Northeast Asian History Foundation.*

東北アジアの歴史紛争の論理とその淵源

: 疏通のための省察

柳鏞泰 (ユ・ヨンテ、ソウル大学)

はじめに

「概して隣国同士は仲が悪いものである。したがって、日韓両国の歴史認識を共有しようとする試み自体、あまり意味がない。ローマ人の物語のように、第三者を話題にすれば、考えが同じであることに意外と驚くかも知れない」。日本人作家、塩野七生の言葉である。しかし、「ローマ人の物語」が日韓両国で数百万部の売り上げを見せ、韓中日の世界史教科書も彼女の忠告に劣らずローマに起源を持つヨーロッパ史を中心に作られているが、彼女が期待した効果はほとんど見られないようだ。

その最大の原因は、歴史教育に求められるべきである。韓中日の三国は、いずれも自国史と世界史に両分した歴史教育を行い、その中でそれぞれ自国中心主義とヨーロッパ中心主義に傾倒しており、東アジアの隣国の歴史への配慮が極めて足りない。中国・日本・韓国のいずれも自国史を東アジアの脈絡のなかで把握する視角が欠如しているという指摘は¹⁾、三国の歴史認識に秘められた「隣の軽視」の「東アジアの疎外」現象をよく物語っている。このように、隣国を軽視し疎外する歴史的認識が、何に由来するものであるかが明らかになれば、近年深刻化している東アジアの歴史紛争を解消する方法も見いだせるであろう。それは、誰もが知るように、ヨーロッパ近代国家を自らのモデルとする国家主義の所産であるが、一般的な国家主義を超える東アジア的な特殊性の所産でもあるという点が見過ごされてきたのではないかと思う。ドイツは周辺

1) ペク・ヨンソ、〈中国に‘アジア’があるのか?〉、《東アジアの帰還》、創作と批評社、2000年；中村哲編著、韓国学中央研究会 韓国文化交流センター訳、《東アジアの歴史教科書はどのように書かれているのか》、ソウル：エディター、2006年(백영서, 〈중국에 ‘아시아’ 가 있는가?〉, 《동아시아의 귀환》, 창작과비평사, 2000; 中村哲編著, 한국학중앙연구원 한국문화교류센터 옮김, 《동아시아 역사교과서는 어떻게 쓰여 있을까?》, 서울: 에디터, 2006)

国家に戦争責任を認めて賠償を行い、アメリカの議会もハワイ王国合併100周年を迎えて謝罪決議案を採択したが、なぜ東アジアではこのような「歴史和解」がないのかを考えれば、なおさらである。

ヨーロッパ人のヨーロッパ中心主義と異なる次元で、東アジア人による東アジア疎外現象に注目する理由がここにある。問題は、それがどこに原因しているのかである。私が思うには、それは近代日本の脱亜入欧主義と伝統的な中華主義が結合し、上昇作用した結果である。そこで本稿では、三国間の歴史紛争の主要争点を簡略に整理し、その原因をヨーロッパ中心主義の日本版である脱亜入欧主義に加え、伝統的な中華主義とのかかわりから論じていく。東アジア三国は近代以降、脱亜入欧主義を共有したが、それ以前に中国モデルに由来する帝国志向の国家体制と、中華主義をより長い間共有した。それによって、互いが自らを「華」とし隣国を「夷」とみなす二分法的な隣国蔑視の心理が普遍化したと見られるためである。その手がかりは、1922年に北京大学教授の王桐齡が『東洋史』の序文で、「わが国の士大夫は漢族文化に心酔し、長い間事大に縛られて他族をすべて我族より遙かに劣ったものと見なし、彼らを概して蠻夷戎狄と呼んだ」とし、中国と「一衣帯水の関係にある朝鮮・日本の歴史について尋ねれば、目をぼんやりとさせながら何も答えられない……東洋三国がどのような関係を持っていたかと尋ねれば、いったい何のことも分かっていない」と²⁾批判したところから見いだせる。

中国の専有物ではなく、東アジア諸国によって共有され、それによって中国はもちろん、日韓両国とベトナムも華夷区分による隣国蔑視観念が強烈だったという研究があり³⁾、これを積極的に活用したい。

1. 韓国古代史の認識：中華民族史観と日帝植民史観の同居

いわゆる「東北工程」が本格化され、韓中両国間に歴史紛争が深化すると、2004年8月に両国外交当局者は突如として会合を行ない、東北工程の研究結果を歴史教科書に反映させないことを口頭で約束した。この約束が現在までは守られているが、中学校の教科書ではない大学の歴史教材に目を向けると、事情は全く異なっている。

2) ベク・ヨンソ、〈20世紀の東アジア歴史教科書のアジア観〉、《東アジア近代知性の東アジア認識》、成均館大学校大東文化研究院 学術会議発表文、ソウル：2005年1月、31ページ、39ページ(백영서, 〈20세기 동아시아 역사 교과서의 아시아관〉, 《동아시아 近代知성의 동아시아 認識》, 成均館大學校 大東文化研究院 學術會議 發表文, 서울: 2005. 1, 31면, 39면)

3) ミン・ドゥギ、〈東アジアの実体とその展望〉、《時間との競争》、ソウル：延世大出版部、2001年；古田博司、〈東アジア中華思想共有圏の形成〉、駒井洋編、《脱オリエンタリズムとしての社会知》、東京：ミネルヴァ書房、1998年(민두기, 〈동아시아의 實體와 그 展望〉, 《시간과의 競争》, 서울: 연세대출판부, 2001; 古田博司, 〈東アジア中華思想共有圏の形成〉, 駒井洋編, 《脱オリエンタリズムとしての社会知》, 東京: ミネルヴァ書房, 1998)

現在、中国各大学の歴史科の学生にとって世界史は必須科目となっており、歴史を専攻していない学生は教養選択科目となっている。このため、いくつかの社会史の教材の中から『世界中世紀史』(北京大學出版社、1990)がまず、高句麗史を中国史とみなし、最も広く読まれている『世界通史』(全6巻、人民出版社、1997年初版)に「高句麗は中国少数民族の地方政権である」と明示されており、そのほか『世界史綱』(上海人民出版社、1997年初版)と『高教版 世界古代史』(高等教育出版社、1999年初版)も同様である。これらの教材は、10～20あまりに上る全国各地の主要大学の教授が参加・編纂したもので、それだけに広く使用されており、重版を重ね、2007年度現在も使用されている。

これらの教材においては、韓国史ではなく「朝鮮史」という名前が使われているが、その古代・中世史に対する認識は、一言で中華民族史観と日本の植民史観の同居であると要約できる。

『世界通史』は1996年まで、箕子の朝鮮建国説は信じられないと否認しており、漢の四郡設置を朝鮮に対する侵入であるとし、後に高句麗が楽浪を逐出したことを朝鮮古土の収復と見なしていた。ところが、1997年版を見ると、周の武王が殷の貴族である箕子を朝鮮侯に封爵し、箕子が現在の平壤にある王儉城に箕氏朝鮮を建てたとし、従来の見解を覆している。

高句麗については、従来一貫して百済・新羅とともに、朝鮮の三国時代を構成する一国として叙述してきたが、1997年からはこれを覆し、「高句麗は漢の玄菟郡の管轄下にある中国少数民族であり、紀元前37年に政権を樹立した後も、東漢、魏晋南北朝、隋唐に至るまで中原王朝に隷属された中国少数民族の地方政権である」としている。その次に、高句麗の南進過程、つまり中国勢力の南進過程について、簡潔ながらも余すところなく叙述している。唐の高句麗侵略は、侵略ではなく征伐、つまり「中国から分立しようという動きを終息させる」ための統一戦争と見なしたのである⁴⁾。しかも『亜洲史』(2006)は、これと同一の論理に依って、百済と新羅の王も唐帝国の地方政権であったと主張している⁵⁾。

これに先立ち、『世界史』(全6巻、高等教育出版社、1994年初版、2004年13刷)は、まず「新羅統一以降の朝鮮」から述べられており、三国時代が完全に削除されている。これは数年後、中学の教科書にも引き継がれ、『義務教育標準実験本 世界歴史』(人民出版社、2003年8月)も韓国の三国時代が削除されている。このように、古朝鮮・高句麗を韓国史から除外するものや、中国史であるとする中国の大学教材の韓国史認識は、1990年から登場したものであるが、その論理はどのようなものであろうか。教材で

4) 崔連仲主編、《世界通史》古代卷、北京：人民出版社、1997(2004)年、437-442ページ。

5) 許海山主編、《亞洲史》、北京：線裝書局、2006年、70-72ページ。

は何の説明もないが、研究論書を通じてみれば、二つがある。⁶⁾

まず注目されるのが、朝貢冊封の論理である。高句麗が長い間、中原王朝に朝貢をしていたことを根拠とし、これを中原に隷属した地方政権であると見なしている。これは、中国と周辺国家の朝貢冊封関係を、春秋時代の周王室-諸侯国間の封建関係と同一なものとする見解により、中国と非中国の境界を取り払ってしまう中華主義の極端な例である。珍しいことは、中国にとってはこれほど重要な「朝貢」が、彼らの大学の教材や中学の教科書には、全く言及されていないという点である。これに対し、日本の歴史教科書は、朝貢関係を非常に重視しているだけではなく、便宜的に解釈して、日本の特殊性と優越性を強調し、朝鮮の隷属性を際立たせている。最近、日本の文部省の検定を通過した『中学社会：歴史的分野』（扶桑社、東京書籍、帝国書院、清水書院、日本書籍新社、2005）を見ると、日本の朝貢は中国から朝鮮半島南部に対する支配権を認めてもらうための外交手続と見なす反面、朝鮮の朝貢は自主の欠如を表す表徴のように見なしている。また日本に対する琉球の朝貢も同じような意味と認識し、琉球合併を正当化している⁷⁾。日中両国は、いずれも朝貢の論理を利用して隣国の歴史を無視しているのである。

しかし、この論理は極めて恣意的であるため、日本・ベトナムなど他の朝貢国も中国史に含まれるのかという反論に答えることができない。これに次ぐ論理が、民族融合論による中華民族論である。その骨子は「現在の中国の境内にあるすべての民族は、中華民族であり、彼らの歴史は中国史である」というものである。このような中華民族論は、20世紀初頭に梁啓超と孫文などによって形成され、1920年代以降、教科書の反帝闘争史認識の基準となってきたが、当時においてすら中華民族が清末に成立したものと見なされてきたので、前近代東アジアの周辺民族との関係には、この基準が適用されてこなかった。⁸⁾ところが、1980年から従来の立場を変えて、それが秦以前に成立されたと見なし、前近代の東アジアにも適用した。ある教材には「漢族と匈奴、鮮卑、氐、羯、羌はすべて黄帝の子孫である」と記され、これは先秦時期の華夏族であっても、漢以降の漢族であっても、すべての少数民族を自らの兄弟とみなす伝統を持っていたためであるとしている。⁹⁾このように、中華民族が秦以前に成立し、それ以来、幾

6) ヨ・ホギユ、〈中国学会の高句麗対外関係史研究〉、《韓国古代史研究》31集、2003年9月(여호규, 〈中國學界의 高句麗 對外關係史 研究現況〉, 《韓國古代史研究》31집, 2003. 9)

7) ユ・ヨンテ、〈日本歴史教科書の東アジア認識：脱亜觀念の持続と変化〉、《歡呼の中の警鐘：東アジアの歴史認識と歴史教育の省察》、ソウル：ヒューマニスト、2006年、243-280ページ(유용태, 〈日本歴史教科書の 동아시아 인식: 脫亞觀念의 持續과 變化〉, 《歡呼 속의 警鐘: 동아시아 歷史認識과 歷史教育의 省察》, 서울: 휴머니스트, 2006, 243-280면)

8) ユ・ヨンテ、〈中華民族論と東北地政学：東北工程の論理根拠〉、前掲書、203-226ページ(유용태, 〈中華民族論과 東北地政學: 동북공정의 논리근거〉, 같은 책, 203-226면)

9) 吳于廑・齊世榮主編、《世界史》古代史 上、北京：高等教育出版社、1994(2004)年、430-431ページ、456ページ。

度にわたって周辺民族を融合して拡大したのであれば、古朝鮮・高句麗も黄帝の子孫になり、中国史に帰属するしかない¹⁰⁾。また従来は匈奴や蒙古・満州族の南下をすべて異民族の中国「侵略」としてきたが、現在においては先の論理にもとづき、これらを中華民族の「統一」とし、民族の融合と見なしている¹¹⁾。このようになれば、中国が近代以前に起こしたすべての戦争は、統一のための内戦になってしまう。このような歴史認識は、中華民族史観の膨張ともいえよう。

また、これ以外に注目されるのは、中華民族史観の中に、日本の植民史観が以前から流入、同居してきた点である。人民出版社の《世界通史》(1972)、《世界史》(1983)、《世界通史》(1997)に一貫して、いわゆる「任那日本府説」の内容が記されているが、その内容が次第に量質ともに強化されていくことが分かる。1997年版は「大和国家は非常に早い時期から隣国朝鮮を侵略し、4世紀中葉は朝鮮半島南端の弁韓伽倻国の手中から任那(今の釜山・金海;原文ママ)を略奪し、北への侵略を続ける拠点とした。新羅の力が強くなり、大和侵略勢力を朝鮮半島から追い出した」¹²⁾とあり、以前の版で「任那を侵佔して北に蚕食する拠点」としていたことに比べれば、大和勢力と任那の内容をさらに深く扱っているのは明らかだ。

中国の歴史教材に任那日本府説が登場したのは、20世紀初頭に中国の近代学校の歴史教育が始まってからである。当時の中国は、日本の教材と教師をほぼ直輸入していたような状況にあり、それによって歴史教育を進めていたため¹³⁾、明治時代における日本の植民政策学の一端を担っていた植民史学の研究成果が、そのようなルートを通じて無批判的に受容され、今日に至っている。これを典型的に示す例が、黄炎培の《朝鮮史》(上海商務印書館、1929)である。一時は「動かすことができない事実」と見なされていたこの説は、その後の研究の進展により、日本ですらほぼ廃棄されており、最近の日韓歴史共同委員会でも否定されている¹⁴⁾。扶桑社版もこのような趨勢をある程度反映して、「大和朝廷」「大和国家」ではない)が高句麗の南下に対応して「半島南部の任那という所に拠点を構築していたものと考えられる」と消極的で曖昧な表現に

10) アメリカの学界では中華民族論を「没歴史の見解」と一蹴しているだけでなく、高句麗を中国史に帰属させようという中国の企みを批判し、高句麗は中国から独立した国家であり、韓国史に属すると明示した。Suisheng Zhao, *A Nation-State by Construction: Dynamics of Modern Chinese Nationalism*, Stanford Univ. Press, 2004, 39-40면; Patricia B. Ebrey, Anne W. Walthall, James B. Palais, *East Asia: A Cultural, Social, and Political History*, Houghton Mifflin Co., N.Y.: 2006, 126-127ページ。

11) バク・ジャンベ、〈近代中国の歴史教育と中華民族のアイデンティティー1・2〉、《中国近現代史研究》19集、20集、2003年9月、2003年12月(박장배, 〈近現代中國의 歴史教育과 中華民族 정체성 1・2〉, 《中國近現代史研究》19集、20集、2003年9, 2003年12)

12) 崔連仲主編、《世界通史》古代卷、458-459ページ。

13) Douglas R. Reynolds, *CHINA, 1898-1912: The Xinzheng Revolution and Japan*, Harvard Univ. Press, 1993年, 117-118ページ。

14) 《韓日歴史共同研究報告書》第1巻、ソウル: 韓日歴史共同委員会、2005年7月に載せられた数々の論文と座談会の記録を参照。

後退している¹⁵⁾。にもかかわらず1世紀以上もの間、中国の教材は扶桑社版の記述よりもより強い植民史観を持ち続けているのである。要するに、中国の大学教材の韓国史認識は、中華主義と植民主義の結合による、中国少数民族の地方政権である高句麗の南下と任那に拠点をおいた日本勢力の北進という、日中並進の構図となっている。

2. 日本の東アジア侵略と戦争責任認識: 大国主義、反共主義、徳治観念

東アジアにおいて独立王国として存在していた琉球を、明治初期に日本が合併したのは、明らかに日本の最初の対外侵略であり、その後、太平洋戦争にまで絶えることなく拡大した東アジア侵略の出発であった。韓中日のいずれも、琉球が1870年代まで独立した王国として東アジアの一員であったことを認めているが、琉球合併を侵略と認識している中学校教科書を探すのは困難である。その大半は、言及すらしていない。大学の教材である中国の『世界通史』は、「日本は、欧米国家に対する屈従的地位から抜け出せない状態にあり、早くから対外侵略拡張の道へと進んだ。その矛先はまず琉球、台湾、朝鮮に向けられた」とされている。そして、その延長線で、日清戦争を明確に侵略戦争として規定した¹⁶⁾。韓国の教科書は、日清戦争と日露戦争を朝鮮と満州を掌握するための、連続した侵略戦争であると解釈している。

先述の日本の教科書は、琉球合併の過程を比較的詳細に記述しているにも関わらず、これを侵略と見なすものはない。どの教科書も、朝鮮合併の信号弾であった「琉球合併」について、ただ国内の事務処理を意味する「琉球処分」と認識するだけである。さらに琉球の国家主権をめぐる問題は、合併当時に日中間の外交交渉の対象であり、そのため第二次世界大戦後の戦後処理においても連合国の内部で日本からの分離の是非が議論となったが、これに関心をおく教科書はない。

日本の侵略戦争は敗戦によって終結し、戦犯裁判のために連合国は侵略戦争の範囲を定めなければならなくなった。扶桑社の教科書は、日本が帝国主義でも軍国主義でもなく、植民地を領有したこともなく、侵略戦争をしたこともないという立場をとっている。これによって、日本の植民地や占領地域の中で反帝国の民族開放運動が起きたこと自体を認めずにいる。ただ、欧米の列強のみを植民地を領有した帝国主義であると描写し、日本は彼らからアジアを解放する解放者として描写しているのである。ひいては、第三人(アメリカの外交官)の言葉を引用して、中国の抗日民族運動を明白に侮蔑している。東アジアの侵略者である帝国日本を解放者と認識する扶桑社版の転

15) 《中学社会：新しい歴史教科書》、東京：扶桑社、2005年検定合格本、32ページ。

16) 劉祚昌等主編、《世界通史》近代卷 下、北京：人民出版社、1997(2004)年、826-827ページ。

倒した歴史認識の中に、東アジアは存在していない。

それ以外の日本の教科書は、日本の侵略戦争を認めながらも、その範囲に関しては1931年の満州事変以降と限定し、琉球合併、日清戦争-義和団鎮圧戦争、日露戦争、朝鮮合併、およびその過程での義兵鎮圧戦争など、それ以前の侵略行為を責任範囲から除外している。なぜこのようになったのだろうか。よく知られているように、アメリカの太平洋戦争史観が、戦後日本人の戦争観に決定的なガイドラインとして働きかけたことは事実であり、これが教科書にも影響を与えたのである。『世界通史』は、米ソ中英仏などの11カ国で構成された「連合国極東委員会が名目上、対日政策決定の最高機構であったが、その決議はアメリカ政府を通じてアメリカ占領軍が執行したため、事実上アメリカの単独占領地位を変化させることができなかった」としている。そして、国共内戦で「共産党が勝利すると、アメリカがアジア政策の終点を日本へと変え、日本扶植政策を加速化した」と指摘している¹⁷⁾。これは、アメリカの単独侵略が不徹底な戦後処理を招いたという論理と変わらない。このような見方は、最近の中国人の研究から見いだせる¹⁸⁾。韓国の高等学校『世界史』の三種類のうち、ひとつはこれについて全く言及がなく、残りの二つは戦犯裁判の結果のみを、ドイツを中心に簡略に記述しているだけである¹⁹⁾。

しかし、東アジア的な視点で見れば、戦後処理の過ちをアメリカの単独戦略のせいのみと決めつけるのは誤りであろう。この過程において中国が果たすべき役割は、戦後のドイツに対するフランスの役割と同じくらい大きなものであったが、自ら放棄してしまったためである。東京裁判を主導したアメリカが当初設定した侵略戦争の範囲は、1941年の真珠湾攻撃以降であった。しかし、中国が1931年の満州事変以降まで拡大すべきだと要求し、アメリカがこれを受け入れることによって、そのように決定された。台湾を植民地化した日清戦争を侵略戦争と規定した中国が、どうして満州事変以降を基準としたのかは明らかではないが、対日政策決定に対する中国の影響力が決して小さくならなかったことは明らかである。

中華民国政府は、抗日戦争で重大な役割を果たしたと見なされ、対日占領政策決定の主体である連合国極東委員会の一員になった。当初、アメリカが樹立した対日分割占領計画(米英中ソの四カ国共同)は原爆投下による日本の初期降伏で廃棄され、

17) 徐天新等主編、《世界通史》當代卷、北京：人民出版社、1997(2004)年、23-24ページ。

18) 王元周(Wang Yuanzhou)、〈日本歴史教科書問題に対する中国の認識と対応〉、《東アジアの歴史葛藤を見つける五つの視線-2005年日本教科書問題を中心に》、アジア平和と歴史教育連帯国際シンポジウム、ソウル：2006年12月、28ページ(王元周(Wang Yuanzhou)、〈日本歴史教科書問題에 대한 中國의 認識과 對應〉、《동아시아 歴史葛藤을 바라보는 다섯 가지 視線-2005년 日本教科書問題를 중심으로》、아시아평화와 역사교육연대 국제심포지엄, 서울: 2006. 12, 28면)

19) オ・グムソン 他、《高等学校世界史》、ソウル：クムソン出版社、2003年、288ページ；キム・ウンスク 他(、《高等学校世界史》、ソウル：教学社、2003年、338ページ(오금성(외)、《고등학교 세계사》、서울: 금성출판사, 2003, 288면; 김은숙(외)、《고등학교 세계사》、서울: 교학사, 2003, 338면)

アメリカの主導と中国の補助を結合する占領政策へと急旋回した。中国はアメリカの要請にしたがい、当初は三師団の派兵計画を立てていたが、それに満たない1万5000人に縮小し、1946年6月にはそれも放棄した。ソ連に対日占領の参加の余地を与えず、本格化した国共内戦に備えるための選択であった。これに先立ち、蔣介石は、ルーズベルトが天皇制の存廃を問うた際に存続を希望し、日本の分割占領と厳格な賠償要求にも反対した。これもまたソ連の影響力の拡大を阻止するための配慮からであった。一方、中国において投降した日本軍に対しては、政府軍と同等の月給と補給を提供しながらも、これらを反共内戦に動員し、そのため自国内で進めたBC級の戦犯裁判も極めて寛大に処理したが、結局は大半を帰還させた。以德報怨の論理からきたものであった²⁰⁾。

こうした国民政府の対日政策は、国共間の政治協議を通じて、内戦を防止・猶予することにより、対日占領遂行に中国軍を動員しようとしていたアメリカの計算を崩した。その結果、アメリカの対日政策が1947年から「逆コース」に旋回するにあたって少なからぬ影響を与えたものと見られる。この時から、軍国主義の戦犯が釈放されると、中国の世論を主導した知識人は、大々的な反米扶日運動を展開しつつ、アメリカの助けで日本が復興し、中国を再侵略するかも知れないという危機感を持って国民政府の積極的な対応を促した。「もし、中国が泥沼にはまった日本の足首をつかんでいなかったなら、真珠湾攻撃以降、アメリカが受けた苦痛はより大きかっただろう。日本に対する戦勝は中米共通の功勞であるため、中国は日本の処理に対し、当然、言及する余地がある」というのが、その論理であった²¹⁾。しかし、国民政府はこれを「共産党のそそのかしによる策動」と見なして鎮圧しつつ、連日反共の戦略と以德報怨の寛大な原則を堅持し、軍国主義の生産の責任と権限を自ら放棄してしまった。それによって、戦後処理の全過程がアメリカの単独決定に委ねられただけではなく、これによって日米中からなる反共同盟の形成を期待していた国民政府は、中国人の巨大な反日民主主義の逆風に遭い、国共内戦で国民の支持を失ってしまった。国民党政権が国共内戦で破れたため、フランスのような役割を担当することができないとする意見があるが²²⁾、これは原因と結果を逆転させた指摘であり、国民党政権が反共内戦を目的にみずからの役割を放棄した結果、敗北したものと考えられる。

このような国民政府を批判しながら、反日反米の民族主義の情緒を煽動していた共

20) 黄自進、〈抗戦結束前後蔣介石の対日態度：「以德報怨」真相的探討〉、《中央研究院近代史研究所集刊》45期、2004年9月、143-185ページ。

21) 廖風徳、《學潮與戦後中國政治》、臺北：東大圖書公司、1994年、208ページ。

22) 黄自進、前掲論文、183-185ページ；吉田裕、《日本人の戦争観》(ハ・ジョンムン 他)、ソウル：歴史批評社、2004年、82-83ページ(黄自進, 앞의 글, 183-185면; 吉田裕, 하중문(외) 옮김, 《日本人의 戦争觀》, 서울: 歴史批評社, 2004, 82-83면)

産党も、政権を掌握した後は、日本に対して国民政府と同様に寛大であった。したがって、ナチズムに対する厳格な処罰と賠償を実行したヨーロッパの法治観念と比較すると、中国の徳治観念は、徳よりも力に依存しつつ、戦争による近代日本の成功神話を盲信する日本の軍国主義者の活動空間を広げ、戦後日本の脱亜入米を自ら招いたのではないかとも思われる。それが戦後日本の歴史認識に与えた影響、特に隣国アジアを無視する皇国史観の持続は、決して小さいとは言えないである。

3. 世界史教科書の構成体制: 東アジア人による東アジア疎外

韓中日のすべてが「国際理解の増進」を歴史教育の目標のひとつとして重視している。ここに、隣国東アジアはどれほど配慮されているであろうか。ヨーロッパ諸国の教科書が、「隣国国際」を重視しているのに比べて、三国の教科書は「強大国国際」を非常なまでに重視した。いわば、大国主義の強烈な表現である²³⁾。東アジア的な脈絡を考慮しない歴史認識は、教科書の構成にも強く現れている。まず、記述の量において、三国の教科書が自国以外の東アジアについて記述した量は、中国の教科書が7.9%、日本18.4%、韓国20%で、ヨーロッパに関する記述(中国64、日本45.4、韓国34.2)よりも顕著に少ない²⁴⁾。このような偏向は、量のレベルを越え、内容の構成にもみられる。

日本の教科書がいかにヨーロッパ中心的な視角で構成されているのかについては、すでに何度も指摘されている²⁵⁾。中国の『初中歴史課程標準』(2001)、『高中歴史課程標準』(2003)という世界史の教科書における必須学習テーマのうちアジアに関するものは、前者が23テーマ中1つ(中古アジア)、後者は11テーマ中ゼロである²⁶⁾。このような偏向は、教科書の目次にもそのままみられる。小中『世界歴史』(試験本、華東師範大学出版社、2003年8月)は、世界史を複数の区域文明が全救(全域??? 번역자에게 확인바랍니다)文明に向けて一体化していく過程と理解し、中世区域文明の単元で一つの課(東亜・南亜文明)に登場するが、それ以降の時期になると完全になくなっている。高中『世界近代史』(人民出版社、2003)は、それより少し多く、三つの節(16~18世紀的亞洲、亞洲革命暴風、亞非拉民族民主運動)に登場する。しかし両者のいずれも、単元・章のテーマでは、アジアや東アジアに関するものは見いだせない。これに比べて、大学の教材である『世界通史』は、アジアと東アジアを比較的詳細に叙述してい

23) 韓国人の大国主義に関しては、パク・ミョンギユ、〈小国主義と大国主義を超えて〉、《創作と批評》122号、2003年夏号(박명규, 〈小國主義와 大國主義를 넘어서〉, 《創作과 批評》122호, 2003년 여름)参照。

24) 中村哲編著、前掲書、313ページ。

25) 宮嶋博史、〈近代を見直す〉、《創作と批評》2003年夏。

26) これに関する紹介と分析は、キム・ユリ、〈歴史教学大綱から歴史過程標準へ—最近の中国の歴史教育過程の改革〉、《歴史教育》96集、2005年12月(김유리, 〈歷史教學大綱에서 歷史課程標準으로—최근 중국의 역사교육과정 개혁〉, 《歷史教育》96집, 2005. 12)参照。

るが、東アジアの近代史の中で日本はない。日本は、ただ欧米を主とする資本主義の発展史の中でのみ把握されているだけである。

韓国の『中学社会』(教学社など8種、2002)の世界史領域も、これと大差ない。前近代よりも近現代に近づくにつれて、東アジアの疎外現象は深刻になる²⁷⁾。前近代史では、中国に比重がおかれているが、それ以外の日本とベトナムなどの他の東アジア国家の歴史は、ほぼ無視されている。特に、日本に対しては、韓国の先進文化を日本に伝えたという優越感が強く反映している反面、日本を後進国と見なし、軽視する認識が投影されている。近現代史は国民国家の形成過程を中心に、中国と日本の例に比重がおかれているが、その過程が第一次世界大戦直後に完了すべきもののように記述されており、日本の成功と韓中の失敗を自明のように表現している。その結果、各国が置かれた条件の違いによって、国民国家形成の時期差を認めつつその原因を探求するのではなく、成敗の結果にとらわれる歴史認識の単純化を招来するに至った。

現代史は、第一次・第二次世界大戦を中心に構成された結果、西欧の強大国中心の国際情勢に異常なまでに偏っており、そのためアジアは章よりも小さな節で扱われている。それもアフリカとまとめて「アジア・アフリカ各国の民族運動」という節(12ある節のたったひとつ)に、その時期にも両大戦の間に限定されている。教科書の記述内容を見ても、アジア史は近代のみであり、現代はほとんどないように分解されてしまっている。

また冷戦体制についても、ヨーロッパの状況のみで記述が終了してしまっているため、韓国・北朝鮮を含むアジアの冷戦構造とその余波への関心が閉ざされている。冷戦についてはヨーロッパにおけるその名の通りの冷戦のみに触れているが、アジアにおいては、「冷戦体制の中の熱戦」が30年間続き、政治をはじめ、個人の意識と思想、学問や教育が抑圧され、奇形化するという苦痛の時代が強要されてきた。このような冷戦の中心に位置していながら、冷戦体制の維持・再生産の機制として作用したベトナム戦争は、いかなる形であれ記述すべきであったが、言及は皆無に近い。記述があってもアメリカとベトナムの戦争としてのみ記し、北朝鮮と韓国、日本と中国を含む「東アジアの戦争」という視点は見られない²⁸⁾。韓国軍と中国軍の参戦に触れた教科書は皆無である。中国の教科書が、中国軍の朝鮮戦争参戦を叙述しながら、ベトナム戦争の参戦に触れていないのは理解に苦しむ。

東アジアの疎外の中でも目立つのは、小国の疎外現象である。中国や韓国では、民

27) 以下の教科書分析は、ユ・ヨンテ、〈韓国歴史教科書の中の東アジア国民国家形成史〉、前掲書、442-475ページ(유용태, 〈韓國歷史教科書 속의 동아시아 國民國家形成史〉, 앞의 책, 442-475면) 参照。

28) ベトナム戦争を東アジアの視角から取り扱った論文としては、ユ・ヨンテ、〈東アジアのベトナム戦争：南北三角同盟の対応〉、前掲書、281-345ページ(유용태, 〈동아시아의 베트남전쟁: 南北三角同盟의 對應〉, 같은 책, 281-345면) 参照。

族運動の記述において、帝国に反対する民族を独立と統一の絶対的主体、国家形成の唯一の主体と見なしているため、その内部の少数民族は最初から排除されている。そのため主体民族と少数民族の間に作用する位階構造が視野に入ってくるはずがない。琉球の歴史が排除され、チベット・モンゴル・ウイグル族の歴史が見過ごされているのもそのためである。一方それには、反帝民族論の近代主義以外にも、前近代の時期に内面化された朝鮮中華主義も影響を与えたものと見られる。例えば、衛正斥邪運動に参加して抗日運動を行い、1908年には満州に亡命して中国で活動した朝鮮の抗日儒学者、李承熙の「五族中華論」は、中華主義と反帝民族主義が結合して少数民族を無視した認識論的策略の転向を見せている(무슨 말인지 잘 이해되지 않습니다. 번역자에게 확인 바랍니다)。彼には、そのとき丁度独立した大蒙古国は眼中にもなかった²⁹⁾。

このような「東アジアの不在」、「小国の不在」の世界史構成は、一次的に脱亜入欧時代の日本の国家主義・大国主義から影響を大きく受けた。19世紀末の梁啓超の指摘のごとく「日本人所謂世界史、萬國史、實皆西洋史耳」、「日本人所謂東洋史者、對于泰西而言也…。率十之八九紀載中國耳」であった³⁰⁾。韓国の兪鉦兼も1908年、『東洋史教科書』で「万国史と称して東洋の歴史を編入する者が少ないため、西洋人にとってはそうかもしれないが、東洋人としてこのあり様は、東洋に在する民族と国家を無視し、自棄することではないのか」と指摘した問題も、それに起因するものであった。ここに「中国の士大夫は、長い間事大に縛られ、他族はすべて我族よりもずっと劣ると考え、彼らを概して蠻夷戎狄と呼んだ」という王桐齡の指摘と、李承熙の五族中華論に見られる中華主義が重なりあえば、東アジア疎外はより深刻になるしかない。

20世紀においては、韓中日の三国に共有されたこのような世界史の構成を脱皮しようとする努力が、様々な形で模索されていた。その中でも、韓国政府が2006年末に高校の選択科目として「東アジア史」の新設を決定したのは、このような東アジアの疎外現象を解消する糸口を作り上げる契機になるであろう。既存の自国史と世界史の二分法の構図は、東アジアの隣国を配慮することが困難な世界史認識構図だと判断し、新しい地域史のパラダイムを導入することにしたのである。その試みが成功すれば、現在の自国史・世界史の二分法構造がもたらす自国中心主義と、ヨーロッパ中心主義の間で歴史認識の均衡をつかむことができるであろう。

29) 王元周(Wang Yuanzhou)、〈李承熙の中華主義と共和政治論〉、ソウル大学校 奎章閣韓国学研究院セミナー発表文、2007年5月。

王元周(Wang Yuanzhou)、〈李承熙의 中華主義와 共和政治論〉、서울대학교 奎章閣韓國學研究院 세미나 발표문, 2007. 5.

30) 〈東籍月旦〉(1899)、《梁啓超全集》第一冊、北京出版社、1999年、329ページ、332ページ。

4. 東アジアの歴史紛争の歴史的淵源

以上で確認した、東アジア人による東アジア疎外の現象を招いた歴史的淵源は何なのか。東アジアは世界史に類例を見ないほどの特殊な経験、すなわち古代以来、中央集権国家の形成と営為の長い経験を持っている。各国は中国モデルの国家制度を受容し、自らの情勢に遭わせて適用し、その過程で当然中国的世界観である中華の論理と、帝国の論理もともに受容したのだが、小規模の国家であったためか、帝国意識と帝国の論理はあまり注目されなかった。

中国は周辺諸国を四夷と見なし、彼らが皇帝の徳を慕って自発的に朝貢してきたとして冊封した。したがって、朝貢を怠ったり、行かない周辺国があれば、それは皇帝の徳を否認することと見なされ、攻撃し臣服させて、これを「征伐」であると道徳的に正当化した。中華民国の最高指導者であった蔣介石が、中国人は常に周辺国を徳によって教化してきたのであり、一度も侵略したことがないと豪語したのも、そうした脈絡からであった³¹⁾。そのため、歴史上の数多くの朝貢国が征服され消えた事実が、彼の眼中に入るはずがない。それにも関わらず、四夷がなければ「中国」の概念は成立することができないため、これをすべて征服して、自らの領土とすることもできなかった。

儒教經典にも華夷大防(種族が異なれば必ずその心も異なる、左氏傳)の種族主義と華夷一統(ただ教化があるだけで、種族の区別はない、論語)の文化主義が共存するが、中国の歴代王朝は中原出身であっても、異族出身であっても、唯一絶対の天朝を自任しつつ、必要にしたがってこの二つの論理を諸刃の剣と見なし、絶えず支配領域を拡張することができた。そうして、これを歴史編纂にそのまま反映したが、『史記』を初めとした歴代の正史が、すべて自己の王朝の記述に加え、藩属九服の諸地域を列伝に盛り込むことによって、天下観念を歴史化したのである³²⁾。このように、四夷も文化主義によって諸侯国に次ぐ天下体系の一環として含まれていたため、治国と平天下は中国支配層の連続した実践課題と考えられた。このような中華主義的世界観は、20世紀の中国人にも形を変えて受け継がれた³³⁾。

31) 「五千年以来中国は民族自衛の戦争は行っただが、侵略のために軍事を動員したことはない。」と自負した。蔣介石、《中國之命運》(ソングジョン)、ソウル: 新世代社、1946年、126ページ(蔣介石, 송지영 옮김, 《中國之命運》, 서울: 新世代社, 1946, 126면)

32) コ・ビョンイク、〈中国歴代正史の外国列伝〉、《大東文化研究》2集、1966年、153ページ(고병익, 〈中國 歴代正史의 外國列傳〉, 《大東文化研究》2집, 1966, 153면)

33) ユ・ヨンテ、〈中国人の「南朝鮮漢城」：20世紀の中華主義〉、《東亞洲歴史研究》4集、1998年12月；王元周(Wang Yuanzhou)、〈認識他者與反觀自我：近代中國人的韓國認識〉、《近代史研究》2007年2期；楊念群(Yang Nianqun)、〈何謂“東亞”-近代以來中日韓對“亞洲”想象的差異及後果〉、《東アジア近代知性の東アジア認識》、91-98ページ(유용태, 〈中國人の「南朝鮮 漢城」：20세기 中華主義〉, 《東亞洲歴史研究》4집, 1998. 12; 王元周(Wang Yuanzhou), 〈認識他者與反觀自我：近代中國人的韓國認識〉, 《近代史研究》2007년 2기; 楊念群(Yang Nianqun), 〈何謂“東亞”-近代以來中日韓對“亞洲”想象的差異及後果〉, 《東아시아 近代知性の東아시아 認識》, 91-98면)

このような天下観念は、国家規模で見れば、中国と比べ物にならないほど小さな朝鮮・日本・ベトナムなどの周辺諸国にも受容された。そして、これら小国も中華を自負しつつ、自国の周辺に四夷を設定する中華主義を共有しつつ、小天下秩序を追求した。東アジア諸国は、近世以来、中華主義を共有しつつ隣国を蔑視したことが、数人の研究者によって指摘されているが³⁴⁾、筆者はそうした行為はさらに遡ると思われる。これは『史記』を正史編纂のモデルと見なした周辺国の歴史叙述と、歴史認識にもそのまま投影された。

古代以来、日本は中国正史を模倣した『古事記』と『日本書紀』にもとづき、天皇や皇后が新羅を西蕃と見なし、朝貢を受けたという傳承を信奉してきた³⁵⁾。実際に天皇に任命された大將軍の指揮下に東夷を征服し、領土を拡大する膨張政策が推進されていた。豊臣秀吉もこの論理にしたがって朝鮮が朝貢してこなければ、軍事を起こして征伐すると豪語し、侵略を断行した。この侵略戦争が失敗してからも、このような小天下秩序観念は征夷大將軍の支配体制下で『朝鮮征伐記』と『征韓録』などの参戦記録物に頼って続けられ、『大日本史』(1720)に至っては、任那日本府が諸韓国を統制したという叙述に定着した³⁶⁾。幕府が朝鮮通信使を長い間朝貢使節と見なし、18世紀の日本を代表する知識人であり幕府高位管理出会った新井白石は、「三韓はすべて日本の西蕃であり、その王と百姓はすべて日本の臣属だった」としている。この延長線で明治維新の直前に、吉田松陰は朝鮮の服属を当然のものとし、天皇への朝貢を怠った罪を問い、不服な場合には征伐しなければならないという主張を、やがて維新主導勢力になる弟子に教えた。このような征夷の歴史認識は、少数の武士層の間でだけ傳承されてきたが、明治維新以降、社会進化論と結合して帝国主義政策の一貫である征韓論とアジア主義へと発展し、一般人にも広く教育された³⁷⁾。これを背景に、1880年代になって「日本民族」の概念が登場し、小天下秩序ではない天下秩序の中心を自負するようになった。樽井藤吉の『大東合邦論』(1893)がその絶頂であるが、西洋の白人を夷と定め、東アジアを天皇の天下として設定することによって、日本を中華と見な

34) 古田博司、前掲論文〈朝鮮中華主義と日本型華夷意識の対立〉(ソン・スンチョル)、《日本研究》11号、1996年12月(古田博司, 앞의 글; 손승철, 〈朝鮮中華主義와 日本型華夷意識의 對立〉, 《日本研究》11호, 1996. 12)

35) ヨン・ミンス、〈日本の中学校の歴史教科書の古代史叙述と歴史認識〉、《韓国史研究》129集、2005年6月、195-207ページ(연민수, 〈日本 中學校 歴史教科書の 古代史 叙述과 歴史認識〉, 《韓国史研究》129집, 2005. 6, 195-207면)

36) キム・ウンスク、〈日本の古代認識と歴史教育〉、《時代轉換と歴史認識》、ソウル、2001年、299-326ページ; バク・スチョル、〈15-16世紀の日本の戦国時代と豊臣政権〉、歴史学界編、《戦争と東北亜の国際秩序》、イルチョク、2006年、196-223ページ(김은숙, 〈日本の 古代認識과 歴史教育〉, 《時代轉換과 歴史認識》, 서울, 2001, 299-326면; 박수철, 〈15-16세기 日本의 戰國時代와 豊臣政権〉, 歴史學會編, 《戦争과 동북아의 國際秩序》, 일조각, 2006, 196-223)

37) 加藤陽子、《近代日本の戦争論理: 征韓論から太平洋戦争まで》(バク・ヨンジュン)、ソウル: テハクサ、2003年、46-48ページ(加藤陽子, 박영준 옮김, 《近代日本の 戦争論理: 征韓論에서 太平洋戦争까지》, 서울: 테학사, 2003, 46-48면)

したという点で、中華主義の近代の変容であった³⁸⁾。

その他ベトナムも、中国の皇帝に対する朝貢を通じて武力侵略を避ける一方、北の中華帝国と対比される「南の中華帝国」を自負しつつ、周辺に四夷を設定した小天下秩序を形成し、東南アジア諸国の朝貢を受けつつ、皇帝国として君臨した。このような小天下観念は『大越史記全書』などの歴史書を通じて、歴史化・伝承され、実際に「朝貢しなければ征伐だ」と言って南方の小国を征服し、絶え間なく領域を拡大することによって、これを現実化した³⁹⁾。

その結果、「中華民族」の概念と同一の論理構造の「ベトナム民族」概念が、1940年前後登場した。したがって、ベトナム領土には現在、中国の例に劣らない数の少数民族が、強い独自性を維持しつつ存在している。

東アジア三国の中華主義が、近代の条約体制においても持続され、隣国を蔑視する例としては、日清修好条規における日清戦争間の三国関係からみることができる。天朝大国を自負してきた清は、アヘン戦争で破れ、ヨーロッパの列強英国と南京「条約」を結んだが、対等な条約締結を求める隣国日本に対しては、かつての朝貢国であると見下して、日清修好「条規」を結んだ。朝清水陸貿易「章程」も、これと同様である。帝国日本はすぐにこの中華主義的外交を学びとり、朝鮮を自らの朝貢国と見なし、日朝修好「条規」を結んだ。当時、清朝の当局の説明によると、「条約は彼此が対等に結ぶ約章であるが、章程は上下が定まった條規である」⁴⁰⁾という。日清修好条規は、その内容においては領事裁判権と協定関税条項を双務的に認めた対等な条約だったが、名分においてはこのように伝統的な華夷観念にとどまっていたのである。

このように、中国・日本・ベトナムの歴代王朝・国家は、終始一貫して中国の中華主義と天下秩序を模倣して自らの小天下秩序を形成し、実際に絶え間なく領域拡張を試みてきたのであり、実際に拡張に成功した。一方で韓国は、高句麗時代に小天下秩序の膨張の後、縮小を続けなければならなかった。朝鮮時代初期において、女真族などの遊牧民族の一部が領土に編入されることがあったが、やがて同化して独自の文化を持った少数民族としては残らなかった。その場合も、征服による領土拡張の結果ではなかった。

38) イ・ソンギュ、〈中華思想と民族主義〉、チョン・ムンギル 他編、《東アジア、問題と視角》、ソウル：文学と知性社、1995年、147-150ページ(이성규, 〈中華思想과 民族主義〉, 정문길(외) 편, 《동아시아, 문제와 視角》, 서울: 문학과지성사, 1995, 147-150면)

39) ユ・インソン、〈中越関係と朝貢制度〉、《中国の天下思想》、ソウル：ミンウンサ、1988年、147-184ページ；坪井善明、〈ヴェトナム阮朝(1802-1945)の世界観〉、《国家学会雑誌》96刊 11・12号、1983年(유인선, 〈中越關係와 朝貢制度〉, 《中國의 天下思想》, 서울: 민음사, 1988, 147-184면; 坪井善明, 〈ヴェトナム阮朝(1802-1945)の世界観〉, 《國家學會雜誌》96권 11・12호, 1983)

40) キム・ミンギュ、〈近代東アジアの国際秩序の変容と清日修好條規-‘條規体制’の生成-〉、《大東文化研究》41集、2002年12月、329ページ(김민규, 〈近代 동아시아 國際秩序의 變容과 淸日修好條規-‘條規體制’의 生成-〉, 《大東文化研究》41집, 2002. 12, 329면)

このように膨張と縮小の歴史経験が交錯する中、各国は自国にとって最も有利な視点を選び、歴史認識の基準としている。膨張の歴史と帝国の経験を持つ三国は、最も大きな領土を治めた最近の例を重んじて現在主義の立場をとる一方、縮小の経験を持つ韓国はこれを批判しながら歴史主義の立場をとっている。ここにおいて歴史認識の衝突が発生するのであるが、三国すべてが歴史主義の立場をとらない限り、それを避けるのは難しいであろう。

まとめ：歴史対話の展望

唯一で絶対的な中心であった中国をはじめ、それを模倣して小さな中心を目指した周辺国も、自国の朝貢は外交政略だと信じつつ、自国に対する周辺国からの朝貢は四夷の服属とみなし、隣国に不作法に対応した。両国間の認識はこのように大きな乖離が存在していたため、受け取る側では自国の威勢を高めるため、外国の使臣や商人を朝貢使節と見なして朝貢国の数を誇張しようとした⁴¹⁾。これは、単なる数の誇張を越えた問題を伴っているが、それは(小)中心国が、ある隣国を一旦朝貢国と見なしてから「朝貢しなければ征伐する」というように、武力行使の強行が常であった点がそれである。「征伐」とは、目下の非道を武力によって正す行為を意味するため、侵略や加害ではなく、道徳的に正当な権威の行使であった。したがって、複数の小中心による中層性が中華帝国とその天下秩序を批判し、変化させた内的要因として作用した点は認めるとしても、中華の論理、帝国の論理を解体したのではなく、それぞれが分配している点に注目したい。それが東アジア各国の国民の脳裏に、一般的な意味の国家主義を越えた大国主義を内面化させたのである。

韓国もこうした中華の論理から自由ではないが、現実における膨張としては現れず、日中両国の膨張によって縮小し、抑圧された歴史のみが存在する。それによって、韓国人の被害者意識は群を抜いて強烈である半面、日本をはじめ、中国とベトナムには加害者意識がほとんどなく、近現代の経験による被害者意識のみが強く残っている。「中国は、他国を徳で教化したに過ぎず、朝鮮半島を侵略したことはない」とする蒋介石の歴史認識や、日本はアジアを侵略したことがなく、ヨーロッパの支配から解放させようとしたという扶桑社教科書の歴史認識や靖国神社は、その極みである。このように、東アジアの歴史認識には、被害者ばかりが存在しているである。

このように、膨張指向の帝国論理を内在した各国の主な歴史認識は、自国内でだけ通じる自国中心主義にとどまっているため、国境を越えた瞬間、互いに衝突するしか

41) ベトナムのグエン(阮)王朝は朝貢国を13も持っていたとしたが、実際は三国に過ぎなかった、Alexander B. Woodside, *Vietnam and the Chinese Model*, Harvard Univ. Press, 1988年、239ページ。

ない。東アジアの歴史紛争の最も根深い原因は、ここにあると見られる。

このような共通点が認められるとしても、やはり韓国の歴史は千年以上も膨張の帝国経験を持っていないため、周辺国への抑圧と歴史葛藤の助長が最も少ないという点で、東アジアにおける歴史対話を率先して行える名分・位置を持っていると言える。韓国がまず国の教育課程に東アジア史を取り入れたことも、このような脈絡と関連があるのではないかと思われる。韓国の基盤は、こうした名分を除けば依然として脆弱であるが、今後の課題として、どのようなものがあるであろうか。

第一に、東アジア諸国が被害者であるという認識から抜け出し、先に強調した帝国経験と帝国意識に留意することにより、被害者であると同時に加害者であるという意識を確認する必要がある。中華の論理による朝貢秩序は礼と寛容の秩序であったとし、これを新たな東アジア地域秩序の構想の思想資源として活用しようとの意見もあるが⁴²⁾、中華の論理にもとづいて周辺小国を侵略・征服した事実を「征伐」と正当化する「加害意識の不在」を敵視し、加害者意識を回復しない限り、その被害者である隣国の小国に伝わるのは難しいであろう。それに先立ち、四夷の設定による隣国蔑視の観念からの脱皮も急先務である。東アジアにおいては、宗教すらそうした政治論理に従属し、ヨーロッパのカトリックのように、国家主義を相対化する普遍理念としての機能を果たせなかつただけに、歴史を現実の政治の束縛から自由にする国家・社会の民主化が不可欠である。自由と人権の普遍価値に立脚した民主化だけが、ヨーロッパの例のように、歴史対話の推進力となる市民社会を活性化させ、現在主義に抑留された歴史認識を歴史主義に帰着させられるであろう。

相互理解のための対話がこれまでも数度試みられているが、またひとつの試みとして、隣国の歴史教科書を翻訳して一般読者に流通させ、教育の現場で交互に使用する方法も考慮してはどうか。まず他国の教科書で授業を行い、次にこの経験による報告書を作成して各国が共有すれば、各国の教科書がいかに関心中心の大国主義の視角から構成されているのかを知ることができ、さらにそれを相対化する必要性と方法について、さらに説得力ある提言が可能となるだろう。

第二に、他国の教科書の交互使用の経験までを含め、自国を越えて東アジアの隣国でも通用する歴史を作製していく必要がある。自国史と世界史の二分法を越えて「東アジア地域史」を構成することができるとすれば、それこそが東アジアの歴史対話を引き出す近道ではないかと思う。このためには、まず単なる両国の関係史ではなく、東アジアの範囲で相互有機的に関連した歴史を浮かび上がらせる必要がある。韓中日が共同して書いた『未来を開く歴史』も、このような意図から作られたものであるが、依然我々の期待を満足させられるものとはなっていない。その理由として二点のみを

42) 汪暉、《現代中國思想的興起》上巻 第二部(帝國與國家)、北京：生活・讀書・新智 三聯書店、2004年。

挙げるなら、まず琉球合併を台湾事件と関連づけた記述において、琉球王国の滅亡として、すなわち琉球王国の歴史としての認識が見られない点がある⁴³⁾。これは、小国主義の視点が欠如しているかを反映している。それは、近代国民国家を絶対化し、国民国家を形成できなかった集団を排除した近代主義の結果でもあり、伝統的な華夷区分法にしたがって琉球を夷狄視した結果でもある。もうひとつは、日本の戦後処理がアメリカの単独占領によって歪曲されたと言うだけで、大国である中国の権限と責任を東アジア的な脈絡から把握する視角が欠如している点である⁴⁴⁾。

歴史上の中国は、一国家と言うよりも巨大な帝国であり、周辺にある小国の事情を理解するのは困難であろう。小国の視角を強調する理由もここにある。小国や小民族により注目することで、地域秩序を威嚇する帝国の存在を相対化する必要性を効果的に示すことができるであろう。同じような多くの国が競争し牽制するヨーロッパとは異なり、超越的な地位を持った日米中の三帝国が順番に君臨してきた東アジアでは、これら帝国の相対化こそが、地域内の平和と反映において不可欠な課題である。東アジアの歴史紛争の淵源が中華帝国をモデルとした大国主義にあるとはいえ、中国と日本の中にもそれに批判的な小国主義論理はやはり微弱であるが存在していた。このような小国主義の論理を浮かび上がらせることができれば、大国主義と帝国意識を省察し、相対化する資源としていくことができるであろう。

43) 韓中日三国共同歴史編纂委員会、《未来を開く歴史》、ソウル：ハンギョレ新聞社、2005年、44ページ(韓中日三國共同歴史編纂委員會,《미래를 여는 역사》, 서울: 한겨레신문사, 2005, 44면)

44) 同書、206-207ページ。

學術會議參觀記



2007歴史NGO世界大会の評価と展望

梁美康 (ヤン・ミガン世界大会運営委員長,
ジョージワシントン大学訪問研究員)

Journal of Northeast Asian History
volume 4, number 2 (Dec 2007) : 168-171

*Copyright © 2007 by Northeast Asian History Foundation. All Rights Reserved.
No portion of the contents may be reproduced in any form without
written permission of Northeast Asian History Foundation.*

2007 歴史 NGO 世界大会の評価と展望

梁美康 (ヤン・ミガン世界大会運営委員長、ジョージワシントン大学訪問研究員)

世界初の歴史関連 NGO 世界大会

韓国と日本の間には、いまだ解決すべき課題が残されている。日本軍の「慰安婦」問題や強制徴用・徴兵問題、原爆問題などがそれにあたる。1980年代以降、韓日両国の市民社会は、こうした問題を解決するための協力を続けてきた。韓国・日本の市民社会の協力が本格的に始まったのは1990年代以降であり、2000年代の日本による歴史歪曲を機に、その関係は韓国と中国、そして日本の市民社会にまで広がり、2005年には韓中日共同教科書、韓日共同教材を作製するなど、共通の歴史認識を築いていくための活発な取り組みが行なわれてきた。また2003年には高句麗の歴史をめぐる韓国と中国の間で葛藤が生じ、韓中間の歴史的対話の必要性が高まった。

韓中日の間で歴史的葛藤が高潮する中、これまで市民社会や学会が粘り強く求めてきた、歴史問題に対する総合的な対応を実現させようと、2005年に東北アジア歴史財団が設立された。東北アジア歴史財団は設立当初から、市民社会との緊密な協力関係によって、東北アジアの歴史をめぐる葛藤を解決しようと努力してきた。こうした時代の流れを基盤として、東北アジアの不安定要素である根深い歴史的葛藤を解決するために、これまで多角的な努力が続けられてきた。その結果、東北アジア歴史財団と歴史 NGO が力を合わせ、第1回歴史 NGO 世界大会が開催されることとなった。これは、特殊な歴史背景を持つ東北アジアが生み出した状況に、韓国の市民社会の躍動性が合わさった結果である。

世界大会の目的と結果：最重要キーワードは「歴史和解」

世界大会の目的は、第一に、過去20年間に韓日または韓中日を中心に築かれてきた市民社会の成果を、より発展的に継承することであり、第二に、ドイツとポーランド、ドイツとフランスなど、すでにヨーロッパで進められている歴

史和解の経験を通して、歴史的葛藤を解決するための NGO の役割を再確認すること、第三に、アジアやアフリカなど、現在世界各地で起きている歴史的葛藤の現況を把握し、現地で歴史和合と平和に努める NGO 間の連帯・協力関係を築くことにある。

以上のような目的が、世界大会によってどれほど達成できたのだろうか。最大の成果は、異なる領域で活動してきた NGO が一カ所に集結し、思想や活動を共有することによって、連帯の枠組が形成できた点である。韓国内の NGO の場合、財政や言語の問題をはじめ様々な難関により、国際的な活動を続けることは困難である。そのため今回の世界大会は、共に連帯網を形成していく貴重な機会を提供したといえるだろう。

世界大会のもう一つの成果は、テーマにもなっているように、歴史的葛藤をどのように克服するかにある。歴史的葛藤は、両国間の葛藤を極大化し、最終的には国家や国民の平和と和合を阻害する要素となる。歴史的葛藤を解決するための究極の目的がすなわち「歴史和解」である。「歴史和解」は、絶え間ない対話を通して持続的に努力することで初めて可能となる。世界大会は「歴史和解」のための、そして「歴史和解」に向けた NGO の苦悩を分かち合う場としての役割が最も大きい。「歴史和解」の段階は、「相手の思想を認める」という低いレベルのものから、「共同の課題を共に遂行する」という高いレベルにいたるまで、多岐にわたっている。今回の大会は、様々な思想を持った人々が集まり、互いのそれを確認すると共に、違いを発見しそれを認めることから始まった。そうした意味では、学術シンポジウムや討論会において互いの思想が確認できたことは、歴史和解への第一歩であったといえる。

世界大会の構成と内容

今回の世界大会には、アジア、アフリカ、ヨーロッパなど各大陸から 21 カ国 5000 人余りが参加した。韓国の NGO は、国際ネットワークを保有する 33 団体を中心に活動が行なわれており、海外からは 29 団体からの参加者があった。今回の世界大会を支援したボランティアは 100 人余りであり、海外参加者の案内や翻訳、行事・広報・事務局の支援など、その活動は多方面にわたった。世界大会では 61 人による発表が行われ、開幕シンポジウムをはじめメイン行事、日帝植民地被害問題、中国古代史歴史認識問題、領土領海問題など、5 つの分野で進行されるプログラムを含め、計 28 のプログラムに参加者が参加した。

世界大会のプログラムは、学術シンポジウムが 6、文化行事 7、ワークショップ

プ3、発表会6、討論会6であった。また、世界大会の特徴は、これまでの国際大会が主に研究者中心のシンポジウムであったのに比べ、研究者や活動家だけでなく、中高生をはじめ大学生、大学院生など、様々な人が参加できる参与型のプログラムを企画、開発した点である。移動授業と歴史体験フェスティバルは、現場探訪と歴史問題を結合した斬新なアイデアで学生の人気を集めた。また青少年キャンプ指導者、韓日関係専門家、領土領海専門家を対象にした非公開深層討論会では、専門家の掘り下げた議論によって情報を共有し国際ネットワークを強化する機会を提供した。さらに、青少年や大学生が歴史体験の経験を共有する歴史体験発表会、日帝植民地被害の経験を証言する被害者証言会、韓国に留学中の外国人大学院生を中心に世界の歴史紛争の現況について発表するグローバル大学院生討論会などは、充実したプログラム内容によって参加者の満足度を高めたと評価された。

歴史和解のためのモデル発掘

世界大会の基調は、歴史的葛藤を引き起こす民族主義を克服し、世界が共感できる普遍的な主題で歴史問題を取り上げることにある。今回の世界大会の標語は「歴史の結び目、平和な未来」であり、「結び目」を象徴化した。各国家ごとに複雑に絡み合った歴史の結び目を急いでほどかねばならない。また、いまだに解決されていない歴史の結び目を、正しく結びなおさなければならない。歴史の結び目をほどき、そして結びなおし、平和という未来へ歩みを進めることが、我々の役目である。

このような点で、開幕シンポジウムは、葛藤の側面を強調するのではなく、歴史和解のための様々な事例を通して、新たなるビジョンをもって市民社会と手を取り合える可能性を模索した点に意味がある。『21世紀における歴史和解のための市民社会の役割』と題した開幕シンポジウムでは、戦後の歴史清算において相反する2つの道を歩むドイツと日本の代表的知識人であるウォルフガング・ヤコブ・マイヤー教授と武者小路公秀教授が、第2次世界大戦以降の両国における戦後清算の過程と限界について語った。また、歴史和解のための事例研究では、青少年交流、平和教育モデル、国際ネットワークを中心に、これらを成功的に遂行している団体の責任者から事例研究に関する話を聞いた。各分野別に進行されたシンポジウムと討論会では、葛藤の問題が何であり、その解決案にはどのようなものがあるのかについて、多角的に診断し提案する時間が設けられた。

第1回世界大会から得た教訓

今回の世界大会は第一回目であり、その成果は、歴史的葛藤の懸案が何であり、その代案を模索する第一歩であったという点に見いだすことができる。初の大会ということもあり、大きな成果を期待するには無理があるが、歴史関連の NGO の全活動を一カ所に集めて経験を共有することで、歴史的葛藤を解決するための NGO の役割を再確認したことは、非常に意義のあることといえる。しかし、今回の世界大会においてさらに重用なことは、韓国内の NGO 間の疎通と連帯を強化すると共に、国際的には国内外の団体のネットワークを通してグローバルマインドを育て、世界と疎通する方法を学ぶことができた点である。つまり我々は、葛藤を引き起こし平和を阻害する民族主義を克服し、普遍的な価値観をもって歴史的葛藤問題に反問しようとしたのである。

しかし、我々には依然として、世界大会の目的を十分に共有できなかった側面がある。準備する各団体のレベルの差に起因する準備不足、大規模な世界大会を準備する専門スタッフ不足、準備期間の不足など、多くの問題点が持ち上がった。また、多様なプログラムが同時に行なわれたため、各団体・分野を越えた共感を形成できなかつたとの指摘も受けた。様々な活動をしている NGO 同士の接触の機会があまり多くなかつたとの評価も受けた。第1回世界大会で得たこのような教訓は、第2回世界大会を準備するにあたり、重要な資料として活用されるだろう。

第2回大会の具体的成果に期待

2008年に開催される第2回大会は、第1回大会で問題になった部分を補うと共に、新たな議題を発掘し、歴史関連 NGO 同士の和合と連帯のための好機となるよう期待したい。第1回大会では、歴史和解のための市民社会の役割という包括的な議題が取り上げられたが、第2回、第3回では、それらを個別に掘り下げ、歴史和解のための具体的な成果を上げなければならないだろう。組織の面においては、さらに多くの歴史関連 NGO の参加を可能にし、様々な方法で参加者の満足度を高めなければならない。またアジアとの連帯を形成している海外ネットワーク、アメリカ、ヨーロッパなど、様々な形態で歴史和解に努めている国際ネットワークとの連帯に、さらなる努力が必要であろう。

このような発展的継承を通して、第2回世界大会は東北アジアの歴史的葛藤問題が、東北アジアだけの問題ではなく、世界との疎通を可能にし、また世界が東北アジアに注目する機会となることを願っている。



「東アジア歴史的和解国際フォーラム」参観記

琴京淑 (クム・ギョンスク、東北亞歴史財団責任研究委員)

Journal of Northeast Asian History
volume 4, number 2 (Dec 2007) : 174~178

*Copyright © 2007 by Northeast Asian History Foundation. All Rights Reserved.
No portion of the contents may be reproduced in any form without
written permission of Northeast Asian History Foundation.*

「東アジア歴史的和解国際フォーラム」参観記

琴京淑（クム・ギョンスク、東北亞歴史財団責任研究委員）

10月9日、10日、ソウルの世宗ホテルで、財団とユネスコ韓国委員会の共同主催による「東アジア歴史的和解国際フォーラム」が開催された。「歴史対話によって切り開く東アジアの歴史的和解」というテーマからも分かるように、今回のフォーラムでは、10カ国から専門家が集まり歴史的和解のための歴史対話を試みた。フォーラムは、大きく4つの分科と2つの基調講演で構成されていた。

第1部は、「東アジアにおける歴史対話の多層化のための模索」であった。「東アジア内の国境を越えた歴史の模索－最近の歴史対話の教訓と東アジア地域史の展望」では、三谷博教授が、2000年代以降の東アジア地域における国境を越えた歴史対話の模索について発表した。彼は、東アジアにおける歴史対話によって明らかになる歴史の記憶と解釈の相違に関心を向けなければならないと強調した。歴史対話に関しては、主に若者を対象とした歴史教科書問題が取り上げられているが、三谷博教授は、歴史対話の妨げになっているのが大人であることに注目し、大人のための歴史教材を製作していると述べた。そして、現在、日本の大人のための近代東アジア歴史シリーズ編纂チームを組織し、作業を進めていることを明らかにした。このチームは、今後3巻の歴史書を発行する予定であるが、そのうち1冊は、主に19世紀を扱ったものであり、残りの2冊は、20世紀初期の日本の国際関係に関するものであるという。ペク・ヨンソ(延世大)教授は「東アジア共同体と歴史対話」で、東アジア共同体の未来を描くために過去への探索を試みるといった、歴史研究者の知的実践が求められていると語った。また、「疎通的普遍性(communicative universality)」の発想から歴史的和解が可能になるだろうと述べた。彼の提唱する「疎通的普遍性」とは、各々の文脈には、他者とは区別される個性があり、それと同時に相互理解の可能性を付与する普遍性が存在するという事実を悟ることである。ペク教授は、疎通を可能にする具体的な実践課題として、「歴史オンブズマン制度」の導入を強

調した。つまり、東アジア各国間の歴史紛争もしくは歴史歪曲の例を調査しマスコミに公表するなど、間接的な強制手段を動員し、歴史的和解に貢献できるようにするというのである。アンドリュー・ホルバート(日本東京経済大)教授は「市民社会の役割」で、東アジアはヨーロッパと異なり市民運動が発達せず、また東アジアの市民運動は国家の影響を受けており、歴史対話と和解のためには超国家的な団体が必要であると力説した。

香港大学の龍応台教授は、「記憶の衝突—台湾—中国関係と日本」で、台湾の現代史問題について問題を提起した。彼女は、日本に対する台湾人の態度を決定する要素が、中国であることを強調した。つまり、台湾人の日本認識は、彼らの中国認識に影響されているというのである。日本の植民統治に対する評価は、現実の状況に応じて変化するが、「互いに異なる記憶」は「互いに異なる態度」を生みだし、「互いに異なる未来への展望」もまた、過去の解釈を決定すると述べた。

第2部の主題は、「東北アジアにおける歴史対話の現況および課題」であった。

イム・サンソン(林相先)研究委員(東北アジア歴史財団)は「韓・日共同歴史教材の現況および課題」で、韓国と日本の歴史学者が共同執筆、発刊した5つの教材(『日韓共通歴史教材 朝鮮通信使』、『未来をひらく歴史』、『女性の目から見た日韓近代史』、『向き合う日韓史』、『日韓共通歴史教材日韓交流の歴史』)の内容を検討し、今後の課題を述べた。現行の教材については、教師が学習指導にあたってこれらの教材を参考にしていると指摘した。現在、韓・日歴史共同委員会の委員として活動するキム・テシク(金泰植)教授(弘益大)は、第1期の共同歴史委員会の活動を基盤として2007年6月から活動を開始した第2期においては、両国研究者の歴史認識の相違を解決し、積極的な活動を期待していると述べた。中国からの参加者である王希良(黒龍江省社会科学院)教授は、韓・中・日共同歴史教材である『未来をひらく歴史』の執筆に携わった経験を基に発表を行なった。彼は、3国の研究者たちによる交流と協力、さらには激しい論争を経て、共同歴史教材の発刊が実現したと語った。これには、<史実の尊重→正しい歴史観の守護→相手の立場に対する理解→偽りのない交流の展開→歴史に対する共同の認識に合意>という過程が必要であった。そして、今後の持続的な協力のため、3国の研究者が専門的な研究を進めると共に資料を共有し、研究者間の交流を増やさなければならないことを強調した。

3部のテーマは、「歴史的和解のための歴史教育」であった。

ボド・フォン・ボリス教授(独ハンブルク大学)は「歴史的和解のための歴史教育」で、ドイツの観点から見た理論的考察と実践経験を発表した。彼は、歴

史的和解のためには「互いに歩み寄り共に努力」し、さらに「互いに向き合い共に歩む」ことを実践しなければならないと述べた。同時に、そのために必要な前提条件をいくつか提示した。それは、第一に「過去を忘れず、過去から距離をおいて話し合うこと」、第二に「現在を完全に判定するために過去を許容しないこと」、第三に「共同の未来の条件と機会を探ること」である。このようにして、少しずつ変わらなければならないと語った。木村茂光教授(東京学芸大)は「日・韓共通歴史教材の作製と歴史教育」で、ソウル市立大学と東京学芸大学が10年間にわたって進めてきた共同研究の成果について発表した。この共同研究を通して、共通歴史教材の編纂・発刊こそが、一国史観／自国史観の限界を越えて21世紀に東アジアの歴史認識を共有するための、具体的な作業であることを確信したと述べた。教育現場にいるパク・チュンヒョン教諭(韓国・良才高等学校)は「共同教材による歴史的和解の可能性模索」で、21世紀の歴史教育は東アジアの市民によって客観化され、また歴史教育は国際市民の養成を目標にすべきだと提案した。蘇智良教授(中国上海師範大)は、「正しい歴史教育が歴史的和解の先決条件」であることを強調した。

第4部の「東アジア歴史的和解ネットワーク」は、東南アジアの歴史的和解について考察する時間であった。モンゴルやベトナム、マレーシアの研究者の見解を検討した。

土肥隆一(日本民主党議員)とリリィ・ガードナー・フェルドマン(Lily Gardner Feldman、米ジョージ・ホプキンズ大学)教授による基調講演も行なわれた。その中でも特に、フェルドマン教授の講演が印象的であった。フェルドマン教授は、21世紀になり国際的なレベルでの和解(reconciliation)現象と、これを説明するための学問的研究が急増し、様々な定義が発表されたと述べた。和解のレベルは高～低までいくつかに区別でき、この中には様々な意味が存在するという。低レベルにおいては共存を意味し、高レベルにおいては態度や信念の変化により、かつての敵対勢力が協力を重視することを意味するという。また和解とは、平和を注入することではなく、「相違の融合」であると語った。さらに、乖離(divergence)の除去ではなく、認識しこれを緩和するため、そして共同の協力的枠組の中でこれを可能にするために、「生産的な討論」を行なうことを現実的な目標としなければならないと述べた。

各討論者は、歴史的和解の前提条件について言及し、和解の主体問題と和解に必要な前提条件に関する論議が必要だと述べた。こうした前提条件に関する論議を行なわないまま「和解」だけを主張することは、逆に混乱を招くことになる。つまり、「和解」の主体が国家と国家なのか、政府と国家なのか、それと

も、ひとつの国の政府と国民全体と被害当事者間の和解なのかが、明確でないということである。また、「和解」のためには加害者が真実を明らかにし、それを認め告白すると共に謝罪しなければならないと主張した。「和解」は、被害者の役割であり、彼らが加害者を許し手をさしのべた時に、初めて成立することを強調した。さらに、偽りのない和解の実現は、一国の内部で改革運動と民主化運動が総体的に連結することで可能になると指摘した。

討論者は、ヨーロッパと東アジアにおける歴史的和解のあり方が異なっていると指摘した。つまり、ヨーロッパと東アジアは、地政学的要因が異なるということである。第2次大戦以降の、東アジアとヨーロッパの状況には違いが見られるが、これには冷戦の展開過程や各地域におけるアメリカの役割が、大きく作用していると主張した。

東アジアにおける韓国と日本の市民団体の活動に関する討論も行なわれた。韓国の市民団体は、1970年～80年代の民主化運動において非常に献身的な活動を見せたが、大衆的な運動という面では、脆弱であると言わざるを得ない。歴史教科書問題については、日本の市民運動団体が「新しい歴史教科書」の採択率0%を実現させたことは、驚くべき成果であった。一方、韓国の市民団体が日本に比べ脆弱な理由を、討論者は次のように説明した。韓国は民主化運動を経験したが、戦争の痛みを十分に克服できずにおり、国家主義と軍事主義の雰囲気は今もなお残っている。一方、日本は大きな危機に直面しているが、少なくとも第2次大戦以降は、戦争をしてはならないという共通の意識が形成されている。

歴史的和解の方法については、歴史を政治化してはならないことを強調した。「歴史は歴史家に委ねるべきであり、これは和解のための第一歩であり、歴史を政治的目的のために活用してはならない」というのだ。ヨーロッパが歴史的和解に歩みを進めることができたのは、歴史問題を政治化せず歴史家に任せたためであることを、再度強調した。ヨーロッパにおける歴史的和解は、ヨーロッパの地域統合と安保にも、非常によい影響をもたらした。東アジアでも、このようなものが必要なのである。他の国々を嫌いになることで満足感を得るのではなく、過去に起きた事に対するビジョンと理解を、互いに共有することが重要である。

韓国と日本の歴史対話の現況と課題に関する討論も行なわれた。討論者は、韓国を中心とした東アジアにおける歴史対話の経過を、2段階に分けて説明した。まず、1970年から2000年代までをひとつの段階として設定した。彼は、韓国と日本が歴史対話のパートナーになり、主に日本の歴史教科書問題や日本の歴史認識について論じる過程で、相手の歴史認識を探索し理解していく時期であったと述べた。そして次の段階である2001年～現在は、日本における「新しい歴

史教科書」の発刊が契機となり、歴史対話の範囲が拡散すると共に、深刻な様相をなした時期であるという。歴史対話の主体は韓国と日本であったが、そこに中国とヨーロッパ諸国が加わり、さらに北朝鮮が参加して問題が拡張するに至ったと説明された。

この日の討論では、東アジアにおける歴史対話の成果について、自国史を相対化する試みが非常に重要であるという意見が提起された。

二日間にわたる今回のフォーラムでは、発表者や討論者をはじめ、参加者全員が真剣なまなざしで見守る中、専門的な討論が交わされた。総合討論では、各国の歴史教科書を持参してフォーラムを開催してはどうかとの提案も行なわれた。歴史的和解のためには、交流の拡大だけでは不十分であり、交流の回数を増やすと共に認識の共有を目指すべきことを確認する場となった。

The background of the page is a solid, warm orange color. Overlaid on this are several large, expressive brushstrokes in a lighter, golden-yellow hue. These strokes are curved and layered, creating a sense of movement and depth, reminiscent of traditional Chinese ink wash painting techniques. The strokes are most prominent on the left and bottom edges, framing the central text.

書評



書評；
夫馬進編「中国東アジア外交交流史の研究」
(京都：京都大学学術出版会，2007)

車惠媛 (チャ・ヘウォン，延世大)

Journal of Northeast Asian History
volume 4, number 2 (Dec 2007) : 182-191

*Copyright © 2007 by Northeast Asian History Foundation. All Rights Reserved.
No portion of the contents may be reproduced in any form without
written permission of Northeast Asian History Foundation.*

Book Review: Essays on the History of Chinese Diplomacy and Cultural Exchange in East Asia (Kyoto: Kyoto Univ. Press, 2007)

書評; 夫馬進編「中国東アジア外交交流史の研究」

(京都：京都大学学術出版会，2007)

車惠媛 (チャ・ヘウォン，延世大)

I

本書は、日本の京都大学 COE (Center of Excellence) プログラムである『地球化時代の多元的人文学の拠点形成 The Study of Humanities in the Age of Globalization』の傘下にある「東アジアの国際秩序と交流の歴史的研究」というプロジェクトの成果として出版された。中国および東アジア専攻者で構成された 15 名の筆者は、5 年にわたる共同研究の末、600 頁にも上る膨大な研究書を編纂するに至った。当初の研究目的は、プロジェクトのテーマに沿い、東アジア世界の国際秩序と交流の歴史を広範囲にわたって探求するというものであったが、研究が最終段階に入ったところで「中国・東アジア外交交流史」にテーマを変更することになったという。本書における「外交」という用語は、研究の性格と方向性を包括する概念として意図的に採択されたものであり、本書を貫く重要な問題意識であるといえる。周辺諸国に対する中国の「外交」は、歴史上どのように展開してきたか、また外交という面から、新たにひとつの特徴が発見されるという点が、研究における共通の関心事項となっている。

中国で伝統的に使われている「外交」の語は、外国の臣下が君主の命令に従うのではなく、自らの判断によって交際するといった否定的な用例に限られているという。実際のところ、歴代の中国の国際関係も、外国は全て侵略者（夷狄）とみなし、正式な交渉相手とは考えていなかったという点で、独立国家間の平等な関係を前提とした近代的外交 (diplomacy) 概念を適用するのは無理があると思われる。広く知られているように、中国では古代以来、儒教理念に基づく華夷思想が主導的な位置を占めており、外国との交渉もまた、これを基盤とした朝貢冊封体制の上下関係の上に成り立っていたと理解されてきた。にもかかわらず、本書において、「我々が考える外交という概念が存在しなかった、

あるいはこれを正面から主張することができなかつた世界」として展開してきた中国—東アジアの関係を、外交という普通名詞の範疇に位置づけるのは、いかなる理由からなのか。研究責任者である夫馬進氏は、これまで中国歴代の対外関係は「特殊形」とみなされることで、逆に歴史の実体から遠ざかってしまったと指摘している。長い間、中国—アジアを西欧の歴史的経験と区別するオリエンタリズムの影響を受けると共に、最近では朝貢システム論や冊封体制論といった言説が流行し、東アジアにおける伝統世界の国際関係は、ほぼこの枠内のみで規定、理解、説明されるようになった。これにより、華夷思想がいかなる時代においても均質的に作用する超歴史的な原則として理解されることや、朝貢・冊封制度が事実以上に大きな位置を占めるものとして規定されることがよくある。

各論文が提示している様々な歴史的事例は、中国と周辺世界の関係が理念や制度により固定されていたというよりは、むしろ柔軟性のある戦略的選択によって維持されてきたことを示唆している。下記の目次からも分かるように、本書は中国文明の形成期から 20 世紀までの長い時間と、韓中日の三国や東南アジア、シルクロードの一部までを含む広範囲な空間を、研究対象としている。1 部と 3 部では、古代から明清代までの伝統時代における中国外交の多様な実体をテーマとして取り上げ、4 部では、国際秩序と国際関係という面から東アジアを扱った論稿を掲載した。また、2 部にある 4 編の論文が、いずれも高麗・朝鮮の対中国関係を扱っているという点は、本書の特徴のひとつと言える。そして、明清と朝鮮間における礼や問罪の問題に焦点をあてた 3 部の夫馬進の論文を含めると、朝鮮半島と中国の関係が本書の 3 分の 1 を占めている。朝鮮半島の国々は、中国との長い交流の歴史の中で、中国的な礼制秩序と朝貢冊封制度を構成した最も典型的な例として理解されてきた。外交という面では、朝貢体制の受動的な客体ではなく交渉の主体としての高麗・朝鮮の役割が、新たに証明される可能性があるという点で、本書は韓国史に関わる研究者たちの注目を集めるだろう。

本書におけるもう一つの特徴は、文献資料を実証し分析する伝統的な方法に充実な一方で、性格の異なる資料をできるだけ多く利用し、「方法の相対化」を試みた点である。多くの論文が、中国の史料だけでなく朝鮮や日本の資料、オランダや満州語の檔案といった多言語の資料を利用しており、史実を立体的に構成しようという努力がうかがえる。性格の異なる資料を利用し、特定の史料と内容を相対化するという方法は、様々な集団の利害関係が絡み合い、混乱と誤解を招く恐れのある該当分野の研究において、客観性を最大限に確保し、歴史に対する理解を深めるための試みであると評価される。

本書の書評で、各論文が該当研究史において、どのような意義を持っている

のかを論じることは、紙面の制約だけでなく評者の能力では不可能であると思われることから、本書の全体的な論旨について簡単に要約すると共に、評者が感じた点を叙述し、本書の紹介に代えたい。

第1部 華夷思想の成立と漢・北朝・隋唐の外交政策

1章 中国古代における華夷思想の成立・・・吉本道雅

2章 漢儒の外交構想－「夷狄不臣」論を中心に・・・保科季子

3章 麴氏高昌国と中国王朝－朝貢・羈摩・冊封・制服・・・辻正博

第2部 高麗・朝鮮の対中国関係

4章 朝鮮前近代における民族意識の展開－三韓から大韓帝国まで・・・矢木毅

5章 高麗の文人官僚・李齊賢の元朝における活動－その峨眉山行を中心に・・・金文京

6章 モンゴル帝国の崩壊と高麗恭愍王の外交政策・・・デイビッド・ロビンソン（水越知訳）

7章 朝貢関係と情報収集－朝鮮王朝対中国外交を考えるに際して・・・伍躍

第3部 明清期の中国外交

8章 朝貢と海禁の論理と現実－明代中期の「奸細」宋素卿を題材として・・・山崎岳

9章 “懐柔遠夷”言説における明代中国・チベットの政治・文化関係・・・沈衛榮（片桐宏道訳）

10章 明清中国の対朝鮮外交における「礼」と「問罪」・・・夫馬進

11章 清代の互市と“沈黙外交”・・・岩井茂樹

12章 荷蘭オランダ国の朝貢・・・中砂明德

第4部 近代東アジアの諸相

13章 薛福成の滇緬界務交渉・・・箱田恵子

14章 極東選手権競技大会とYMCA・・・高嶋航

15章 東アジア史の「近世」問題・・・永井和

II

1部では、中国の対外関係の基本枠である華夷思想の形成と適用の過程について検討している。華夷思想が現実を規定したというよりは、むしろ現実の国際関係によって変貌する柔軟性を備えていたという指摘は注目される。1章の吉本道雅の論文は、華夷論は夷狄の同化を原則としているが、歴史的状況に応じて様々な代案を選択していくなかで、華夷関係の枠組が完成したと説明している。

すなわち、中原において華と夷が混居していた春秋時代と、実体としての夷が消滅した戦国時代後半、そして夷狄に対する領土化が成された秦漢代の歴史的経験に合わせて、それぞれ同化、廢絶、羈縻などの論理が組み立てられたというのである。ここで、華と夷の境界は、文化的・人種的に固着したものではなく、可変性のあるものとして表現されている。2章の保科季子の論文は、儒教が正統な教義として確立した漢代にも、匈奴との関係は理念にとらわれず、流動的に変化したことを明らかにしている。儒者蕭望之の「夷狄不臣」論(Refusing to Accept Barbarians)は、強敵な匈奴を臣下として服属させることができなかつた現実を反映しており、「夷狄同化」に基づく天下支配の理念が定着したのは、漢の物理的優位が確保されてからのことであったと述べている。3章の辻正博の論文は、5世紀末から7世紀前半に、シルクロードの要衝地を支配していた麴氏高昌国 Gaochang Kingdom と中国王朝の間で展開された外交政策や戦略の特質を明らかにしている。高昌国は、遊牧勢力と中国王朝の間で様々な戦略を巧みに用いながら国家を維持していたが、最終的には、激変する国際環境のなかで唐帝国により征服された。ここで、高昌国の「漢人国家」としての側面が、むしろ唐朝の征服を正当化する口実になったというのは、興味深い指摘である。また、唐帝国はこの時期、朝鮮半島の三国に対しては一貫して冊封による君臣関係の遵守を要求しており、地域によって様々な外交戦略を駆使した点も取り上げている。中国の境界地域が「中華の疆域」であるのか、それとも「夷狄の地」であるのか、その基準は常に政治と関連して変更されてきたことを指摘しているのも、この論文の主要成果といえるだろう。

このように、中国外交の柔軟性と恣意性、そして情勢に応じた巧みな変化などの特徴は、3部の明清期にも共通して見られるものである。明清期は、典型的な朝貢冊封体制が実現した時期であると考えられてきた。しかし、8章の山崎岳の論文では、明朝の閉鎖的な朝貢制度は、発達した政治制度と体制を備えた東アジア各国を結び付けるには、信頼しがたいものであったと述べられている。端的な例として、明朝は海禁体制下であっても海外の朝貢使節に含まれた華人(Chinese)を黙認し、規定を破った日本使節に対しても、強硬と融和策を巧妙に駆使し対応してきた。これら華人は、中国との間で紛争が起こると、「奸細 traitor」という汚名をとり歴史の表舞台に登場した。しかし、朝貢制度の隙間を巧妙にすり抜けていくこれら華人は、海禁(Maritime Prohibition)下においても民間社会が流動的な動きを見せていたことを証明している。9章の Shen Weirong (沈衛榮)の論文は、中国の「懐柔遠夷 Discourse of Accommodating Barbarians from Afar」という言説が、明朝に服属したチベットに対しては守られた形跡がないことを明らかにしている。明政府は、褒賞と贈物でチベットに政治的・物質的な満足感を与え、その一方で教化の可能性を徹底的に遮断し、

文化の浸透と交流を制限しようとした。士大夫もまた、夷狄の風俗により華夏の気風が乱れるのを懸念し、チベット仏教を警戒し、卑下した。中国側は異質文化に対し、懐柔よりも意図的な誤解と閉鎖的な対応を貫いていたにもかかわらず、チベット仏教は中国社会の奥深くまで浸透し、その文化的影響力は相当なものであった。

10章の夫馬進の論文は、明清代に中国と朝鮮の間で起きた4件の外交事件を通して、中国的な世界秩序を成立させた「礼と問罪 Rites and Sanctions」の理念が、現実的にどのように適用されたのかについて検討している。中国の礼制秩序は、礼から逸脱した外国に対する物理的な制裁措置である「問罪」を含んでいる。中国は朝鮮に対し、貢物の規定違反、国王の冊封と外交文書の不備などを理由に問罪を警告した。しかし、どの行為が非礼にあたるのかは、中国側が恣意的に決めることであった。よって、両国の関係が安定していた時期には、非礼はほとんど摘発されず、逆に中国内部で不安要因が深刻化し、両国の関係に摩擦が生じる恐れがある場合に、問罪警告が下された。つまり、別の事案に対する警告と威嚇のメッセージが、時折「礼を重視せよ」という原則を通して伝えられたということである。

ここで、非礼に対する問罪は、直接的には「内政」干渉やこれによる摩擦を避けることができるという点で、軍事行動や強硬策を保留させる一種の緩衝作用があったと判断される。筆者が指摘するように、朝鮮は他の朝貢国とは異なり、礼によって統制することができる唯一の朝貢国であったことは明らかである。礼制秩序に対する深い理解を基盤とした朝鮮の「恭順」は、他の朝貢国には見られないものである。著者はこれを、中国支配の正統性を内部から受け入れた朝鮮の「隷属の内面化」と評価している。ただし、ここで朝鮮が内面的に服属した対象が、朝鮮の存立に絶え間なく影響を及ぼす明朝と清朝という実体であるのか、儒教理念に基づく礼制秩序そのものなのかは、状況に応じて区別する必要があると思われる。一方、王位継承の名分に強く執着していた明朝の士大夫や、仁祖反正が礼の原則に反するという点を強く意識していた洪翼漢の例のように、原則の内面化は、むしろ外交の柔軟性を阻害する可能性を秘めていた。礼制秩序は、中国と朝貢国の双方を規制する理念的、心理的な禁域でもあった。

11章の岩井茂樹の論文は、17世紀末の互市制度 (Border Markets) が、朝貢制度や朝貢貿易の負担を軽減するための意図的な選択であったことを明らかにしている。清朝は、貿易や移住といった外交問題を、政治的空間から遠ざけ「周辺化」する方法を追求した。互市制度は、遠隔地交易により国家間の接触を最小限におさえ、相互の経済的利益を保証するものであった。朝貢制度のもとでは避けて通れなかったであろう2つの事件、すなわち18世紀初めに日本が発行

した貿易許可証による摩擦と、1740年にオランダ領のジャワで発生した華僑虐殺事件に対し、清朝は沈黙と放任を貫いた。経済的な実利を重視しつつ、できるだけ政治的摩擦を避けようとした清朝の政策は、明朝と決定的に異なっている。中国を中心とし、同心円的に構成された礼制秩序がもたらす不要の葛藤を、清帝国自らがある程度防ごうとしていたのである。

こうした事実は、12章(中砂明德論文)の論旨と合わせて考えると、17、18世紀の中国外交における一つの共通した特徴として理解される。同論文は、貿易の拡大と国交樹立を目標に接近してきたオランダに清朝が求めた厳しい儀礼と朝貢規則の強制は、実際には「国際法」や外交原則に対する理解不足ではなく、これ以上の交渉を避けるための意図的な外交術であったことを明らかにしている。本来、オランダ使節団の朝貢は、18世紀末にイギリスのマカートニー使節団が経験した挫折と同様、朝貢体制の「わずらわしい公文書と屈辱的な儀礼」にこだわる中国の前に、合理的なヨーロッパ型の外交関係を成立させるのは不可能であったことを示す事例と考えられてきた。しかし、巨大な国力を持つ清朝は、良くいえば柔軟に、悪くいえば都合良く朝貢制度を利用し、朝貢規定を理由にオランダの入場と要求を拒否したにすぎなかった。よって、朝貢と現実の「外交交渉」は、本質的には相互対立的なものではなかった。中国側の外交は、時代と情勢によって複雑に展開してきたが、時勢にあわせて変化する柔軟性と巧みさは核心的な特徴であると言うことができ、またこれは各論文において共通して指摘されている点でもある。

2部では、中国の主な外交対象であった高麗・朝鮮が、外交の主体としてどのように歩んできたのかについて論じている。4章の矢木毅の論文は、古代から現在までの韓国の民俗・国家・領土意識の問題を、通史的に扱っているのが特徴である。韓国人の自民族中心主義は、高句麗の故地を継承するという意識が反映された、変形した三韓概念であり、すでに高麗時代にははっきりとした輪郭ができあがっていた。また、それを主導した勢力は、初期の仏教勢力から朝鮮後期の儒者層へと拡大、継承されていったという。19世紀末の大韓帝国において採択された「韓」という一文字は、国号からも分かるように、清朝に対する対等意識、日本に対する優越意識と深くかかわっており、今日もなお韓国の民族主義と領土意識の土台を形成しているという。一方、こうした自己意識の裏面では、高句麗の継承者であることを自負した女真、満州族に対する差別と蔑視意識が追い風となったことも指摘している。現在、高句麗の歴史をめぐる認識は、東アジア地域において敏感な争点として浮上している。近代の国民国家の枠組を築けなかった女真や満州族の民族意識を含め、高句麗史を把握すべきであるとする筆者の結論は、他者の視線から見た韓国人の歴史認識の現状を示すものであり、十分に傾聴かつ注目すべき提言である。

5章の金文京の論文は、高麗の文人官僚である李齊賢の峨眉山行 (Visit to Mt. Emei) の例を通して、高麗と元の文化交流が様々な次元で活発に進められたことを明らかにしている。その背景として、当時高麗が元の内政干渉を退けながら、事実上の独立国としての体制と文化を守ろうとした点が提示されている。6章のデイビッド・ロビンソンの論文は、14世紀後半に東アジアを強打した「紅巾の乱」が、中国史の視点だけでなく周辺諸地域に至るまで、国際的に影響を及ぼした点に注目している。紅巾の乱は、元朝支配期に、高麗の恭愍王が国内外において権威を維持する方策として利用され、また続く明朝の誕生や朝鮮の建国などとも、緊密な関係にあった。この時期には、高麗と中国の地方政権が独自に交渉を行なうなど、東アジアの各勢力の間で外交活動が活発化し、相互の情報交換が行なわれていたという興味深い事実も示されている。

7章の伍躍 (Wu Yue) の論文は、清朝で三藩の乱が起きた頃の朝鮮燕行使による情報収集活動に注目し、これが朝鮮の国策決定にどのような影響をもたらしたかを追跡した。朝貢国の文書や情報収集は、中国側に知られた場合、それは自国の安全を脅かす重大事であり、実際に深刻な外交問題に発展した例もある。にもかかわらず、朝鮮はできる限り多くの手段を動員して情報を収集し、中国側の動向を把握すると共に、自国の安全と利益を迫及しようとした。この論文は、これまで注目されなかった情報の需要と疎通という側面から、両国の関係を理解する道を切り開いた重要な試みであると評価される。ただ著者は、朝鮮のこうした情報収集活動はいずれも、朝鮮の従属国としての立場からはじまるものであると結論づけている。基本的に、従属関係であった前近代の東アジア国際秩序において、宗主国に対する朝貢国の外交行為は、結局「事大」と規定されるしかないということである。朝貢関係の規則に違反して行われていた朝鮮王朝の自救努力は、支配の正統性を維持するために、中国王朝の承認を得ることだけに重点がおかれていたとするのは、本文で明らかにされている具体的な歴史上の意義を、むしろ制限してしまっている点は残念なところである。

4部は、近代以降を扱った論文2本と時代区分に関する論稿で構成されている。箱田恵子は、清末の外交官として活躍した薛福成が推進した、雲南・ミャンマーにおける国境拡張(滇緬界務交渉)に注目している。この交渉は従来、「領土確保」の成功例、もしくは本来中国に帰属していた土司の地を喪失した「失地条約」という、正反対の評価がなされてきた。筆者は、これを自国史研究の視点にとどまらず、当時の欧米列強と中国の利害関係が複雑に絡み合った、同時代の状況をふまえて理解しなければならないと主張している。14章(高嶋航論文)は、20世紀の初頭に、フィリピン、中国、日本の3国間で開催された極東大会という国際的スポーツ行事が、政治によって従属させられた事実注目している。この大会は、極東の主導権を手中に収めようとするアメリカの意志がそ

の基盤にあり、YMCA が帝国主義的に変容する過程で行なわれたものであった。その後、日本と中国のナショナリズム高揚により大会が廃止されるまで、政治との関連性はさらに強まっていったという。最終章(永井和論文)は、日本を含む東アジアの時代区分に関する問題を全般的に概括しながら、最近登場した 16 世紀近世論 (Early Modern Period) を紹介している。地球規模での一体化、世界化という視点を、近世の歴史認識に積極的に導入することを提案している。

III

中国の「外交」活動を中心に扱った各論文により、これまで朝貢関係や華夷論という枠組では説明が容易でなかった重要な事実が明らかになった。各研究に共通する指摘は、周辺世界との関係において、中国が時と場合により冊封・羈縻・問罪・征服を使いわけるといった、柔軟かつ流動的な対応を見せてきた点である。「大国」の外交政策は、明らかに華夷思想に基づいたひとつの論理的一貫性を要求する。しかし、華夷思想は超歴史的な理念ではなく、現実的な要求によって多くの変化と歪みを経験してきた。現実的な利害関係と力の強弱が交差する中で、中国側の外交論理と形式は絶え間なく変化していったのである。

各研究者の意図ではないが、本書は、伝統時代の中国と周辺地域の関係という類似したテーマを扱った、フェアバンクの編著『中国的世界秩序：伝統中国の対外関係』(1968年)¹とおのずと対比される。広く知られているように、フェアバンクはヨーロッパ人が中国の東南海岸に到来した 19 世紀半ばを、近代文明への転換期として設定すると共に、開港と近代的条約体系を要求する西欧勢力の挑戦に対し、伝統中国は華夷思想に基づく朝貢体制の影響により、無気力で不適切な対応をせざるを得なかったと指摘した。歴史的に中国と関係を持ってきた諸地域を、朝貢制度を中心に結びつけた中国的国際秩序は、朝貢体制と条約関係、伝統時代と近代、中国と東アジア、もしくは中国と西欧という二分法的な側面が強い。40 年余りの時間において発行された本書は、華夷思想と朝貢制度といった求心点が、固定的な役割を果たしていたわけではない点に注目し、各時代・情勢に伴う事実の遠心力と、これを受けて流動的に変化する様相を把握することに力を注いだ。

華夷論と朝貢制を基盤とした中国的世界秩序は、1970 年代に西嶋定生氏が中心となり提唱した「東アジア世界論」を筆頭に、最近の濱下武志氏の朝貢システム論に至るまで、後の歴史研究に影響を与え続けてきた²。複雑かつ多様な 19

¹ John King Fairbank, ed., *The Chinese World Order: Traditional China's Foreign Relations*, Cambridge: Harvard University Press, 1968

² 濱下武志, 『近代中国の国際的契機：朝貢貿易システムと近代アジア』, 東京：東京大学出

世紀の中国と西欧列強の関係を一目で把握できる枠組、もしくは伝統時代を総括する秩序体系といえる朝貢制度は、後に中国と東アジア、東南アジアを結ぶネットワークもしくはシステムとして拡大解釈されてきた。

執筆者の一人である岩井茂樹氏は、朝貢システムの構成と体系は、フェアバンク氏の朝貢体制論を継承、拡張させたことを指摘している。伍躍氏もまた、最近中国の一部の研究者が、朝貢体制を「中国対外関係体制」もしくは「東アジア国際協力体制」と拡大解釈する傾向にあることに警戒心を抱いている。伝統中国の対外関係や東アジア国際関係は、システムや制度のみで把握した場合、史料に見られる史実との間で大きな差が生じてしまう。各研究者のこうした問題意識に基づいて書かれた本書が、朝貢制度に対する新たな解釈を可能とし、伝統時代における東アジアの生動感あふれる歴史の世界へ、読者を導いてくれると確信している。

本書のこのような研究史における意義と、各論文の完成度には賛辞を表したいが、各研究が「外交」の適用範囲に関して互いに共感しているという点には疑問が残る。具体的な史実を深く掘り下げた各研究の特徴から、各論文の論旨が、必ずしも有機的に結びついている必要があるとは思われない。しかし、外交という普通名詞を意図的に選択した共同研究である点をふまえ、次のような疑問に対する教示を得られれば幸いである。本書の焦点は、中国外交の「柔軟性と巧みさ」にあるが、それらは外交の対象国においても主体的な独自性として認められるのかという点である。評者の印象では、この点について各研究者の見解が、一致しているとは言い難い。

軍事的・文化的大国である中国との共存が求められる周辺国家にとって、柔軟で効果的な外交は、中国王朝よりも切実で絶体絶命の課題であったのは明らかである。しかし、高昌国の例からも分かるように、小国の必死の外交努力も、中国側の恣意的な選択の前では水泡に帰した。周辺国の立場からすれば、柔軟かつ巧みな中国の外交に対処することは、予測不可能かつ恣意的であるという点で、朝貢関係の理念と規定通りの展開よりもさらに困難を極めたであろう。

このように考えると、朝貢国あるいは属国の名のもとに独立を維持してきた朝鮮半島諸国がおのずと問題の焦点となってくる。中国外交の対象となってきた高麗・朝鮮は、様々な局面において、自国の命運をかけた外交活動を持続的に展開してきた。しかし、朝貢国、蕃属国という関係によって、高麗・朝鮮を合理的な選択が可能な外交の主体として認めることには、躊躇されるのである。元末明初に、高麗の恭愍王が反元勢力と秘密裏に交渉を進めると、元朝がこれ

版会，1990。濱下武志編，『東アジア世界の地域ネットワーク』，山川出版社，2001。西嶋定生の東アジア論は李成市，『東アジア文化圏の形成』，東京：山川出版社，2000。（박경희訳，『만들어진 고대（作られた古代）』，삼인，2001）を参照。

を疑い咎めたという事実が、研究において注目されている。しかし、これに対する評価は、柔軟な外交努力ではなく、時勢に応じて立場を変える「機会主義的な態度」である。朝鮮においては、中国側が自国の都合によって朝貢-冊封関係の名分を恣意的に唱えた時も、朝鮮側の要求や主張は礼制にのっとった表現や制限によって行なわれたため、これが消極的な姿勢と捉えられるのも無理はない。刻一刻と立場が変わる中国外交に対処するための周辺国家の努力が、柔軟性よりもむしろ従属性の深化と映ってしまうのは、逆説的ではある。

この点は、朝鮮半島の政治集団が、根深い自民族中心の理念を発展させてきたと指摘した研究と関連づけて、再検討する必要があると思われる。矢木毅氏は、朝鮮半島の国家は代表的な「事大主義」勢力とみなされてきたが、これは朝鮮と明朝の間で最も友好かつ安定的な関係が築かれた 300 年間に限られたものであり、韓・中関係の歴史においてはむしろ例外にあたりと評価した。中国外交の対象である様々な周辺国家は、均質的な従属関係ではなく、中国のように時代と情勢に応じて変化を繰り返してきた。

本書は、後記の Afterward で明らかにしているように、2つの流れ、すなわち中国文化への理解が深く一体感のある京都大学東洋学の伝統と、各民族の交流の舞台である東アジアにおいて「中国」を相対化してきた日本の東洋史学の流れが背景にある。書評のはじめで紹介した方法論の相対化と、中国-東アジアという歴史的空間を相対化した点は、この共同研究のもう一つの意義であるといえる。「中国」の相対化は、清日戦争以降の帝国日本の方向性と一致していた。しかし、今日の東アジア歴史研究において、中国と地域の相対化はこれとは異なり、現実的に必要なものといえる。後記で指摘したように、近年の歴史研究は緻密に細分化され、中国史、韓国史、日本史といった一国史の範疇は、方法論あるいは問題意識においても、簡単には飛び越えられない障壁であった。東アジア、アジアという地域を視野に入れた中国-周辺国研究は、相互の役割、比重を相対化して理解することのできる可能性を生み出すだろう。特にトルキスタン、チベット、旧満州地域など、現在も近代国家を形成できずにいる歴史の主体が交錯、混在していた歴史の復元するにあたり、国家を相対化した地域史の視点は、十分にその効能を発揮するだろう。さらに、外交というよりも、普遍的な関係の中で地域の歴史を把握することで、覇権主義的な歴史認識もしくは自衛的な自民族中心主義を乗り越えた、成熟した歴史理解が期待されるのである。

各分野の専門家が多様な資料を緻密に分析した 15 編の論稿は、その文脈に沿って読み解くのに多くの労力を要した。評者の誤読や偏見により、本書の成果が損なわれないようお願いしつつ、紹介の結びとしておく。



『近代日本の陽明学』を読んで
原題：小島毅著，
『近代日本の陽明学』（講談社，2006）

申铉承（シン・ヒョンスン，高麗大東アジア文化交流研究所）

Journal of Northeast Asian History
volume 4, number 2 (Dec 2007) : 194~199

*Copyright © 2007 by Northeast Asian History Foundation. All Rights Reserved.
No portion of the contents may be reproduced in any form without
written permission of Northeast Asian History Foundation.*

『近代日本の陽明学』を読んで

原題：小島毅著、『近代日本の陽明学』（講談社，2006）

申铉承（シン・ヒョンスン，高麗大東アジア文化交流研究所）

1.

2006年秋のことだった。私用で日本の東京大学を訪れた。10年にわたる留学生生活を終え、韓国に帰国してから数カ月が過ぎたある日、急用ができ6年間身を置いた東京大学に向かった。そして、この書評の対象である本の著者である小島毅先生を訪ね、その時にプレゼントされたのが本書であった。まず、「近代日本の陽明学」という題名が目に入ってきた。そして、本書の裏表紙には次のような広告・宣伝文句が書かれていた。『善意が起こす「革命」はタチが悪い！我々が創出した「近代」の問題の本質は、陽明学と水戸学の系譜が交差するとき明らかになる。陽明学の新たな解釈史にして、日本近代思想史の驚くべき読み直し』。

本書は、その題名から1867年明治維新以降の日本の陽明学に関する解説書という印象が強かった。しかし実際はそうではない。本書は、陽明学と水戸学という一見対照的な流派に見える2つの思潮が、根本的には同じ思想的根拠に基づいており、また近代日本の学問精神について論じている「近代日本精神史」と似ているという印象を受けた。

著者である小島毅は、日本の中国思想研究分野において、新たな研究方法論—中国近世期における思想文化の展開を、社会思想史的アプローチで追い、礼教の展開過程として把握する方法—を提起し、現在国内外から注目を集めている若手研究者である。また、アメリカや台湾も彼の研究方法論に大きな関心を寄せており、今後の活躍が期待されている。特に、台湾・中国と韓国の中国哲学界で広く知られている溝口雄三先生の研究方法を批判的に継承しており、今後は、東京大学の中国思想分野において、次世代を引っ張る新しいリーダーとなっていくであろう。だが彼は、中国近世思想史にのみ関心を抱いているわけではない。最近では、自国である日本の近代精神史の中から、中国の代表的な

思想である儒教文化の要素を抽出し、その思想史的な地位について疑問を投げかけている。彼が自ら多くの論著で明らかにしているように、彼は「東アジア思想史」において哲学という語を用いていない。いや、哲学の語を排除し「思想文化」という言葉で代替しているというのが正確であろう。二分法的にいえば、彼の関心は、哲学や思想ではなく歴史だといっても過言ではない。

このように、著者がしばしば使用している「思想・文化史的」という言葉は、いわゆる西洋哲学的な解読と分析を意味するのではなく、ある学派や思潮が誕生した時代的背景と問題意識に焦点をあてているという意味なのである。実際のところ、西洋にせよ東アジアにせよ、既存の哲学・思想に関する研究成果は、思想内部からの検討と分析のみが行なわれてきたといえる。思想内部のみを学習し研究したために、歴史的な実体や当時の社会状況、政治的環境は、観念化された思想の中に埋もれてしまった。そのため、ある言説が展開した時間的・空間的背景と時代の潮流は、全く把握されてこなかったばかりか、西洋哲学における方法論に立脚して学派の分類や哲学的内容のみに執着した結果、東アジア思想の本来の姿は失われることとなった。従って著者は、ある時代の思想的要素を抽出する際、必ずその当時の歴史的実状と関連づけて論じることを主な目的としている。

一方、本書は本論に入る前に、著者のプロローグにおいて靖国「参観」の記という題名で、2005年10月17日のある事件、すなわち当時日本の内閣総理大臣であった小泉純一郎の靖国神社参拝から話をはじめている。著者は、小泉総理大臣の行為は、アジア諸国の感情を刺激するものであったと指摘し、靖国神社参拝は日本国内の法律的問題ではなく「歴史」の問題であることを強調した。また、靖国神社の起源が儒教にあるということと、この神社は実際のところ「儒教主義に基づく社」であることを説明している。

2.

本書の特徴は、近代日本の陽明学を通史的に叙述していない点にある。つまり、これまでの思想史解説書のように、思想家とその思想の核心を順序立てて述べるのではなく、エピソードを通してある事実（または事件）やそこに登場する様々な人物、さらには彼らの陽明学・水戸学における思想的要素を抽出するという方法をとっている。また、本書は6つのエピソードで構成されている。第一のエピソードは、大塩中斎（大塩平八郎）であり、「やむにやまれぬ反乱者」という副題をつけて大塩を描いている。第二のエピソードは国体論の誕生、第三は御一新（明治維新）のあと、第四は帝国を支えた理念として、カント哲学・武士道・陽明学について言及している。第五のエピソードでは、日本精神につ

いて論じると共に「観念の暴走」という副題をつけ、第六のエピソードでは、「闘う女、散る男」を主題とし「水戸の残照」を副題としている。

第一のエピソードでは、他称陽明学者、自称「聖学の徒」である大塩中斉と彼が引き起こしたある事件に注目し、陽明学の核心的思想要素について述べている。話は1837年2月に大阪で発生した蜂起から始まる。通称「乱」と呼ばれるこの蜂起事件の首謀者が大塩であることから、この騒擾事件は一般的に「大塩平八郎の乱」と呼ばれている。当時、大塩は大阪の治安・行政の責任者である幹部職から外れていた。彼は、抑えられない義憤を抱き、また飢えた貧民の惨状に我慢できず、大阪市内で放火するという不幸な蜂起事件を起こしたのだった。彼は、私利私欲によって大阪市内で放火したわけではなかった。著者は、まずこの事件について触れつつ、明治以降、特に昭和の敗戦により民主主義の確立が賛美される中で、大塩中斉が「近代精神」の所有者として英雄・偶像化されてきた点に疑問を唱えている。すなわち著者は、陽明学者の大塩中斉が武装蜂起したのは、近代化や民主主義のためではなく、彼自身が固く信じていた陽明学の理念のためであったとする。なぜなら、陽明学においては、孔子・孟子の正しい教えを実践することが最も重要だからである。従って大塩中斉の蜂起事件も、こうした枠組の中で理解されなければならないとしている。またその合間には、陽明学者大塩中斉と、著者が「水戸学的朱子学者」と規定する頼山陽との交際と友情を面白く述べている。陽明学と朱子学は仲の良くない学問流派であるにもかかわらず、彼らの交際について語っている点は、非常に興味深い。

第二のエピソードでは、「国体論の誕生」と題し、思想流派について本格的に論じている。国体論の思想背景となる様々な流派について論じている点が興味深い。ここでは、江戸時代に様々な思想流派が縦横に交差し、それが国体論へとつながったことを述べており、また水戸学の開祖といえる徳川光圀の『大日本史』編纂の意義と編集方針、そして主な内容を紹介している。そして、後期における水戸学の代表者として知られる会澤正志斉について、彼の主な著作である『新論』を、国体論を本格的に論じた最初の作品であると評価した。ちなみにこの『新論』は、尊王攘夷を主唱した幕末期の政治運動に大きな影響を及ぼした作品でもある。続いて国体と連動する国学について述べ、陽明学者であると共に幕末の志士であった吉田松陰の国体論について論じている。著者はここで、吉田松陰の国体論は会澤正志斉の国体論と比べ、純粋な「天皇中心主義」と述べている。

第三のエピソードでは、「御一新のあと」という題名がつけられている。第二のエピソードでは、日本の近世つまり江戸時代の陽明学や水戸学、国学が主な対象であったが、ここでは明治維新後の近代日本における陽明学の展開と様相

について本格的に述べている。書名が「近代日本の陽明学」であることからすると、第三のエピソードは本書の最も核心的な部分であるといえる。特徴として、明治時代の1877年に、三島中洲が東京千代田区麴町の自宅で開設し、後に漢学専門学校として設立された二松学舎について多くの紙面を割いている点が挙げられる。二松学舎は、三島中洲の学問精神を基に、陽明学による教育を表明した学校であった。この学校は、現在も日本の陽明学研究のメッカと言われており、陽明学精神を基盤とする建学精神が今もなお維持されている。続いて筆者は、日本の近代期に陽明学を一般化させた人物として、三宅雪嶺と彼が参加した国粹主義者の文化団体である政教社に触れ、陽明学を国粹主義的な立場と関連づけることを試みた人物であると評価している。一方、陽明学がキリスト教と非常に類似している点を強調し、陽明学を「キリスト教化」しようとした人物として内村鑑三について言及し、彼の陽明学顕彰に関する話で同エピソードを締めくくっている。

第四のエピソードでは、「帝国を支えるもの—カント・武士道・陽明学」という題名がつけられている。ここで注目しなければならないのは、日本近代の明治帝国を支えた3つの思想の軸として、カント（ドイツの哲学者）、陽明学、武士道について言及している点である。興味深いのは、中国文化こそが「明治時代の精神的支柱」であったと評価していることだ。中国文化とは、中国先秦時代の儒教思想を含め、中国近世期に胎動した朱子学と陽明学であった。また、明治時代に最も関心を集めた哲学としてカント哲学について言及する部分と、武士道の中の中国思想（特に陽明学）について言及する部分は印象的である。

第五のエピソードでは、日本精神に関する論議が繰り広げられており、また「観念の暴走」という副題がつけられている。まず著者は、昭和期に活躍した革新思想家の3人に関する論議を展開している。3人とは、大川周明、安岡正篤、高島素之である。高島素之は、日本で初めてマルクスの『資本論』を完訳した人物であり、唯物史観を批判した国家社会主義者でもある。実際のところ、著者は高島を本書にふさわしくない人物としつつも、儒教の性善説と性悪説において高島が自ら「性悪説」論者であることを告白した事実に注目し、彼の国家観はそこに由来するものであるとしている。大川周明は、彼の代表作『日本精神研究』が広く知られており、著者は大川周明の英雄観と『日本精神研究』の説明に紙面の多くを割いている。安岡正篤については、一般人にはなじみの薄い陽明学者であり、日本の学界（特に陽明学界）においてもさほど言及されていない人物である。にもかかわらず著者は、彼に対し暫定的な評価を下しながら、安岡自身が剣道の名手であった点に注目し、「現場主義の活動家」と評価すると共に、武術という面では王陽明の後継者であると述べている。

第六のエピソードは、「闘う女、散る男」と題され、副題は「水戸学の残照」

となっている。ここでは、主に 1945 年以降の日本における水戸学と陽明学的要素、そしてその残照について論議している。特に、戦後の女性運動家で有名な山川菊栄と、小説家であり劇作家としても有名な三島由紀夫を、共に水戸学の血を受け継いだ人物であったと評価している点は興味深い。また、このエピソードの後半では、三島が書いた「革命哲学としての陽明学」という文章について言及し、三島由紀夫の陽明学観を論じている。

こうして、本書の本論は 6 つのエピソードからなっており、縦横無尽に日本近世期の陽明学的思潮を少しずつ含めながら、近代以降の日本における陽明学の言説を多角的に分析している。

3.

終わりに、本書を読み興味深く感じた点について、いくつか言及しておこうと思う。著者によると、陽明学とは朱子学において挫折を経験した思想であるという。理を「我々の心の作用」として追求する陽明学的特性は、「知行合一」としての実践哲学であり、水戸学とも親和的に相互作用しながら、幕末期には革命のイデオロギーとして機能したと述べている。大塩中斎は、頼山陽の知己だった。頼山陽の編著『日本外史』は、幕末期の勤皇の志士たちに大きな影響を与えたが、朱子学と陽明学はこうした微妙な関係によって結びついていた点も興味深い。また、陽明学的な性格をもった吉田松陰は、水戸学の影響下で神国思想（これは国学からの影響）と国体論を結合させたと評価している。

さらに興味深い事実は、心を重視する陽明学の「良知」思想が、明治の思想家たちに肯定的に受け入れられたという点だ。つまり、三宅雪嶺、内村鑑三、三島中洲、そして『武志道』の著者新渡戸稲造などがそれにあたるという。これ以外にも、本書の興味深い点は多数ある。近代の日本思想史における陽明学の展開を、水戸学、武士道、西洋哲学、キリスト教、マルクス主義などとの関係から再解釈しているのも、そのひとつである。また、それらが具体的な人物の思想と行動を通じ、6 つのエピソードで構成され説明されているため、読みやすいとの印象を受ける。一般的に思想史関連の既存の解説書は、一般人には多少読みづらいが、本書は思想史に関する書籍でありながら、エピソード形式で構成されているため、一般人にも読みやすいものとなっている。

近代日本の思想界で、地位を確実なものとした陽明学の系譜と要素を探る作業が、本書が最も重要視している点である。著者によると、日本における陽明学の特色は、「純粋な動機主義」にあるという。動機が正しければ政治的結果に対する疑問はそれほど生まれず、つまり「動機さえよければいいという主義」であるといっても過言ではない。幕末維新の峠を越えた陽明学は、使い捨ての

ような思想の役割を果たしたのではなく、その形質を優勢遺伝子として保存しながら、多様で多角的な思想として重なり合うことで、一貫して日本の近現代史の中で生動してきたのである。

陽明学の本流は今の日本のあると誇らしげに語ったのは、三宅雪嶺である。また、三島由紀夫によると、「革命哲学」と命名された陽明学は、大正天皇の侍講であった三島中洲により宮中に伝えられ、内村鑑三の手でキリスト教と合わさり、井上哲次郎の労作によりカントと調和するに至ったなど、著者の説明は近代日本の陽明学の位置づけを克明にしているといえる。

最後に、中国明代の王陽明によって始められた儒学の一潮流としての陽明学は、幕末期の日本において、本家である中国から独立し、行動的な変革思想として強い影響力を持つようになった。例えば、三島由紀夫が晩年に著した「革命哲学としての陽明学」の中で、彼が陽明学者として特筆したのは、大塩中斎と吉田松陰および明治維新の功臣西郷隆盛の3人であった。このように、陽明学は日本に輸入された後、本家である中国とは完全に異なる新たな思想として復活した。つまり、本土中国の王学（陽明学の本来の名称）が解体され、近代日本になって陽明学という名のもとで新たに復活したというのである。しかもそれは、近代日本の精神史において最も強い影響力をもつ思潮として登場したのであった。本書を手にするだけで、我々読者は、以上の内容を非常に簡単に確かめることができる。